

ほろほろ

脚はよく發育し、概ね群居して、穀粒昆蟲などを食す。原産地は亞弗利加の北部。ほろほろなみた。ほろほろ涙【名】ほろほろと落つる涙。天の鵜鳥「ほろほろ涙のひとり言」

ほろほろの「さうじ」ほろほろの草子【名】「書」ほろ(梵論)を見よ「墓と呼ぶ油賣の女の二子、虚空坊と蓮華坊と、母の死後、共に虚無僧になりたる始末を記せるもの。一卷。僧明恵の著。ほろほろ一ひ。ほろほろ醉【名】ほろほろ(俗語)に同じ。

ほろぼん【感】ほろおんの轉訛。狂言盤出伏「橋の下の菖蒲は、ほろぼん、ほろぼん、誰(こ)が植えた菖蒲ぞ、ほろぼん、ほろぼん」ほろみ、襪履箕【名】柄を取り附けて、馬糞をさらふに用ふる箕。

ほろみそ 法論味嗜【名】『大和國奈良興福寺の維摩會(經)にて、法論の時、法師の食ふものなるよりいふとの説あり』焼味噌を日に乾して、細かに刻み、胡麻・麻の實山椒、又、割りたる胡桃(こ)などを混ぜ合せ、ほろほろしたる形にせる食品。飛鳥(多)味嗜。護命(多)味嗜。ほろんみそ。ほろみそ。ほろろんみそ。下城集「法論味嗜、ホロミソ。本朝南都法論之時用之故云爾。但世俗所言也」

ほろみそらり 法論味嗜賣【名】法論味噌を賣りあること、又その人。法論味噌賣の夕立【句】物の損はるる事を恐るる聲。【諺語】

ほろむじや 母衣武者、親武者、幌武者、保侶武者、母盧武者【名】母衣を懸けたる武者。ほろの者。木下陸奥同會戰「敵勢より、母衣武者一人」

ほろん勃 吮(梵 Bhrū)【感】「佛」一字命輪(多)の種子(多)。三字連聲して、一字をなす。【じ】。

ほろんじ 梵論字【名】ほろ(梵論)に同ほろんみそ 法論味噌【名】ほろみそ(法論味噌)に同じ。

ほろめえたあ(英 Bolometer)【名】「理」輻射の強さを、その熱効果によりて測

ほろり

定する装置。西曆一八八三年、ラングリ(G. Langley)の發明に係る。熱電堆よりは、感度遙かにすぐれたり。抵抗微温計。ほろりや 襪履屋【名】襪履を賣買する家、又その人。

ほろりやうぶく 襪履洋服【名】著古してよごれ破れたる洋服。【じ】。

ほろりよひ 微醉【名】ほろあひ(微醉)に同ほろりよひきげん 微醉機嫌【名】ほろりよひの愉快なる心地。ほろり【貌】ほろほろに同じ。菖蒲、露にほろり【貌】ほろほろに同じ。河津鼓「無智、無學の床右衛門一言にだまされ、ほろりとす」

ほろり【貌】ほろほろに同じ。先代萩「涙の聲張り上げ、ほろりほろりとお泣きやるが」

ほろろ【貌】ほろほろに同じ。古今春の野の繁き草葉の妻戀に飛び立つ雉子のほろろとぞ鳴く「領域反魂香」雉子にほろろの聲あつて、雪は降るとの心あり

ほろろ打つ【句】雉山鳥など、羽ばたきして鳴く。爲患集ききす鳴く春の大野を見渡せば早歲(多)あさりほろろ打つなり

ほろろろを掛く【句】前條に同じ。大藏流狂言禁野「雉子がほろろをかけてござるによつて」

ほろろろぐ【動下二他】ほろほろとしたるやうにす。源兵「荷葉(多)の方(多)を合はせたる名香、蜜をかくし、ほろろけて焚きにほはしたる」

ほろろろじゆら 勃魯呂宗【名】やせけう「耶ほろろろつけ」ほろろろ漬【名】煎りたる豆腐(多)の中に、麻の實などを混じたる食品。

ほろわた

ほろわた 襪履綿【名】使ひ古して、よごれちぎれたる綿。ほろあひ 微醉【名】酒にすこし酔ひてあること。ほろほろあひ。ほろりよひ。微醉(多)。

ほろあひ 微醉【動四自】酒にすこし酔ふ。五十年忌歌念佛「ほろ酔ひ来りしが」

ほろあひ【英 White】【名】しろいろ。白色。【次條の略】

ほろあひ【英 White shirts】【名】「白襟衣の義」全部白色にして、カラ、カフスまで附屬し、洋服の下に著るに用ふるシャツ。ほわいと。わいしやつ。

ほわいと【英 White-houses】【名】米國大統領の官邸。同國の首府ワシントンに在り。石造二階建、白壁にて塗り、間口五十二メートル、奥行二十六メートル、西曆一七九二年の建築に係る。白宮(多)。白館。白聖館。

ほわい【英 White】【名】徳川時代に、廻船にその石敷に應じて課せし運上。

ほわた 穂綿【名】茅花(多)・葦などの穂を集めて、綿に代用したるもの。

ほわんちう 黄酒【名】支那酒の一。支那に現在せる酒類の中、最も貴重せらる。魚黄なり。主産地は浙江省紹興(多)府くわうしゆ。

ほお 蒲葦【名】蒲(多)と葦(多)と。ほお 補遺【名】遺(多)りであるを集めて補ふこと。【じ】。

ま

【發音】【ま行第一の音。子音mが母音nに結び附きて發す。子音mのi・n・o・oと結び附きたるは、即ちみむめあなり。mは、上下兩唇を密閉して、氣息の口より出づるを防ぎ、聲帯の振動を帯びたる氣息を鼻腔へ通過せしめて發する音にして、摩擦音に屬すれば、唇音(又、兩唇音)に屬す。ま及びその他のま行音は、唇音たる點に於ては、びぶへぼと同一なるが故に、兩者同列の二音の間に轉換すること多し。例へば、かばがま(通)、まびきま(氣味)、けぶりけり(烟)、すへら(すめら(鼻))と(ほす(鼻))の類。なほ、んの條下を参照せよ。【長音は、まあと書くと、まーと書くと、前者に依り、後者に依り、】一語の中に、まの直後にあ又はふの續く時は、通例、相合して、まの長音に發音す。例へば、ま(申す)は(い)ま(敗亡)か(ま)構(ふ)を(モ)オ(ス)、ハイ(モ)オ(カ)モ(オ)と發する類。一語の中に於ける變化にはあらざれども、かま(蒲生)を(ガ)モ(オ)と發する類も、これに準ずる。但し、そのふが四段活用の動詞の語尾なる場合には、ふをウと發音し、その直前の音と、音節を分ちて發音す。例へば、

おえうあ かけきさ そせすしと つちた のねぬほ ほへふひは もめんむみま よゆや るれるりら まをわ

まあま

【幼児の語】
まあまあ 先先【副】まあ先を重ねていふ語。まづまづ。「まあまあ、止(し)したま(ま)」

まあみ 真網【名】一張の網を二艘の網船にて用ふる場合に、その右方の半部。(逆網(さかみ)に對して)

まあみづね 真網船【名】真網を載する右方の船(逆網船(さかみぶね)に對して)

まあめ【名】「動」うま(馬)を云ふ。「下總國の方言」

まあゆ 眞あゆ【名】「あゆのわざ(あゆの風)を見よ」少しく東によりて吹く北風。「北國の方言」

ま【名】「動」たか(鷹)に同じ。

ま【名】鳥牛【名】毛色の黒き牛。古語。「和名」鳥牛、麻伊、黒牛也」

ま【名】麻衣【名】あさぎ(も)麻衣に同じ。

ま【助動】ま【音便】「多分行くまい」

ま【助動】ま【音便】「多分行くまい」

ま【名】「動」たか(鷹)に同じ。

ま【名】鳥牛【名】毛色の黒き牛。古語。「和名」鳥牛、麻伊、黒牛也」

ま【名】麻衣【名】あさぎ(も)麻衣に同じ。

ま【助動】ま【音便】「多分行くまい」

ま【助動】ま【音便】「多分行くまい」

ま【名】「動」たか(鷹)に同じ。

ま【名】鳥牛【名】毛色の黒き牛。古語。「和名」鳥牛、麻伊、黒牛也」

ま【名】麻衣【名】あさぎ(も)麻衣に同じ。

まい

四對有り、提脚二本、長くして、先端に吸盤を有す。内設は、石灰質より成りて、船形をなし、白くして輕し。肉囊厚くして、兩側に擴り、後端にて離る。西海、西南海に多し。肉は鮮食し、又、鰯を製す。露汁よりセビヤと呼ぶ色料を製し、甲は齒磨粉となす。かめのこいか。こぶいか。誌などのこと。

まいき 毎期【名】期限の度(ごと)のこと。

まいきやう 埋經佛【名】經を地中に埋むること。

まいきやう 埋經佛【名】經を地中に埋むること。

まいきやう 埋經佛【名】經を地中に埋むること。

まいきやう 埋經佛【名】經を地中に埋むること。

まいきやう 埋經佛【名】經を地中に埋むること。

まいきやう 埋經佛【名】經を地中に埋むること。

まいきやう 埋經佛【名】經を地中に埋むること。

まいきやう 埋經佛【名】經を地中に埋むること。

まいきやう 埋經佛【名】經を地中に埋むること。

まいきやう 埋經佛【名】經を地中に埋むること。

まいきやう 埋經佛【名】經を地中に埋むること。

まいきやう 埋經佛【名】經を地中に埋むること。

まいきやう 埋經佛【名】經を地中に埋むること。

まいきやう 埋經佛【名】經を地中に埋むること。

まいきやう 埋經佛【名】經を地中に埋むること。

まいきやう 埋經佛【名】經を地中に埋むること。

まい

まいさう 埋草【名】「農」『英』(S. 0. 0. 0.) 飼料に供する玉蜀黍(とうもろこし)豌豆(エンドウ)大豆(大豆)禾穀類などを、そのまま埋藏室中に堆積し、壓力を加へて、草の間の空氣を排除したるもの。

まいさう 埋草【名】「農」『英』(S. 0. 0. 0.) 飼料に供する玉蜀黍(とうもろこし)豌豆(エンドウ)大豆(大豆)禾穀類などを、そのまま埋藏室中に堆積し、壓力を加へて、草の間の空氣を排除したるもの。

まいさう 埋草【名】「農」『英』(S. 0. 0. 0.) 飼料に供する玉蜀黍(とうもろこし)豌豆(エンドウ)大豆(大豆)禾穀類などを、そのまま埋藏室中に堆積し、壓力を加へて、草の間の空氣を排除したるもの。

まいさう 埋草【名】「農」『英』(S. 0. 0. 0.) 飼料に供する玉蜀黍(とうもろこし)豌豆(エンドウ)大豆(大豆)禾穀類などを、そのまま埋藏室中に堆積し、壓力を加へて、草の間の空氣を排除したるもの。

まいさう 埋草【名】「農」『英』(S. 0. 0. 0.) 飼料に供する玉蜀黍(とうもろこし)豌豆(エンドウ)大豆(大豆)禾穀類などを、そのまま埋藏室中に堆積し、壓力を加へて、草の間の空氣を排除したるもの。

まいさう 埋草【名】「農」『英』(S. 0. 0. 0.) 飼料に供する玉蜀黍(とうもろこし)豌豆(エンドウ)大豆(大豆)禾穀類などを、そのまま埋藏室中に堆積し、壓力を加へて、草の間の空氣を排除したるもの。

まいさう 埋草【名】「農」『英』(S. 0. 0. 0.) 飼料に供する玉蜀黍(とうもろこし)豌豆(エンドウ)大豆(大豆)禾穀類などを、そのまま埋藏室中に堆積し、壓力を加へて、草の間の空氣を排除したるもの。

まいさう 埋草【名】「農」『英』(S. 0. 0. 0.) 飼料に供する玉蜀黍(とうもろこし)豌豆(エンドウ)大豆(大豆)禾穀類などを、そのまま埋藏室中に堆積し、壓力を加へて、草の間の空氣を排除したるもの。

まいさう 埋草【名】「農」『英』(S. 0. 0. 0.) 飼料に供する玉蜀黍(とうもろこし)豌豆(エンドウ)大豆(大豆)禾穀類などを、そのまま埋藏室中に堆積し、壓力を加へて、草の間の空氣を排除したるもの。

まいさう 埋草【名】「農」『英』(S. 0. 0. 0.) 飼料に供する玉蜀黍(とうもろこし)豌豆(エンドウ)大豆(大豆)禾穀類などを、そのまま埋藏室中に堆積し、壓力を加へて、草の間の空氣を排除したるもの。

まいさう 埋草【名】「農」『英』(S. 0. 0. 0.) 飼料に供する玉蜀黍(とうもろこし)豌豆(エンドウ)大豆(大豆)禾穀類などを、そのまま埋藏室中に堆積し、壓力を加へて、草の間の空氣を排除したるもの。

まいさう 埋草【名】「農」『英』(S. 0. 0. 0.) 飼料に供する玉蜀黍(とうもろこし)豌豆(エンドウ)大豆(大豆)禾穀類などを、そのまま埋藏室中に堆積し、壓力を加へて、草の間の空氣を排除したるもの。

まいさう 埋草【名】「農」『英』(S. 0. 0. 0.) 飼料に供する玉蜀黍(とうもろこし)豌豆(エンドウ)大豆(大豆)禾穀類などを、そのまま埋藏室中に堆積し、壓力を加へて、草の間の空氣を排除したるもの。

まいさう 埋草【名】「農」『英』(S. 0. 0. 0.) 飼料に供する玉蜀黍(とうもろこし)豌豆(エンドウ)大豆(大豆)禾穀類などを、そのまま埋藏室中に堆積し、壓力を加へて、草の間の空氣を排除したるもの。

まいさう 埋草【名】「農」『英』(S. 0. 0. 0.) 飼料に供する玉蜀黍(とうもろこし)豌豆(エンドウ)大豆(大豆)禾穀類などを、そのまま埋藏室中に堆積し、壓力を加へて、草の間の空氣を排除したるもの。

まいさう 埋草【名】「農」『英』(S. 0. 0. 0.) 飼料に供する玉蜀黍(とうもろこし)豌豆(エンドウ)大豆(大豆)禾穀類などを、そのまま埋藏室中に堆積し、壓力を加へて、草の間の空氣を排除したるもの。

まいさう 埋草【名】「農」『英』(S. 0. 0. 0.) 飼料に供する玉蜀黍(とうもろこし)豌豆(エンドウ)大豆(大豆)禾穀類などを、そのまま埋藏室中に堆積し、壓力を加へて、草の間の空氣を排除したるもの。

まいさう 埋草【名】「農」『英』(S. 0. 0. 0.) 飼料に供する玉蜀黍(とうもろこし)豌豆(エンドウ)大豆(大豆)禾穀類などを、そのまま埋藏室中に堆積し、壓力を加へて、草の間の空氣を排除したるもの。

まい

まいすばうす 賣僧坊主【名】「まいす(賣僧)に同じ。狂言路邊坊主」そのなまいす坊主、なせに大事の男を坊主にした」と。

まいせき 毎夕【名】夕ごと。夜ごと。まゆふ。ゆふべゆふべ。毎夜。

まいせつ 毎節【名】「節」(せつ)のこと。

まいせん 賣扇【名】「ばいせん(賣扇)に同じ。賣扇の祖母(おば)は、手に日を翳(かげ)す」【句】「箕賣(ひし)の笠(かさ)を、手に翳(かげ)す」【句】「箕賣(ひし)の笠(かさ)を、手に翳(かげ)す」

まいたい 莓苔【名】「ばいたい(莓苔)に同じ。莓苔の翁(おきな)は、手に日を翳(かげ)す」【句】「箕賣(ひし)の笠(かさ)を、手に翳(かげ)す」

まいだま 藪玉【名】「まゆだま(藪玉)の轉訛。

まいたん 毎旦【名】「まいとう(毎朝)に同じ。毎旦の味旦(あじむ)に同じ。

まいたん 味旦【名】「まいとう(毎朝)に同じ。毎旦の味旦(あじむ)に同じ。

まいたん 賣炭【名】「ばいたん(賣炭)に同じ。賣炭の翁(おきな)は、手に日を翳(かげ)す」【句】「箕賣(ひし)の笠(かさ)を、手に翳(かげ)す」

まいちど 今一度【副】「いまひとたび、なまいちどもんじ(眞一文字)【名】「ま(眞)は接頭語」全くの一字。まっす。一直線。太平記眞一文字に流を切りて、向の岸へかけたり」

まいつき 毎月【名】「まいげつ(毎月)に同じ。まいひん(眞一心)【名】「ま(眞)は接頭語」全くの一心。

まいて 況いて【副】「まして(況して)の音便。源氏、まして、きんだちの御ために」

まいてう 毎朝【名】「まいあさ(毎朝)に同じ。まいど 毎度【名】「たびごと。たびたび。いつも。毎回」

まいとせ 眞いとせ【名】「ま(眞)は接頭語」【句】「ま(眞)は接頭語」【句】「ま(眞)は接頭語」

まいとせ 眞いとせ【名】「ま(眞)は接頭語」【句】「ま(眞)は接頭語」【句】「ま(眞)は接頭語」

まいとせ 眞いとせ【名】「ま(眞)は接頭語」【句】「ま(眞)は接頭語」【句】「ま(眞)は接頭語」

まいとせ 眞いとせ【名】「ま(眞)は接頭語」【句】「ま(眞)は接頭語」【句】「ま(眞)は接頭語」

まいとせ 眞いとせ【名】「ま(眞)は接頭語」【句】「ま(眞)は接頭語」【句】「ま(眞)は接頭語」

じ。盛衰更替りとも、さりととも、又奇せ、又寄せしけれども、毎度にはざりければ」

まいしごめ 巻止「名」巻きたるものの解けぬ様に、止め置く具。

まいなす「英 Minus sign の略」【名】「數」

まいげんがう「減號」に同じ。【よす】(負數)に同じ。

まいなす「マイナス電氣」【名】「理」

まいにち「毎日」【名】「ひごと」ひび。【ち】

まいにち「毎日運動」【名】「天」

まいにち「毎日」【名】「ひごと」ひび。【ち】

まいにち「毎日」【名】「ひごと」ひび。【ち】

まいにち「毎日」【名】「ひごと」ひび。【ち】

まいにち「毎日」【名】「ひごと」ひび。【ち】

まいにち「毎日」【名】「ひごと」ひび。【ち】

まいにち「毎日」【名】「ひごと」ひび。【ち】

まいにち「毎日」【名】「ひごと」ひび。【ち】

まいにち「毎日」【名】「ひごと」ひび。【ち】

まいにち「毎日」【名】「ひごと」ひび。【ち】

まいにち「毎日」【名】「ひごと」ひび。【ち】

まいにち「毎日」【名】「ひごと」ひび。【ち】

まいにち「毎日」【名】「ひごと」ひび。【ち】

まいにち「毎日」【名】「ひごと」ひび。【ち】

まいにち「毎日」【名】「ひごと」ひび。【ち】

もの。のま。のみ。のめ。まきはだ。船

まいはひ「間祝」真祝【名】意外の大漁ありたる時、その漁業主が、漁夫その他の關係者及び知人を招きて、祝宴を開くこと、印入(シ)の手拭又は染出(シ)の漁衣を漁夫等に贈りて、その表彰とするを常とす。まんいはひ。

まいばん「毎晩」【名】「まいや」(毎夜)に同じ。

まいばら「米原」【名】「地」近江國坂田郡入江村にある地。琵琶湖の東岸、彦根の北方約二里。鐵道東海道本線と北陸線との連絡地なり。

まいぶ「(名)「種」まゆみ(桃葉蘂子)に同じ。

まいぶく「埋伏」【名】「うづもれ」かくること。又うづめかくすこと。

まいぶみ「卷文」【名】「卷紙」に認めて巻きたる文。(枚文(カ)に對して) 江次郎「卷文若干巻、枚文若干巻、印判」

まいぼつ「埋没」【名】「埋もれて見えぬやうになること。【南史の郭祖深傳に「節、口利辭、競相推薦、酒直守、信、坐見三埋没、ことあり」世人に知られぬこと。擧用せられたること。

まいまい「毎毎」【副】「莊子の扶藪篇に「天下每大亂」とあり」たびたび。しばしば。いつも。つねに。

まいまい「昧昧」【貌】「楚辭の懷沙に「日昧昧其將暮」とあり」くらさま。

まいみ「眞忌」【名】「神事の近づき、之に與る人の三日間するものいづき。致齋(荒忌(カ)に對して)「古語」和泉式部集「契りしをたがふべしやは、いづくしき荒忌眞忌きよまはるとも」

まいもつ「埋没」【名】「まいぼつ」(埋没)に同じ。

まいや「毎夜」【名】「よごと」ばんごと。夜毎。

まいゆふ「毎夕」【名】「まいせき」(毎夕)に同じ。

まいらん「霖爛」【名】「地」はいらん(霖爛)に同じ。

まいる「哩」(英里)【助數】「英國の距離の單位。呎(フ)の千二百八十倍、我國の十

四町四十五間一尺に當る。英里。

まいるか「眞海豚」【名】「動」(ま眞)は接頭語「い」(海豚)に同じ。(鼠海豚(鼠鯨)など)に對して)

まいらう「まどし」間色絨【名】「むらさき」(まどし)「紫絲絨」に同じ。一説に、何色にても、間色(カ)にて絨したるものなりと

まいわし「眞鯛真鯛」【名】「動」(ま眞)は接頭語「い」(鯛)に同じ。(潤日鯛(カ)など)に對して)

まい毛「助數」【尺度の單位。尺の萬分の一。【秤目の單位。貫の百分の一。【錢の單位。厘の十分の一。】

まい安「名」「ま」(安)に同じ。

まい猛「名」「猛」(カ)に同じ。勢のさかんなこと。いかめしきこと。勇猛。落蓬(いとまう)にきらきらしき法事「種、御そらぶんなど、いと猛にありき」

まい副「副」【まの音便。「まう一度」(カ)「猛」接頭語「猛烈なる意。「猛運動」「猛練習」

まいあ「盲啞」【名】「めくら」と、おしと。

まいあ「盲啞」【名】「めくら」と、おしと。

まいあ「盲啞」【名】「めくら」と、おしと。

まいあ「盲啞」【名】「めくら」と、おしと。

まいあ「盲啞」【名】「めくら」と、おしと。

まいあ「盲啞」【名】「めくら」と、おしと。

まいあ「盲啞」【名】「めくら」と、おしと。

まいあ「盲啞」【名】「めくら」と、おしと。

まいあ「盲啞」【名】「めくら」と、おしと。

まいあ「盲啞」【名】「めくら」と、おしと。

まいあ「盲啞」【名】「めくら」と、おしと。

まいあ「盲啞」【名】「めくら」と、おしと。

まいあ「盲啞」【名】「めくら」と、おしと。

漢の畫家。杜陵の人。人物寫生に長ず。元帝、後宮の妃嬪を畫きて奉らしめしに、妃嬪、みな畫工に賤せしが、王昭君のみ、その美貌を待みて賤らざりき。後帝圖を按じて、匈奴の呼韓邪單于に、王昭君を賜ふに當り、これを召見するに、その美、後宮第一なりしより、事露れ、誅に伏せり。

まいか「孟夏」【名】「孟は始(カ)の異稱。夏のはじめ。初夏。【陰曆四月の異稱。孟夏の安」【古、四月一日に行ひし句の宴。【孟夏の句」【古、四月一日に行はれし公事。臣下に御酒を賜ひ、政をきこしめししもの。儀式は孟夏の句と同じ。【句)參照。

まいか「孟夏」【名】「孟は始(カ)の異稱。夏のはじめ。初夏。【陰曆四月の異稱。孟夏の安」【古、四月一日に行ひし句の宴。【孟夏の句」【古、四月一日に行はれし公事。臣下に御酒を賜ひ、政をきこしめししもの。儀式は孟夏の句と同じ。【句)參照。

まいか「孟夏」【名】「孟は始(カ)の異稱。夏のはじめ。初夏。【陰曆四月の異稱。孟夏の安」【古、四月一日に行ひし句の宴。【孟夏の句」【古、四月一日に行はれし公事。臣下に御酒を賜ひ、政をきこしめししもの。儀式は孟夏の句と同じ。【句)參照。

まいか「孟夏」【名】「孟は始(カ)の異稱。夏のはじめ。初夏。【陰曆四月の異稱。孟夏の安」【古、四月一日に行ひし句の宴。【孟夏の句」【古、四月一日に行はれし公事。臣下に御酒を賜ひ、政をきこしめししもの。儀式は孟夏の句と同じ。【句)參照。

まいか「孟夏」【名】「孟は始(カ)の異稱。夏のはじめ。初夏。【陰曆四月の異稱。孟夏の安」【古、四月一日に行ひし句の宴。【孟夏の句」【古、四月一日に行はれし公事。臣下に御酒を賜ひ、政をきこしめししもの。儀式は孟夏の句と同じ。【句)參照。

まいか「孟夏」【名】「孟は始(カ)の異稱。夏のはじめ。初夏。【陰曆四月の異稱。孟夏の安」【古、四月一日に行ひし句の宴。【孟夏の句」【古、四月一日に行はれし公事。臣下に御酒を賜ひ、政をきこしめししもの。儀式は孟夏の句と同じ。【句)參照。

まいか「孟夏」【名】「孟は始(カ)の異稱。夏のはじめ。初夏。【陰曆四月の異稱。孟夏の安」【古、四月一日に行ひし句の宴。【孟夏の句」【古、四月一日に行はれし公事。臣下に御酒を賜ひ、政をきこしめししもの。儀式は孟夏の句と同じ。【句)參照。

まいか「孟夏」【名】「孟は始(カ)の異稱。夏のはじめ。初夏。【陰曆四月の異稱。孟夏の安」【古、四月一日に行ひし句の宴。【孟夏の句」【古、四月一日に行はれし公事。臣下に御酒を賜ひ、政をきこしめししもの。儀式は孟夏の句と同じ。【句)參照。

まいか「孟夏」【名】「孟は始(カ)の異稱。夏のはじめ。初夏。【陰曆四月の異稱。孟夏の安」【古、四月一日に行ひし句の宴。【孟夏の句」【古、四月一日に行はれし公事。臣下に御酒を賜ひ、政をきこしめししもの。儀式は孟夏の句と同じ。【句)參照。

まいか「孟夏」【名】「孟は始(カ)の異稱。夏のはじめ。初夏。【陰曆四月の異稱。孟夏の安」【古、四月一日に行ひし句の宴。【孟夏の句」【古、四月一日に行はれし公事。臣下に御酒を賜ひ、政をきこしめししもの。儀式は孟夏の句と同じ。【句)參照。

まいか「孟夏」【名】「孟は始(カ)の異稱。夏のはじめ。初夏。【陰曆四月の異稱。孟夏の安」【古、四月一日に行ひし句の宴。【孟夏の句」【古、四月一日に行はれし公事。臣下に御酒を賜ひ、政をきこしめししもの。儀式は孟夏の句と同じ。【句)參照。

まいか「孟夏」【名】「孟は始(カ)の異稱。夏のはじめ。初夏。【陰曆四月の異稱。孟夏の安」【古、四月一日に行ひし句の宴。【孟夏の句」【古、四月一日に行はれし公事。臣下に御酒を賜ひ、政をきこしめししもの。儀式は孟夏の句と同じ。【句)參照。

まいか「孟夏」【名】「孟は始(カ)の異稱。夏のはじめ。初夏。【陰曆四月の異稱。孟夏の安」【古、四月一日に行ひし句の宴。【孟夏の句」【古、四月一日に行はれし公事。臣下に御酒を賜ひ、政をきこしめししもの。儀式は孟夏の句と同じ。【句)參照。

まいか「孟夏」【名】「孟は始(カ)の異稱。夏のはじめ。初夏。【陰曆四月の異稱。孟夏の安」【古、四月一日に行ひし句の宴。【孟夏の句」【古、四月一日に行はれし公事。臣下に御酒を賜ひ、政をきこしめししもの。儀式は孟夏の句と同じ。【句)參照。

まいか「孟夏」【名】「孟は始(カ)の異稱。夏のはじめ。初夏。【陰曆四月の異稱。孟夏の安」【古、四月一日に行ひし句の宴。【孟夏の句」【古、四月一日に行はれし公事。臣下に御酒を賜ひ、政をきこしめししもの。儀式は孟夏の句と同じ。【句)參照。

まいか「孟夏」【名】「孟は始(カ)の異稱。夏のはじめ。初夏。【陰曆四月の異稱。孟夏の安」【古、四月一日に行ひし句の宴。【孟夏の句」【古、四月一日に行はれし公事。臣下に御酒を賜ひ、政をきこしめししもの。儀式は孟夏の句と同じ。【句)參照。

まいか「孟夏」【名】「孟は始(カ)の異稱。夏のはじめ。初夏。【陰曆四月の異稱。孟夏の安」【古、四月一日に行ひし句の宴。【孟夏の句」【古、四月一日に行はれし公事。臣下に御酒を賜ひ、政をきこしめししもの。儀式は孟夏の句と同じ。【句)參照。

まいか「孟夏」【名】「孟は始(カ)の異稱。夏のはじめ。初夏。【陰曆四月の異稱。孟夏の安」【古、四月一日に行ひし句の宴。【孟夏の句」【古、四月一日に行はれし公事。臣下に御酒を賜ひ、政をきこしめししもの。儀式は孟夏の句と同じ。【句)參照。

まいか「孟夏」【名】「孟は始(カ)の異稱。夏のはじめ。初夏。【陰曆四月の異稱。孟夏の安」【古、四月一日に行ひし句の宴。【孟夏の句」【古、四月一日に行はれし公事。臣下に御酒を賜ひ、政をきこしめししもの。儀式は孟夏の句と同じ。【句)參照。

まいか「孟夏」【名】「孟は始(カ)の異稱。夏のはじめ。初夏。【陰曆四月の異稱。孟夏の安」【古、四月一日に行ひし句の宴。【孟夏の句」【古、四月一日に行はれし公事。臣下に御酒を賜ひ、政をきこしめししもの。儀式は孟夏の句と同じ。【句)參照。

まうじ

まうじにかかる 申掛る【動四自】いひかか
る言掛るに同じ。一代男初対面から、
私は振られますまいと、智慧自慢申しか
かり。

まうじかく 申掛く【動下二他】いひかか
く(言掛く)に同じ。五人女「我が一子、未だ
定まる妻とてなし、そなたも退つ」かぬ
中なれば、これにと申し掛ければ

まうじかぬ 申兼ぬ【動下二他】いひかか
ぬ(言兼ぬ)に同じ。
まうじかはす 申交す【動四他】いひかは
す(言交す)に同じ。兼て「この御なからひ
は、……いみじうはづかしう、心にくく申
しかはせたまふ」

まうじかふ 申替ふ【動下二他】申し上
げて取りかふ。平首「既に死罪に定まりた
りしを、今度の勳功の賞に申し替へて」

まうじきかず 申聞かず【動下二他】いひ
きかず(言聞かず)に同じ。
まうじきける 申聞ける【動下二他】前
條に同じ。五人女「心底申しきかせられ
ば、茂右衛門思の外なる思はく違ひ」

まうじくたす 申下す【動四他】申し乞
ひて、下す。宇道「宣言を申し下して」
まうじく申す【名】「神佛に申し請ひた
るによりて生れたる兒。和合(山姥)の
の告子(おんこ)を見るやうに、むっくり起きる
と、山めぐりが商賣だ」

まうじく申す【名】「いひこ(言事)に
同じ。平首「かたはら痛き申事なれども」
まうじく申す【名】「申しこむこと」。

まうじく申す【名】「法」相手の承諾を得て、契約を成立
せしめんとする意志を表示すること。
まうじく申す【名】「申込価格」賣買
契約にて、申込人の申し込む価格。
まうじく申す【名】「申し込む
人。まうじく申込人」。

まうじく申す【名】「申込状」(名)「申込の
趣旨を記載せる書状。申込書」。「じ」
まうじく申す【名】「前條に同
まうじく申す【名】「申込人」(名)「まうじく申
す」(名)に同じ。
まうじく申す【名】「動四他」【いひこむ
まうじく申す】(名)に同じ。

まうじ

(言込む)に同じ。團體などに、用件を
いひおくる。目「進んで契約をなす」
まうじく申す【名】「申し行ふこと」
さばき。沙汰。處置。平首「この中將、院
の御氣色(おんいき)に能く人にて、院中の事、申沙
汰せられるが」

まうじく申す【名】「申沈む」(動下二他)「申し
立てて、他人の地位の低くなるやうにす。
平首「源氏の人人をば、申し沈めんとする
などこそ承れ」

まうじく申す【名】「孟施舍」(名)「孟子の
公孫丑上篇に出づ。孟は姓、舍は名、施は
發語の詞」支那の古の勇者。
まうじく申す【名】「申し出づる
旨。いひき。まうじく申す。慶雲記「傍若
無人の景親が申状」(名)「まうじく申す」(名)に
同じ。「鎌倉時代の語。兼て「平太右
貞領所之旨、搦申状」之間」(名)「原告の
訴状本解状(おんこ)」。武家時代中、殊に鎌
倉時代及び室町時代の語」

まうじく申す【名】「参從」(動四自)「(参)
從ふの音便」附き從ふ。投降す。來降す。
「古語」馬當歸、マウシタガヒナム」
まうじく申す【名】「動下二他」【いひたつ
まうじく申す】(名)に同じ。

まうじく申す【名】「動佐變自」下位
の者に告げ知らす。
まうじく申す【名】「明治元年より六
年頃まで、現今の開令省令などに相當
する法令の終に記して、太政大臣より
諸省の卿に、又は諸省の卿より知事に
申し達することを示しし語」

まうじく申す【名】「申し立つるこ
と」。「法」官公署に一定の主張を提出
すること、又その主張。
まうじく申す【名】「申立の趣
旨を記載せる書面」。「る人」
まうじく申す【名】「申立人」(名)「申し立つ
まうじく申す」(名)に同じ。

まうじく申す【名】「動佐變他」互に
往復し、又は交通をなす。交際す。
まうじく申す【名】「申遣す」(動四他)【いひつ
かはず(言遣す)に同じ。
まうじく申す【名】「申し次ぐこと」。

まうじく申す【名】「申し次ぐこと」。

まうじ

ありつき。藩編「於義丸を下すべし」と仰
ありつきに、使者、申次の人に近づきて」
目「次條の略」
まうじく申す【名】「申次衆」(名)「足利幕
府の職制の」。諸將士の参贊する時、名を
報じ、謁を通ずることを掌り、盲人進見の
際には、手を取りて導きなどせしもの。永
祿中の員數十七人。そうしや奏者」(名)「参照」
まうじく申す【名】「動下二他」【いひつ
まうじく申す】(名)に同じ。

まうじく申す【名】「明治元年より同
六年頃まで、現今の開令省令などに當
る法令の終に記して、太政大臣より諸
省の卿に、又は諸省の卿より知事に申
し附くることを示しし語」
まうじく申す【名】「申次々」(動四他)
取り次ぎて申す。盛衰記「梶原、三位中將
の前に跪きて申さんとしければ、何條申
し繼ぐべきと思はれけん……と宣ひ
ければ」

まうじく申す【名】「申しつくること」。
まうじく申す【名】「動下二他」【いひつ
たふ(言傳ふ)に同じ。五人女「古人の申傳
へし」(名)に同じ。
まうじく申す【名】「申傳」(名)【いひつた
まうじく申す】(名)に同じ。
まうじく申す【名】「申傳」(名)【いひつた
まうじく申す】(名)に同じ。

まうじく申す【名】「妻を得んことを
神佛に祈願すること、又、斯くして得たる
妻。まうじく申す(申)参照。狂言(おんこ)「清水
の觀世吉に、申妻をよしてあるが、案の如く
に妻を下され」
まうじく申す【名】「何と申す
も、かれこれいひても、つまるところ、
若風俗(おんこ)申しても、御方(おんこ)は、かりそめの
御言葉をかはしたるべき分なれば」(名)「諸
太平記」申すも、地獄は、諸國の附合(おんこ)
にて、はれがまし得候へば」

まうじく申す【名】「先に言ひ出た
まうじく申す【名】「狂言(おんこ)「ど
ちらからなりとも、出た方から申得て御
さる」

まうじく申す【名】「非難の箇所。申
分。缺點。狂言(おんこ)「申所も無い花でござ
ります」(名)「(名)を申す所」
まうじく申す【名】「神社内の、祝詞
まうじく申す【名】「申通す」(動四他)「取り次
ぎて、奥に通す」。「古語」空鷲昔「この殿
にさぶらひし下部なん参りたる、これ
申しとほしたまへ」

まうじく申す【名】「申成」(名)「申しなすこ
申成にて、一旦のおん恨ごとにてこそ候
ふらめ」
まうじく申す【名】「申成す」(動四他)【いひ
まうじく申す】(名)に同じ。太平記「今出河右
大臣公頼の女にて候ふなるを、徳大寺左
大臣に申し名づけながら、未だ皇太后宮
の御匣(おんこ)にて候ふなる」
まうじく申す【名】「申直す」(動四他)【いひなほ
す(言直す)に同じ。兼て「大臣(おんこ)こそ、
なほこれ申しなほしたまへ」

まうじく申す【名】「言ひ
ながら寝入ること。五人女「この小坊主
枕傾け……と、夢にもうつつにも申寝入
にしづまりける」
まうじく申す【名】「動下二他」【いひ
まうじく申す】(名)に同じ。
まうじく申す【名】「陳述す」
まうじく申す【名】「申開」(名)「申し開くこと」
まうじく申す【名】「申開」(名)【いひひら
く(言開く)に同じ。太平記「その身の誤ら
ざる所を申し開き」
まうじく申す【名】「佛」妄りなる執念。
虚妄(おんこ)の法に執著すること。著聞實に
妄執(おんこ)にもなりぬべきに」

まうじく申す【名】「申合む」(動下二他)【いひふ
くむ(言合む)に同じ。兼て「三代記」とくと申
し合め」
まうじく申す【名】「申文」(名)「事情を陳上す
る文。上申する文書。かきあげ。まうじ
く申す。表。江次「馬除三座頭」之次第奉
仕申文」。「古、公卿その他、相當の地
位に在る者の、關官關位ある場合に、こ
れに敘任せられんことを、朝廷に申請せ
し文書。自身も書き、推薦者の書く事も

まうじ

分。缺點。狂言(おんこ)「申所も無い花でござ
ります」(名)「(名)を申す所」
まうじく申す【名】「神社内の、祝詞
まうじく申す【名】「申通す」(動四他)「取り次
ぎて、奥に通す」。「古語」空鷲昔「この殿
にさぶらひし下部なん参りたる、これ
申しとほしたまへ」

まうじく申す【名】「申成」(名)「申しなすこ
申成にて、一旦のおん恨ごとにてこそ候
ふらめ」
まうじく申す【名】「申成す」(動四他)【いひ
まうじく申す】(名)に同じ。太平記「今出河右
大臣公頼の女にて候ふなるを、徳大寺左
大臣に申し名づけながら、未だ皇太后宮
の御匣(おんこ)にて候ふなる」
まうじく申す【名】「申直す」(動四他)【いひなほ
す(言直す)に同じ。兼て「大臣(おんこ)こそ、
なほこれ申しなほしたまへ」

まうじく申す【名】「言ひ
ながら寝入ること。五人女「この小坊主
枕傾け……と、夢にもうつつにも申寝入
にしづまりける」
まうじく申す【名】「動下二他」【いひ
まうじく申す】(名)に同じ。
まうじく申す【名】「陳述す」
まうじく申す【名】「申開」(名)「申し開くこと」
まうじく申す【名】「申開」(名)【いひひら
く(言開く)に同じ。太平記「その身の誤ら
ざる所を申し開き」
まうじく申す【名】「佛」妄りなる執念。
虚妄(おんこ)の法に執著すること。著聞實に
妄執(おんこ)にもなりぬべきに」

まうじく申す【名】「申合む」(動下二他)【いひふ
くむ(言合む)に同じ。兼て「三代記」とくと申
し合め」
まうじく申す【名】「申文」(名)「事情を陳上す
る文。上申する文書。かきあげ。まうじ
く申す。表。江次「馬除三座頭」之次第奉
仕申文」。「古、公卿その他、相當の地
位に在る者の、關官關位ある場合に、こ
れに敘任せられんことを、朝廷に申請せ
し文書。自身も書き、推薦者の書く事も

まうじく申す【名】「申合む」(動下二他)【いひふ
くむ(言合む)に同じ。兼て「三代記」とくと申
し合め」
まうじく申す【名】「申文」(名)「事情を陳上す
る文。上申する文書。かきあげ。まうじ
く申す。表。江次「馬除三座頭」之次第奉
仕申文」。「古、公卿その他、相當の地
位に在る者の、關官關位ある場合に、こ
れに敘任せられんことを、朝廷に申請せ
し文書。自身も書き、推薦者の書く事も

まうじく申す【名】「申合む」(動下二他)【いひふ
くむ(言合む)に同じ。兼て「三代記」とくと申
し合め」
まうじく申す【名】「申文」(名)「事情を陳上す
る文。上申する文書。かきあげ。まうじ
く申す。表。江次「馬除三座頭」之次第奉
仕申文」。「古、公卿その他、相當の地
位に在る者の、關官關位ある場合に、こ
れに敘任せられんことを、朝廷に申請せ
し文書。自身も書き、推薦者の書く事も

まうじく申す【名】「申合む」(動下二他)【いひふ
くむ(言合む)に同じ。兼て「三代記」とくと申
し合め」
まうじく申す【名】「申文」(名)「事情を陳上す
る文。上申する文書。かきあげ。まうじ
く申す。表。江次「馬除三座頭」之次第奉
仕申文」。「古、公卿その他、相當の地
位に在る者の、關官關位ある場合に、こ
れに敘任せられんことを、朝廷に申請せ
し文書。自身も書き、推薦者の書く事も

まうじく申す【名】「申合む」(動下二他)【いひふ
くむ(言合む)に同じ。兼て「三代記」とくと申
し合め」
まうじく申す【名】「申文」(名)「事情を陳上す
る文。上申する文書。かきあげ。まうじ
く申す。表。江次「馬除三座頭」之次第奉
仕申文」。「古、公卿その他、相當の地
位に在る者の、關官關位ある場合に、こ
れに敘任せられんことを、朝廷に申請せ
し文書。自身も書き、推薦者の書く事も

まうじく申す【名】「申合む」(動下二他)【いひふ
くむ(言合む)に同じ。兼て「三代記」とくと申
し合め」
まうじく申す【名】「申文」(名)「事情を陳上す
る文。上申する文書。かきあげ。まうじ
く申す。表。江次「馬除三座頭」之次第奉
仕申文」。「古、公卿その他、相當の地
位に在る者の、關官關位ある場合に、こ
れに敘任せられんことを、朝廷に申請せ
し文書。自身も書き、推薦者の書く事も

あり、又、文章家に依頼して書くこともあり。毎年、正月五日の欽位、八日の女欽位、十一日の縣石(のち)の除目(のち)、及び京官の除目などの時に出家する例としたりはこぶみ。まうしじやう。其除目のほなど、……雪降りこぼりなどしたるに、申文もてありく四位五位」

まうしじぶん 申分【名】いひぶん(言分)に同じ。権置何でも、ちつと貌容(のち)に申分を拵(か)へたりやあ、人が惚れて五月風(か)いばかりか、油断がらなれえ」胸算(のち)銀子請け取って、申分はなれども」

まうしじぼとく 申解く【動四他】いひぼとく(言解く)に同じ。五人女「されども、思ひ込みし戀なれば、このまま置くべきにもあらず。我も、一とほり心の程を申しほどきてなん」

まうしじまうし 申申【感】人を呼びかくるにいふ語。もしもし。まうし。狂言武悪「ああ、申し申し、武悪(のち)が亡霊(のち)には隠も御座りませぬ」

まうしじます 申升【名】遊客に祝儀をねだること。「徳川時代の常陸國潮来(のち)の妓樓の語」細末無蓋「且那樣方へ出しぬけに申しますがあつては悪うござりますから、……申しますとは、若い者より、客へ、臺の物を出して、南簾一片をせしめることなり」

まうしじん 安心【名】「佛」煩惱の妄念、全然「所願、心に来らば、安心迷亂すと知りて、一事をも爲すべからず」

まうしじん 妄信【名】みだりに信ずること、又その信念。

まうしじん 妄進【名】むやみに進むこと。

まうしじん 猛進【名】勢はげしく進むこと。

まうしじん 盲人【名】目の見えぬ者。めしむ。

まうしじん 盲人拳【名】盲人の間にけはれし一種の拳指を出だすことなく、雙方一時に發聲して數を呼び、相手より一拳上の數を呼びたるを勝となすもの。例へば、相手の「三」といひし時、「四

(四)」といへば、勝となる類。

まうしじんせう 孟津抄【名】「書」『孟津』は、支那河南省洛陽孟津縣に在る黄河沿岸の渡津。周の武王の殷を伐たんと、兵を率ゐてここに至りし時諸侯の會する者八百に達せし由傳へらるる所なるより、津梁の義にていふ『河海抄』花鳥餘情を参考して、源氏物語を註釋せるもの。二十一卷。九條通(のち)の著。「じ」。

まうしじや 盲者【名】まうじん(盲人)に同じ。

まうしじや 亡者【名】「佛」死にたる人。なき人。

まうしじや 佛【名】成佛せざる死者の魂魄の、冥途に迷ひ居る者。なきたま。いろいろいふ。

まうしじやう 猛將【名】猛き將。勇猛なる大將。

まうしじやう 罔象【名】「莊子の達生篇」に出づ「水の怪物。その狀小兒の如く、色赤黒く、臂長く、耳大にして、爪赤しといふ。」水の神。みづは。

まうしじやう 毛嬙【名】「人」支那にて、西施と並び稱せられし美人。

まうしじやう 網狀【名】網の如きかたち。戰國時代の齊の公族。姓は田、名は文。孟嘗君はその號。宣王の庶弟嬰の子。父に繼ぎて、薛(のち)公となる。客を好み、食客三千人あり。名聲諸侯の間に聞ゆ。後、魏の相となる。周の赧王三十六年薛に卒す。

まうしじやう ていじき 網狀結締織【名】「醫」『Bathulius Brindgowe』結締織の一。星を狀する細胞の、相倚り、互に吻合して網狀をなせるもの。胎兒にのみ見るものにして、成長後は、單に層状なる纖維の網狀を作るのみ。網の目の内には常に、細胞として白血球充實す。腺様組織。腺狀組織。

まうしじやう けつていじき 網狀結締組織【名】「醫」前條に同じ。

まうしじやう みやく 網狀脈【名】「植」『英』Betula(又 Nettle) venation』葉脚の一點より一條又は數條の大脈を出だし、これより又若干の側脈を分ち、更に細脈

を分出して、網狀をなせるもの。雙子葉植物の葉は、皆これに屬し、掌狀脈と羽狀脈とに分る。(並行脈に對し)

まうしじや はす 申合す【動下二他】まうしあはす(申合す)の訛。狂言「これ(音曲を申しやせませぬ」

まうしじゆ 毛錐【名】極めて微小なる量。

まうしじゆ 毛じゆう【名】鼠の如き怪物。盛衰よくよく見れば、毛じゆうなり。毛じゆうとは、鼠の唐名なり」

まうしじゆ 盲從【名】見識なくして、言ふがままに従ふこと。めくら滅法に服従すること。

まうしじゆん 孟春【名】「孟は始(のち)の義」春の初。陰曆一月の異稱。

まうしじゆん 孟句【名】孟夏の句と孟冬の句との併稱。

まうしじやう 毛茸【名】「植」『英』Trichome』植物の表皮に生せる毛、又はそれに類似せるもの。形状一定せず、單一の細胞より成るものと、多數の細胞毛より成るものとあり、又、内に原形質を含めるものと、然らざるものとあり。せんまろ(腺毛)を貫ひて」

まうしじわく 申分く 申別く【動下二他】まうしわく(言分く)に同じ。若風「この理(のち)を親方に申し分けて、首尾よく隙(のち)を貫ひて」

まうしじわけ 申分 申別 申譯【名】いひわけ(言分)に同じ。

まうしじわたし 申渡【名】申しわたすこと。いひわたし。胸算用「例年申渡御存じの如く、大晦日の七つ下りに候へば」

まうしじわたす 申渡す【動四他】いひわたす(言渡す)に同じ。申渡(のち)を宣告す。

まうしす 帽子【名】臨濟家の僧の被る六稜の頭巾。

まうす 申す【動四他】「まます(申す)の音便」いふ。告ぐ。ます。白す。天子のため、政事をとりに行ふ。貴人のために興り行ふ。ます。古語「萬葉堀

江より水脈引(のち)しつ御舟さす賤男(のち)のともは川の瀬まうせ」目請ふ。願ふ。竹原「おほやけに申して、買ひ取りて奉る」盛衰寺領・坊領をも申さんずるや」四爲す。仕る。ます。萬葉「古の君が三代經て仕へけり吾が大君は七代分(のち)申さね」

まうすう 孟陬【名】「爾雅」に「正月爲陬、離騷」に「攝提貞于孟陬(のち)」とあり。孟は始(のち)の義。陬は隅の義。隅、正しくはそ。陰曆正月の異稱。

まうすお 毛錐【名】『五代史の漢臣史弘肇傳に「毛錐子」とあり。先鋒の尖れるを錐に譬(のち)ていふ(筆)の異稱。

まうすお 毛錐子【名】前條に同じ。

まうせい 猛勢【名】「猛きいきほひ。きはめて多勢なること。勇猛なる軍勢。藤曲「放下(のち)敵(のち)は猛勢、われらは、ただ一人にて候間」

まうせい 猛勢節所なし【句】猛勢に對しては、要害もその効を失ふ。「諺語」

まうせい 猛聲【名】猛きこゑ。

まうせい 猛骨【名】「猛然と反骨すること。きびしく反骨すること。

まうせい 妄舌【名】「佛」まうご(妄語)に同じ。藤曲「江口」に「心に思ひ、口にいふ妄舌の縁となるもの」

まうせん 毛氈【名】毛と綿との纖維を混合して壓搾し、種種の色に染めたる、厚き敷物。支那より舶載し、床張又は机掛などに用ふ。織物に非ず。ふえると。

まうせん 毛尖【名】「醫」まうかん(毛幹)を見よ。

まうせん 輞川【名】「地」支那浙江省の西湖の附近にある勝地。

まうせん 妄染【名】「佛」染はせんざん(染著)の義。染の執著。盛衰馬生死の妄染なれば」

まうせん 猛然【貌】たけきさま。はげしきさま。「同じ」。

まうせんざ 毛氈草【名】「植」次條に

まうせんご 毛氈苔【名】「植」茅苧菜(のち)科に屬する多年生の食蟲草。高さ

を分出して、網狀をなせるもの。雙子葉植物の葉は、皆これに屬し、掌狀脈と羽狀脈とに分る。(並行脈に對し)

まうしじや はす 申合す【動下二他】まうしあはす(申合す)の訛。狂言「これ(音曲を申しやせませぬ」

まうしじゆ 毛錐【名】極めて微小なる量。

まうしじゆ 毛じゆう【名】鼠の如き怪物。盛衰よくよく見れば、毛じゆうなり。毛じゆうとは、鼠の唐名なり」

まうしじゆ 盲從【名】見識なくして、言ふがままに従ふこと。めくら滅法に服従すること。

まうしじゆん 孟春【名】「孟は始(のち)の義」春の初。陰曆一月の異稱。

まうしじゆん 孟句【名】孟夏の句と孟冬の句との併稱。

まうしじやう 毛茸【名】「植」『英』Trichome』植物の表皮に生せる毛、又はそれに類似せるもの。形状一定せず、單一の細胞より成るものと、多數の細胞毛より成るものとあり、又、内に原形質を含めるものと、然らざるものとあり。せんまろ(腺毛)を貫ひて」

まうしじわく 申分く 申別く【動下二他】まうしわく(言分く)に同じ。若風「この理(のち)を親方に申し分けて、首尾よく隙(のち)を貫ひて」

まうしじわけ 申分 申別 申譯【名】いひわけ(言分)に同じ。

まうしじわたし 申渡【名】申しわたすこと。いひわたし。胸算用「例年申渡御存じの如く、大晦日の七つ下りに候へば」

まうしじわたす 申渡す【動四他】いひわたす(言渡す)に同じ。申渡(のち)を宣告す。

まうしす 帽子【名】臨濟家の僧の被る六稜の頭巾。

まうす 申す【動四他】「まます(申す)の音便」いふ。告ぐ。ます。白す。天子のため、政事をとりに行ふ。貴人のために興り行ふ。ます。古語「萬葉堀

を分出して、網狀をなせるもの。雙子葉植物の葉は、皆これに屬し、掌狀脈と羽狀脈とに分る。(並行脈に對し)

まうしじや はす 申合す【動下二他】まうしあはす(申合す)の訛。狂言「これ(音曲を申しやせませぬ」

まうしじゆ 毛錐【名】極めて微小なる量。

まうしじゆ 毛じゆう【名】鼠の如き怪物。盛衰よくよく見れば、毛じゆうなり。毛じゆうとは、鼠の唐名なり」

まうしじゆ 盲從【名】見識なくして、言ふがままに従ふこと。めくら滅法に服従すること。

まうしじゆん 孟春【名】「孟は始(のち)の義」春の初。陰曆一月の異稱。

まうしじゆん 孟句【名】孟夏の句と孟冬の句との併稱。

まうしじやう 毛茸【名】「植」『英』Trichome』植物の表皮に生せる毛、又はそれに類似せるもの。形状一定せず、單一の細胞より成るものと、多數の細胞毛より成るものとあり、又、内に原形質を含めるものと、然らざるものとあり。せんまろ(腺毛)を貫ひて」

まうしじわく 申分く 申別く【動下二他】まうしわく(言分く)に同じ。若風「この理(のち)を親方に申し分けて、首尾よく隙(のち)を貫ひて」

まうしじわけ 申分 申別 申譯【名】いひわけ(言分)に同じ。

まうしじわたし 申渡【名】申しわたすこと。いひわたし。胸算用「例年申渡御存じの如く、大晦日の七つ下りに候へば」

まうしじわたす 申渡す【動四他】いひわたす(言渡す)に同じ。申渡(のち)を宣告す。

まうしす 帽子【名】臨濟家の僧の被る六稜の頭巾。

まうす 申す【動四他】「まます(申す)の音便」いふ。告ぐ。ます。白す。天子のため、政事をとりに行ふ。貴人のために興り行ふ。ます。古語「萬葉堀

まうしじ

まうしん

まうしご

まうしやう

まろえ

四五寸乃至八寸あり。葉は根出し、長き葉柄と、圓形、淡紅色の葉身とを有し、叢生す。葉面に密生す。赤き腺毛より、粘液を出して、これに止る小蟲を捕へ、同時に腺毛より消化液を分泌して、蟲體を消化し、糞分とす。夏、莖頂に、白色又は淡紅色の小花、總狀をなして開く。高山、寒地又は温地の、濕潤なる野地に自生す。



(けごんせうま)

まろえ 網疏網疎 [名] 『綱目』砂疎ならずを見よ』法律の疎漏なること。

まろえ 孟宗 [名] 『人』支那の二十四孝の一。字は恭武。江夏の人。少き時、李漸に従ひて學ぶ。その母、笱を嗜みしが、冬近からんとして、笱未だ生ぜざるに當り、宗、竹林に入りて哀歎せしに、至孝、天に感じて、笱を得、母に供するを得たりと傳ふ。吳の孫皓に仕へて、司空に至る。『植』まろえちう(孟宗竹)の略。

まろえ だけ 孟宗竹 [名] 『植』次條にまろえちう(孟宗竹) [名] 『植』竹の一。種。高さ三丈餘、莖周、竹類中最大にして、二尺五寸に及ぶものあり。肉厚くして、軟質、每節二枝を生ず。葉は披針形にして、平行脈を具へ、縁は帶紫茶褐色にして、暗紫色の斑點あり。地上莖は建築、器具の用に、籐は笠草履などの料に供し、莖は食用とす。原産地は支那江南地方、我國へは琉球を経て、薩摩に渡來し、温暖なる各地に栽培す。その培養的變種に龜甲竹(龜甲)あり。まろえちうだけ。まろえちう。わせただけ。江南竹。漢竹(漢竹)。

まろえ ちうだけ 毛足類 [名] 『動』蠕形動物中、環蟲類の一。體は圓筒形にして、多數の同形環節の連續より成り、各環節間は、隔膜によりて區劃せられ、體腔は多くの房に分る。體面に硬き刺子膜を被り、各關節には、一定の位地に、刺又は剛毛を具ふ。蚯蚓(蚯蚓)は、沙蠶(沙蠶)の一種に屬す。又これを蠕形動物中の一綱とし、多足類、貧毛類の二目に分つ者あり。その場合、沙蠶、磯目は前者に、蚯蚓は後者に屬す。

まろえ ちうだけ 毛足類 [名] 『動』蠕形動物中、環蟲類の一。體は圓筒形にして、多數の同形環節の連續より成り、各環節間は、隔膜によりて區劃せられ、體腔は多くの房に分る。體面に硬き刺子膜を被り、各關節には、一定の位地に、刺又は剛毛を具ふ。蚯蚓(蚯蚓)は、沙蠶(沙蠶)の一種に屬す。又これを蠕形動物中の一綱とし、多足類、貧毛類の二目に分つ者あり。その場合、沙蠶、磯目は前者に、蚯蚓は後者に屬す。

まろえ

まろえ ちうだけ 毛足類 [名] 『動』蠕形動物中、環蟲類の一。體は圓筒形にして、多數の同形環節の連續より成り、各環節間は、隔膜によりて區劃せられ、體腔は多くの房に分る。體面に硬き刺子膜を被り、各關節には、一定の位地に、刺又は剛毛を具ふ。蚯蚓(蚯蚓)は、沙蠶(沙蠶)の一種に屬す。又これを蠕形動物中の一綱とし、多足類、貧毛類の二目に分つ者あり。その場合、沙蠶、磯目は前者に、蚯蚓は後者に屬す。

まろえ ちうだけ 毛足類 [名] 『動』蠕形動物中、環蟲類の一。體は圓筒形にして、多數の同形環節の連續より成り、各環節間は、隔膜によりて區劃せられ、體腔は多くの房に分る。體面に硬き刺子膜を被り、各關節には、一定の位地に、刺又は剛毛を具ふ。蚯蚓(蚯蚓)は、沙蠶(沙蠶)の一種に屬す。又これを蠕形動物中の一綱とし、多足類、貧毛類の二目に分つ者あり。その場合、沙蠶、磯目は前者に、蚯蚓は後者に屬す。

まろえ ちうだけ 毛足類 [名] 『動』蠕形動物中、環蟲類の一。體は圓筒形にして、多數の同形環節の連續より成り、各環節間は、隔膜によりて區劃せられ、體腔は多くの房に分る。體面に硬き刺子膜を被り、各關節には、一定の位地に、刺又は剛毛を具ふ。蚯蚓(蚯蚓)は、沙蠶(沙蠶)の一種に屬す。又これを蠕形動物中の一綱とし、多足類、貧毛類の二目に分つ者あり。その場合、沙蠶、磯目は前者に、蚯蚓は後者に屬す。

まろえ ちうだけ 毛足類 [名] 『動』蠕形動物中、環蟲類の一。體は圓筒形にして、多數の同形環節の連續より成り、各環節間は、隔膜によりて區劃せられ、體腔は多くの房に分る。體面に硬き刺子膜を被り、各關節には、一定の位地に、刺又は剛毛を具ふ。蚯蚓(蚯蚓)は、沙蠶(沙蠶)の一種に屬す。又これを蠕形動物中の一綱とし、多足類、貧毛類の二目に分つ者あり。その場合、沙蠶、磯目は前者に、蚯蚓は後者に屬す。

まろえ ちうだけ 毛足類 [名] 『動』蠕形動物中、環蟲類の一。體は圓筒形にして、多數の同形環節の連續より成り、各環節間は、隔膜によりて區劃せられ、體腔は多くの房に分る。體面に硬き刺子膜を被り、各關節には、一定の位地に、刺又は剛毛を具ふ。蚯蚓(蚯蚓)は、沙蠶(沙蠶)の一種に屬す。又これを蠕形動物中の一綱とし、多足類、貧毛類の二目に分つ者あり。その場合、沙蠶、磯目は前者に、蚯蚓は後者に屬す。

まろえ ちうだけ 毛足類 [名] 『動』蠕形動物中、環蟲類の一。體は圓筒形にして、多數の同形環節の連續より成り、各環節間は、隔膜によりて區劃せられ、體腔は多くの房に分る。體面に硬き刺子膜を被り、各關節には、一定の位地に、刺又は剛毛を具ふ。蚯蚓(蚯蚓)は、沙蠶(沙蠶)の一種に屬す。又これを蠕形動物中の一綱とし、多足類、貧毛類の二目に分つ者あり。その場合、沙蠶、磯目は前者に、蚯蚓は後者に屬す。

まろえ

まろえ ちうだけ 毛足類 [名] 『動』蠕形動物中、環蟲類の一。體は圓筒形にして、多數の同形環節の連續より成り、各環節間は、隔膜によりて區劃せられ、體腔は多くの房に分る。體面に硬き刺子膜を被り、各關節には、一定の位地に、刺又は剛毛を具ふ。蚯蚓(蚯蚓)は、沙蠶(沙蠶)の一種に屬す。又これを蠕形動物中の一綱とし、多足類、貧毛類の二目に分つ者あり。その場合、沙蠶、磯目は前者に、蚯蚓は後者に屬す。

まろえ ちうだけ 毛足類 [名] 『動』蠕形動物中、環蟲類の一。體は圓筒形にして、多數の同形環節の連續より成り、各環節間は、隔膜によりて區劃せられ、體腔は多くの房に分る。體面に硬き刺子膜を被り、各關節には、一定の位地に、刺又は剛毛を具ふ。蚯蚓(蚯蚓)は、沙蠶(沙蠶)の一種に屬す。又これを蠕形動物中の一綱とし、多足類、貧毛類の二目に分つ者あり。その場合、沙蠶、磯目は前者に、蚯蚓は後者に屬す。

まろえ ちうだけ 毛足類 [名] 『動』蠕形動物中、環蟲類の一。體は圓筒形にして、多數の同形環節の連續より成り、各環節間は、隔膜によりて區劃せられ、體腔は多くの房に分る。體面に硬き刺子膜を被り、各關節には、一定の位地に、刺又は剛毛を具ふ。蚯蚓(蚯蚓)は、沙蠶(沙蠶)の一種に屬す。又これを蠕形動物中の一綱とし、多足類、貧毛類の二目に分つ者あり。その場合、沙蠶、磯目は前者に、蚯蚓は後者に屬す。

まろえ ちうだけ 毛足類 [名] 『動』蠕形動物中、環蟲類の一。體は圓筒形にして、多數の同形環節の連續より成り、各環節間は、隔膜によりて區劃せられ、體腔は多くの房に分る。體面に硬き刺子膜を被り、各關節には、一定の位地に、刺又は剛毛を具ふ。蚯蚓(蚯蚓)は、沙蠶(沙蠶)の一種に屬す。又これを蠕形動物中の一綱とし、多足類、貧毛類の二目に分つ者あり。その場合、沙蠶、磯目は前者に、蚯蚓は後者に屬す。

まろえ ちうだけ 毛足類 [名] 『動』蠕形動物中、環蟲類の一。體は圓筒形にして、多數の同形環節の連續より成り、各環節間は、隔膜によりて區劃せられ、體腔は多くの房に分る。體面に硬き刺子膜を被り、各關節には、一定の位地に、刺又は剛毛を具ふ。蚯蚓(蚯蚓)は、沙蠶(沙蠶)の一種に屬す。又これを蠕形動物中の一綱とし、多足類、貧毛類の二目に分つ者あり。その場合、沙蠶、磯目は前者に、蚯蚓は後者に屬す。

まろえ ちうだけ 毛足類 [名] 『動』蠕形動物中、環蟲類の一。體は圓筒形にして、多數の同形環節の連續より成り、各環節間は、隔膜によりて區劃せられ、體腔は多くの房に分る。體面に硬き刺子膜を被り、各關節には、一定の位地に、刺又は剛毛を具ふ。蚯蚓(蚯蚓)は、沙蠶(沙蠶)の一種に屬す。又これを蠕形動物中の一綱とし、多足類、貧毛類の二目に分つ者あり。その場合、沙蠶、磯目は前者に、蚯蚓は後者に屬す。

まろえ

まろえ ちうだけ 毛足類 [名] 『動』蠕形動物中、環蟲類の一。體は圓筒形にして、多數の同形環節の連續より成り、各環節間は、隔膜によりて區劃せられ、體腔は多くの房に分る。體面に硬き刺子膜を被り、各關節には、一定の位地に、刺又は剛毛を具ふ。蚯蚓(蚯蚓)は、沙蠶(沙蠶)の一種に屬す。又これを蠕形動物中の一綱とし、多足類、貧毛類の二目に分つ者あり。その場合、沙蠶、磯目は前者に、蚯蚓は後者に屬す。

まろえ ちうだけ 毛足類 [名] 『動』蠕形動物中、環蟲類の一。體は圓筒形にして、多數の同形環節の連續より成り、各環節間は、隔膜によりて區劃せられ、體腔は多くの房に分る。體面に硬き刺子膜を被り、各關節には、一定の位地に、刺又は剛毛を具ふ。蚯蚓(蚯蚓)は、沙蠶(沙蠶)の一種に屬す。又これを蠕形動物中の一綱とし、多足類、貧毛類の二目に分つ者あり。その場合、沙蠶、磯目は前者に、蚯蚓は後者に屬す。

まろえ ちうだけ 毛足類 [名] 『動』蠕形動物中、環蟲類の一。體は圓筒形にして、多數の同形環節の連續より成り、各環節間は、隔膜によりて區劃せられ、體腔は多くの房に分る。體面に硬き刺子膜を被り、各關節には、一定の位地に、刺又は剛毛を具ふ。蚯蚓(蚯蚓)は、沙蠶(沙蠶)の一種に屬す。又これを蠕形動物中の一綱とし、多足類、貧毛類の二目に分つ者あり。その場合、沙蠶、磯目は前者に、蚯蚓は後者に屬す。

まろえ ちうだけ 毛足類 [名] 『動』蠕形動物中、環蟲類の一。體は圓筒形にして、多數の同形環節の連續より成り、各環節間は、隔膜によりて區劃せられ、體腔は多くの房に分る。體面に硬き刺子膜を被り、各關節には、一定の位地に、刺又は剛毛を具ふ。蚯蚓(蚯蚓)は、沙蠶(沙蠶)の一種に屬す。又これを蠕形動物中の一綱とし、多足類、貧毛類の二目に分つ者あり。その場合、沙蠶、磯目は前者に、蚯蚓は後者に屬す。

まろえ ちうだけ 毛足類 [名] 『動』蠕形動物中、環蟲類の一。體は圓筒形にして、多數の同形環節の連續より成り、各環節間は、隔膜によりて區劃せられ、體腔は多くの房に分る。體面に硬き刺子膜を被り、各關節には、一定の位地に、刺又は剛毛を具ふ。蚯蚓(蚯蚓)は、沙蠶(沙蠶)の一種に屬す。又これを蠕形動物中の一綱とし、多足類、貧毛類の二目に分つ者あり。その場合、沙蠶、磯目は前者に、蚯蚓は後者に屬す。

まろえ ちうだけ 毛足類 [名] 『動』蠕形動物中、環蟲類の一。體は圓筒形にして、多數の同形環節の連續より成り、各環節間は、隔膜によりて區劃せられ、體腔は多くの房に分る。體面に硬き刺子膜を被り、各關節には、一定の位地に、刺又は剛毛を具ふ。蚯蚓(蚯蚓)は、沙蠶(沙蠶)の一種に屬す。又これを蠕形動物中の一綱とし、多足類、貧毛類の二目に分つ者あり。その場合、沙蠶、磯目は前者に、蚯蚓は後者に屬す。

四對の足を有し、腹部は長くして、數輪あり。人類の毛叢に寄生し、而處(ニ)或は小疹の因をなすことも多く、又、犬、豚、猫羊などに寄生するものもあり。

まうなうら 盲囊部 [名] 醫 氣管支と共に肺構成する部分。壁は平滑ならずして、數多の膨出部あり、これを肺氣胞と稱す。一に、肺漏斗といふ。

まうにゆうらう 毛乳頭 [名] 醫 毛囊の基部に存する突起。結締織より成り、血管、神経に富み、毛髮の營養と發育とを司り、これが根源をなすを以て、毛髮を抜き去りても、毛乳頭を害せざれば、毛髮再生す。毛母。まうこん(毛根)参照。

まうねん 妄念 [名] 佛 迷へる執念。太平記「多生の(佛)廣劫までの妄念となりぬと覺え候ふ」

まうのぼる 參上る [動四自] 『まあのぼる(參上る)の音便』まゐる。參上す。「古語」源兵めしなき時も、開ゆべき事あるをりは、まうのぼりけり」

まうはつ 毛髮 [名] 手 掌・足趾(ひだ)爪などを除きて、全身に發生する角質總狀の保護機關。硬身のものとして、柔軟なるものもあり。毛根・毛幹・毛囊の三部より成る。頭部のもは、寒熱・打撲を防ぎ、耳鼻に存するものは、蟲・塵來の入を防ぎ、眼、腋窩などのものは、それ等の部を保護す。け。かみのけ。け。

まうはじ 湿度計 [名] 理 英 Hair hygrometer 毛髮の、乾濕に應じて、伸縮する性質を利用し、これを用ひて造りたる湿度計。「に同じ」

まうはん 盲斑 [名] 醫 まうはん(盲點) まうか 毛皮 [名] けがは(毛皮)に同じ。

まうひつ 毛筆 [名] 穂を獸毛にて造りたる筆。(鉛筆・石筆・洋筆などに對して) まうひつ(く) 毛筆畫 [名] 毛筆にてよく繪畫(へん)畫(え)する畫。用器畫などに對して)

まうしふ 毛布 [名] 毛織の布。ブランケット・セルジなどの類。けつと。(絹布(け)・綿布(わ)に對して) めんまう(綿毛布)

まうなう

參照。 まうふう 猛風 [名] つよき風。大風。暴風。まうふう 盲風 [名] 秋に吹く暴風。「じ。わき」

まうぶつ 毛物 [名] まうぞ(毛族)に同じ。まうへい 猛兵 [名] 勇猛なる兵士。まうへい 猛母 [名] ばうぼ(亡母)に同じ。乳類(に)同じ。

まうぼ 毛母 [名] 醫 まうにゆうらう(毛母)に同じ。まうぼ 孟母 [名] 孟子(の)母。孟母三遷の教 [句] 「三遷(の)教」を見よ。

まうぼん 孟賁 [名] 古、支那の衛の勇士。「孟賁の勇(の)」

まうぼる 食欲 [動四他] 食ふ。まほる。「古語」肥不食モノマウホラズ。空糞 [まうぼる物、日に糞一つ] まうひら 芥菜 [名] 草又は毛髮などの生ひ亂るるさま。ばうばう

まうしり 筆毫 [名] 毛筆の筆先。まうしり 筆毫 [名] おいぼれたるさま。「古語」源兵まうまうに、耳もおぼおぼしかりければ」

まうまく 網膜 [名] 醫 Netanant 眼球を形成する三層の膜の内、最内部に在り、視覚を司る、白色・非薄なるもの。後部は前部よりも著しく厚く、視神經は網膜をなして來り、ここに終る。まうてん(盲點)參照。

まうまくへん 網膜炎 [名] 醫 Netanant 網膜に炎症を起す病。まうまくへん(網膜炎)に同じ。

まうまへん 網膜 [名] 醫 Netanant 網膜に炎症を起す病。まうまへん(網膜炎)に同じ。

まうまへん 網膜 [名] 醫 Netanant 網膜に炎症を起す病。まうまへん(網膜炎)に同じ。

まうまへん

篤に「劉公幹以失敬罪、文帝問曰、卿何以不謹於文憲、植答曰、臣諷庸短、亦由陛下網目不疎」とあり。法律の細密なるをいふ。

まうもくきやうらう 盲目競走 [名] 學校の運動會などにて、目かくしをして行ふ旗取競走。

まうやうきん 毛様筋 [名] 醫 水晶體の周壁に附著せる眼筋。水晶體の凸凹の度を變更し、物體を明視することを得しむる作用をなす。

まうゆう 猛勇 [名] ゆうまう(勇猛)に同じ。まうゆうす 申諭す [動四他] よこす(諭す)に同じ。「古語」權馬樂兼通誰か誰かこの事を親にまうよこし申しし藏けるこの家この家のおとよめ、親にまうよこしけらしも」

まうら 眞裏 [名] 全くの裏。まことの裏。(眞裏(對)に對して)

まうら 網羅 [名] 魚をとる網と、鳥をとる網と。ままとめ集むること。残りず取り入ること。

まうらう 孟浪 [名] まんらん(孟浪)に同じ。まうらう 猛利 [名] たけくするときこと。保元後三猛利誠心」

まうり 毛利 [名] 姓氏の一。大江廣元の第四男季光相模國毛利庄の地頭職となり、毛利四郎と稱せしに始る。第十世元就家を興し、子孫相繼ぎ、敬親(の)の時、萩城より山口に移り、明治維新後、公爵を授けらる。田氏の。宇多源氏なる。佐佐木泰綱の十世の孫定春、駿江莊の内森村に住して、森氏を稱せしが、其子(高政)に至りて、毛利氏に改めしに起る。關ヶ原の役後、高政豊後國佐伯(の)に轉封し、子孫相襲ぎ、明治維新後、子爵を授けらる。

まうりつるもと 毛利輝元 [名] 武將。元就の孫、隆元の子。幼名は幸龜丸。將軍足利義輝の一字を受けて、輝元といふ。羽柴秀吉輝元を攻む。信長の獄せらるるや、輝元秀吉と和し、後朝鮮征伐に従軍し、五大老に加へらる。關ヶ原の役、

まうりつるもと

款を東軍に通じ、戦後、周防長門二國を保つ。寛永二年薨す。年七十三。まうりつるもと 毛利元就 [名] 武將。弘元の次男。天文二十年、陶晴賢の大内義隆を執するや、晴賢を嚴島に誅し、安藝周防長門の三國を領し、元龜二年、尼子氏を滅し、安藝周防長門備中備後幡國伯耆出雲隱岐石見の十州を領するに至り、その年六月安藝國吉田の郡山城に卒す。年七十五。

まうりやう 罔兩 魍魎 [名] 左傳の宣公三年の條に「魍魎罔兩、莫能逢之」とあり。木石の怪。一説に、山川の精。諸曲小鏡治「魍魎鬼神に至るまで」

まうれい 亡靈 [名] ばうれい(亡靈)に同じ。狂言武藝「武愚が亡靈には隠も御座りませぬ」

まうれつ 猛烈 [名] たけくはげしきこと。勢の強く鋭きこと。

まうろく 老耄 [名] おいぼるること。又その人。老耄。まうろく(折助)を云ふ。「京都大阪の語」驢鬃毛上方にてまうろくといふは、江戸にていふ折介といふことなり」

まうろく 盲録 [名] 仁義禮智忠孝の六を亡(ひ)ふとの義にて、實は亡六なること。又、城外へ使に赴きて、暮六(の)まで歸らぬ時は、歸參听はぬ習なるより、もう六時(が)が鳴りたるか、鳴りたるかと、耳を立つる意にて、もう六ならんなどともいふ。前條(に)同じ。驢鬃毛上方(の)で盲録といふは、折助の事だは」

まうろく 盲録 [名] 仁義禮智忠孝の六を亡(ひ)ふとの義にて、實は亡六なること。又、城外へ使に赴きて、暮六(の)まで歸らぬ時は、歸參听はぬ習なるより、もう六時(が)が鳴りたるか、鳴りたるかと、耳を立つる意にて、もう六ならんなどともいふ。前條(に)同じ。驢鬃毛上方(の)で盲録といふは、折助の事だは」

まうろく 盲録 [名] 仁義禮智忠孝の六を亡(ひ)ふとの義にて、實は亡六なること。又、城外へ使に赴きて、暮六(の)まで歸らぬ時は、歸參听はぬ習なるより、もう六時(が)が鳴りたるか、鳴りたるかと、耳を立つる意にて、もう六ならんなどともいふ。前條(に)同じ。驢鬃毛上方(の)で盲録といふは、折助の事だは」

まうろく 盲録 [名] 仁義禮智忠孝の六を亡(ひ)ふとの義にて、實は亡六なること。又、城外へ使に赴きて、暮六(の)まで歸らぬ時は、歸參听はぬ習なるより、もう六時(が)が鳴りたるか、鳴りたるかと、耳を立つる意にて、もう六ならんなどともいふ。前條(に)同じ。驢鬃毛上方(の)で盲録といふは、折助の事だは」

まうろく 盲録 [名] 仁義禮智忠孝の六を亡(ひ)ふとの義にて、實は亡六なること。又、城外へ使に赴きて、暮六(の)まで歸らぬ時は、歸參听はぬ習なるより、もう六時(が)が鳴りたるか、鳴りたるかと、耳を立つる意にて、もう六ならんなどともいふ。前條(に)同じ。驢鬃毛上方(の)で盲録といふは、折助の事だは」

まうろく

まおもて

まおもて 眞表眞面(名)全くのおもて。まむかひ。正面。(眞裏)に對して) まか 摩訶莫訶(梵 Mahā) [名] 大なること。すぐれてあること。

まが 禍(名)「曲の義」悪しきこと。不吉。災害。「古語」眞其狂、ソノマガラ 幸かい 眞權(名)「ま」は接頭語「かい(權)の美稱。「古語」萬葉、大船にまかいしじぬき」

まかい 魔界(名)「佛」惡魔の境界。魔境。魔道。十訓終には、魔界のために誣さるべし」 「まがくつ」 幸がい 麻鞋(名)麻にて作りたるくつ。 幸から 末額(名)まっかう(抹額)の轉。江次第「射手(位服)踏懸(末額)」

まかかせ 摩訶迦葉(名)「人」かせふ(迦葉)に同じ。 まが 禍神(名)禍事(ま)を行ふ神。災害を興ふる神。惡神。邪神。 まかからん 摩訶迦羅天・莫訶歌羅天(梵 Mahā) [名]「佛」だいごてん(大黒天)に同じ。

摩訶迦羅天の法(句)「佛」茶吉尼(ま)を調伏せんがために、大黒天を念じて行ふ修法(法)。太平記・宋朝には、西蕃の帝師として、摩訶迦羅天の法を修して、朝家の護持を致す眞言師なり」

まがき 籬節(名)「竹柴の類を粗く編みて作りたる垣。まき。まき。まき。和名「籬末加岐。一云、末世」 曰妓樓の店と入口の落間との間にある格子戸。 目まがき おし(籬節)の略。 照敷(籬末加岐)將菜(ま)に、籬て私夫(ま)に間菜子(ま)あり」

籬の内(句)い。家庭。家内。 源氏「兵部卿の宮など、この籬の内好ましくしたまふ心みだりにしがな」 籬の野邊(句)「籬」のほとりの植込を、野に譬へていふ語。月漣(底深きま)がきの野寮の蟲の音を月と風との下に聞くかな」

籬の山(句)「籬」の高きを、山に譬へていふ語。 續千載(月を見て夜もや越えん夕ぐれの籬の山に咲ける卯の花)

まがき 眞壯嶋(名)「勤」ま(眞)は接頭語「普通」の壯嶋(長壯嶋)などと區別していふ) まがきがし 眞鹿嶋(名)「地」陸前國松島灣にある島。 藤原(町より海上十餘町、竹林繁茂し、梅花貝を産す。まがきのま)がき 籬際(名)籬のきは。 籬(眞)殺「身につけと祈るや梅の籬きは」

まがき

まがき 眞壯嶋(名)「勤」ま(眞)は接頭語「普通」の壯嶋(長壯嶋)などと區別していふ) まがきがし 眞鹿嶋(名)「地」陸前國松島灣にある島。 藤原(町より海上十餘町、竹林繁茂し、梅花貝を産す。まがきのま)がき 籬際(名)籬のきは。 籬(眞)殺「身につけと祈るや梅の籬きは」

まがき 眞壯嶋(名)「勤」ま(眞)は接頭語「普通」の壯嶋(長壯嶋)などと區別していふ) まがきがし 眞鹿嶋(名)「地」陸前國松島灣にある島。 藤原(町より海上十餘町、竹林繁茂し、梅花貝を産す。まがきのま)がき 籬際(名)籬のきは。 籬(眞)殺「身につけと祈るや梅の籬きは」

まがき 眞壯嶋(名)「勤」ま(眞)は接頭語「普通」の壯嶋(長壯嶋)などと區別していふ) まがきがし 眞鹿嶋(名)「地」陸前國松島灣にある島。 藤原(町より海上十餘町、竹林繁茂し、梅花貝を産す。まがきのま)がき 籬際(名)籬のきは。 籬(眞)殺「身につけと祈るや梅の籬きは」

まがき 眞壯嶋(名)「勤」ま(眞)は接頭語「普通」の壯嶋(長壯嶋)などと區別していふ) まがきがし 眞鹿嶋(名)「地」陸前國松島灣にある島。 藤原(町より海上十餘町、竹林繁茂し、梅花貝を産す。まがきのま)がき 籬際(名)籬のきは。 籬(眞)殺「身につけと祈るや梅の籬きは」

まがき 眞壯嶋(名)「勤」ま(眞)は接頭語「普通」の壯嶋(長壯嶋)などと區別していふ) まがきがし 眞鹿嶋(名)「地」陸前國松島灣にある島。 藤原(町より海上十餘町、竹林繁茂し、梅花貝を産す。まがきのま)がき 籬際(名)籬のきは。 籬(眞)殺「身につけと祈るや梅の籬きは」

まがき 眞壯嶋(名)「勤」ま(眞)は接頭語「普通」の壯嶋(長壯嶋)などと區別していふ) まがきがし 眞鹿嶋(名)「地」陸前國松島灣にある島。 藤原(町より海上十餘町、竹林繁茂し、梅花貝を産す。まがきのま)がき 籬際(名)籬のきは。 籬(眞)殺「身につけと祈るや梅の籬きは」

まがき 眞壯嶋(名)「勤」ま(眞)は接頭語「普通」の壯嶋(長壯嶋)などと區別していふ) まがきがし 眞鹿嶋(名)「地」陸前國松島灣にある島。 藤原(町より海上十餘町、竹林繁茂し、梅花貝を産す。まがきのま)がき 籬際(名)籬のきは。 籬(眞)殺「身につけと祈るや梅の籬きは」

まがき 眞壯嶋(名)「勤」ま(眞)は接頭語「普通」の壯嶋(長壯嶋)などと區別していふ) まがきがし 眞鹿嶋(名)「地」陸前國松島灣にある島。 藤原(町より海上十餘町、竹林繁茂し、梅花貝を産す。まがきのま)がき 籬際(名)籬のきは。 籬(眞)殺「身につけと祈るや梅の籬きは」

まがき 眞壯嶋(名)「勤」ま(眞)は接頭語「普通」の壯嶋(長壯嶋)などと區別していふ) まがきがし 眞鹿嶋(名)「地」陸前國松島灣にある島。 藤原(町より海上十餘町、竹林繁茂し、梅花貝を産す。まがきのま)がき 籬際(名)籬のきは。 籬(眞)殺「身につけと祈るや梅の籬きは」

まかじや

まかじや 眞鹿兒矢(名)「ま(眞)は接頭語「か(や)鹿兒矢」の羊稱。「古語」記「天真鹿兒矢、アモノマカヤ」 まかじやみ 眞鹿兒弓(名)「ま(眞)は接頭語「か(や)鹿兒弓」の美稱。 記「天(ま)の麻迦古矢・天の波波矢(ま)を天若日子(ま)に賜ひて遊しき」

まかじや 眞鹿兒矢(名)「ま(眞)は接頭語「か(や)鹿兒矢」の羊稱。「古語」記「天真鹿兒矢、アモノマカヤ」 まかじやみ 眞鹿兒弓(名)「ま(眞)は接頭語「か(や)鹿兒弓」の美稱。 記「天(ま)の麻迦古矢・天の波波矢(ま)を天若日子(ま)に賜ひて遊しき」

まかじや 眞鹿兒矢(名)「ま(眞)は接頭語「か(や)鹿兒矢」の羊稱。「古語」記「天真鹿兒矢、アモノマカヤ」 まかじやみ 眞鹿兒弓(名)「ま(眞)は接頭語「か(や)鹿兒弓」の美稱。 記「天(ま)の麻迦古矢・天の波波矢(ま)を天若日子(ま)に賜ひて遊しき」

まかじや 眞鹿兒矢(名)「ま(眞)は接頭語「か(や)鹿兒矢」の羊稱。「古語」記「天真鹿兒矢、アモノマカヤ」 まかじやみ 眞鹿兒弓(名)「ま(眞)は接頭語「か(や)鹿兒弓」の美稱。 記「天(ま)の麻迦古矢・天の波波矢(ま)を天若日子(ま)に賜ひて遊しき」

まかじや 眞鹿兒矢(名)「ま(眞)は接頭語「か(や)鹿兒矢」の羊稱。「古語」記「天真鹿兒矢、アモノマカヤ」 まかじやみ 眞鹿兒弓(名)「ま(眞)は接頭語「か(や)鹿兒弓」の美稱。 記「天(ま)の麻迦古矢・天の波波矢(ま)を天若日子(ま)に賜ひて遊しき」

まかじや 眞鹿兒矢(名)「ま(眞)は接頭語「か(や)鹿兒矢」の羊稱。「古語」記「天真鹿兒矢、アモノマカヤ」 まかじやみ 眞鹿兒弓(名)「ま(眞)は接頭語「か(や)鹿兒弓」の美稱。 記「天(ま)の麻迦古矢・天の波波矢(ま)を天若日子(ま)に賜ひて遊しき」

まかじや 眞鹿兒矢(名)「ま(眞)は接頭語「か(や)鹿兒矢」の羊稱。「古語」記「天真鹿兒矢、アモノマカヤ」 まかじやみ 眞鹿兒弓(名)「ま(眞)は接頭語「か(や)鹿兒弓」の美稱。 記「天(ま)の麻迦古矢・天の波波矢(ま)を天若日子(ま)に賜ひて遊しき」

まかじや 眞鹿兒矢(名)「ま(眞)は接頭語「か(や)鹿兒矢」の羊稱。「古語」記「天真鹿兒矢、アモノマカヤ」 まかじやみ 眞鹿兒弓(名)「ま(眞)は接頭語「か(や)鹿兒弓」の美稱。 記「天(ま)の麻迦古矢・天の波波矢(ま)を天若日子(ま)に賜ひて遊しき」

まかじや 眞鹿兒矢(名)「ま(眞)は接頭語「か(や)鹿兒矢」の羊稱。「古語」記「天真鹿兒矢、アモノマカヤ」 まかじやみ 眞鹿兒弓(名)「ま(眞)は接頭語「か(や)鹿兒弓」の美稱。 記「天(ま)の麻迦古矢・天の波波矢(ま)を天若日子(ま)に賜ひて遊しき」

まかす

まかす 間敷(名)「間」の敷。 部屋の数。 間敷と柱との間の敷。 八人橋杭(ま)の間敷も多き、その中に」 まかせ 任(名)相手の爲すがまにすること。 置土産(ま)のまかせに、金にかまはぬは昔の事」 「あやしき風。

まかせ 任(名)相手の爲すがまにすること。 置土産(ま)のまかせに、金にかまはぬは昔の事」 「あやしき風。 まかせ 魔風(名)惡魔の風。 魔縁の風。 まかせ 任切(名)全く相手の爲すがまにすること。 一任。 まかせ 引き 任切(名)前條の音便。 まかせ 引水(名)田池などに、他より引きたる水。 一任(女)見(ま)音(ま)して、まかせ水の清げにここに住みなせる(ま)は」 「(摩揭陀國)を見よ。

まかせ 任(名)相手の爲すがまにすること。 置土産(ま)のまかせに、金にかまはぬは昔の事」 「あやしき風。 まかせ 魔風(名)惡魔の風。 魔縁の風。 まかせ 任切(名)全く相手の爲すがまにすること。 一任。 まかせ 引き 任切(名)前條の音便。 まかせ 引水(名)田池などに、他より引きたる水。 一任(女)見(ま)音(ま)して、まかせ水の清げにここに住みなせる(ま)は」 「(摩揭陀國)を見よ。

まかせ 任(名)相手の爲すがまにすること。 置土産(ま)のまかせに、金にかまはぬは昔の事」 「あやしき風。 まかせ 魔風(名)惡魔の風。 魔縁の風。 まかせ 任切(名)全く相手の爲すがまにすること。 一任。 まかせ 引き 任切(名)前條の音便。 まかせ 引水(名)田池などに、他より引きたる水。 一任(女)見(ま)音(ま)して、まかせ水の清げにここに住みなせる(ま)は」 「(摩揭陀國)を見よ。

まかせ 任(名)相手の爲すがまにすること。 置土産(ま)のまかせに、金にかまはぬは昔の事」 「あやしき風。 まかせ 魔風(名)惡魔の風。 魔縁の風。 まかせ 任切(名)全く相手の爲すがまにすること。 一任。 まかせ 引き 任切(名)前條の音便。 まかせ 引水(名)田池などに、他より引きたる水。 一任(女)見(ま)音(ま)して、まかせ水の清げにここに住みなせる(ま)は」 「(摩揭陀國)を見よ。

まかせ 任(名)相手の爲すがまにすること。 置土産(ま)のまかせに、金にかまはぬは昔の事」 「あやしき風。 まかせ 魔風(名)惡魔の風。 魔縁の風。 まかせ 任切(名)全く相手の爲すがまにすること。 一任。 まかせ 引き 任切(名)前條の音便。 まかせ 引水(名)田池などに、他より引きたる水。 一任(女)見(ま)音(ま)して、まかせ水の清げにここに住みなせる(ま)は」 「(摩揭陀國)を見よ。

まかせ 任(名)相手の爲すがまにすること。 置土産(ま)のまかせに、金にかまはぬは昔の事」 「あやしき風。 まかせ 魔風(名)惡魔の風。 魔縁の風。 まかせ 任切(名)全く相手の爲すがまにすること。 一任。 まかせ 引き 任切(名)前條の音便。 まかせ 引水(名)田池などに、他より引きたる水。 一任(女)見(ま)音(ま)して、まかせ水の清げにここに住みなせる(ま)は」 「(摩揭陀國)を見よ。

まかせ 任(名)相手の爲すがまにすること。 置土産(ま)のまかせに、金にかまはぬは昔の事」 「あやしき風。 まかせ 魔風(名)惡魔の風。 魔縁の風。 まかせ 任切(名)全く相手の爲すがまにすること。 一任。 まかせ 引き 任切(名)前條の音便。 まかせ 引水(名)田池などに、他より引きたる水。 一任(女)見(ま)音(ま)して、まかせ水の清げにここに住みなせる(ま)は」 「(摩揭陀國)を見よ。

まかせ 任(名)相手の爲すがまにすること。 置土産(ま)のまかせに、金にかまはぬは昔の事」 「あやしき風。 まかせ 魔風(名)惡魔の風。 魔縁の風。 まかせ 任切(名)全く相手の爲すがまにすること。 一任。 まかせ 引き 任切(名)前條の音便。 まかせ 引水(名)田池などに、他より引きたる水。 一任(女)見(ま)音(ま)して、まかせ水の清げにここに住みなせる(ま)は」 「(摩揭陀國)を見よ。

まかたち 従女從婢(名) 『前子』等

達(約)轉(眞)貴人に附き添ふ女。こしもと。

まがたま 曲玉(名) 『名』 『玉』 『古』 『代』 『我』 『國』 『に』 『於』 『て』 『装』 『身』 『の』 『用』 『に』 『供』 『せ』 『り』 『一』 『種』 『の』 『玉』 『概』 『ね』 『瑪』 『瑙』 『碧』 『玉』 『を』 『材』 『料』 『と』 『し』 『又』 『純』 『金』 『硝』 『子』 『粘』 『土』 『等』 『を』 『用』 『ひ』 『た』 『る』 『も』 『あり』 『形』 『も』 『種』 『な』 『れ』 『ど』 『細』 『く』 『し』 『て』 『全』 『體』 『彎』 『曲』 『し』 『頭』 『太』 『く』 『細』 『や』 『窄』 『く』 『頸』 『孔』 『を』 『穿』 『ち』 『て』 『紐』 『に』 『貫』 『き』 『て』 『頸』 『間』 『を』 『穿』 『ち』 『て』 『又』 『葬』 『に』 『使』 『す』 『る』 『品』 『用』 『に』 『も』 『供』 『せ』 『り』 『古』 『墳』 『より』 『發』 『掘』 『す』 『る』 『こ』 『と』 『多』 『く』 『も』 『と』 『獸』 『類』 『の』 『牙』 『に』 『孔』 『を』 『穿』 『ち』 『て』 『紐』 『に』 『貫』 『き』 『て』 『用』 『ひ』 『し』 『遺』 『風』 『の』 『美』 『化』 『せ』 『る』 『な』 『る』 『べ』 『し』 『と』 『い』 『ふ』 『。』 『紀』 『八』 『尺』 『(マ)』 『の』 『勾』 『玉』 『(マ)』 『の』 『五』 『百』 『津』 『(マ)』 『の』 『み』 『す』 『ま』 『る』 『球』 『。』



(またがま)

まかち 眞楫(名) 『(ま)』 『(真)』 『は』 『接』 『頭』 『語』 『か』 『ち』 『楫』 『の』 『美』 『稱』 『萬』 『葉』 『朝』 『な』 『ぎ』 『に』 『眞』 『梶』 『榜』 『(マ)』 『ぎ』 『出』 『て』 『見』 『つ』 『つ』 『來』 『し』 『御』 『津』 『(マ)』 『の』 『松』 『原』 『浪』 『越』 『(マ)』 『に』 『見』 『ゆ』 『。』

まかぢき 眞旗魚(名) 『(動)』 『旗』 『魚』 『(マ)』 『の』 『一』 『種』 『體』 『長』 『六』 『七』 『尺』 『背』 『は』 『濃』 『蒼』 『色』 『腹』 『部』 『は』 『白』 『く』 『鱗』 『は』 『退』 『化』 『し』 『て』 『皮』 『下』 『に』 『隠』 『れ』 『商』 『小』 『さ』 『く』 『腹』 『鰭』 『は』 『一』 『本』 『の』 『棒』 『状』 『を』 『な』 『し』 『前』 『部』 『の』 『脊』 『鱗』 『濃』 『き』 『斑』 『有』 『り』 『我』 『國』 『南』 『西』 『の』 『海』 『に』 『多』 『し』 『。』

まかつ 目勝つ(動) 『(動)』 『自』 『目』 『も』 『が』 『つ』 『(面』 『勝』 『つ』 『)』 『に』 『同』 『じ』 『古』 『語』 『鰻』 『汝』 『是』 『目』 『勝』 『於』 『人』 『者』 『…』 『マ』 『カ』 『ツ』 『の』 『略』 『。』

まかづ 罷出(動) 『(動)』 『下』 『二』 『自』 『ま』 『かり』 『い』 『づ』 『(罷』 『出』 『ま』 『が』 『つ』 『ま』 『かり』 『う』 『磨』 『羯』 『宮』 『(名)』 『天』 『じ』 『ぶ』 『に』 『き』 『ゆる』 『(十二)』 『宮』 『を』 『見』 『よ』 『。』

まがつ 禍津日(神) 『(名)』 『次』 『條』 『に』 『同』 『じ』 『祝』 『詞』 『御』 『門』 『祭』 『ま』 『が』 『つ』 『び』 『と』 『い』 『ふ』 『神』 『の』 『一』 『種』 『也』 『。』

まかて おんじやう 罷出音聲退出音聲(名) 『(名)』 『節』 『會』 『(マ)』 『な』 『ど』 『の』 『日』 『樂』 『果』 『て』 『出』 『る』 『人』 『の』 『退』 『出』 『す』 『時』 『諸』 『樂』 『を』 『合』 『奏』 『す』 『こ』 『と』 『。』 『い』 『り』 『おん』 『じ』 『や』 『う』 『。』 『たい』 『し』 『ゆ』 『つ』 『おん』 『じ』 『や』 『う』 『。』 『(參』 『音』 『聲』 『(マ)』 『に』 『對』 『して』 『樂』 『式』 『部』 『員』 『長』 『慶』 『子』 『を』 『ま』 『か』 『て』 『おん』 『じ』 『や』 『ら』 『に』 『遊』 『び』 『て』 『新』 『儀』 『式』 『。』

「晚景天皇奉杯、獻壽訖、復御本座、舞詠、奏三罷出音聲退出」

まかま 眞假名眞假字(名) 『(ま)』 『(眞)』 『は』 『接』 『頭』 『語』 『か』 『ん』 『な』 『(眞)』 『の』 『美』 『稱』 『古』 『語』 『。』

まかま 眞假名眞假字(名) 『(ま)』 『(眞)』 『は』 『接』 『頭』 『語』 『か』 『ん』 『な』 『(眞)』 『の』 『美』 『稱』 『古』 『語』 『。』

まかま 眞假名眞假字(名) 『(ま)』 『(眞)』 『は』 『接』 『頭』 『語』 『か』 『ん』 『な』 『(眞)』 『の』 『美』 『稱』 『古』 『語』 『。』

まかま 眞假名眞假字(名) 『(ま)』 『(眞)』 『は』 『接』 『頭』 『語』 『か』 『ん』 『な』 『(眞)』 『の』 『美』 『稱』 『古』 『語』 『。』

まかま 眞假名眞假字(名) 『(ま)』 『(眞)』 『は』 『接』 『頭』 『語』 『か』 『ん』 『な』 『(眞)』 『の』 『美』 『稱』 『古』 『語』 『。』

まかま 眞假名眞假字(名) 『(ま)』 『(眞)』 『は』 『接』 『頭』 『語』 『か』 『ん』 『な』 『(眞)』 『の』 『美』 『稱』 『古』 『語』 『。』

まかま 眞假名眞假字(名) 『(ま)』 『(眞)』 『は』 『接』 『頭』 『語』 『か』 『ん』 『な』 『(眞)』 『の』 『美』 『稱』 『古』 『語』 『。』

まかま 眞假名眞假字(名) 『(ま)』 『(眞)』 『は』 『接』 『頭』 『語』 『か』 『ん』 『な』 『(眞)』 『の』 『美』 『稱』 『古』 『語』 『。』

まかま 眞假名眞假字(名) 『(ま)』 『(眞)』 『は』 『接』 『頭』 『語』 『か』 『ん』 『な』 『(眞)』 『の』 『美』 『稱』 『古』 『語』 『。』

まかま 眞假名眞假字(名) 『(ま)』 『(眞)』 『は』 『接』 『頭』 『語』 『か』 『ん』 『な』 『(眞)』 『の』 『美』 『稱』 『古』 『語』 『。』

まかま 眞假名眞假字(名) 『(ま)』 『(眞)』 『は』 『接』 『頭』 『語』 『か』 『ん』 『な』 『(眞)』 『の』 『美』 『稱』 『古』 『語』 『。』

まかま 眞假名眞假字(名) 『(ま)』 『(眞)』 『は』 『接』 『頭』 『語』 『か』 『ん』 『な』 『(眞)』 『の』 『美』 『稱』 『古』 『語』 『。』

まかま 眞假名眞假字(名) 『(ま)』 『(眞)』 『は』 『接』 『頭』 『語』 『か』 『ん』 『な』 『(眞)』 『の』 『美』 『稱』 『古』 『語』 『。』

まかま 眞假名眞假字(名) 『(ま)』 『(眞)』 『は』 『接』 『頭』 『語』 『か』 『ん』 『な』 『(眞)』 『の』 『美』 『稱』 『古』 『語』 『。』

まかま 眞假名眞假字(名) 『(ま)』 『(眞)』 『は』 『接』 『頭』 『語』 『か』 『ん』 『な』 『(眞)』 『の』 『美』 『稱』 『古』 『語』 『。』

まかま 眞假名眞假字(名) 『(ま)』 『(眞)』 『は』 『接』 『頭』 『語』 『か』 『ん』 『な』 『(眞)』 『の』 『美』 『稱』 『古』 『語』 『。』

まかま 眞假名眞假字(名) 『(ま)』 『(眞)』 『は』 『接』 『頭』 『語』 『か』 『ん』 『な』 『(眞)』 『の』 『美』 『稱』 『古』 『語』 『。』

まかま 眞假名眞假字(名) 『(ま)』 『(眞)』 『は』 『接』 『頭』 『語』 『か』 『ん』 『な』 『(眞)』 『の』 『美』 『稱』 『古』 『語』 『。』

まかま 眞假名眞假字(名) 『(ま)』 『(眞)』 『は』 『接』 『頭』 『語』 『か』 『ん』 『な』 『(眞)』 『の』 『美』 『稱』 『古』 『語』 『。』

まかま 眞假名眞假字(名) 『(ま)』 『(眞)』 『は』 『接』 『頭』 『語』 『か』 『ん』 『な』 『(眞)』 『の』 『美』 『稱』 『古』 『語』 『。』

まかま 眞假名眞假字(名) 『(ま)』 『(眞)』 『は』 『接』 『頭』 『語』 『か』 『ん』 『な』 『(眞)』 『の』 『美』 『稱』 『古』 『語』 『。』

まかま 眞假名眞假字(名) 『(ま)』 『(眞)』 『は』 『接』 『頭』 『語』 『か』 『ん』 『な』 『(眞)』 『の』 『美』 『稱』 『古』 『語』 『。』

まかま 眞假名眞假字(名) 『(ま)』 『(眞)』 『は』 『接』 『頭』 『語』 『か』 『ん』 『な』 『(眞)』 『の』 『美』 『稱』 『古』 『語』 『。』

まかま 眞假名眞假字(名) 『(ま)』 『(眞)』 『は』 『接』 『頭』 『語』 『か』 『ん』 『な』 『(眞)』 『の』 『美』 『稱』 『古』 『語』 『。』

まかま 眞假名眞假字(名) 『(ま)』 『(眞)』 『は』 『接』 『頭』 『語』 『か』 『ん』 『な』 『(眞)』 『の』 『美』 『稱』 『古』 『語』 『。』

まかま 眞假名眞假字(名) 『(ま)』 『(眞)』 『は』 『接』 『頭』 『語』 『か』 『ん』 『な』 『(眞)』 『の』 『美』 『稱』 『古』 『語』 『。』

まかま 眞假名眞假字(名) 『(ま)』 『(眞)』 『は』 『接』 『頭』 『語』 『か』 『ん』 『な』 『(眞)』 『の』 『美』 『稱』 『古』 『語』 『。』

まがひ

す。惑はず。貴之集おく霜のおきまがはせる菊の花いづれを元の色とかは見ん」

まがひ(名) 擬梨子地(名) 金粉の代りに、錫粉を用ひたる梨子地。

まがひ(名) 擬物(名) 見違ふほどに似せて造りたる品物。まぎれもの。にせ物。

まがひ(名) 擬物(名) 見違ふほどに似せて造りたる品物。まぎれもの。にせ物。

まがひ(名) 擬物(名) 見違ふほどに似せて造りたる品物。まぎれもの。にせ物。

まがひ

次條に同じ。源氏例の五十寺の御誦經宗(名)又、かのおはします御寺にもまがひるるなり。

まがひ(名) 擬物(名) 見違ふほどに似せて造りたる品物。まぎれもの。にせ物。

まがひ(名) 擬物(名) 見違ふほどに似せて造りたる品物。まぎれもの。にせ物。

まがひ(名) 擬物(名) 見違ふほどに似せて造りたる品物。まぎれもの。にせ物。

まがひ(名) 擬物(名) 見違ふほどに似せて造りたる品物。まぎれもの。にせ物。

まがほ

目。まことがほ。まことしがほ。心中肯度申「うろろせすと出てうせいと、眞顔に呪むに涙」

まがほ(名) 眞顔(名) 「人」きやうかたうまがほ(狂)

まがほ(名) 眞顔(名) 「人」きやうかたうまがほ(狂)

まがほ(名) 眞顔(名) 「人」きやうかたうまがほ(狂)

まがほ(名) 眞顔(名) 「人」きやうかたうまがほ(狂)

まがひ

渡來し、春に至りて、北に歸る。一種雁金は眞雁に酷似すれども、頭軀一層小さく、額の白色は幅廣くして、頭頂まで達し、嘴も、翼も、短き點に於て異なり。但し、和歌にては、雁(と)かり及び「かりがね」とは、同義に用ひ來れり。

まがひ(名) 眞雁(名) 「雁」類の一種。

まがひ(名) 眞雁(名) 「雁」類の一種。

まがひ(名) 眞雁(名) 「雁」類の一種。

まがひ(名) 眞雁(名) 「雁」類の一種。

まがり [名] 「植」ゆらなり龍體に同じ。
まがりく 「龍」 「動自」 まがる (龍) の
延。 「古語」 起死耳、マカラクノミ

まからずむぎ 眞燕麥 [名] 「植」 「ま(眞)」
は接頭語からずむぎ(燕麥)に同じ。

まかり罷 [名] 「ま」 かること。 「御膳部」
を取り下ぐる。新二日の御もえのまか
るを告げしむる。日中行軍藏人、殿上の撒(の)の盤を
持ちて

罷申す [句] 罷り去らんとし、その
由を申す。暇乞す。 「古語」 起、辭子
倭姫命、ヤマトヒメノミコトニマカリ
マシタマヒテ、落馬師(の)は、左の大
臣にまかり申し参りたまへり

まかり罷 [接頭語] 動詞に添へて、語勢を強
め、又、謙遜の意を示す語。 「まかり間違
(ま)へば」 「本日罷り出づべき處」

まがり曲 [名] 「ま」 がること、又、まがり
である處。まがりかど。 「まがりかね曲
金の略。 「手綱」の真中。 太平記「手綱の
まがりをつんと切られて」 「四」 その形、
輪の如く曲れるよりいふ。 「糯米(の)粉
をこね、細くひねりて、輪の如くにし、胡
麻の油にて揚げたる、古の菓子。 まがり
もち。 「饅餅」 和名饅餅、形如二藤葛者
也。 萬加利

まがり [名] 「合子(の)鏡」などの類の
總稱。 空齋酒(樽)に入れて、すそで、
まがりして沸しつづ飲ます。 律然、殿上に
て水を召しける時、主殿司(の)が、土器(の)
を奉りければ、まがり参らせよとて
まがりしてぞ召しける。 「動」 じやがひ
(蛇見)に同じ。

まがり 間借 [名] 料金を拂ひて、他人の
住宅の一室を借ること。 (間貸) (の)に對
して) 別れる。 「古語」 源兵かれこれま
かりあかる所にて

まかりあづかる 罷預かる 「動四自」 「ま
かり罷」は接頭語あづかる(預かる)を丁
寧にいふ語。 慶長記まかり預からんと云

ひき
まかりあぶ 罷逢ふ 「動四自」 「まかり(罷)」
は接頭語あぶ(逢ふ)を謙遜しいふ語。
大鶴佛法うとくて、世のしる大法會なら
ぬにはまかりあぶ事もなかりし

まがりあみ 曲網 [名] 網の一種。底網な
く、帯の如き細長き網を彎曲又は圓曲、又
は折曲して敷設し、垣網に沿ひて入り來
る魚を留めて、網目に撞らしむるものと、
沈子(の)方より繰り揚げて魚を抄ひ捕る
ものとあり

まかりあり 罷在り 「動良變自」 「まかり
(罷)は接頭語あり(在り)ある(居る)を
丁寧にいふ語。 「明日は、終日拙宅に罷在
り候」

まかりいづ 罷出づ 「動下二自」 「貴き
所より退きて歸る。 退出す。 まかづ。 ま
かんづ。 源兵内裏よりまかり出でたまひ
けるに」 「大鶴」 まかり出でて、おととも、
變らぬ姿、今一たび見え、かくて案内も申
して、必ず参りはべらん。 「まかり(罷)
は接頭語」 出づ。 参り出づす。 まかりこ
す。 一茶、罷出でたるはこの藪の藁(の)に
て候」

まかりいる 罷入る 「動四自」 「まかり(罷)」
は接頭語いる(入る)を丁寧にいふ語。
「たままた、この道にまかり入りしけれ
ば」 「發心集」 この山(まかり入りし時)
まかりいづ 罷入る 「動下二他」 「まかり
(罷)は接頭語いる(入る)を丁寧にいふ
語。 源兵いづれの方とも知らず、船を海
中へまかり入れぬべく」

まがりえ 曲江 [名] 曲りてある江。 慶野
(繪) 一曲江に築の見えぬ鶴舟かな

まかりかど 曲角 [名] 道の曲りてある
かど。

まがりかね 曲金 曲尺 [名] 鋼又は眞鍮
にて、直角に折れ曲りたる形に造り、長さ
方に一尺五寸、短き方に七寸五分の目盛
を施し、算法の勾股弦をうつしたる物差。

工匠の、方形を作るに用ふ。かねざし。ま
しがね。まがりざし。まがりじやく。ま
がし。かね。和名辨色立成云、曲尺、麻
賀利賀福

まかりかへる 罷歸る 「動四自」 貴き所
を辭して歸り去る。まがる。起「歸三子國、
クニニマカリカヘリ」 慶長記頼家……
御前を立ちざまに、……とて、三井寺へ罷
り歸る

まがりき 曲木 [名] 曲りてある木。
新千載「わざとそくり放つめれまがり木
に這ひまつはるる青葛をば」 「まげき(曲
木)の説。

まがりきざき 曲木細工 [名] まげき
を(曲木細工)の説。

まがりくねる 曲くねる 「動四自」 ねぢ
け曲る。幾つにも折れまがる。屈曲す。
一茶、涼風の曲りくねつて來りけり

まがりこころ 曲心 [名] ねぢけ(の)拗
心)に同じ。 勇表「杓子のまがり心より、浮
名は立ちそめ」

まかりこす 罷越す 「動四自」 「まかり(罷)」
は接頭語まかりこす(越す)に同じ。
まがりこ(ん)じやく 曲根性 [名] こんじやく
うまがり(根性)に同じ。 藤蛇の曲根性

まかりさがる 罷下る 「動四自」 まかりの
(罷退)に同じ。 「に同じ。

まかりさじ 曲差 [名] まがりかね(曲金)
まがりしむく 曲四目 [名] 團扇の活(の)
の目の名、曲尺の形に四つ目の目の存す。

まがりじやく 曲尺 [名] まがりかね(曲金)
に同じ。 「根曲竹)に同じ。

まかりだけ 曲竹 [名] 「植」 ねまがりだけ
まかりぢ 罷道 [名] 貴き所より罷り
歸る時通る道。 「古語」 番葉さざ波のし
が津の子らが罷道の河瀬の道を見ればさ
ぶしも。 「まがる(罷る)を見よ」 死に
し者の通りゆく道。冥途の道。よみち。
 「古語」 精起みまし大臣(の)の罷道も、う
しろ軽く

まかりで 曲處 [名] 道の曲る處。ま
がりかど。 娘殺精氣を附ける。まがり
とに水つたまりがあるせえ

まかりつんでる 罷突出る 「動下二自」 ま
かりつ(罷出づ)に同じ。 「てある所
まかりどる 曲殿 [名] 殿内の、折れ曲り
まかりどぼる 罷通る 「動四自」 「まかり
(罷)は接頭語どぼる(通る)に同じ。

まかりども [名] せいし(世子)に同じ。 「朝
鮮の古語」 起「世子、マカリトモ」

まがりなり 曲形 [名] 次條を見よ。
曲形にも「句」十分とまでは行かずと
も、くの字なりにも。(の)字なりにも

まかりなる 罷爲る 「動四自」 「まかり(罷)」
は接頭語なる(爲る)に同じ。 平道僧法
師にも罷り成り

まかりなる 罷成る 「動四自」 「まかり(罷)」
は接頭語なる(成る)に同じ。(打消)の形
にて用ふ。 「堪忍罷成らぬ」

まがりぬいけ 勾池 [名] 「地」 大和國飛
鳥(の)の橋寺の附近にて、島の宮にあり
し池。

まがりのおほえひろくにおしたけかな
ひのすめらみこそ 勾大兄廣國押武
金日天皇 [名] 「人」 あんかんでんわ(安閑
天皇)に同じ。

まがりのかかはしのみや 勾金箸宮
[名] 今の和國高市(の)郡に在りし、安
閑天皇の皇居。その趾は、同郡金橋村大
字曲川と眞管(の)村大字土橋との附近な
るべしといふ。

まかりのく 罷退く 「動四自」 貴き人の
前より退き去る。まかりさがる。 發心集
「何者ぞ、便(の)なし。まかりのけ」

まかりのたま 勾玉 [名] まがたま(勾玉)
に同じ。

まかりのぼる 罷上る 「動四自」 貴き人
の側を辭し去りて、都へ赴く。 後拾遺伊
勢の齋宮わたりよりまかりのぼりて侍り
ける人

まがりのみづ 曲水 [名] きよくすぬ(曲
水)の直譯。 吉野齋宮の千とせもめぐれ
桃の花川はまがりの水の上にて

まがりばな [名] 「植」 十字花科に屬する
一年生の草。高さ五六寸乃至一尺。葉は

まがり

まがり

まがり

まがり

まがり

長楕圓狀、披針形を呈して、粗なる鋸齒あり、又や羽狀に分裂せるもあり。白色の花を著け、果實は殆ど圓形をなし、苦味あり。もと舶來せるなり。

まがり はなる 罷離る【動下二自】貴き人又は目上の人の側を退き離る。空襲年五つにて、女親の手のまかり離れて世の中に侍りしに

まがり はおる 曲ボオル【名】花ボオルの類なる。一種の菓子。

まがり まうし 罷申【名】まがり(眼)と同じ。源氏「思し餘りて、五の宮に、例の近づき参りたまふ……」さすがに、まかりまうし、はた聞えたまふ

まかり まうす 罷申す【句】まかり(罷)の條下を見よ。

まかり まがらふ 罷間違ふ【動四自】まかり(罷)は接頭語。まかりのま(間)と、頭韻をなす「まがらふ(間違ふ)と同じ。

まがり みち 曲路【名】まがりであるみち。うねくたれたる道路。

まかり むかふ 罷向ふ【動四自】まかり(罷)は接頭語。むかふ(向ふ)と同じ。盛衰記「三井寺へ馳せ行きて、彼の人に罷り向ひて見れば」

まがり もち 曲餅環餅【名】まがり(曲)と同じ。「古語」字彙評、萬我利餅

まがり や 曲屋【名】身代の傾く家。衰運に向ふ家。目「心のねぢけたる人。つむじまがり。根性まがり。」

まかり いる 罷寄る【動四自】まかり(罷)は接頭語。よる(寄る)と同じ。宇治年まかり寄りて、風重くなりて

まかり わたる 罷渡る【動四自】まかり(罷)は接頭語。わたる(渡る)と同じ。古事記「今一度北に罷り渡れ」

まかり 今一 度北に 罷り渡れ【句】

まかり の みや 曲陝宮【名】かるのまがり(罷)のみや。輕曲陝宮を見よ。紀「蓬都於輕地、是謂曲陝宮」

まかる 罷る【動四自】「めかる(目離る)の轉かといふ」貴き所より退き去る。(參るに對して)「起將就二根國、ネノクニニマカラムトス」莚里に宿直物(對)取り

まがる

に違るに、をのこ二人まかれといふに「みまかる。死ぬ。起もし邪(ま)き心あらば、天若日子(ま)ま、この矢にまかれと云(り)たまひて」

まかる 負かる【動四自】「ま(負)く」の受動形より轉成せるもの。價を減じて安くすることを得。

まがる 曲る【動四自】「直(ま)ならぬま」となる。ゆがむ。かたむく。屈曲す。道理に外(ま)る。ねぢく。ひがむ。「枉る」。「曲(ま)ふ」。身代が曲る

曲った釜には曲った飯【句】「破鍋(ま)にも綴蓋(ま)に同じ」「諺語」曲った事【句】道理にはづれたる事。まがった事。曲事。悪事。

曲った松の木【句】「柱にや成らぬに言ひかけたるもの」柱にやならぬ(走らねばならず)の意の隠語。

曲らねば世が渡られぬ【句】世間の風俗習慣に従はず、己が主義のみを貫かんとしては、世渡(ま)は出来ず。人

と屏風は、直(ま)ては立たぬ【句】「諺語」曲らねば世に立たぬ【句】前條に同じ。「諺語」

枉れるを矯めて、直きに過ぐ【句】「越絶書に「子之復仇、臣討賊、至誠感天、矯枉過直」とあり」物事を正さんとして、その程度を過す。「諺語」

まがれつと【名】まがれつとに同じ。

まかろに【伊 Moorah】【名】澱粉を多少篩ひ去りたる小麦粉にて製したる、西洋の麵類。絲狀又は管狀に製す。

まき 牧【名】「馬(ま)城(ま)の義」年馬・羊などを放ち飼ふ土地。まきば。ぼくちやう。うまき。むまき。放牧地。狹衣(牧)の馬(牧)の童(ま)【句】「ほくぞう(牧童)に同じ。新古今より、牧のうなるが吹く笛は深きさとりしるべとぞ聞く」

まき 巻【名】「書冊の區分。一巻の一」巻の二」紀「弘計天皇紀、ヲケノスメラミコトノミマキ」「俳諧の附合(ま)」、又その書きもの。「目(ま)まき(芽巻)を云ふ。「女の語」四まきぞめ(巻染)の略。

まき

まき 任【名】「四段活用のま(任)く」の連用形より、名詞に轉成せるもの「まけ(任)に同じ。「古語」萬葉大君のまきのまにまに取りもちて仕ふる國の」

まき 横【名】「まき(真木)の轉義。横の字は「真木の合字」いぬまき(犬横)の略。「かちやまき(高野横)の略。目(ま)なら(小)橋(ま)に同じ。」「方言」

まき 薪【名】「たき(薪)を云ふ。「關東のまき(真木)【名】「ま(真)は接頭語」杉檜類の通稱。ま(ま)真草(真草)参照。「古語」萬葉みよし野の真木立つ山ゆ」和名被末木。今按、又、杉一名也」

真木の瓦【句】檜などに作りたる樋石を疊み、上に真木の瓦を俯伏せて、側にいふ語。紀「赤絹一百疋、アカギヤミツビヤクマキ」「書籍の巻数をいふに用ふる語。巻(ま)の。古今すべて千(ま)うた二十(ま)まき、名づけて、古今和歌集といふ」

まき 間木【名】「長押(ま)の上などに設けたる、棚の如きもの。蜻蛉敷珠(ま)も、間木に打上げなご、らうがはしきに」今昔「髪に繩を付けて、間木に釣り係て」

まき あがる 巻上る【動四自】巻きて、上の方へ移りゆく。

まき あぐ 巻上ぐ【動下二他】「巻きて上ぐ。まくりあぐ。萬葉「玉林に宿るししやも求むるによき白妙の袖纏」上上げてし待つ我が女」源氏御座(ま)まき上げて」「巻ひてとる。ふんだくる。横奪す。無墨金は残らず前(ま)が巻上げ」

まき あげ 巻上【名】巻き上ぐること。記「五節(ま)……その時、拍子には、白薄様(ま)の厚染紫(ま)の紙、巻上の絲、柄繪畫きたる筆の軸やと嘩す巻上の巻上の筆【句】軸を繞りに巻きたる筆。平家「五節(ま)には、白薄様(ま)の紙、しゆぜん寺の紙、巻上の筆、白書いたる筆の軸などいふ、様様かやうに面白き事をのみこそ歌ひ舞はるるに」

まきあげ

まきあげき 捲揚機【名】ういんちに同じ。日除【名】商店など、の軒先に取りつけて、巻き上げ、巻きおろしの自在なる日覆。

まき あひ 巻足【名】紀州流の水泳術に於ける足の使ひ方の一。

まき あみ 巻網、旋網【名】魚群を包圍して、漁獲する網。多くは長方形にて、「の籠網の左右に、翼網を取り附けたるもあり、大なるは、長さ六七百尋、丈五六十尋に及ぶ。二艘の船に積み込み、魚群を圍みし後、二船相合し、翼網より順次、船上に手繰り上ぐるを普通とす。中著網、揚網(ま)網(ま)網等、これに屬し、鱈、鮭、秋刀魚(ま)鱈(ま)鱈、鯛等を捕るに用ふ。

まき 白く 巻石【名】白くして、他の色の巻線のある石。これを拾ひ來る者は、その親死すとの俗説あり。

まき 散らしたるがときさまに、處處に置く石。とびいし。若魚又、中門、左の方の碇石いろいる、木の間木の間の釣燈籠に影映りて」

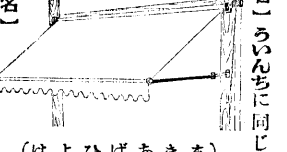
まき つつみのかみ 真木和泉守【名】「人まき(ま)の真木保臣」に同じ。

まき ちやう 魔球【名】野球に於て、カアアして、到達するやうに投げたる球。

まき ちやう 巻魚【名】魚の片身を卸して、骨を抜き、上身を去り、その皮を鹽水に漬け、しばらく置きて上げ、水を去り、糝(ま)を巻き、蒸籠(ま)にて蒸して製す。

まき おどい 巻櫻【名】けんえい(巻櫻)に同じ。「相撲(ま)の手の一。相手の差手を巻き込み、片手を管にあて、押すと見せて、相手の押し返す鼻を捲きたる方に捻り落すこと。

まき おどす 巻落す【動四他】「一巻きか



らませて、相手の槍などを手放さしむ。八犬傳「槍を、からりと巻落されて、太刀を抜かんとする處を」

まき「かひ」巻帯(名)「帯を、腰のあたりに巻きつけたるのみにて結びぬこと。」

まき「かくす」巻隠す「動四他」まき包みて隠す。萬葉「わが袖に震たばしる巻かくし消」たすもあらむ妹「見むたれ」

まき「かけ」巻掛(名)「刀の柄の巻方のまき「かご」巻籠(名)「堤防具の一。石田の巻を全部蛇籠にて包みたるもの。水勢の甚だ強き大河に用ふ。」

まき「かひ」巻貝(名)「(螺)と同じ。まき「かへし」巻返(名)「小梓(の)などに練れる糸の根(を)を一定せんがために、更に他の小梓に練り返すこと。」

まき「かへす」巻返す「動四他」巻きたる物を一旦ひろげて、更に又巻く。語曲「先」に讀みたる巻物を、…巻返して見れども」

まき「かへす」巻返す「動四自」海岸に打ち寄せたる波、跳ね上りて、折れ返る。まき「がみ」巻紙(名)「半切(の)紙を横に長く纏ぎ合はせたるもの。書簡用とす。まき「がみ」巻髪(名)「頭髮を束ねて、ぐるぐる巻くこと、又その巻きたる頭髮。馬の鬣を束ね結ぶこと、又その束ね結びたる鬣。」

まき「がり」巻狩(名)「狩場を包圍し、獸を中に取り込めて狩ること。曾我「翌日より三日の巻狩とぞ聞えける」

まき「ぞめ」巻絹(名)「軸に巻きつけたる絹の段物。こしぎ。こしぎ(腰指)參照。纂要「砂金百兩、巻絹百端、馬三四を引かればなる」

まき「きぬた」巻砧(名)「布帛を巻き疊み

て、砧に掛くこと。狂歌百人一首多勢河島「淋しきもうち重なりけり巻砧まいに旅寝の宿に聞く夜は」

まき「きり」巻切(名)「巻物の小口を切り揃ふること。七職人歌書「巻物。この巻切り、いかにしたるにか、切目の揃はぬよ」

まき「くさ」まき草(名)「植」「たちあひぶ(蜀葵)と同じ。字鏡集「葵、マキゲサ、カラアフヒアト」

まき「くさ」まき草(名)「植」「たちあひぶ(蜀葵)と同じ。字鏡集「葵、マキゲサ、カラアフヒアト」

まき「くさ」まき草(名)「植」「たちあひぶ(蜀葵)と同じ。字鏡集「葵、マキゲサ、カラアフヒアト」

まき「くさ」まき草(名)「植」「たちあひぶ(蜀葵)と同じ。字鏡集「葵、マキゲサ、カラアフヒアト」

まき「くさ」まき草(名)「植」「たちあひぶ(蜀葵)と同じ。字鏡集「葵、マキゲサ、カラアフヒアト」

まき「くさ」まき草(名)「植」「たちあひぶ(蜀葵)と同じ。字鏡集「葵、マキゲサ、カラアフヒアト」

まき「くさ」まき草(名)「植」「たちあひぶ(蜀葵)と同じ。字鏡集「葵、マキゲサ、カラアフヒアト」

まき「くさ」まき草(名)「植」「たちあひぶ(蜀葵)と同じ。字鏡集「葵、マキゲサ、カラアフヒアト」

まき「くさ」まき草(名)「植」「たちあひぶ(蜀葵)と同じ。字鏡集「葵、マキゲサ、カラアフヒアト」

まき「くさ」まき草(名)「植」「たちあひぶ(蜀葵)と同じ。字鏡集「葵、マキゲサ、カラアフヒアト」

まき「くさ」まき草(名)「植」「たちあひぶ(蜀葵)と同じ。字鏡集「葵、マキゲサ、カラアフヒアト」

まき「くさ」まき草(名)「植」「たちあひぶ(蜀葵)と同じ。字鏡集「葵、マキゲサ、カラアフヒアト」

まき「くさ」眞木割く「枕」眞木を斧にて割きて造れる材木をいふ意にて、ひ(槍)にかけ、又、同音のひ(日)にもかけていふ。一説に、さ(は)草(は)は義にて、眞木たる効用をなすといふ意にてかけていふ。眞木(を)く(槍)の御門(を)」。萬葉「眞木(を)く(槍)の御門(を)」

まき「くさ」眞木割く「枕」眞木を斧にて割きて造れる材木をいふ意にて、ひ(槍)にかけ、又、同音のひ(日)にもかけていふ。一説に、さ(は)草(は)は義にて、眞木たる効用をなすといふ意にてかけていふ。眞木(を)く(槍)の御門(を)」。萬葉「眞木(を)く(槍)の御門(を)」

まき「くさ」眞木割く「枕」眞木を斧にて割きて造れる材木をいふ意にて、ひ(槍)にかけ、又、同音のひ(日)にもかけていふ。一説に、さ(は)草(は)は義にて、眞木たる効用をなすといふ意にてかけていふ。眞木(を)く(槍)の御門(を)」。萬葉「眞木(を)く(槍)の御門(を)」

まき「くさ」眞木割く「枕」眞木を斧にて割きて造れる材木をいふ意にて、ひ(槍)にかけ、又、同音のひ(日)にもかけていふ。一説に、さ(は)草(は)は義にて、眞木たる効用をなすといふ意にてかけていふ。眞木(を)く(槍)の御門(を)」。萬葉「眞木(を)く(槍)の御門(を)」

まき「くさ」眞木割く「枕」眞木を斧にて割きて造れる材木をいふ意にて、ひ(槍)にかけ、又、同音のひ(日)にもかけていふ。一説に、さ(は)草(は)は義にて、眞木たる効用をなすといふ意にてかけていふ。眞木(を)く(槍)の御門(を)」。萬葉「眞木(を)く(槍)の御門(を)」

まき「くさ」眞木割く「枕」眞木を斧にて割きて造れる材木をいふ意にて、ひ(槍)にかけ、又、同音のひ(日)にもかけていふ。一説に、さ(は)草(は)は義にて、眞木たる効用をなすといふ意にてかけていふ。眞木(を)く(槍)の御門(を)」。萬葉「眞木(を)く(槍)の御門(を)」

まき「くさ」眞木割く「枕」眞木を斧にて割きて造れる材木をいふ意にて、ひ(槍)にかけ、又、同音のひ(日)にもかけていふ。一説に、さ(は)草(は)は義にて、眞木たる効用をなすといふ意にてかけていふ。眞木(を)く(槍)の御門(を)」。萬葉「眞木(を)く(槍)の御門(を)」

まき「くさ」眞木割く「枕」眞木を斧にて割きて造れる材木をいふ意にて、ひ(槍)にかけ、又、同音のひ(日)にもかけていふ。一説に、さ(は)草(は)は義にて、眞木たる効用をなすといふ意にてかけていふ。眞木(を)く(槍)の御門(を)」。萬葉「眞木(を)く(槍)の御門(を)」

まき「くさ」眞木割く「枕」眞木を斧にて割きて造れる材木をいふ意にて、ひ(槍)にかけ、又、同音のひ(日)にもかけていふ。一説に、さ(は)草(は)は義にて、眞木たる効用をなすといふ意にてかけていふ。眞木(を)く(槍)の御門(を)」。萬葉「眞木(を)く(槍)の御門(を)」

まき「くさ」眞木割く「枕」眞木を斧にて割きて造れる材木をいふ意にて、ひ(槍)にかけ、又、同音のひ(日)にもかけていふ。一説に、さ(は)草(は)は義にて、眞木たる効用をなすといふ意にてかけていふ。眞木(を)く(槍)の御門(を)」。萬葉「眞木(を)く(槍)の御門(を)」

まき「くさ」眞木割く「枕」眞木を斧にて割きて造れる材木をいふ意にて、ひ(槍)にかけ、又、同音のひ(日)にもかけていふ。一説に、さ(は)草(は)は義にて、眞木たる効用をなすといふ意にてかけていふ。眞木(を)く(槍)の御門(を)」。萬葉「眞木(を)く(槍)の御門(を)」

まき「くさ」眞木割く「枕」眞木を斧にて割きて造れる材木をいふ意にて、ひ(槍)にかけ、又、同音のひ(日)にもかけていふ。一説に、さ(は)草(は)は義にて、眞木たる効用をなすといふ意にてかけていふ。眞木(を)く(槍)の御門(を)」。萬葉「眞木(を)く(槍)の御門(を)」

まき「すな」蒔砂子(名)「金・銀の粉」を蒔き附けたるもの。「みまき。薪炭。まき「すみ」薪炭(名)「まきと、すみと。まき「すな」蒔砂(名)「鶴を巻きて輪切(の)にし、切断面の渦の如き形をなすやうにしたるもの。」

まき「すな」蒔砂子(名)「金・銀の粉」を蒔き附けたるもの。「みまき。薪炭。まき「すみ」薪炭(名)「まきと、すみと。まき「すな」蒔砂(名)「鶴を巻きて輪切(の)にし、切断面の渦の如き形をなすやうにしたるもの。」

まき「すな」蒔砂子(名)「金・銀の粉」を蒔き附けたるもの。「みまき。薪炭。まき「すみ」薪炭(名)「まきと、すみと。まき「すな」蒔砂(名)「鶴を巻きて輪切(の)にし、切断面の渦の如き形をなすやうにしたるもの。」

まき「すな」蒔砂子(名)「金・銀の粉」を蒔き附けたるもの。「みまき。薪炭。まき「すみ」薪炭(名)「まきと、すみと。まき「すな」蒔砂(名)「鶴を巻きて輪切(の)にし、切断面の渦の如き形をなすやうにしたるもの。」

まき「すな」蒔砂子(名)「金・銀の粉」を蒔き附けたるもの。「みまき。薪炭。まき「すみ」薪炭(名)「まきと、すみと。まき「すな」蒔砂(名)「鶴を巻きて輪切(の)にし、切断面の渦の如き形をなすやうにしたるもの。」

まき「すな」蒔砂子(名)「金・銀の粉」を蒔き附けたるもの。「みまき。薪炭。まき「すみ」薪炭(名)「まきと、すみと。まき「すな」蒔砂(名)「鶴を巻きて輪切(の)にし、切断面の渦の如き形をなすやうにしたるもの。」

まき「すな」蒔砂子(名)「金・銀の粉」を蒔き附けたるもの。「みまき。薪炭。まき「すみ」薪炭(名)「まきと、すみと。まき「すな」蒔砂(名)「鶴を巻きて輪切(の)にし、切断面の渦の如き形をなすやうにしたるもの。」

まき「すな」蒔砂子(名)「金・銀の粉」を蒔き附けたるもの。「みまき。薪炭。まき「すみ」薪炭(名)「まきと、すみと。まき「すな」蒔砂(名)「鶴を巻きて輪切(の)にし、切断面の渦の如き形をなすやうにしたるもの。」

まき「すな」蒔砂子(名)「金・銀の粉」を蒔き附けたるもの。「みまき。薪炭。まき「すみ」薪炭(名)「まきと、すみと。まき「すな」蒔砂(名)「鶴を巻きて輪切(の)にし、切断面の渦の如き形をなすやうにしたるもの。」

まき「すな」蒔砂子(名)「金・銀の粉」を蒔き附けたるもの。「みまき。薪炭。まき「すみ」薪炭(名)「まきと、すみと。まき「すな」蒔砂(名)「鶴を巻きて輪切(の)にし、切断面の渦の如き形をなすやうにしたるもの。」

まき「すな」蒔砂子(名)「金・銀の粉」を蒔き附けたるもの。「みまき。薪炭。まき「すみ」薪炭(名)「まきと、すみと。まき「すな」蒔砂(名)「鶴を巻きて輪切(の)にし、切断面の渦の如き形をなすやうにしたるもの。」

まき「すな」蒔砂子(名)「金・銀の粉」を蒔き附けたるもの。「みまき。薪炭。まき「すみ」薪炭(名)「まきと、すみと。まき「すな」蒔砂(名)「鶴を巻きて輪切(の)にし、切断面の渦の如き形をなすやうにしたるもの。」

まさたけ

まさつみ

まさのほ

まさたけ

まさたけ 卷竹【名】綿を巻きて、綿筒

【名】印判屋にて、彫刻す

【名】木地を挟みて、上を皮にて巻き、手に

振りて彫刻する具。鷹尾通内巻、繰りか

けし布製の踏踏【名】掛板、卷竹よ

まさだち 蔦太刀【名】蔦輪【名】の太刀

に同じ。東鯉東帯、平座【名】蔦太刀

まさたつ 卷立つ【動下二自】盛んに巻

く。頻りに巻く。國姓巻【名】風起り、竹

葉、颯と巻立て、巻立て

まさたて 卷立【名】芝居にて、女に扮装

する者の著く一種の髪。

まさたば 卷烟草、卷煙草【名】乾燥

せる烟草の葉を細長く巻き、その一端に

點火し、他の一端より吸ふやうにせるも

の。葉巻【名】烟草と紙巻【名】烟草とあり

【名】刻【名】烟草に對して【名】専ら紙巻烟草

をいふ。

まさづつみ 卷包【名】巻きて包むこと

又その包みたる物。【名】みたる弓鼓

まさつる 卷弦【名】上を麻にて巻き包

まき【名】捲手【名】はらびき【名】柱引に同

じ。【名】まくて【名】捲手に同じ。

まさどう 卷胴【名】和船の車立【名】挾

【名】指天【名】などの車。どう。ころば

し。【名】しやち【名】車地に同じ。

まさどうら 卷豆腐【名】豆腐を絞り、水

氣を去り、搗鉢にて搗り、葛粉を入れ、牛

蒟蒻細粉などを、せん打に切り、栗、慈姑

麻の實などの物をを加へ、豆腐に包み、小麦

粉を解きて被せ、胡麻の油にて揚げ、砂糖

醬油にて甘く煮たるもの。

まさどり 巻取機【名】機【名】を織るに

緯絲【名】を經絲【名】に組織せしむるにつ

れ、その織りたる部分を、自動的に布巻

【名】に巻き取るに用ふる機械。【名】取る

まさのり 卷取【名】馬匹を調教するに、

直線行進中、馬場の内方に進出し、圓形を

畫し、前蹄跡に入り、前と同方向に行進す

ること。

まさのり 横尾【名】地【名】次條の略。

まさのり 横尾山【名】地【名】和泉

國泉北條【名】郡と河内國南河内郡とに跨れ

る山。和泉山脈に屬し、四嶽八峯に分れ

四十八瀑三十六洞の勝あり。頂上【名】高

二八〇〇尺に施福寺あり。【名】卷尾山

【名】山城國葛野【名】郡の北部にある山。高

尾山【名】梅尾【名】山と連な相りて、三尾【名】

の稱あり。紅葉の名所にして、山腹に西

明寺あり。【名】山城國久世郡にある山。

まさのり 横尾山【名】地【名】前條

まさのり 横尾山【名】地【名】蓮などの葉の、未だ開

かずして巻きあまるもの。

まさのり 横尾山【名】地【名】蓮などの葉の、未だ開

まさのり 横尾山【名】地【名】蓮などの葉の、未だ開

まさのり 横尾山【名】地【名】蓮などの葉の、未だ開

まさのり 横尾山【名】地【名】蓮などの葉の、未だ開

まさのり 横尾山【名】地【名】蓮などの葉の、未だ開

まさのり 横尾山【名】地【名】蓮などの葉の、未だ開

まさのり 横尾山【名】地【名】蓮などの葉の、未だ開

まさのり 横尾山【名】地【名】蓮などの葉の、未だ開

まさのり 横尾山【名】地【名】蓮などの葉の、未だ開

まさのり 横尾山【名】地【名】蓮などの葉の、未だ開

まさのり 横尾山【名】地【名】蓮などの葉の、未だ開

まさのり 横尾山【名】地【名】蓮などの葉の、未だ開

まさのり 横尾山【名】地【名】蓮などの葉の、未だ開

まさのり 横尾山【名】地【名】蓮などの葉の、未だ開

まさのり 横尾山【名】地【名】蓮などの葉の、未だ開

まさのり 横尾山【名】地【名】蓮などの葉の、未だ開

まさのり 横尾山【名】地【名】蓮などの葉の、未だ開

まさのり 横尾山【名】地【名】蓮などの葉の、未だ開

まさのり 横尾山【名】地【名】蓮などの葉の、未だ開



まきぼん 巻本(名)巻物にしたる本。運
歩色葉巻本、マキボン

まきまもり 巻守(名)つつまもり(筒守)に
同じ。

まきみづ 撒水(名)さつする(撒水)に同
まきむくのたまき(名)みや 纏向珠城

まきむくのたまき(名)みや 纏向珠城
宮(名)今の大和國磯城(郡)纏向村大
字穴師(字)の西、長者屋敷の邊にありし、
垂仁天皇の皇居。磯城珠垣宮。

まきむくのひひろのひみや 纏向日代
宮(名)今の大和國磯城(郡)纏向村大
字穴師(字)の北方にありし、景行天皇の
皇居。記まきむくの日代の宮は朝日の
日照る宮夕日の日かげる宮

まきむくのひひろのひみや 纏向日代
宮(名)今の大和國磯城(郡)纏向村大
字穴師(字)の北方にありし、景行天皇の
皇居。記まきむくの日代の宮は朝日の
日照る宮夕日の日かげる宮

まきむくのひひろのひみや 纏向日代
宮(名)今の大和國磯城(郡)纏向村大
字穴師(字)の北方にありし、景行天皇の
皇居。記まきむくの日代の宮は朝日の
日照る宮夕日の日かげる宮

まきむくのひひろのひみや 纏向日代
宮(名)今の大和國磯城(郡)纏向村大
字穴師(字)の北方にありし、景行天皇の
皇居。記まきむくの日代の宮は朝日の
日照る宮夕日の日かげる宮

まきむくのひひろのひみや 纏向日代
宮(名)今の大和國磯城(郡)纏向村大
字穴師(字)の北方にありし、景行天皇の
皇居。記まきむくの日代の宮は朝日の
日照る宮夕日の日かげる宮

まきむくのひひろのひみや 纏向日代
宮(名)今の大和國磯城(郡)纏向村大
字穴師(字)の北方にありし、景行天皇の
皇居。記まきむくの日代の宮は朝日の
日照る宮夕日の日かげる宮

まきむくのひひろのひみや 纏向日代
宮(名)今の大和國磯城(郡)纏向村大
字穴師(字)の北方にありし、景行天皇の
皇居。記まきむくの日代の宮は朝日の
日照る宮夕日の日かげる宮

まきむくのひひろのひみや 纏向日代
宮(名)今の大和國磯城(郡)纏向村大
字穴師(字)の北方にありし、景行天皇の
皇居。記まきむくの日代の宮は朝日の
日照る宮夕日の日かげる宮

まきむくのひひろのひみや 纏向日代
宮(名)今の大和國磯城(郡)纏向村大
字穴師(字)の北方にありし、景行天皇の
皇居。記まきむくの日代の宮は朝日の
日照る宮夕日の日かげる宮

まきむくのひひろのひみや 纏向日代
宮(名)今の大和國磯城(郡)纏向村大
字穴師(字)の北方にありし、景行天皇の
皇居。記まきむくの日代の宮は朝日の
日照る宮夕日の日かげる宮

まきむくのひひろのひみや 纏向日代
宮(名)今の大和國磯城(郡)纏向村大
字穴師(字)の北方にありし、景行天皇の
皇居。記まきむくの日代の宮は朝日の
日照る宮夕日の日かげる宮

まきむくのひひろのひみや 纏向日代
宮(名)今の大和國磯城(郡)纏向村大
字穴師(字)の北方にありし、景行天皇の
皇居。記まきむくの日代の宮は朝日の
日照る宮夕日の日かげる宮

まきむくのひひろのひみや 纏向日代
宮(名)今の大和國磯城(郡)纏向村大
字穴師(字)の北方にありし、景行天皇の
皇居。記まきむくの日代の宮は朝日の
日照る宮夕日の日かげる宮

まきむくのひひろのひみや 纏向日代
宮(名)今の大和國磯城(郡)纏向村大
字穴師(字)の北方にありし、景行天皇の
皇居。記まきむくの日代の宮は朝日の
日照る宮夕日の日かげる宮

まきむくのひひろのひみや 纏向日代
宮(名)今の大和國磯城(郡)纏向村大
字穴師(字)の北方にありし、景行天皇の
皇居。記まきむくの日代の宮は朝日の
日照る宮夕日の日かげる宮

まきむくのひひろのひみや 纏向日代
宮(名)今の大和國磯城(郡)纏向村大
字穴師(字)の北方にありし、景行天皇の
皇居。記まきむくの日代の宮は朝日の
日照る宮夕日の日かげる宮

まきむくのひひろのひみや 纏向日代
宮(名)今の大和國磯城(郡)纏向村大
字穴師(字)の北方にありし、景行天皇の
皇居。記まきむくの日代の宮は朝日の
日照る宮夕日の日かげる宮

まきむくのひひろのひみや 纏向日代
宮(名)今の大和國磯城(郡)纏向村大
字穴師(字)の北方にありし、景行天皇の
皇居。記まきむくの日代の宮は朝日の
日照る宮夕日の日かげる宮

の巻きてあるもの。「人。
まきや 薪屋(名)薪を商ふ家、又その
まきやう 魔境(名)「佛」悪魔の境界。
魔界。魔道。諸曲(曲)魔境の鬼と、今ぞ
なる」。「遊里など、すべて、人の心を誘
惑する處。

まきやう 魔鏡(名)光線を反射せしむ
る時、種種の影像又は文字の映りあらは
るる鏡。その裏面に彫刻物などありて、
凹凸あるがために、鏡面研磨の際、自然に
表面に分子の密なる部分と疎なる部分と
を生じ、從ひて、光線反射の度、全面一様
なるを得ざるに因る。「悪狂」に同じ。

まきやう 魔狂(名)「哲」まひさきやう 魔
まきやう 麻行(名)「語」五十音圖中第
七の行(音)、「即ち」ま・み・む・め・も」の五
行。「屬する五音。

まきやう 麻行音(名)「語」麻行に
まきやう おん 眞木保臣(名)「人」幕末
の勤王家。筑後國久留米(郡)の水天宮の
祠官。幼名は湊。從五位下和泉守に任せ
らる。弘化元年、江戸に出で、四方の志士
と交る。嘉永五年、罪を藩に獲、幽囚十一
年、文久二年、島津久光を要して事を擧げ
んとし、再び藩に幽閉せらる。後、釋され
て、長門國に入り、長藩庇護の下に京に出
づ。大和行幸の事故れて、七卿の西下す
るや、これに從ひ、専ら帷帳に參す。元治
元年夏、長藩三家老に從ひて、京に上り、
久坂(郡)通武等と天王山に據り、幕兵と
戦ひて敗れ、天王山に自刃す。年五十二。
まきやう 目消ゆ(動)「目」目くらむ。
「古語」。「驚迷眩、マドヒマキエテ」

まきやう 媽宮(名)「地」ぼこう(馬公)に
同じ。

まきやう 綱弓(名)革或は絲などに
巻きたる弓なるべし。扶桑略記、綱弓、革
胡籥」

まきやう 巻寄す(動)「下二他」「次第に
巻き込む。巻きながら進む。夫木(巻寄す
る)の心はづかしく、殘のひらに老(見
えにけり)」。敵を取り巻きて攻寄す。
まきやう 眞清水藏六(名)

まきやう 眞清水藏六(名)

まきやう 眞清水藏六(名)

まきやう 眞清水藏六(名)

まきやう 眞清水藏六(名)

まきやう 眞清水藏六(名)

まきやう 眞清水藏六(名)

まきやう 眞清水藏六(名)

まきやう 眞清水藏六(名)

まきやう 眞清水藏六(名)

まきやう 眞清水藏六(名)

まきやう 眞清水藏六(名)

まきやう 眞清水藏六(名)

まきやう 眞清水藏六(名)

まきやう 眞清水藏六(名)

まきやう 眞清水藏六(名)

「人」陶工。もと清水。幼名、田三郎。山城
國乙訓郡久我村の人。叔父和氣龜孝に學
ぶ。弘化元年開塾して、名を藏六と改め、
遂に一家をなす。後、妙法院宮の命によ
り、姓を眞清水と改む。明治十年歿す。
まきやう 紛(名)まきらかし(紛)の略。重非簡
「蒲團被て行く振」も、涙くろめし
まきやう 紛(名)まきらかし(紛)の略。重非簡
「蒲團被て行く振」も、涙くろめし
まきやう 紛(名)まきらかし(紛)の略。重非簡
「蒲團被て行く振」も、涙くろめし

まきやう 紛(名)まきらかし(紛)の略。重非簡
「蒲團被て行く振」も、涙くろめし
まきやう 紛(名)まきらかし(紛)の略。重非簡
「蒲團被て行く振」も、涙くろめし

まきやう 紛(名)まきらかし(紛)の略。重非簡
「蒲團被て行く振」も、涙くろめし
まきやう 紛(名)まきらかし(紛)の略。重非簡
「蒲團被て行く振」も、涙くろめし

まきやう 紛(名)まきらかし(紛)の略。重非簡
「蒲團被て行く振」も、涙くろめし
まきやう 紛(名)まきらかし(紛)の略。重非簡
「蒲團被て行く振」も、涙くろめし

まきやう 紛(名)まきらかし(紛)の略。重非簡
「蒲團被て行く振」も、涙くろめし
まきやう 紛(名)まきらかし(紛)の略。重非簡
「蒲團被て行く振」も、涙くろめし

まきやう 紛(名)まきらかし(紛)の略。重非簡
「蒲團被て行く振」も、涙くろめし
まきやう 紛(名)まきらかし(紛)の略。重非簡
「蒲團被て行く振」も、涙くろめし

まきやう 紛(名)まきらかし(紛)の略。重非簡
「蒲團被て行く振」も、涙くろめし
まきやう 紛(名)まきらかし(紛)の略。重非簡
「蒲團被て行く振」も、涙くろめし

まきやう 紛(名)まきらかし(紛)の略。重非簡
「蒲團被て行く振」も、涙くろめし
まきやう 紛(名)まきらかし(紛)の略。重非簡
「蒲團被て行く振」も、涙くろめし

まきやう 紛(名)まきらかし(紛)の略。重非簡
「蒲團被て行く振」も、涙くろめし
まきやう 紛(名)まきらかし(紛)の略。重非簡
「蒲團被て行く振」も、涙くろめし

まきやう 紛(名)まきらかし(紛)の略。重非簡
「蒲團被て行く振」も、涙くろめし
まきやう 紛(名)まきらかし(紛)の略。重非簡
「蒲團被て行く振」も、涙くろめし

まきやう 紛(名)まきらかし(紛)の略。重非簡
「蒲團被て行く振」も、涙くろめし
まきやう 紛(名)まきらかし(紛)の略。重非簡
「蒲團被て行く振」も、涙くろめし

まきやう 紛(名)まきらかし(紛)の略。重非簡
「蒲團被て行く振」も、涙くろめし
まきやう 紛(名)まきらかし(紛)の略。重非簡
「蒲團被て行く振」も、涙くろめし

まきやう 紛(名)まきらかし(紛)の略。重非簡
「蒲團被て行く振」も、涙くろめし
まきやう 紛(名)まきらかし(紛)の略。重非簡
「蒲團被て行く振」も、涙くろめし

まきやう 紛(名)まきらかし(紛)の略。重非簡
「蒲團被て行く振」も、涙くろめし
まきやう 紛(名)まきらかし(紛)の略。重非簡
「蒲團被て行く振」も、涙くろめし

まきやう 紛(名)まきらかし(紛)の略。重非簡
「蒲團被て行く振」も、涙くろめし
まきやう 紛(名)まきらかし(紛)の略。重非簡
「蒲團被て行く振」も、涙くろめし

まきやう 紛(名)まきらかし(紛)の略。重非簡
「蒲團被て行く振」も、涙くろめし
まきやう 紛(名)まきらかし(紛)の略。重非簡
「蒲團被て行く振」も、涙くろめし

まきやう 紛(名)まきらかし(紛)の略。重非簡
「蒲團被て行く振」も、涙くろめし
まきやう 紛(名)まきらかし(紛)の略。重非簡
「蒲團被て行く振」も、涙くろめし

まきやう 紛(名)まきらかし(紛)の略。重非簡
「蒲團被て行く振」も、涙くろめし
まきやう 紛(名)まきらかし(紛)の略。重非簡
「蒲團被て行く振」も、涙くろめし

まきやう 紛(名)まきらかし(紛)の略。重非簡
「蒲團被て行く振」も、涙くろめし
まきやう 紛(名)まきらかし(紛)の略。重非簡
「蒲團被て行く振」も、涙くろめし

まきやう 紛(名)まきらかし(紛)の略。重非簡
「蒲團被て行く振」も、涙くろめし
まきやう 紛(名)まきらかし(紛)の略。重非簡
「蒲團被て行く振」も、涙くろめし

まきやう 紛(名)まきらかし(紛)の略。重非簡
「蒲團被て行く振」も、涙くろめし
まきやう 紛(名)まきらかし(紛)の略。重非簡
「蒲團被て行く振」も、涙くろめし

まきやう 紛(名)まきらかし(紛)の略。重非簡
「蒲團被て行く振」も、涙くろめし
まきやう 紛(名)まきらかし(紛)の略。重非簡
「蒲團被て行く振」も、涙くろめし

まきり(一)まき 間切書記(名)間切吏員
の一。間切長の命令を受けて、庶務に従
事せしもの。

まきり(一)まき 間切書記(名)間切吏員
の一。間切長の命令を受けて、庶務に従
事せしもの。

まきり(一)まき 間切書記(名)間切吏員
の一。間切長の命令を受けて、庶務に従
事せしもの。

まきり(一)まき 間切書記(名)間切吏員
の一。間切長の命令を受けて、庶務に従
事せしもの。

まきり(一)まき 間切書記(名)間切吏員
の一。間切長の命令を受けて、庶務に従
事せしもの。

まきり(一)まき 間切書記(名)間切吏員
の一。間切長の命令を受けて、庶務に従
事せしもの。

まきり(一)まき 間切書記(名)間切吏員
の一。間切長の命令を受けて、庶務に従
事せしもの。

まきり(一)まき 間切書記(名)間切吏員
の一。間切長の命令を受けて、庶務に従
事せしもの。

まきり(一)まき 間切書記(名)間切吏員
の一。間切長の命令を受けて、庶務に従
事せしもの。

まきり(一)まき 間切書記(名)間切吏員
の一。間切長の命令を受けて、庶務に従
事せしもの。

まきり(一)まき 間切書記(名)間切吏員
の一。間切長の命令を受けて、庶務に従
事せしもの。

まきり(一)まき 間切書記(名)間切吏員
の一。間切長の命令を受けて、庶務に従
事せしもの。

まきり(一)まき 間切書記(名)間切吏員
の一。間切長の命令を受けて、庶務に従
事せしもの。

まきり(一)まき 間切書記(名)間切吏員
の一。間切長の命令を受けて、庶務に従
事せしもの。

まきり(一)まき 間切書記(名)間切吏員
の一。間切長の命令を受けて、庶務に従
事せしもの。

まきり(一)まき 間切書記(名)間切吏員
の一。間切長の命令を受けて、庶務に従
事せしもの。

まきり(一)まき 間切書記(名)間切吏員
の一。間切長の命令を受けて、庶務に従
事せしもの。

まきり(一)まき 間切書記(名)間切吏員
の一。間切長の命令を受けて、庶務に従
事せしもの。

まきり(一)まき 間切書記(名)間切吏員
の一。間切長の命令を受けて、庶務に従
事せしもの。

まきり(一)まき 間切書記(名)間切吏員
の一。間切長の命令を受けて、庶務に従
事せしもの。

まきり(一)まき 間切書記(名)間切吏員
の一。間切長の命令を受けて、庶務に従
事せしもの。

まきり(一)まき 間切書記(名)間切吏員
の一。間切長の命令を受けて、庶務に従
事せしもの。

まきりよ

まきりより **巻龍**〔名〕模様の一種。龍の圓形に婦りてある形を描けるもの。五人女(巻龍)の鐵鏝(巻龍)。
まきりより **巻菱湖**〔名〕「人」書家。名は大任、字は致遠又、起巖、通稱は右内、又、弘齋と號す。越後國西蒲原(巻菱湖)郡卷の人、一説には新潟の人ともいふ。江戸に出て、業を龜田鴨齋に受け、詩を善くし、性草率にして、酒を嗜む。天保十四年歿す。年六十七。

まきりより **めん** 間切吏員〔名〕間切の行政事務を取り扱ひし吏員、即ち間切長間切書記間切收入役村頭などの總稱。
まきり 間切の〔動四自〕波間を切りて、船を進む。〔逆風の時、眞直に進まず、帆を適當に操り、時宜によりては、數回の轉回を行ひて、目的地に達す。〕

まきり 紛る〔動下二自〕目(目)切るの義。見わけられず。見ちがふ。まがふ。酒兵御鼻の色ばかり、物事にもまざるまじろ花やかに。〔他の物事にもまざるまじろ心を引き。愛さざる。源兵何にか、まざる事なきつれづれを慰めまし。〕
 〔入りまじる。まざる。混す。榮生「けちかければ、まぎれ渡りつつ見奉らせたまふ。〕
 〔隠る。隠れ忍ぶ。源兵「この際(ま)に立たる屏風も、端の方おし墨まされたるが、まざるべき几帳なども。〕

まきり 紛〔名〕まぎること。源兵「夕闇の道たどたどしげなるまぎれに、吾が車にひて奉る。』同「昔の物語などせさせて聞きたまふに、少しつれづれのまぎれなり。』

まきり あたり 紛當〔名〕まぐれあたり(紛當)に同じ。和合人「拙父鯉丈が緩りたる笑談にも、まぎれ當のありといへど。』
まきり へむ 紛込む〔動四自〕まぎれて入り込む。混雜に乗じて入り込む。まぎれて、見分けが難くなる。まぎれこむ。
まきり へどろ 紛所〔名〕まぎるべき所。見ちがふ。源兵「まぎれどころなき御顔つきを、思し寄らぬ事にしあれば。』
まきり へむ 紛ばむ〔動四自〕紛らはしく見ゆ。源兵若き人とても、うち紛れば

まきりよ

み、いかにぞや世づきたる人もおはすべかめるを。』
まきり ぶね 紛船〔名〕へうせん(漂船)にまきりもの 紛物〔名〕まぎれ易き物。互に似て區別しがたき物。まがひもの。新可笑記「同じ二色、二人に傳はりて、しかも違はざるのまぎれ物。』

まきり もの 紛者〔名〕まぎれ易き人。互に似て、區別しがたき者。阿波鴨門「手前の殿の名を借つて、着を極めし紛者、尋ね出すその間。』
まきり ろろ 巻轆轤〔名〕巻きて動かす轆轤。平家女護鳥巻轆轤の大綱を。』しやち(車地)に同じ。
まきり わた 巻縮捲綿〔名〕打ちたる綿を疋状となして巻きたるもの。
まきり わら 巻葉菜砵〔名〕葉を巻き束ねたるもの。射術練習の的などす。どうゆひ。風來山人六部集「善操の辨「弓の稽古する者、素引(ま)葉砵ばかりて、手前さへ固まれば、的にかかるに及ぶまじけれども。』朝衣箱根の赤腹は、巻葉に挿し。』

まきり わら まへ 巻葉前〔名〕射藝にて、巻葉を射て、射前(ま)を正すこと。
まきり わら や 巻葉矢〔名〕巻葉を射るに用ふる矢。鐵は圓柱状の小さき木割(ま)を用ふ。』

まきり わり 薪割〔名〕薪を割ること、又それを用ふる一種の刃物。
まきり れ 蒔繪〔名〕漆と金銀粉とを用ひて、器物の面に繪模様をかき表すこと、又その繪模様。先づ漆にて繪を描き、その漆の未だ乾かざるうちに、金銀の粉を蒔きつけおき、後に磨きて、光澤を生ぜしむ。その製によりて、平蒔(蒔繪)高蒔(蒔繪)研出(蒔繪)の三種に分ち、又、梨地(蒔繪)金貝(蒔繪)などあり。現今は、寫眞蒔繪銅版蒔繪(紙型)蒔繪等の發明あり。
 蒔繪の太刀〔句〕蒔繪の細太刀(ま)に同じ。
 蒔繪の天秤棒擔(ま)〔句〕身分を辨へずして高ぶる人の譬。「談語」

蒔繪の野太刀〔句〕鞘に蒔繪を施したる野太刀。
 蒔繪の種太刀(ま)〔句〕種太刀の一。鞘に蒔繪を施し、公卿殿上人の常用とせしもの。
 蒔繪の細太刀〔句〕細太刀の一。鞘に蒔繪を施し、公卿殿上人の常用とせしもの。まきた。蒔繪の太刀(ま)。
 蒔繪螺鈿(ま)の太刀〔句〕細太刀の一種。鞘に蒔繪を施し、青貝を摺りてあり。遠所又は雨天の日の行幸に、供奉の公卿これを帯び、後世は、公卿殿上人の常用とせしもの。
まきり れ 撒餌〔名〕小鳥などに餌を撒きちらして與ふること、又その餌。
まきり れ あふぎ 蒔繪扇〔名〕地扇を漆にて染め、蒔繪(赤繪)を書きたるもの。
まきり れ れ 蒔繪櫛〔名〕蒔繪を施したる木櫛。まきり。
まきり れ れ 蒔繪師〔名〕蒔繪を業とする人。著聞年頭召使ふ蒔繪師ありけり。』
まきり れ はき まき多萩〔名〕「植」苳(ま)に屬する多年生の草。莖細くして、高さ一二尺餘に達す。葉は複葉にして、楕圓形の三小葉より成り、互生し、秋、葉縁より、線状の一花梗生じ、紅色を帯びたる黄色の蝶形小花冠を有する花二三箇つづ開く。我國、山野に自生し、又、觀賞用とす。』
まきり れ ふて 蒔繪筆〔名〕蒔繪を書くに用ふる筆。
まきり れ や 蒔繪屋〔名〕蒔繪を業とする家、又その人。一代男「蒔繪屋の治助」
まきり れ を 巻緒〔名〕繪を巻きおく時の結紐(ま)。

まきりよ

かあてん。幔幕。帷幕。和名幕、馬久。』
 終に幕を引くよりいふ。芝居の演技の一段落。』前項の義より轉じていふ。場面(ま)又は場合。「貴様などの出る幕でない、引込んでゐろ。』四しまひ。をばり。終結。「この問題は、これで幕だ。幕が明く。』引幕が明く、芝居にて、演技の始まるにいひ、又、事の始まるに譬へていふ。』
まきり が下りる 〔句〕揚幕(ま)を垂れ下り幕に掛く。』俳優が、苦情を言ひたてて、舞臺に出でず。「徳川時代の芝居の語)』

まきり す 〔句〕演戲を一段落附かしむ。幕を切る。』芝居にて、幕を開く。揚幕(ま)を掲ぐ。又、事端を啓くに譬へていふ。八笑人何の思慮もなく、若侍の言ふに任せ、幕を切らせり。』
まきり を閉づ 〔句〕幕を引く。』同じ。
まきり の終(ま)になる。終結す。』一生の幕を閉る。』
まきり を絞る 〔句〕幕を畳みあげ、又は捲きあげたとして括る。
まきり を引く 〔句〕引幕(ま)を閉づ。陰(ま)の幕。』めま(女幕)に同じ。陽(ま)の幕。』をま(男幕)に同じ。
まきり 膜 〔名〕「生」動物體の内在りて、肉などを包み覆へる薄き皮。例へば、動物の體のは、小きは、鼓膜の類より、大なるは、膈膜、胸膜、腹膜、横膈膜など、又、植物體の細胞膜など。たなしし。うすかは。』すべて、物の表面をおほふ薄き物。

まきり 巻く捲く 〔動四他〕圓く、くるくると畳み込む。』
まきり まとふ 〔句〕圓く、くるくると畳み込む。』
まきり 略 〔句〕帆を巻く。』碇を巻く。』
まきり 附合(ま)をなす。
まきり 巻くより延ばせ 〔句〕帆を巻くより、帆足を延ばすがよし。』(船人の談語)』消極主義よりは、積極主義を取るがよし。』
まきり 捲く 〔動四自〕圓くくるくる次第に

かあてん。幔幕。帷幕。和名幕、馬久。』
 終に幕を引くよりいふ。芝居の演技の一段落。』前項の義より轉じていふ。場面(ま)又は場合。「貴様などの出る幕でない、引込んでゐろ。』四しまひ。をばり。終結。「この問題は、これで幕だ。幕が明く。』引幕が明く、芝居にて、演技の始まるにいひ、又、事の始まるに譬へていふ。』
まきり が下りる 〔句〕揚幕(ま)を垂れ下り幕に掛く。』俳優が、苦情を言ひたてて、舞臺に出でず。「徳川時代の芝居の語)』

まきりよ

かあてん。幔幕。帷幕。和名幕、馬久。』
 終に幕を引くよりいふ。芝居の演技の一段落。』前項の義より轉じていふ。場面(ま)又は場合。「貴様などの出る幕でない、引込んでゐろ。』四しまひ。をばり。終結。「この問題は、これで幕だ。幕が明く。』引幕が明く、芝居にて、演技の始まるにいひ、又、事の始まるに譬へていふ。』
まきり が下りる 〔句〕揚幕(ま)を垂れ下り幕に掛く。』俳優が、苦情を言ひたてて、舞臺に出でず。「徳川時代の芝居の語)』

まきり す 〔句〕演戲を一段落附かしむ。幕を切る。』芝居にて、幕を開く。揚幕(ま)を掲ぐ。又、事端を啓くに譬へていふ。八笑人何の思慮もなく、若侍の言ふに任せ、幕を切らせり。』
まきり を閉づ 〔句〕幕を引く。』同じ。
まきり の終(ま)になる。終結す。』一生の幕を閉る。』
まきり を絞る 〔句〕幕を畳みあげ、又は捲きあげたとして括る。
まきり を引く 〔句〕引幕(ま)を閉づ。陰(ま)の幕。』めま(女幕)に同じ。陽(ま)の幕。』をま(男幕)に同じ。
まきり 膜 〔名〕「生」動物體の内在りて、肉などを包み覆へる薄き皮。例へば、動物の體のは、小きは、鼓膜の類より、大なるは、膈膜、胸膜、腹膜、横膈膜など、又、植物體の細胞膜など。たなしし。うすかは。』すべて、物の表面をおほふ薄き物。

まきり 巻く捲く 〔動四他〕圓く、くるくると畳み込む。』
まきり まとふ 〔句〕圓く、くるくると畳み込む。』
まきり 略 〔句〕帆を巻く。』碇を巻く。』
まきり 附合(ま)をなす。
まきり 巻くより延ばせ 〔句〕帆を巻くより、帆足を延ばすがよし。』(船人の談語)』消極主義よりは、積極主義を取るがよし。』
まきり 捲く 〔動四自〕圓くくるくる次第に

かあてん。幔幕。帷幕。和名幕、馬久。』
 終に幕を引くよりいふ。芝居の演技の一段落。』前項の義より轉じていふ。場面(ま)又は場合。「貴様などの出る幕でない、引込んでゐろ。』四しまひ。をばり。終結。「この問題は、これで幕だ。幕が明く。』引幕が明く、芝居にて、演技の始まるにいひ、又、事の始まるに譬へていふ。』
まきり が下りる 〔句〕揚幕(ま)を垂れ下り幕に掛く。』俳優が、苦情を言ひたてて、舞臺に出でず。「徳川時代の芝居の語)』

小く重なる。回り流る。うづまく。

まく枕（枕）【動四他】枕とす。「古語」記

「玉手さし中き股長（袴）にいはなむさむを」

萬葉世の中に事しげむと思はねば君が

袂をまかぬ夜もありき。「古語」同衾して、相

手の手を枕とす。婿す。「古語」萬葉たら

らちねの母が目かれて若草の妻をもま

かず。

まく蒔く【動四他】散らし下す。散ら

し種（種）を蒔く。「古語」記

「山がたにまける青菜も種備人（種）と共

に摘めばたぬしもあるか」

「古語」蒔繪をなす。禁秘抄御調度等、近代蒔繪繪

著書蒔繪師……只今御物（蒔）を蒔きか

けて候へば」

「魚子（蒔）を蒔く」を見

よ。散らしかく。ふりかく。そそぐ。

「撒く」水をまく。「鹽をまく」

金をまく。人を人に分け興ふ。散財す。和合（旅）

出て、俳優（）といふのが知れりやあ

餘計な錢も時かなければならぬえから

「逆（）の者を途中にて、わざと他の事

に紛らわして、はげしむ。膝栗毛（）一人

歩いて去（）ねて、我（）ばかりまかれ

ましたはいな」

「好まぬ者に對し、それ

と言はずして、座を立たしめ、又その来る

べきを來ぬやうに仕向く。「遊廓の語」

まく負く【動下二他】力又は程度劣り

て、敵することを不得。勝たず。敗る。

まく任く【動下二他】言ひつけて、事を

行ひに遣る。つかはす。まからす。「古語」

萬葉まつろはば國を治めとみこながなら

任けたまへば」

「官職に任ず。任命す。

「古語」

「古語」

「古語」

「古語」

「古語」

「古語」

「古語」

「古語」

「古語」

「古語」

「古語」

「古語」

「古語」

「古語」

「古語」

「古語」

「古語」

「古語」

「古語」

「古語」

「古語」

「古語」

「古語」

「古語」

「古語」

まく任く【動下二他】言ひつけて、事を

行ひに遣る。つかはす。まからす。「古語」

萬葉まつろはば國を治めとみこながなら

任けたまへば」

「官職に任ず。任命す。

「古語」

「古語」

「古語」

「古語」

「古語」

「古語」

「古語」

「古語」

「古語」

「古語」

「古語」

「古語」

「古語」

「古語」

「古語」

「古語」

「古語」

「古語」

「古語」

「古語」

「古語」

「古語」

「古語」

「古語」

「古語」

まくさへら馬草倉秣庫（名）秣を入れ

おく倉所。

まくさへら馬草場秣場（名）秣を刈り取

まくさへらむし蠟蟻（名）【動】みつすし（鼓

蟲）に同じ。字蠟蟻、マダサムシ

まくさへら馬草桶秣桶（名）秣を入れ

て馬にかぶ桶。

まくさへら眞櫛（名）【ま（眞）は接頭語】

櫛の美稱。「古語」萬葉少女（）ら

織るはたの上を眞櫛もてかかたぐ島波

間より見ゆ」

まくさへらかかろ捲掛る【動四自】まくりか

まくさへら幕下（名）力士の階級の一。昔

は、幕の内以下なるもの、後には、番附面

第二段の欄に名を載せらるるもの。その

最上位を俗に貧乏神といひ、それより以

下十五人（近時までは十人）を總稱して

十兩取といふ。

まくさへら出す捲出す【動四他】まくり出す

（捲出す）の轉。流麗出世體（）且那（吹込

み、まくし出してのけたが」

まくさへら捲立つ【動下二他】まくりたつ

（捲立つ）の轉。

まくさへらま（英 Maximun）（名）最大限。

最高度。まさしまむ（みにまむに對して

まくさへら幕尻（名）相撲（）の、幕内（）

の最末の地位。

まくさへら膜翅類（名）【動】昆蟲類の

一目。口器は咬嚼と舐食とに適し、四翅

は膜質にして、脈少く、且つ前後大なら

まくさへら

まくさへら

まくさへら

まくさへら

まくさへら

まくさへら

まくさへら

まくさへら

まくさへら

まくさへら

まくさへら

まくさへら

まくさへら

まくさへら

まくさへら

まくさへら

まくさへら

まくさへら

まくさへら

まくさへら

まくさへら

まくさへら

まくさへら

まくさへら

まくさへら

まくさへら

まくさへら

まくさへら

まくさへら

まくさへら

まぐさ

まぐさ(はら) 眞葛延ふ「枕」その地に葛の多かりしためにや、かすがのやま(春日山)にかけていふ。眞葛延ふは春日の山はうちなびき春より行く」と

まぐさ(はら) 眞葛原「行」葛の一面に生ひたる處。配「赤駒のいゆき憚るまぐさ原何のつてごとだににえけむ」

まぐさ(ま) 眞葛交「名」眞葛のまじり生えてあること。撰次まつはる眞葛まじりの玉ざさはまさかに刈るもうるさかりけり」

まぐさ(ま) 眞葛焼「名」文化の頃、富川長造の、仁清(?)焼に摸して、京都祇園眞葛ヶ原にて焼き創めし陶磁器。太田焼。

まぐさ(ま) 目屎「名」めく(目屎)に同じ。「古語」字彙、眼、目、垢。萬久會。

まぐさ(ま) 馬糞「名」馬のくそ。ばふん。まぐさ(ま) 馬糞海膽「名」(動)海膽(?)類の一種。大き徑一寸餘、全形、栗の種果に似、無數の短刺ありて、黄綠色を帯び、やや馬糞に類す。我國、各地の淺海に産す。

まぐさ(ま) 馬糞紙「名」ばふん(馬糞)その他獸類人類の糞又は腐敗動物質等に集まり棲息して、その中に産卵し、幼蟲と共に、それらの汚物を食する金龜子。種類多けれど、體長大抵二三分、楕圓形にして背面は隆起し、腹面は扁平、色は多しは黒色又は黒褐色にして、黄色又は褐色の斑紋あり。初春温暖の日には、田圃の間を飛翔す。まぐさ(ま)。

まぐさ(ま) 馬糞漂「名」路上に在る馬糞を拾ひあるく人。配「糞は、空中より舞ひ下りて、道路の馬糞を啄み、空中によりていふ」(?)(糞)の異稱。和合人「馬屎さらひがねらひを附けあしめいし」

まぐさ(ま) 馬糞鷹「名」(動)小形なる、一種の鷹。鶴(?)よりはやや小さく、悦哉

まぐさ(ま) 馬糞鷹「名」(動)小形なる、一種の鷹。鶴(?)よりはやや小さく、悦哉

まぐさ(ま) 馬糞鷹「名」(動)小形なる、一種の鷹。鶴(?)よりはやや小さく、悦哉

まぐさ

(?)よりは大きく、翼の長さ八寸五分ほどにて、その上面は赤褐色に黒點あり、下面は淡褐色に黒點縦列し、又、雄は頭と尾とは灰褐色を呈し、尾に九條の黒帯あり、雌と幼鳥とは、頭、尾共に背と同じく赤褐色を呈す。ちやうけんばう。

まぐさ(ま) 馬糞蟲「名」(動)まぐさ(ま) (馬糞金龜子)に同じ。

まぐさ(ま) 幕盾「名」幕を引きめぐらし、矢を防ぎ、盾の代用とせしもの。まぐさ(ま) 眞直「名」高所より眞直に下ること。義經記「長刀(?)打振り、まくだりにをめぐりてかかす」(?)京都にて、南をさして、眞直に行くこと。保元敵の追懸げんも悪しかりなんと思ひて、眞下に逃げたりけるが」

まぐさ(ま) 開口「名」土地・家屋などの前面の長さ(奥行に對して)開口ばかりで、奥行が無(句)雜駁にして、深遠ならざる知識の譬。

まぐさ(ま) 眞口鱸「名」さざ(棒鱸)に同じ。まぐさ(ま) 魔窟「名」悪魔の住む處。まぐさ(ま) 眞直「名」高所より眞直に下ること。義經記「長刀(?)打振り、まくだりにをめぐりてかかす」(?)京都にて、南をさして、眞直に行くこと。保元敵の追懸げんも悪しかりなんと思ひて、眞下に逃げたりけるが」

まぐさ(ま) 眞口鱸「名」さざ(棒鱸)に同じ。まぐさ(ま) 魔窟「名」悪魔の住む處。まぐさ(ま) 眞直「名」高所より眞直に下ること。義經記「長刀(?)打振り、まくだりにをめぐりてかかす」(?)京都にて、南をさして、眞直に行くこと。保元敵の追懸げんも悪しかりなんと思ひて、眞下に逃げたりけるが」

まぐさ(ま) 眞口鱸「名」さざ(棒鱸)に同じ。まぐさ(ま) 魔窟「名」悪魔の住む處。まぐさ(ま) 眞直「名」高所より眞直に下ること。義經記「長刀(?)打振り、まくだりにをめぐりてかかす」(?)京都にて、南をさして、眞直に行くこと。保元敵の追懸げんも悪しかりなんと思ひて、眞下に逃げたりけるが」

まぐさ(ま) 眞口鱸「名」さざ(棒鱸)に同じ。まぐさ(ま) 魔窟「名」悪魔の住む處。まぐさ(ま) 眞直「名」高所より眞直に下ること。義經記「長刀(?)打振り、まくだりにをめぐりてかかす」(?)京都にて、南をさして、眞直に行くこと。保元敵の追懸げんも悪しかりなんと思ひて、眞下に逃げたりけるが」

まぐさ(ま) 眞口鱸「名」さざ(棒鱸)に同じ。まぐさ(ま) 魔窟「名」悪魔の住む處。まぐさ(ま) 眞直「名」高所より眞直に下ること。義經記「長刀(?)打振り、まくだりにをめぐりてかかす」(?)京都にて、南をさして、眞直に行くこと。保元敵の追懸げんも悪しかりなんと思ひて、眞下に逃げたりけるが」

まぐさ(ま) 眞口鱸「名」さざ(棒鱸)に同じ。まぐさ(ま) 魔窟「名」悪魔の住む處。まぐさ(ま) 眞直「名」高所より眞直に下ること。義經記「長刀(?)打振り、まくだりにをめぐりてかかす」(?)京都にて、南をさして、眞直に行くこと。保元敵の追懸げんも悪しかりなんと思ひて、眞下に逃げたりけるが」

まぐさ(ま) 眞口鱸「名」さざ(棒鱸)に同じ。まぐさ(ま) 魔窟「名」悪魔の住む處。まぐさ(ま) 眞直「名」高所より眞直に下ること。義經記「長刀(?)打振り、まくだりにをめぐりてかかす」(?)京都にて、南をさして、眞直に行くこと。保元敵の追懸げんも悪しかりなんと思ひて、眞下に逃げたりけるが」

まぐさ

まぐさ(ま) 目合「名」(日)婚(?)の義か「目を見あはする人知れぬものおもひさめぬるこちして、まくなぎつくらせてさしおかせけり」

まぐさ(ま) 幕無「名」絶間(?)なきこと。のべつまくなし。八笑人「ちつと黙(?)らねえか。さう幕なしに地口つづけて」

まぐさ(ま) 幕無「名」絶間(?)なきこと。のべつまくなし。八笑人「ちつと黙(?)らねえか。さう幕なしに地口つづけて」

まぐさ(ま) 麻偏湿母「名」Magnesia。質硬く、研ぎて鏡とするによく、又、良好なる鑄造品を得。まぐさ(ま) 麻偏湿母「名」Magnesia。質硬く、研ぎて鏡とするによく、又、良好なる鑄造品を得。

まぐさ(ま) 麻偏湿母「名」Magnesia。質硬く、研ぎて鏡とするによく、又、良好なる鑄造品を得。まぐさ(ま) 麻偏湿母「名」Magnesia。質硬く、研ぎて鏡とするによく、又、良好なる鑄造品を得。

まぐさ(ま) 麻偏湿母「名」Magnesia。質硬く、研ぎて鏡とするによく、又、良好なる鑄造品を得。まぐさ(ま) 麻偏湿母「名」Magnesia。質硬く、研ぎて鏡とするによく、又、良好なる鑄造品を得。

まぐさ(ま) 麻偏湿母「名」Magnesia。質硬く、研ぎて鏡とするによく、又、良好なる鑄造品を得。まぐさ(ま) 麻偏湿母「名」Magnesia。質硬く、研ぎて鏡とするによく、又、良好なる鑄造品を得。

まぐさ(ま) 麻偏湿母「名」Magnesia。質硬く、研ぎて鏡とするによく、又、良好なる鑄造品を得。まぐさ(ま) 麻偏湿母「名」Magnesia。質硬く、研ぎて鏡とするによく、又、良好なる鑄造品を得。

まぐさ(ま) 麻偏湿母「名」Magnesia。質硬く、研ぎて鏡とするによく、又、良好なる鑄造品を得。まぐさ(ま) 麻偏湿母「名」Magnesia。質硬く、研ぎて鏡とするによく、又、良好なる鑄造品を得。

まぐさ(ま) 麻偏湿母「名」Magnesia。質硬く、研ぎて鏡とするによく、又、良好なる鑄造品を得。まぐさ(ま) 麻偏湿母「名」Magnesia。質硬く、研ぎて鏡とするによく、又、良好なる鑄造品を得。

まぐさ(ま) 麻偏湿母「名」Magnesia。質硬く、研ぎて鏡とするによく、又、良好なる鑄造品を得。まぐさ(ま) 麻偏湿母「名」Magnesia。質硬く、研ぎて鏡とするによく、又、良好なる鑄造品を得。

まぐさ

まぐさ(ま) 眞桑瓜甜瓜「名」(植)初、美濃國本巢(?)郡眞桑村「岐阜市の西方約二里」に産せしよりいふ。葫蘆(?)科に屬する一年生の草。莖は細長くして、刺あり。卷鬚によりて、他物に巻きつく。葉は心臟形にして、掌狀に淺裂し、長柄あり、互生。花は單性雌雄同株にして、黄色の合瓣花冠を有し、其實は楕圓形・綠色にして、濃き縦線あり。味甘し。食用として栽培す。あぢうり。あまうり。うばうり。うり。しまうり。ほぞち。ほんてんうり。まくは。みやこうり。

まぐさ(ま) 眞桑瓜甜瓜「名」(植)初、美濃國本巢(?)郡眞桑村「岐阜市の西方約二里」に産せしよりいふ。葫蘆(?)科に屬する一年生の草。莖は細長くして、刺あり。卷鬚によりて、他物に巻きつく。葉は心臟形にして、掌狀に淺裂し、長柄あり、互生。花は單性雌雄同株にして、黄色の合瓣花冠を有し、其實は楕圓形・綠色にして、濃き縦線あり。味甘し。食用として栽培す。あぢうり。あまうり。うばうり。うり。しまうり。ほぞち。ほんてんうり。まくは。みやこうり。

まぐさ(ま) 眞桑瓜甜瓜「名」(植)初、美濃國本巢(?)郡眞桑村「岐阜市の西方約二里」に産せしよりいふ。葫蘆(?)科に屬する一年生の草。莖は細長くして、刺あり。卷鬚によりて、他物に巻きつく。葉は心臟形にして、掌狀に淺裂し、長柄あり、互生。花は單性雌雄同株にして、黄色の合瓣花冠を有し、其實は楕圓形・綠色にして、濃き縦線あり。味甘し。食用として栽培す。あぢうり。あまうり。うばうり。うり。しまうり。ほぞち。ほんてんうり。まくは。みやこうり。

まぐさ(ま) 眞桑瓜甜瓜「名」(植)初、美濃國本巢(?)郡眞桑村「岐阜市の西方約二里」に産せしよりいふ。葫蘆(?)科に屬する一年生の草。莖は細長くして、刺あり。卷鬚によりて、他物に巻きつく。葉は心臟形にして、掌狀に淺裂し、長柄あり、互生。花は單性雌雄同株にして、黄色の合瓣花冠を有し、其實は楕圓形・綠色にして、濃き縦線あり。味甘し。食用として栽培す。あぢうり。あまうり。うばうり。うり。しまうり。ほぞち。ほんてんうり。まくは。みやこうり。

まぐさ(ま) 眞桑瓜甜瓜「名」(植)初、美濃國本巢(?)郡眞桑村「岐阜市の西方約二里」に産せしよりいふ。葫蘆(?)科に屬する一年生の草。莖は細長くして、刺あり。卷鬚によりて、他物に巻きつく。葉は心臟形にして、掌狀に淺裂し、長柄あり、互生。花は單性雌雄同株にして、黄色の合瓣花冠を有し、其實は楕圓形・綠色にして、濃き縦線あり。味甘し。食用として栽培す。あぢうり。あまうり。うばうり。うり。しまうり。ほぞち。ほんてんうり。まくは。みやこうり。

まぐさ(ま) 眞桑瓜甜瓜「名」(植)初、美濃國本巢(?)郡眞桑村「岐阜市の西方約二里」に産せしよりいふ。葫蘆(?)科に屬する一年生の草。莖は細長くして、刺あり。卷鬚によりて、他物に巻きつく。葉は心臟形にして、掌狀に淺裂し、長柄あり、互生。花は單性雌雄同株にして、黄色の合瓣花冠を有し、其實は楕圓形・綠色にして、濃き縦線あり。味甘し。食用として栽培す。あぢうり。あまうり。うばうり。うり。しまうり。ほぞち。ほんてんうり。まくは。みやこうり。

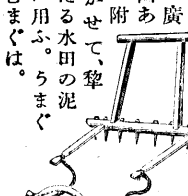
まぐさ(ま) 眞桑瓜甜瓜「名」(植)初、美濃國本巢(?)郡眞桑村「岐阜市の西方約二里」に産せしよりいふ。葫蘆(?)科に屬する一年生の草。莖は細長くして、刺あり。卷鬚によりて、他物に巻きつく。葉は心臟形にして、掌狀に淺裂し、長柄あり、互生。花は單性雌雄同株にして、黄色の合瓣花冠を有し、其實は楕圓形・綠色にして、濃き縦線あり。味甘し。食用として栽培す。あぢうり。あまうり。うばうり。うり。しまうり。ほぞち。ほんてんうり。まくは。みやこうり。

まぐさ(ま) 眞桑瓜甜瓜「名」(植)初、美濃國本巢(?)郡眞桑村「岐阜市の西方約二里」に産せしよりいふ。葫蘆(?)科に屬する一年生の草。莖は細長くして、刺あり。卷鬚によりて、他物に巻きつく。葉は心臟形にして、掌狀に淺裂し、長柄あり、互生。花は單性雌雄同株にして、黄色の合瓣花冠を有し、其實は楕圓形・綠色にして、濃き縦線あり。味甘し。食用として栽培す。あぢうり。あまうり。うばうり。うり。しまうり。ほぞち。ほんてんうり。まくは。みやこうり。

まぐさ(ま) 眞桑瓜甜瓜「名」(植)初、美濃國本巢(?)郡眞桑村「岐阜市の西方約二里」に産せしよりいふ。葫蘆(?)科に屬する一年生の草。莖は細長くして、刺あり。卷鬚によりて、他物に巻きつく。葉は心臟形にして、掌狀に淺裂し、長柄あり、互生。花は單性雌雄同株にして、黄色の合瓣花冠を有し、其實は楕圓形・綠色にして、濃き縦線あり。味甘し。食用として栽培す。あぢうり。あまうり。うばうり。うり。しまうり。ほぞち。ほんてんうり。まくは。みやこうり。

まぐさ(ま) 眞桑瓜甜瓜「名」(植)初、美濃國本巢(?)郡眞桑村「岐阜市の西方約二里」に産せしよりいふ。葫蘆(?)科に屬する一年生の草。莖は細長くして、刺あり。卷鬚によりて、他物に巻きつく。葉は心臟形にして、掌狀に淺裂し、長柄あり、互生。花は單性雌雄同株にして、黄色の合瓣花冠を有し、其實は楕圓形・綠色にして、濃き縦線あり。味甘し。食用として栽培す。あぢうり。あまうり。うばうり。うり。しまうり。ほぞち。ほんてんうり。まくは。みやこうり。

まぐさ(ま) 眞桑瓜甜瓜「名」(植)初、美濃國本巢(?)郡眞桑村「岐阜市の西方約二里」に産せしよりいふ。葫蘆(?)科に屬する一年生の草。莖は細長くして、刺あり。卷鬚によりて、他物に巻きつく。葉は心臟形にして、掌狀に淺裂し、長柄あり、互生。花は單性雌雄同株にして、黄色の合瓣花冠を有し、其實は楕圓形・綠色にして、濃き縦線あり。味甘し。食用として栽培す。あぢうり。あまうり。うばうり。うり。しまうり。ほぞち。ほんてんうり。まくは。みやこうり。



まくはる 間配る [動四他] 間を隔てて

分けておく。分賦す。悦目抄、心をあまきずといふは、譬ひは、題なる句をまきくばらずして、先に譬ひはて、句をなさんとて、いたづらなる私曲の事をよみ具するをいふなり

まへひ 眞杭・眞代 [名] 『ま(眞)は接頭語』(公代)の美稱。『古語』記「初瀬の河の上」(つ瀬)につくひを打ち下(つ瀬)にまくひを打ち

まへふぎやう 幕奉行 [名] 徳川幕府の職制の一。若年寄の支配の下に、陣營に用ふる幕の事を掌りしもの。

まへまぬ 眞熊野 [名] 『地』『ま(眞)は接頭語』(まぬ)三熊野)に同じ。萬葉御食(つ)國志摩の海士(つ)ならし熊野の小舟に乗りて沖へ漕ぐ見ゆ

まへへん 魔軍 [名] 『佛』『惡魔の軍兵。佛道を妨ぐる一切の惡事の譬。盛衰記「前善佛神、可三降伏魔軍」

まへも 莫牟・莫目 [名] 『朝鮮語なるべし』古、高麗(つ)樂・百濟(つ)樂に用ひし、一種の管樂器。但し早く逸亡して傳らざるより、その形状・調律等も、知るに由なし。和名莫牟、本朝格云、莫目師一人。牟或作目、俗云三萬久毛」

まへもし 莫牟師・莫目師 [名] 高麗(つ)樂師及び百濟(つ)樂師の一。莫目生を教ふる事を掌りしもの。

まへもせし 莫牟生・莫目生 [名] 古の雅樂寮の職員の一。莫目を學習せしもの。

まへや 幕屋 [名] 『幕を張りめぐらしてある家。』能樂などの、幕を張りたるがくや。

まへゆ 幕湯 [名] 温泉などにて、貴人のために、みだりなる者の混浴を防がんとて、特に、湯の一部を幕にて隔て遮りたる所。浮世風呂、おと承知の幕湯に入る趣向有馬(つ)の温泉(つ)は知らず、三寸周圍(つ)の胸の中(つ)

まへへら 枕 [名] 『纏座(つ)の約にて、物を纏きて、頭をすする座(つ)とするよりいふなるべしといふ』寝ぬる時頭を承

け支ふる具。箱枕・括(つ)枕入子(つ)枕などなり。又、古代(つ)は、草枕・藁(つ)枕(つ)枕又は菖蒲(つ)の枕などの名もあり、それらの葉を束ねても用ひたりしたる。女(つ)の、男と同衾すること。

一代女(つ)もしくも慾に引かれ、假なる枕に從ひその諸分(つ)とて、金子二歩に身を切賣(つ)目寝て居る時の頭部、又その附近。まくら。まくらもと。古今、枕よりあとより戀のせめ來ればせん方なみぞ床中にをる。『ま(ま)らうし(枕草紙)』

の略。『古語』枕「宮の御前に、内の大臣(つ)の奉りたまへりし御草子を、これに何を書かましたまへりし御前には、史記といふ文を書かせたまへるなどのたまはせしを、枕にこそはしはべらめと申ししかば、さば得よとて、賜はせたりしを。『枕木』」

『枕木』」物事のよりどころ。たね。根據。『前置の言葉。まくらこ。たね。八笑人「前置の枕ばかり長くて、へんてつもない事ばかり申します」

枕上(つ)からず [句] 重病にて、頭を擡ぐる事も出来ぬ程なる形容。傾城反瀧香「荷城様、身うけの晩から、頭痛するとして、引込んで、それから枕上らうす」

枕浮く [句] 寝ながら甚しく泣く形容。源氏「涙落つとも覺えぬに、枕浮くばかりになりけり」

枕片(つ)去る [句] 夫の旅行・外泊して不在なる夜、枕を常のところに据えて、片寄りて寝ぬ。古代の風習なり。かたし(つ)片敷く(つ)参照。萬葉いかにばかり思ひけめかもしきたへの枕片去る夢に見えこし」

枕と枕(つ)く [句] 枕として枕す。枕枕(つ)く。まくらく。『古語』萬葉沖つ浪來寄るありそをしきたへの枕と巻きてなせる君か」

枕に(つ)く [句] 眠るために寝ね、又、病の床に臥す。和合人「さあ寝ようねうちと、是れも同じく枕につく」

枕に直る [句] 女、男の體を得て、同衾す。武家義勇物語、近くは召されたながら、

御枕に直らぬ事を恨み「枕に寝(つ)く [句] 枕として寝ぬ。夫木「大とものたかしの濱の松が根を枕にぬれか家ししのばゆ」

枕の御伽(つ) [句] よさぎ(夜伽)に同じ。天の鶴鳥、枕のお伽が御用ならば、振袖なりと、詰(つ)なりと」

枕の契(つ) [句] 男女、枕をかはずこと。遊京物語、夜(つ)にかはする枕の契は、つひのよすがが定めん男もなし」

枕の塵 [句] 『續後拾遺集』に「床は海枕は山となりぬべし涙も塵も積る怨に」となり」同衾せぬために枕に積る塵。枕の塵を拂ふ [句] 枕の伽をなす。枕席に侍す。

枕の波 [句] 枕もとまで寄せ來るやうに近く聞ゆる波。夫木、秋風を枕の波に聞添へてさぞな寝覺をすまの中山」

枕の外(つ) [句] 知る人も無し [句] 『新勅撰集』に「わが戀は涙を袖にせきとめて枕のほか知る人も無し」とあるに本づく「ままたらぬ戀をひそかに歎く形容。

枕の夢 [句] 『枕頭に見ゆる夢。ゆめ。夫木、山寺の明けゆく鐘に打添へて枕の夢を洗ふ瀧つ瀬』」男女の同衾すること。若風、この若衆を慕原といへるは、一夜の情代銀(つ)三枚あげし替言葉なり。秤目こまかなる京の人が、枕の夢に百二十九匁かけしや」

枕(つ) [句] 獨身の形容。五人女「されども、情(つ)の道を辨へず、一生枕一つにて、あなら夜を明しぬ」

枕も浮く [句] 寝ながら甚しく泣く形容。源氏「かき暮し思ひ亂れて、枕も浮きぬばかり、人やりならず流し添へつつ」

枕を扇(つ)ぐ [句] 『東觀漢記』に「黃香年七歲、事親孝、暑月扇枕、寒則身温」

枕席(つ)とあり [句] 支那漢の黃香(二十四孝の一人)が、年少くして、よく親に事へ、夏は枕頭に侍して扇きたる故事。枕を押つ附ける [句] 「枕を附ける」を

強めていふ語。和合人「彼奴(つ)も、此奴(つ)も、枕をおつ附けると、すぐに大人しくなつたなあ」

枕を重ねぬ [句] 男女、度度同衾す。一代男「晝夜共に、その薬を吞みては、飽かず枕を重ねはべる」

枕を傾く [句] 枕につく。大和野その夜は、椎柴垣の傾(つ)あらはなる山賤(つ)の庵に御枕を傾けさせたまひて

枕を交(つ)す [句] 枕を並ぶに同じ。拾遺(つ)からば人に語らんしきたへの枕かはして一夜寝にきと」

枕を砕く [句] 「枕を割る」に同じ。老子「子國字解」その貨、如何して得べきと、枕をくだきて分別する時は」

枕を定む [句] 『寝ぬる時、枕を蒲團に据う。衽席を定む。古今宵宵に枕定めん方もなし、いかに寝し夜か夢に見えけん』」男女、又は若衆と同衾して、契を固む。五人女「この浮を忘れて、思のままに枕定めて語らんもの」と歎けば」

枕を歎(つ)ぶ [句] 『白樂天の香爐茶下新卜山居』といふ詩に「遺愛寺鐘歎枕聽、香爐茶雪撥、籬看」とあり」寝たる人、枕を立つるやうにし、頭を擡ぐ。源氏「ひとり目をさまして、枕をそばたてて、四方(つ)の嵐を聞きたまふに」

枕を高くす [句] 『無楚韓患、即大王高枕而臥、國必無憂』とあり」安心して寝ぬ。安眠す。安心して暮す。

枕を附く [句] 「枕を頭に接せしむる義」寢床に横たはる。

枕を並ぶ [句] 男女同衾す。枕をかはず。増鳥もるべし昔なましをほととぎす枕並べし昔なましを

枕を始む [句] 男女、始めて同衾す。一代男「是非、今宵は、枕を始め」

枕を結ぶ [句] 草を、枕とせんがために結ぶ。野宿をなす。枕を結(つ)ぶ。新古今「行く末は今幾よとかいはしるの岡の萱根に枕結ばん」

枕の巻

枕の巻

枕の巻

枕の巻

まぐり

まぐりば 捲葉 [名] 風の吹きまくる葉。萬葉露つむ池の蓮のまぐり葉に衣の玉を思ひやるかな

まぐりやき 捲焼 [名] 鯛の切身に、鹽をかけて焼きたる食品。

まぐり 眩る [動下二自] 目くるめく。目くらむ。名義抄 眩、マクレ、メメクル、メクル、クルベク

まぐる 捲る [動四他] 上の方へと巻く。まきあぐ。かきあぐ。「袖をまくる」

まぐる 捲る [動下二自] 上の方へ(剣)を。離れてあがる。「二代男」緋縮緬も、裾一尺あまりまくれて

まぐる 捲る [名] まぐる(る)に同じ。

まぐれ 眩 [名] まぐるること。目のくらむこと。兼卷集 いにしへを戀ふる心にまぐれし君にあひては恐はるるかな

まぐれ 紛 [名] まぐるること。まぎれ。まぐれあたり 紛當 紛中 [名] 偶然ぶつかり。藤「天然礫」のまぐれあたり。偶中。撰河狂歌集「ただ一夜またとも逢はぬ我が中はまぐれあたりのへたのうらなひ」

まぐれ 眩入る [動四自] まぐる(眩る)を強めていふ語。字通「頭を荒う打ちて、まぐれ入りてふせりけり」

まぐれこむ 紛込む [動四自] 次條に同(紛込む)に同じ。

まぐれざいばひ 紛幸 [名] こぼれざいばひ幸へら。眞黒 [名] 眞に黒きこと。全く黒きこと。眞黒 [名] 黒きこと。まぐろ。字通「御烏帽子の、まぐろにて」

まぐろ 鮪・金鎗魚 [名] 「勅」硬鱗類に屬する魚。體長大餘に及ぶ。形、鯉に似て、遙かに肥大し、頭部は殊に大きく、嘴尖

まぐり

り、鼻長く、口は頷下にあり。鱗は側線と胸部とのもの外は、細小にして、皮下に隠る。脊鰭は二基あり、胸、腹鰭共に小さく、又、後背鰭及び臀鰭の後に、八箇乃至十箇の黄色の小鱗並列せり。背部は着黑色を呈し、腹部は銀白色を帯びて、雲母の如く、且つ黄色の斑黒を有す。海洋に群遊して、春より秋にかけて北向し、冬季に南下して、暖流に向ふ。太平洋に面せる東海、東北諸國に多し。肉赤く食用とし、また節にも製す。種類に、旗魚(旗)黄肌(旗)鮪、仙臺鮪等あり。しび。又その小きを、めじと呼ぶ。

まぐろ(う)ちもつ (英 Microcosmus) [名] 「哲」だらちちめ 眞黒棧留 [名] 純黑色なる棧留(う)ちもつ

まぐろ(う)ちもつ 眞黒棧留 [名] 純黑色なる棧留(う)ちもつ

まぐろ(う)ちもつ 眞黒棧留 [名] 純黑色なる棧留(う)ちもつ

まぐろ(う)ちもつ 眞黒棧留 [名] 純黑色なる棧留(う)ちもつ

まぐろ(う)ちもつ 眞黒棧留 [名] 純黑色なる棧留(う)ちもつ

まぐろ(う)ちもつ 眞黒棧留 [名] 純黑色なる棧留(う)ちもつ

まぐろ(う)ちもつ 眞黒棧留 [名] 純黑色なる棧留(う)ちもつ

まぐろ(う)ちもつ 眞黒棧留 [名] 純黑色なる棧留(う)ちもつ

まぐろ(う)ちもつ 眞黒棧留 [名] 純黑色なる棧留(う)ちもつ

まぐろ(う)ちもつ 眞黒棧留 [名] 純黑色なる棧留(う)ちもつ

まぐろ(う)ちもつ 眞黒棧留 [名] 純黑色なる棧留(う)ちもつ

まぐろ(う)ちもつ 眞黒棧留 [名] 純黑色なる棧留(う)ちもつ

まぐろ(う)ちもつ 眞黒棧留 [名] 純黑色なる棧留(う)ちもつ

まげ

まげ 負 [名] 負けること。敗北(勝に對して) 徒然「博打の負きはまりて」 價を低減すること

まげ 管 [名] 『目氣の義』一種の眼病。そこひ。「古語」 字鏡、管、目生、癩也、麻毛、同「眩、麻介。又、目暗」

まげ 眞木 [名] まき(眞木)の轉訛。「東國の古の方言」

まげ 曲 [名] まぐること、又まげたる部分。「まげもの(曲物)の略」 同。まげ 鬚 [名] まげ(曲)の義、わけ鬚に

まげ いざ 負軍 [名] 戦に負けること 敗軍(勝軍に對して) 盛衰記「平家、負軍になりければ」

まげ(う)ちもつ 摩醯首羅(梵 Mahoratti) [名] 「佛」だ(う)ちもつ(大自在天)に同じ。まげ(う)ちもつ 摩醯首羅天 [名] 「佛」前條に同じ。

まげ(う)ちもつ 摩醯首羅天 [名] 「佛」前條に同じ。

まげ(う)ちもつ 摩醯首羅天 [名] 「佛」前條に同じ。

まげ(う)ちもつ 摩醯首羅天 [名] 「佛」前條に同じ。

まげ(う)ちもつ 摩醯首羅天 [名] 「佛」前條に同じ。

まげ(う)ちもつ 摩醯首羅天 [名] 「佛」前條に同じ。

まげ(う)ちもつ 摩醯首羅天 [名] 「佛」前條に同じ。

まげ(う)ちもつ 摩醯首羅天 [名] 「佛」前條に同じ。

まげ(う)ちもつ 摩醯首羅天 [名] 「佛」前條に同じ。

まげ

まげ がた 鬚型 [名] 婦人が鬚を結ぶ時、その中に入れて用ふる、張子(か)の具。島田・丸鬚など、各、型あり。まげ(か)の具。まげ(か)ち 負勝 [名] 負けること、勝つこと。かちまげ。しようぶ。勝敗。

まげ き 曲木 [名] 細き木材を、種種の器具に製造するために撓め曲ぐること、又その曲げたる木材。

まげ きん 負菊 [名] 徳川時代の菊合(き)に負けたる菊。一茎、負菊をひとり見直すたべかなる。

まげ きん 負菊 [名] 徳川時代の菊合(き)に負けたる菊。一茎、負菊をひとり見直すたべかなる。

まげ きん 負菊 [名] 徳川時代の菊合(き)に負けたる菊。一茎、負菊をひとり見直すたべかなる。

まげ きん 負菊 [名] 徳川時代の菊合(き)に負けたる菊。一茎、負菊をひとり見直すたべかなる。

まげ きん 負菊 [名] 徳川時代の菊合(き)に負けたる菊。一茎、負菊をひとり見直すたべかなる。

まげ きん 負菊 [名] 徳川時代の菊合(き)に負けたる菊。一茎、負菊をひとり見直すたべかなる。

まげ きん 負菊 [名] 徳川時代の菊合(き)に負けたる菊。一茎、負菊をひとり見直すたべかなる。

まげ きん 負菊 [名] 徳川時代の菊合(き)に負けたる菊。一茎、負菊をひとり見直すたべかなる。

まげ きん 負菊 [名] 徳川時代の菊合(き)に負けたる菊。一茎、負菊をひとり見直すたべかなる。

まげ きん 負菊 [名] 徳川時代の菊合(き)に負けたる菊。一茎、負菊をひとり見直すたべかなる。

まげ きん 負菊 [名] 徳川時代の菊合(き)に負けたる菊。一茎、負菊をひとり見直すたべかなる。

まげ きん 負菊 [名] 徳川時代の菊合(き)に負けたる菊。一茎、負菊をひとり見直すたべかなる。

まごころ

まごころやくし 孫杓子【名】越前國南條郡湯尾(ゆい)峠の茶屋にて、疱瘡の呪に
なるとて出だす杓子。【植】形、前項
の杓子に似たるよりいふなるべし。れい
し(靈芝)に同じ。「みたる小き杓」
まごせん 孫栓【名】栓の中央に差し込
まごせん 孫栓【名】栓の中央に差し込
まごせん 孫栓【名】栓の中央に差し込
まごせん 孫栓【名】栓の中央に差し込

まごたらうむむ 孫太郎蟲【名】「動」蛇
蛤蝓(かき)の幼蟲。長さ約一寸五分、紡錘
狀をなし、三對の胸肢と、尾毛とを有し
大頭は大形にして、鎌狀をなし、成蟲と
同じく、河中に棲みて、小魚・蟲類などを
捕食す。その乾製せるものは、串に貫き
て賣り、古來、小兒の疳の藥とす。磐城國
刈田(か)郡齋川(か)村の産、著名なり。
まごち 眞東風【名】眞東(か)より吹き
來るの風。無葉まごち吹く花のあたりの
木の下は時ぞともなき雪ぞ降りける。
「うろつく」
まごぢやん 孫嫡子【名】「ぢやん」を
(嫡孫)に同じ。【ぢやん】を「うろつく」
見よ。

まごころ 眞如(に)の月「に」同じ。
眞の月【句】「眞如(に)の月」に同じ。
眞の道【句】「眞實の道德。道賢」心だ
まごころの道にかなひば祈らずとて
も神やまもらん。【佛】道をさしてい

まごころの道にかなひば祈らずとて
も神やまもらん。【佛】道をさしてい

まごころ

まごころの道にかなひば祈らずとて
も神やまもらん。【佛】道をさしてい

まごころの道にかなひば祈らずとて
も神やまもらん。【佛】道をさしてい

まごころの道にかなひば祈らずとて
も神やまもらん。【佛】道をさしてい

まごころの道にかなひば祈らずとて
も神やまもらん。【佛】道をさしてい

まごころ

まごころの道にかなひば祈らずとて
も神やまもらん。【佛】道をさしてい

まごころの道にかなひば祈らずとて
も神やまもらん。【佛】道をさしてい

まごころの道にかなひば祈らずとて
も神やまもらん。【佛】道をさしてい

まごころの道にかなひば祈らずとて
も神やまもらん。【佛】道をさしてい

まごころ

まごころの道にかなひば祈らずとて
も神やまもらん。【佛】道をさしてい

まごころの道にかなひば祈らずとて
も神やまもらん。【佛】道をさしてい

まごころの道にかなひば祈らずとて
も神やまもらん。【佛】道をさしてい

まごころの道にかなひば祈らずとて
も神やまもらん。【佛】道をさしてい

まさい 萬歳〔名〕まんざい(萬歳)の轉。「古語」源兵まざい、まざいと、楠葉を取りかへしつゝ祝ひ

まさい 正板・榎板〔名〕正目の板。まさいへ正家〔名〕一人びんごまさい(備後正家)を見よ。

まさいらく 萬歳樂〔名〕まんざいらく(萬歳樂)の轉。草薙まさいらく、聲、ほのかにかき鳴らして

まさか〔名〕現に向ひてある時。さし當りたる時。目のまへ。目下。ただか(直香)参照。「古語」萬葉「梓弓末はし知らず然れどもまさかは君によりにしものを」と同「しらがつく木綿」は花物(花言)こそはいつのまさかも常忘らえず

まさか〔副〕なまか、なまかに考へても、いかにしても。まさか、(下に打消又は反語の語を伴ふ)「まさか、そんな事はあるまい」「まさか、さうも言ひかねて」

まさかの時〔句〕まさか有るまじとは思へども、萬一、さる切迫したる場合となりたらん時。退引(退)ならぬ場合

まさかあかつかちはやひあめの「おしほみみのみ」正哉吾勝速日天之忍穂耳命(名)天照大神の御子。素戔嗚神と御誓約の時、素戔嗚神、大神の左の御髮に纏ひたまへる五百箇御統珠(御珠)を乞ひ取りてさかみに噛みて吹き棄つる氣吹の中にならまさせる神。瓊瓊杵尊の父神。あめのおしほみみのみこと。

まさかひ〔名〕船の櫓床(櫓)の一部。

まさかき 眞榎〔名〕ま(眞)は接頭語。さかき(榎)の美稱。紀(天)の香山(香山)の五百箇眞坂樹(眞坂樹)

まさかきま 眞逆〔名〕ま(眞)は接頭語。さかき(榎)の美稱。紀(天)の香山(香山)の五百箇眞坂樹(眞坂樹)

まさかきま 眞逆〔名〕ま(眞)は接頭語。さかき(榎)の美稱。紀(天)の香山(香山)の五百箇眞坂樹(眞坂樹)

まさかきま 眞逆〔名〕ま(眞)は接頭語。さかき(榎)の美稱。紀(天)の香山(香山)の五百箇眞坂樹(眞坂樹)

まさかきま 眞逆〔名〕ま(眞)は接頭語。さかき(榎)の美稱。紀(天)の香山(香山)の五百箇眞坂樹(眞坂樹)

まさかきま 眞逆〔名〕ま(眞)は接頭語。さかき(榎)の美稱。紀(天)の香山(香山)の五百箇眞坂樹(眞坂樹)

まさかきま 眞逆〔名〕ま(眞)は接頭語。さかき(榎)の美稱。紀(天)の香山(香山)の五百箇眞坂樹(眞坂樹)

まさかど 將門〔名〕(人)たひらまさかど(平將門)を見よ。常磐津節の曲の一。本外題は忍夜戀曲者(忍夜戀曲者)の古御殿に住し、暮の妖術を用ひて、諸人を悩ます由、寂閑に達し、源頼信、勅諭により、家來大宅太郎光國を遣して、これを討たしめんとせしに、瀧夜又は、都島原の遊女如月(如月)となりて現れ、光國をたらさんと見あらはされ、詰め寄る光國の頸を掴み、宙に上らんとして争ふ事を作れるもの。一名、瀧夜叉。

まさかやま 眞鹿山 眞見神

まさかやま 眞鹿山 眞見神

まさかやま 眞鹿山 眞見神

まさかやま 眞鹿山 眞見神

まさかやま 眞鹿山 眞見神

まさかやま 眞鹿山 眞見神

まさかやま 眞鹿山 眞見神

まさかやま 眞鹿山 眞見神

まさかやま 眞鹿山 眞見神

まさかやま 眞鹿山 眞見神

まさかやま 眞鹿山 眞見神

まさかやま 眞鹿山 眞見神

まさかやま 眞鹿山 眞見神

まさかやま 眞鹿山 眞見神

まさかやま 眞鹿山 眞見神

まさかやま 眞鹿山 眞見神

まさかやま 眞鹿山 眞見神

まさかやま 眞鹿山 眞見神

まさかやま 眞鹿山 眞見神

まさかやま 眞鹿山 眞見神

まさかやま 眞鹿山 眞見神

まさかやま 眞鹿山 眞見神

まさかやま 眞鹿山 眞見神

まさかやま 眞鹿山 眞見神

まさかやま 眞鹿山 眞見神

まさかやま 眞鹿山 眞見神

まさかやま 眞鹿山 眞見神

まさかやま 眞鹿山 眞見神

まさかやま 眞鹿山 眞見神

まさかやま 眞鹿山 眞見神

まさかやま 眞鹿山 眞見神

まさかやま 眞鹿山 眞見神

まさかやま 眞鹿山 眞見神

まさかやま 眞鹿山 眞見神

まさかやま 眞鹿山 眞見神

まさかやま 眞鹿山 眞見神

まさかやま 眞鹿山 眞見神

まさかやま 眞鹿山 眞見神

まさかやま 眞鹿山 眞見神

まさかやま 眞鹿山 眞見神

まさかやま 眞鹿山 眞見神

まさかやま 眞鹿山 眞見神

まさかやま 眞鹿山 眞見神

まさかやま 眞鹿山 眞見神



ましをみ坂たばらばまさやかに見む
まさゆめ 正夢 [名] 事實と一致する夢
玉葉余所見之夢想、正夢之條、更無疑事
賦、仰可、信者也

まさよりりや 政頼流 [名] 放鷹法の流
派の一。唐崎大納言政頼を流祖とす
まさり (優) 勝 [名] まさること。たちこゆ
ること。(劣)に對して) 榮養、蜀朝朝が心
には、並(並)はありとも、勝(勝)はあらじと
思ひたる千手(千手)を

まさりおどり 優劣、勝劣 [名] まさるこ
と、おとること。いられつ。
まさりかほ 優顔勝顔 [名] まされりと
思ふ様子。空想あな、まさりがほにこそ
まさりへき 優草、勝草 [名] 植 [名] 寛平
菊合に「すべらぎの萬代までにまさり草
たまひし種を植ふし菊なり」と詠まれし
歌に本づく(き) (菊)の異稱。(古語)

まさりさま 優様、勝様 [名] 優りである
ありさま。源氏、艶にまばゆきさまは、ま
さりさまにぞ見ゆる
まさりみづ増水 [名] 降雨などのため
に、川池などの水量の増すこと、又その
水。てみづ。ましまし。ぞうする。太
「あらすこや井戸も五月のまさり水」
まさりもの 雜物 [名] まじりもの(雜物)に
同じ。

まさる 眞猿 [名] 眞(眞)は接頭語
さる(猿)に同じ。(古語) 獨次、猿。三
たびてふ聲だに聞けばよそ人に物思ひま
さる音をぞ鳴くる
まさる 増る [動] 四自 多くなる。殖(殖)
ゆ。加はる。ます。増加す。

まさる 優る、勝る [動] 四自 『もと前條の
語と同義』比較して、他に越ゆ。すぐる。
ぬけいづ。ます。劣るに對して)
まさる 雜る、交る、混る [動] 四自 まじる
(交る)の轉。

まさる 眞青 [名] 『ま(眞)は接頭語』正
しく青きこと。まささ。さ。發心集
「この人、色まささになりて、恐れたる氣
色なり」

まさるかじき 正岡子規 [名] 「人」俳人。

伊豫國松山の人。名は常規、通稱は升(升)
(升)又は虎之助子規はその號。別に獨治
(獨治)書屋主人竹の里人とも號す。明治
十八年、高等中學校に入り、二十二年、肺
患に罹りしより、子規と號し、大學に國文
學を學び、特に俳句を研究し、二十五年、
大學を退き日本新聞社に入り、蕪村の
句を推稱し、一新機軸を出す。二十八、
從軍記者として滿洲に渡航せしが、半途
に歸朝し、高濱虛子の發行に係る雜誌「ほ
とときす」を編輯とし、俳句の餘力を以
て、和歌の革新に志し、新體詩、小説にも
筆を染め、又、寫生文と稱する文章の體
を創唱す。三十五年歿す。年三十三。世
にその句を日本派、和歌を根岸派(その居
の下谷)根岸なりしに因る)と呼び、
又、辭世の句に絲瓜(瓜)を吟ぜしより、そ
の忌日(十九日)を瓜絲忌と稱す。

まさり増 [名] 増すこと。殖(殖)ゆるこ
と。殖(殖)すこと。増加。増殖。増(増)
と。殖(殖)すること。優。勝。狂言ど
ちばくれ(委)をかぶり寒氣を防いだが
ましてあらう」 『わりまし増割』に同じ。
まさり猿 [名] 眞(眞)に同じ。業式
部、猿の、木の葉の中より、いと多く出
て來れば、ましましなほをち方人の聲か
はせ我越しわぶるたこのよび坂」
まさり麻紙 [名] 麻の纖維にて製したる
紙。延喜式、麻紙四張」

まさり汝 [代] 『いまし汝、いまし汝』の略
同等もしくは、その以下の者に對する第
二人稱。なんぢ。(古語) 萬葉の川に
朝奈洗ふ兒ましまし吾も千代をぞもて
るいで子たばりね」 源氏、ましましが常に見
らんも羨まばりねをまた見せしんや」
まさり(助動) 『事實を假定的に想像する
意。萬葉かねてより君來ましまむと知らま
せば、門にやどにも玉しかましまし』 正統記
「頼朝といふ人もなく、泰時といふ人も無
からましかば、この日本國の人民、いかが
なりなましまし」 『ましまし』の意に用ふる
ことあり。萬葉、猿潭の池もつらしな我
妹子(女)が玉葉かづかば水ぞひなましまし」
千載、櫻花見るにも悲しなかなかに今年

まさりかぶ 増株 [名] 「商」株式會社が、そ
の資本を増加せんがために、更に募集す
る株式。

まさりかめり [助動] 『まじくあるめりの約
』まじかるめりの音便。『まじかめりの略
』源氏、見奉りまめて戀ひきこゆるにぞ、命
もえ堪ふまじかめる」
まさりき 眞鳴 [名] 「動」たしぎ(田嶋)に同
じ。

まさりきん 増金 [名] ぞうきん(増金)に同
じ。きり 間仕切 [名] 部屋の仕切。
まさりく [名] 鏡 [名] まじりに同じ。野良の玉子
「ましくしと、尻目に見てゐるながら」
まさりく [名] 鏡 [名] まじりに同じ。野良の玉子
「ましくしと、尻目に見てゐるながら」

まさりく [名] 鏡 [名] まじりに同じ。野良の玉子
「ましくしと、尻目に見てゐるながら」

まさりく [名] 鏡 [名] まじりに同じ。野良の玉子
「ましくしと、尻目に見てゐるながら」

まさりく [名] 鏡 [名] まじりに同じ。野良の玉子
「ましくしと、尻目に見てゐるながら」

まさりく [名] 鏡 [名] まじりに同じ。野良の玉子
「ましくしと、尻目に見てゐるながら」

まさりく [名] 鏡 [名] まじりに同じ。野良の玉子
「ましくしと、尻目に見てゐるながら」

まさりく [名] 鏡 [名] まじりに同じ。野良の玉子
「ましくしと、尻目に見てゐるながら」

まさりく [名] 鏡 [名] まじりに同じ。野良の玉子
「ましくしと、尻目に見てゐるながら」

まさりく [名] 鏡 [名] まじりに同じ。野良の玉子
「ましくしと、尻目に見てゐるながら」

まさりけ 増毛 [名] 「地」天鹽國六郡の
一。増毛支廳の管轄に屬す。天鹽國
増毛郡にある町。本道西海岸中、小樽に
次ぐ要地。札幌(札幌)より二十九里、留萌
(留萌)より二里。

まさりて 猿子 [名] 「動」さる(猿)に同
じ。燕雀類に屬する鳥。大さ雀ほど
にして、銀山(銀山)猿子、犬猿子、紅(紅)猿
子、猿子、小笠原猿子などの種類あり
羽色も種類によりて異なるれども、雄は一
部紅色を呈し、銀山猿子のは、全部紅色な
り。紅猿子は、我國最も普通の種にことり。
他は多く冬季に入り渡來す。まじこどり。
夫、まじこるるのくつち原うち拂ひみ
きはかたして昔戀しも」

まさりて 増子 [名] 「地」下野國芳賀郡
にある町。眞岡(眞岡)町の東北二里半。戰
國時代益子氏の居邑。子(子)に同じ。
まさりて 猿子鳥 [名] 「動」まじ(猿
子)に同じ。
まさりて 益子焼 [名] 下野國芳賀郡
多益子町及びその附近より産する陶器
多く土、土瓶、德利水瓶の類にて、嘉
永六年、大塚啓三郎といふ者、磐城國相馬
より職工を招きて創製し、藩主の保護を
受けたり。

まさりて 蠱る [動] 四自 蠱事にあた
る。呪はれて、災に罹る。「古語」 祝詞、
「天(天)のまがつびと云ふ神の言はむ
悪事(悪事)に相まじこり、相口會(相口會)へ賜
ふ事無く」

まさりて 蠱る [動] 四自 前條に同じ。
「古語」 祝詞、
「天(天)のまがつびと云ふ神の言はむ
悪事(悪事)に相まじこり、相口會(相口會)へ賜
ふ事無く」

まさりて 蠱る [動] 四自 前條に同じ。
「古語」 祝詞、
「天(天)のまがつびと云ふ神の言はむ
悪事(悪事)に相まじこり、相口會(相口會)へ賜
ふ事無く」

まさりて 蠱る [動] 四自 前條に同じ。
「古語」 祝詞、
「天(天)のまがつびと云ふ神の言はむ
悪事(悪事)に相まじこり、相口會(相口會)へ賜
ふ事無く」

まさりて 蠱る [動] 四自 前條に同じ。
「古語」 祝詞、
「天(天)のまがつびと云ふ神の言はむ
悪事(悪事)に相まじこり、相口會(相口會)へ賜
ふ事無く」

まさりて 蠱る [動] 四自 前條に同じ。
「古語」 祝詞、
「天(天)のまがつびと云ふ神の言はむ
悪事(悪事)に相まじこり、相口會(相口會)へ賜
ふ事無く」

まさりて 蠱る [動] 四自 前條に同じ。
「古語」 祝詞、
「天(天)のまがつびと云ふ神の言はむ
悪事(悪事)に相まじこり、相口會(相口會)へ賜
ふ事無く」

まさりて 蠱る [動] 四自 前條に同じ。
「古語」 祝詞、
「天(天)のまがつびと云ふ神の言はむ
悪事(悪事)に相まじこり、相口會(相口會)へ賜
ふ事無く」

まさりすけがら 増助郷 [名] 京都よりの
名代、日光門主の京都通行、堂上方大勢の
通行などの如き大通行ありて、助郷の人
馬のみにては不足なる場合に、臨時に觸
書を出して、補助せし郷村。「まじこり」
まさりずり 増摺 [名] おひずり(追摺)に同
じ。

まさりすけがら 増助郷 [名] 京都よりの
名代、日光門主の京都通行、堂上方大勢の
通行などの如き大通行ありて、助郷の人
馬のみにては不足なる場合に、臨時に觸
書を出して、補助せし郷村。「まじこり」
まさりずり 増摺 [名] おひずり(追摺)に同
じ。

まさりすけがら 増助郷 [名] 京都よりの
名代、日光門主の京都通行、堂上方大勢の
通行などの如き大通行ありて、助郷の人
馬のみにては不足なる場合に、臨時に觸
書を出して、補助せし郷村。「まじこり」
まさりずり 増摺 [名] おひずり(追摺)に同
じ。

まさりすけがら 増助郷 [名] 京都よりの
名代、日光門主の京都通行、堂上方大勢の
通行などの如き大通行ありて、助郷の人
馬のみにては不足なる場合に、臨時に觸
書を出して、補助せし郷村。「まじこり」
まさりずり 増摺 [名] おひずり(追摺)に同
じ。

まさりすけがら 増助郷 [名] 京都よりの
名代、日光門主の京都通行、堂上方大勢の
通行などの如き大通行ありて、助郷の人
馬のみにては不足なる場合に、臨時に觸
書を出して、補助せし郷村。「まじこり」
まさりずり 増摺 [名] おひずり(追摺)に同
じ。

まさりすけがら 増助郷 [名] 京都よりの
名代、日光門主の京都通行、堂上方大勢の
通行などの如き大通行ありて、助郷の人
馬のみにては不足なる場合に、臨時に觸
書を出して、補助せし郷村。「まじこり」
まさりずり 増摺 [名] おひずり(追摺)に同
じ。

まさりすけがら 増助郷 [名] 京都よりの
名代、日光門主の京都通行、堂上方大勢の
通行などの如き大通行ありて、助郷の人
馬のみにては不足なる場合に、臨時に觸
書を出して、補助せし郷村。「まじこり」
まさりずり 増摺 [名] おひずり(追摺)に同
じ。

まさりすけがら 増助郷 [名] 京都よりの
名代、日光門主の京都通行、堂上方大勢の
通行などの如き大通行ありて、助郷の人
馬のみにては不足なる場合に、臨時に觸
書を出して、補助せし郷村。「まじこり」
まさりずり 増摺 [名] おひずり(追摺)に同
じ。

まさりすけがら 増助郷 [名] 京都よりの
名代、日光門主の京都通行、堂上方大勢の
通行などの如き大通行ありて、助郷の人
馬のみにては不足なる場合に、臨時に觸
書を出して、補助せし郷村。「まじこり」
まさりずり 増摺 [名] おひずり(追摺)に同
じ。

まさりすけがら 増助郷 [名] 京都よりの
名代、日光門主の京都通行、堂上方大勢の
通行などの如き大通行ありて、助郷の人
馬のみにては不足なる場合に、臨時に觸
書を出して、補助せし郷村。「まじこり」
まさりずり 増摺 [名] おひずり(追摺)に同
じ。

まさりすけがら 増助郷 [名] 京都よりの
名代、日光門主の京都通行、堂上方大勢の
通行などの如き大通行ありて、助郷の人
馬のみにては不足なる場合に、臨時に觸
書を出して、補助せし郷村。「まじこり」
まさりずり 増摺 [名] おひずり(追摺)に同
じ。

まじはる

まじすの増鍾(名)臺秤(びり)にて、物の重量が、現在の分銅のみにては軽きに失する時、更に増し加ふる分銅。
まじした真下(名)まじつぐの下。丁度した。まじも。まじした。(真上(まじ)に對して)

まじだ益田(名)「地」ますだ(益田)を見まじちぎやう増知行(名)増し興ふる知行。加増の祿。甲陽軍鑑「所領を取りて、その上にて、又、増知行を取り、まじして」況して「副」増しての義「いはんや(況や)に同じ」。

まじごと真鴨(名)「ま(真)は接頭語」〔動じ(に)鴨〕の美稱。「古語」記あめつつ千鳥まじとどなどさけるため
まじなひ呪禁厭(名)まじなふこと、又その術。「る事。まじなひ」

まじなひごと呪事(名)まじなひをすまじなひ呪師(名)まじなひの術を業とする人。呪禁(まじ)の師。
まじなひて呪手(名)まじなひの術に巧なる人。まじなひの物語「天下第一のまじなひ手と呼ばげれば」

まじなふ呪ふ〔動四他〕「蟲」なふにてなふは接尾語「蟲事(まじ)を行ふ。神佛などの力に依りて、禍を免れんとする怪しき術を行ふ」

まじね増値(名)既定の値段の上に増し加へたる値段。追加の値段。
まじは真柴(名)「ま(真)は接頭語」しは(柴)の美稱。千載真柴刈る小野の細道跡たえて深く雪のなりにけるかな
まじはかき真柴垣(名)「ま(真)は接頭語」しは(かき)柴垣の美稱。懸馬(ま)まじ垣

まじはに真敷に〔副〕「ま(真)は接頭語」しは(敷)繰り返して。しばしば。萬葉おふぬ妹が名かたに出でむかも「同宜引のきかづらかけまじはにも得がたき陰をお山や枯らさむ」

まじはり交(名)「まじはること。つきあひ。交際。新可笑詞兎角人の交もせず」

まじはる

男女の交接。適合。
交を斷つて、惡口を出さず(句)「君子は交を絶つて、惡辭を出さず」を見よ。
まじはり交ひ交合(名)互にまじはること。まじはり。交會。

まじはる交る難る〔動四自〕「加はり入りて、一つになる。互に入り亂る。混ざ。まじらふ。まじらふ。まじらふ。三行きちがふ。交又す。三行。接す。三代實失火の穢に相交る人々」四つきあまじらふ。交際す。男女交際す。交合す。妻國、鶴鶴飛び來て、その首尾を動かすを見て、二神、まなびて、まじはる事を得たり」四「數」線と線と、又、線と面と、又、面と面とが截り合ふ。線と線と、又、線と面とのは點をなし、面と面との、直線又は曲線をなす。

まじふ交ふ雜ふ〔動下二他〕「加へ入れて、一つにす。ます。混ざ。三行きちがはす。交又するやうになす。三入り交はす。互に入り亂れしむ」

まじもんじ真十文字(名)「ま(真)は接頭語」正しき十文字。全くの十文字。平寫寄れや、組んで勝負を見せんとて、真十文字に駈け破て

まじほ真鹽(名)苦鹽(まじ)を混合せざる、上等なる食鹽。(差鹽(まじ)に對して)
まじほ真潮(名)「ま(真)は接頭語」しほ(潮)の波路。夫木まじほ汲む庵の濱舟管汚ては波路はれせぬまじほだれの空

「我國太平洋岸の暖流、即ち黒潮(まじ)の本流(逆潮(まじ)に對して)」
まじほい目じほい〔形二〕まほゆ(目映し)を云ふ。「東北の方言」

まじま真島真嶋(名)「地」美作國の舊郡の一。明治三十二年、大庭(まじ)郡と合して、眞庭(まじ)郡となる。美作國眞庭郡にある町。三浦氏の舊藩地。舊稱、勝山。〔地〕明治の初年設置の縣の一。ほつち(北條)參照。

まじま〔貌〕「恥ぢ、欲しがり、又は眠り得ずして、目をしばたたくさま。まじりまじり。まじくし。まじくら。ばちくり。藤原毛、理窟詰に遭つて、大閉口となり、まじまじすれば」四「恥ぢず平氣なるさま。まじまじすやあ。梅野、その美ししやつ(まじ)て、眞面眞面(まじ)と虚言(まじ)をぬかすか」

まじます坐す〔句〕「ますは助動詞」ます(坐す)を一層敬ひていふ語。おはします。紀「有徳、イキホヒマシマス」

まじまる(英 Marshmallow)〔名〕西洋菓子の一。白砂糖と澱粉糖とを溶したるものに、寒天と卵の白味とを交ぜ、オレンジ等の香料を加へ、固まりたる時、米粉をまぶして、適度の大きに切りたるもの。

まじみつ増水(名)まさりみつ(増水)に同じ。

まじみつ真清水(名)「ま(真)は接頭語」しみつ(清水)の美稱。源氏「なれこそは岩もあるじ見し人のゆくへは知るや宿の真清水」

まじん麻疹、麻疹(名)はしか(麻疹)にまじん摩針(名)紡績用及び織物起毛用の針の尖端を、相互に整へ、その形状をして、一は織維を平互に開き、他は織物の面より、織維の端を引き出すに適せしむるために施す研磨の工程。

まじん魔神(名)吾人に災を興ふる神まのかみ。邪神。惡魔。
まじん磨針機(名)磨針に使用する機械。様式、種種あり。
まじめ眞面目(名)「まじはまじまじとする義」眞心のこもりである顔色態度。抑れ隠れなどせぬ様子。本氣。和合人「茶見さん、なんでござりますえ、寔におまじめで、オホホ」四「精神のこもりであること。本氣にして、虚飾なきこと。しんめんも。本氣に」

まじも

まじも眞下(名)ました(眞下)に同じ。業經記「木のうつるより出でて、まじもに下(まじ)る」

まじもの靈物(名)詛ひまじなふこと、又その法術。「古語」祝詞大蔵「靈物せる罪」

まじやう眞正(名)まこと。まじめ。
まじやう魔障(名)「佛」魔は梵 Mara (魔羅)の略、障はその譯語。梵漢雙舉の語「惡魔の障、盛衰計たとひ佛法渡りたまふとも、魔障強くは、濁世(まじ)の今、ひろまり難し」

まじやうちき眞正直(名)「ま(真)は接頭語」まことに正直なること。少しも偽のなきこと。まじやうちき。直實。
まじやうめん眞正面(名)「ま(真)は接頭語」まことの正面。まむかひ。まおもて。まじやうめん。

まじやうもの眞情者(名)偽る所なき人。正直者。重情者「さもしい氣は微塵もなく、まじやう者の正直者」。「の語」

まじやく間尺(名)作事の寸法。「工匠間尺に合ふ(句)損益つぐのふ。割(まじ)に合ふ。まじよくに合ふ。(打消又は反語の形にて用ふ)浮世風呂あんなやさしもの事をしてゐる。それで、間尺に合ふものかねえ」

まじゆ〔動下二他〕まじふ(交ふ)の訛。
まじゆつ魔術(名)神變不思議なる術。異術。妖術。魔法。

まじゆつけう魔術教(名)しやまんけう(シヤマン教)に同じ。「職とする人」

まじゆつ魔術(名)「魔術」を行ふ處。又、凶事の展ば發する處。運歩色葉集「魔所 マシヨ」

まじよらう眞松露(名)「植」「ま(真)は接頭語」しよらう(松露)に同じ。
まじよく間尺(名)まじやく(間尺)に合ふことを見よ。

まじめもの眞面目者(名)まじめなる人。浮世風呂亭主は、あんな老實者(まじ)ないいよ」

まじも

まじも眞下(名)ました(眞下)に同じ。業經記「木のうつるより出でて、まじもに下(まじ)る」

まじもの靈物(名)詛ひまじなふこと、又その法術。「古語」祝詞大蔵「靈物せる罪」

まじやう眞正(名)まこと。まじめ。
まじやう魔障(名)「佛」魔は梵 Mara (魔羅)の略、障はその譯語。梵漢雙舉の語「惡魔の障、盛衰計たとひ佛法渡りたまふとも、魔障強くは、濁世(まじ)の今、ひろまり難し」

まじやうちき眞正直(名)「ま(真)は接頭語」まことに正直なること。少しも偽のなきこと。まじやうちき。直實。
まじやうめん眞正面(名)「ま(真)は接頭語」まことの正面。まむかひ。まおもて。まじやうめん。

まじやうもの眞情者(名)偽る所なき人。正直者。重情者「さもしい氣は微塵もなく、まじやう者の正直者」。「の語」

まじやく間尺(名)作事の寸法。「工匠間尺に合ふ(句)損益つぐのふ。割(まじ)に合ふ。まじよくに合ふ。(打消又は反語の形にて用ふ)浮世風呂あんなやさしもの事をしてゐる。それで、間尺に合ふものかねえ」

まじゆ〔動下二他〕まじふ(交ふ)の訛。
まじゆつ魔術(名)神變不思議なる術。異術。妖術。魔法。

まじゆつけう魔術教(名)しやまんけう(シヤマン教)に同じ。「職とする人」

まじゆつ魔術(名)「魔術」を行ふ處。又、凶事の展ば發する處。運歩色葉集「魔所 マシヨ」

まじよらう眞松露(名)「植」「ま(真)は接頭語」しよらう(松露)に同じ。
まじよく間尺(名)まじやく(間尺)に合ふことを見よ。

まじめもの眞面目者(名)まじめなる人。浮世風呂亭主は、あんな老實者(まじ)ないいよ」

まじりか〔英 Mixture〕「名」西班牙の Malloca (Majorca) 島より伊太利に輸入せる陶器に依りて製作せしものなるよりいふ。西曆第十五六世紀の頃、伊太利の各地より製出せる古陶器、又その製法に倣ひて、歐洲諸國にて製作せる陶器の總稱。多くは、有色の陶質素地に、白色不透明の錫釉を施し、なほ釋畫を裝飾したるもの。

まじり猿〔名〕「動」『まざる(眞猿)の轉か。尙異説あり』さる(猿)に同じ。古今「わびしらにまじらな泣きそ足引の山のかひあるけふにやはあらぬ」

まじりが眞白髪〔名〕『ま(眞)は接頭語』まことの白髪。しらが。萬葉わが墨髪の眞白髪にならむきはみ」

まじら眞精〔名〕米をよく精(ぎ)ること、又その米。精白。上白米。和名聚米、萬之良介乃典禰。精細米也」

まじらひ交〔名〕まじらふこと。まじはり。つきあひ。交際。源兵はかばかしくうしろみ思ふ人なままじらひは、なかなかなるべき事と思つたま(ながら)」

まじらふ眞白班〔名〕『ま(眞)は接頭語』しら(白班)の美稱。其枕つくつま屋の内にとぐらゆひすゑぞ吾(こ)が飼ふましらふの鷹(たか)に(鷹)の異稱。

まじらふ交〔動四自〕『ま(交)と同じ語根。らふは動詞の語尾』『ま(交)とまじらふ。まじはる。混ず。』分ける。入りこむ。まじる。まじらふ。保嬰安妻「もみち葉のふりしく山にまじらひてみのしろならぬ色か著つらん」『つつきあふ。まじる。まじはる。まじらふ。交際す。源兵は今なまじらひそと制したまふをも聞かずして」

まじり交雜〔名〕『ま(交)とまじらふこと、又まじりたる物。水邊(みづべ)に。』粥の、水分極めて多くして、重湯(かさ)に近きもの。病後の人などに興(き)ふ。多くは、接頭語(つ)を添(そ)へていふ。『ま(交)ちゆう(交)せ(中店)に同じ。』(大籠(おほ)籠)小格子(こ)に對して)』

まじり目頭此〔名〕めじり(目尻)の轉(目頭(めがね)に對して)源兵いと腹惡しげにまじり引上げたり」

まじりけ雜氣〔名〕まじりである氣味。まじりけ雜毛〔名〕異色の毛のまじること、又その毛。ぶち。

まじりした目尻下〔名〕まじりの下。目尻下の旋毛(まゆげ)の(句)も(ま)る(目圓)に同じ。』

まじりだね雜種〔名〕さつしゆ(雜種)まじりまじり〔名〕まじりに同じ。和合人「この様なるさしかかりたる思附事などには、ただまじりまじりして、受答も思附も、少しも出来ぬなり」

まじりもの雜物〔名〕二種以上の物のまじりである物。他の物の中にまじりである物。まじりもの。交雜物。源兵まじりものなく、きらきらしめめる中に、大君だつちにて、かたくななりとにや」

まじり交雜する錯る〔動四自〕二種以上の物事入り混れて、一つになる。まじらふ。古今、いざ今日は春の山べにまじりなん暮れなば無げの花の陰かは」

まじり眞白〔名〕『ま(眞)は接頭語』まことに眞白。まじらふ。純白。萬葉「やかた尾のまじらふの鷹を宿にすゑかき撫て見つつ向はまくよしも」

まじり交雜する〔動四自〕『目(ま)退(ま)の義』めばたきをなす。またたく。字體「暈萬志呂久、又、萬太太久」

まじり交雜する〔動四自〕まじらふ(交)に同じ。其なり惡しく、物の色よろしうてまじらはんは、いふかひなきものなり」

まじり交雜する〔動四自〕まじらふ(交)に同じ。水邊(みづべ)まじらふ(交)をし」

まじり交雜する〔動四自〕まじらふ(交)に同じ。木升の合字。『液体又は細粒をなせる物を盛りて、その量を測るに用ふる器。我國の、桶のごとき圓柱形なるものあり。容量により、一斗升・一升併・五合併・一合併など呼ぶ。おほます(大併)参照。』『まじり(交)』一併併に同じ。和名、升、麻須、十合器也。』併併に盛りたるだけの量。一併併(交)に二ますは入るや。』

まじり交雜する〔動四自〕まじらふ(交)に同じ。『陰の併、併に月、三併(交)併に(重)併、併に月、三併(交)併に(重)併類あり。』

まじり交雜する〔動四自〕まじらふ(交)に同じ。『陰の併、併に月、三併(交)併に(重)併類あり。』

まじり交雜する〔動四自〕まじらふ(交)に同じ。『陰の併、併に月、三併(交)併に(重)併類あり。』

まじり交雜する〔動四自〕まじらふ(交)に同じ。『陰の併、併に月、三併(交)併に(重)併類あり。』

まじり交雜する〔動四自〕まじらふ(交)に同じ。『陰の併、併に月、三併(交)併に(重)併類あり。』

まじり交雜する〔動四自〕まじらふ(交)に同じ。『陰の併、併に月、三併(交)併に(重)併類あり。』

まじり交雜する〔動四自〕まじらふ(交)に同じ。『陰の併、併に月、三併(交)併に(重)併類あり。』

まじり交雜する〔動四自〕まじらふ(交)に同じ。『陰の併、併に月、三併(交)併に(重)併類あり。』

まじり交雜する〔動四自〕まじらふ(交)に同じ。『陰の併、併に月、三併(交)併に(重)併類あり。』

まじり交雜する〔動四自〕まじらふ(交)に同じ。『陰の併、併に月、三併(交)併に(重)併類あり。』

まじり交雜する〔動四自〕まじらふ(交)に同じ。『陰の併、併に月、三併(交)併に(重)併類あり。』

まじり交雜する〔動四自〕まじらふ(交)に同じ。『陰の併、併に月、三併(交)併に(重)併類あり。』

まじり交雜する〔動四自〕まじらふ(交)に同じ。『陰の併、併に月、三併(交)併に(重)併類あり。』

まじり交雜する〔動四自〕まじらふ(交)に同じ。『陰の併、併に月、三併(交)併に(重)併類あり。』

まじり交雜する〔動四自〕まじらふ(交)に同じ。『陰の併、併に月、三併(交)併に(重)併類あり。』

まじり交雜する〔動四自〕まじらふ(交)に同じ。『陰の併、併に月、三併(交)併に(重)併類あり。』

まじり交雜する〔動四自〕まじらふ(交)に同じ。『陰の併、併に月、三併(交)併に(重)併類あり。』

まじり交雜する〔動四自〕まじらふ(交)に同じ。『陰の併、併に月、三併(交)併に(重)併類あり。』

まじり交雜する〔動四自〕まじらふ(交)に同じ。『陰の併、併に月、三併(交)併に(重)併類あり。』

まじり交雜する〔動四自〕まじらふ(交)に同じ。『陰の併、併に月、三併(交)併に(重)併類あり。』

まじり交雜する〔動四自〕まじらふ(交)に同じ。『陰の併、併に月、三併(交)併に(重)併類あり。』

まじり交雜する〔動四自〕まじらふ(交)に同じ。『陰の併、併に月、三併(交)併に(重)併類あり。』

て、舊大陸の中新統鮮新統(以上第三紀層)及び新大陸の洪積統(第四紀古層)より発見せられ、現今の象との差異は、マンモスよりも多し。

ますどり 升取・枱取(名) 枱にて物を量ること、又その人。

ますなご 眞砂子(名) 『ま(眞)は接頭語』すなご(砂子)の美稱。まさご。名義抄、砂、マナゴイサウ。

ますのいち 升市・枱市(名) 昔、攝津國東成(成)郡住吉神社にて、九月十三日の相撲會に、商人が社頭にて枱を商ふこと。

ますのみ 升呑枱呑(名) 枱に盛りたる酒を、そのまま兩より飲むこと。かぶと。

ますはかり(名) 『動』じしんてう(慈悲心鳥)に同じ。

ますひび 益人(名) 次條を見よ。

天(天)の益人(句) 『古事記に、伊弉諾(伊弉尊)の一日に千人を取り殺さんと宣ひしに對して、伊弉册(伊弉尊)の吾は一日に千五百人を生れ出してしめんと言ひし事見たるによりて、人口の増殖する義にていふとぞ。』天(天)の」とは、天神の作用にて生るる義。この世の人。萬民。あをひとくさ。『古語』祝詞(天)

『國中(中)に成出てむ天の益人等が過ち犯しけむ雜難(難)の罪事(事)』は「ますへり 升枱枱・斗枱(名) はかり(量減)に同じ。」

ますほ 眞緒(名) 『まほ(眞緒)』の轉。『古語』山笠、花すすき月の光にまがはまし深きますほの色に染めずば」

眞緒の薄(薄)の句 『眞緒(眞緒)の薄』の轉。無名抄、ますほの薄といふは、いかなる薄ぞ」

ますほがひ 眞緒貝(名) 瓣鰓類に屬する軟體動物。殻は、長卵形にて質厚く、不明なる紫色又は黄色の放射狀線を有し、裏面は、白色にして、表面の色彩を透視し得。我國の近海に産す。ますほのかひ。

ますほさん(名) 増穂殘口(名) 『人』豊後國の人。名は最中、通稱は大和、號を蟠龍子、似切齋といふ。夙に京都に出て、

近衛公に仕ふ。國學を善くし、殊に俳諧滑稽に長じ、博通を以て稱せらる。神道講釋と稱して、神の理を、平易なる道語に説きて、俚耳に入り易からしめんことに努む。享保二年歿す。年六十三。著書八種を、世に殘口八部書と稱し、神道に關するものも多し。』に同じ。

ますほのかひ 眞緒貝(名) 『動』前より條す。ますほの増倍(副) 前より加りて。いよいよ。だんだん。いやましに。

ますますに 増増に(益に) 『副』前條に同じ。『續後記』そこ故に神もうづなひ佛さへ敬ひたまふ。ますますに今わが君は」

ますまほし 升廻枱廻(名) 受渡米につきて、米數取引所が、倉庫内に現存せる米の性質と容量とを檢査すること。

ますみ 眞澄(名) 『ま(眞)は接頭語』まことよく澄みたること。『古語』梨杏、時の間も目かれやはする日に添へてますみの色のおかね思に」 續後拾遺、曇なきますみの月や天にます豊岡姫の鏡なるらん」

眞澄の鏡(句) まかごとによく澄がみ。かなる鏡。ますかごみ。ますかごみ。ますごの鏡。起、白銅鏡、マスマミノカガミ」

ますみ 眞隅(名) 『建』屋根の勾配等しきものの相會する場合の隅(振隅)に對して)

ますみだじん(名) 眞清田神社(名) 尾張國中島郡一宮(中)町に鎮座せる國幣中社。祭神は火明(神)命。

ますめ 升目・枱目(名) 枱にてはかる石。斗升、合などの量。こくめ。

ますめ 枱屋(名) 徳川時代、江戸深川洲崎(洲)に在りし料理屋。明和の頃、最も榮え、主人の名を祝阿彌といひ、その望陀欄は、繪奩の美を極め、諸家留守居の宴席は、殆どここに定まりたりといふ。

ますめ 増山(名) 姓氏の一。本姓は清和源氏。足利泰氏の第四子なる一色公深の第五世の孫政照より出づ。三河國西尾、常陸國下館(下)を経て、元祿十五年、伊勢國長島に移り、子孫相繼ぎて、明治維新

後、子爵を授けらる。

ますら 益荒(名) 『ますらを(益荒男)の略。』萬葉出でて來しますら吾(す)すら。『ますらがみ(益荒神)の略。』心中、救難(紙)『ますらが行ふ魔法の形』

ますら(名) 『正占(夢)の約』まさしく知り得るうらなひ。『古語』類聚かなふやと龜のますらに問はばはやな戀しき人を夢に見つるを」

ますらかみ 益荒神(名) 荒くただけしき神。荒ぶる神。『古語』出雲風土記、ますら神」

ますらたけを 益荒猛男(名) 『ますらを(益荒男)に同じ。』萬葉から國に行きたらして歸り來む益荒猛男に御酒(酒)奉る」

ますらを 益荒男丈夫(名) 武く強き男子。あらを。ますらたけを。丈夫。(手弱女)に對して) 萬葉、ますらをの男さびすと銅太刀腰にとりはき」

ますらをを 益荒丁子(名) 前條に同じ。『古語』萬葉、益荒丁子のあひ競ひ妻どひしけむ」

ますらをの 益荒男の(枕) 古、男子は常に手結(結)を手に附けしより、地名のたゆひ(手結)にかけていふ。萬葉、ますらをの手結が浦に」

ますら 麻酔麻酔(名) 『麻(麻)にて酔ふ義。』印度地方に培養せる麻の花穂は、樹脂に富み、麻酔性を有し、日本藥局方にて用ひて、藥用とし、催眠藥及び鎮靜藥とし、又、印度地方の土人は、麻酔性の喫煙料として嗜好す。まひ(麻酔)參照)藥劑を用ひて、全身或は局部の知覺を一時喪失せしむること。

ますらさき 麻酔劑・麻酔劑(名) 外科手術などをなすに際し、神經中軸又は末梢に作用して、一時的に知覺を失はしむるに用ふる藥品。例へば、モルヒネ、クロロホルム、コカイン、エテテルなどの類。麻酔劑。

ますらおほ 麻酔法・麻酔法(名) 『獨Morose; Betäubung』醫療上、手術などを行ふにあたり、苦痛を感ぜざらしめんがために、麻酔劑を用ひて、全身又は局部

の知覺を失はしむる方法。一局部を麻痺せしむるを局部麻酔、全身を麻痺せしむるを全身麻酔といふ。

ますらやく 麻酔藥・麻酔藥(名) 『ますらを(麻酔劑)に同じ。』

ませ 籬笆(名) 『間塞(塞)の義とも、馬塞(塞)の義ともいふ。』竹木にて低く、目を荒く作りたる垣。ませがき。ませがき。枕

「前裁には、萱草といふ草を、ませがきひて、いと多く植ゑたりける」 『ます(升)』に同じ。

ませ 老成(名) ませで居ること、又その人。年齢の割に、大人(人)びて見ゆること、又その人。早熟。丹波與作、ませのじねんじよめか」

ませ 眞鏡(名) 『ま(眞)は接頭語』はひふきぎん(灰吹銀)を云ふ。『銀座の語』。

ませ(助動) ましの未然形。

ませ(名) 加賀越前丹後、但馬等の諸國にて用ふる、一種の船。腰より爐(爐)に臺垣立(立)あり、橋を表の方より立つ。『語』

ませ 眞風(名) ま(眞)の轉。『船頭(船頭)のませあひ(難)』(名) 馬術にて、馬を駈けさする様式の一。

ませ 枱り交織(名) 『かうじやく(交織)』に同じ。ませがき籬垣(名) 『ませ(籬)』に同じ。相撲、常夏(夏)の花生ひ茂るませ垣も結ひかためては露ももらさじ』 『黒もじ、柴などを用ひ、杭の見えぬやうに、その兩方より當てて結ひたる垣。庭園に用ふ。』

ませ 眞春間瀬(名) 『ませ(眞)』に同じ。ませか(へ) 雜返(名) 『ませか(へ)』に同じ。ませか(へ) 雜返す(動四他) 『幾度も掻きます。ませか(へ)』 『戯に差出口して、他人の話を混亂せしむ。ませか(へ)す。和合人』ひとりしよげてゐるを氣の毒に思ひ、合せ返す」

ませ くだもの 交菓子(名) 種種なる菓子(子)の。『菓實をつくりたる枝を、ませくだものの上にかざして造したりけるを』

ませ くら(副) ませませ。ませながら。俗曲、鬼怒川昔唄「欠伸の」ませくら、納月(月)より立出づる、以前の男」

ますどり

ますほ

ますら

ませ

まぜ

まぜくりかへす 雜繰返す【動四他】まぜかへす(雜返す)に同じ。
 まぜぐる 雜繰る【動四他】『まぜ(雜ず)の口語形』まぜるに「く」を挿みたるもの。いづゝ。ひねるなど参照。前條に同じ。
 まぜけん 交拳【名】拳の一種。本拳と蟲拳とを交互に行ひ、常の如く勝敗を決する外、本拳を打つべき場合に、蟲拳の指を出だし、又、蟲拳を打つべき場合に、本拳の聲を發したる方をも負とするもの。
 まぜこじ 雜越【名】『うませじ』(馬塞越)を見よ。まぜ垣を隔てて事をすること。六帖「まぜごしに麥はむ駒のはつはつに及ばぬ戀も我はするかな」。「同じ」。
 まぜこぜ 雜こぜ【貌】まぜまぜ(雜雜)にまぜこぢや【名】前條に同じ。〔俚語〕
 まぜざかたな 交魚交肴【名】數種の魚類を取り交せて、贈物などにするもの。八笑人「交魚、少少お目に掛けます」
 まぜこじかへし 雜返【名】まぜかへし(雜返)の音便。
 まぜこじかへす 雜返す【動四他】まぜかへす(雜返す)の音便。「る矢羽」
 まぜは 交羽 雜羽【名】交羽(まぜ)にしたまぜはき 交羽雜羽【名】矢羽を羽(ま)に、その走羽(ま)弓摺羽(ま)外懸羽(ま)に、各異なる鳥の羽を用ふること。あはせはき。「めに横ふる、丸き棒」
 ませほう 笹棒限棒【名】仕切(ま)のたせまぜ 雜雜【貌】いろいろ取りまぜたるさま。まぜこぜ。空舞、いろいろの木をまぜまぜに作りて」
 ませんだ(英 Masenda)【名】〔化〕アニリン色素の一。ロオザニン・パラロオ、ザニンに鹽酸鹽を混合して製する一鹽基性染料。光輝ある暗綠色の結晶をなし、水及び酒精などに溶けて、赤色の液となり、絹羊毛草、紙の類を赤色に染むに用ひ、又、木綿を染むには、タンニン酸等を染媒とすな。ふくしん。まじえんた、ませもの 老成者【名】ませて居る者。年齢の割に大人(ま)びて居る者。〔舊國語〕「伴助はませ者にて」

まぜもの

まぜもの 交物・雜物【名】まざる物。まぜ合はせたる物。まじりもの。和合人交物をすぐり扱ひて見ると、流儀の節はちいとはかりしか無(ま)え」
 まぜる 交ぜる【動下他】まぜかへす(交返す)に同じ。八笑人「いやさ、ませてはいかねえ。まあ聞かっし」
 まぜの眞鏡【名】『ま(眞)は接頭語』(眞)の美稱。古語。夫木、神葉にまその白木綿(ま)引き掛けて今日はあなしの山かつらせよ」
 まぜかかみ 眞澄鏡 眞十鏡 眞寸鏡【名】まぜかかみ(眞澄鏡)の轉。萬葉白たへの襷を掛けまを鏡手に取り持ちて天つ神仰きこひのみ」
 まぜかかみ 眞澄鏡 眞寸鏡 眞寸鏡【枕】眞澄鏡は清く照るものなるより、きよし(清し)たる(照る)にかけていふ。萬葉たなばたの船乗すらしませ鏡清き月夜に雲立ちわたる。同「まを鏡照るべき月を白たへの雲か隠せる天の霧かかも」眞澄鏡は、蓋あり又紐にて掛け吊すものなるより、ふた蓋(ま)か(掛)にかけていふ。萬葉まを鏡たがみ山に木(ま)のくれのしげき谷を。同「まを鏡かけてしぬべ」とまつりだすかたみの物を見るものに、眞澄鏡は、物の形を映して見るものなるより、みる(見る)にかけていふ。萬葉斯くばかり戀しくあらばまを鏡見ぬ日時なくらまらしものを。眞澄鏡は、研磨するものなるより、(磨)及(び)これと音相近き(床)に(ま)していふ。萬葉まを鏡ときし心をゆるしこそその日のきはみ」同「まを鏡とこの邊(ま)去らず」
 ませかかみ 眞澄鏡【枕】まそがよ蘇我の子ら」
 ませささむ(英 Masosamu)【名】變態性慾の一。相手の異性者が殘酷なる待遇を自己の身體に加ふるにより、満足を感じずるもの。性慾倒錯。受動淫虐狂。
 ませのこ(副)ませ(ま)少しに同じ。狂言(ま)山伏「ませ(ま)とこざれ」
 ませて 眞袖【名】『ま(眞)は接頭語、ま(眞手)参照』左右の袖。兩袖。古語。萬葉、太刀のしり鞘に在る野に夏葛引く吾妹(ま)じ」
 ませの鏡【句】『眞澄(ま)の鏡』に同じ。古語。祝詞(國魂神寶「まそびの大御鏡の面(ま)をおしはるかして見えなはす事のごとく」)
 ませの眞緒【名】『ま(眞)は接頭語』(ま)の(緒)の美稱。古語。萬葉、まがねふく丹生(ま)のまそほの色に出で言ははくのみぞ吾(ま)が戀ふらしくは。『赤き色。ますほ。古語。舞衣、花薄まそほの絲を繞りかけてたえず(ま)を招きつるかな』眞緒の薄(ま)【句】緒色の薄。徒然、ますほの薄、まそほの薄などいふ事あり」
 ませのみかかみ 眞澄鏡 眞十見鏡【名】『ま(眞)は接頭語』の轉。まぜかかみ(眞澄鏡)に同じ。古語。「たらちねの母のかたみと吾(ま)が持たる眞十見(ま)鏡に」
 ませむら 眞麻群【名】眞麻(ま)の生ひ茂れる處。古語。萬葉、上つけぬ安蘇のまむらかきまきだぬれどあかねをあとかあがせむ」
 ませゆふ 眞麻木綿【名】『木綿(ま)の本義は、栲(ま)にて作りたるをいふ』眞麻(ま)にて作りたる木綿(ま)。古語。萬葉、かみ山の山べまそゆふ短ゆふかくのみからに長くと思ひき」
 ませを 眞麻字【名】『ま(眞)は(眞)の誤。諸國(安達原)眞麻字の絲を繰返す」
 また 又岐・俣【名】本(ま)は一つなる物の、二つ以上に分れ開きてある處、又その物。ふたまた。今昔、大きな勝の枝に取附きて」
 また 股脛【名】『前條の語の轉義』脚の又(ま)になりてある處、即ち股(ま)と股との間。またぐら。『かりまた(麻股)に同じ。』
 股に掛く【句】あるさまはる。とびある。増多小女波渡世「三千里を股にかけたるこの仲間」

また

また 又【副】「また(又)と同義」これもかれと等しく。同じやうに。ひとしく。また(亦)参照。新古今「これもまた長き別

また

は詳かならず。古語。和名、狹延、麻多。猿屬也」
 また 摩多摩多(梵 Mada)【名】『語』母の義(悉曇)の内、母韻を表す十二字。(體文(影)に對して)』
 また 又復【副】『また(又)と同義』ふたたび。立ちかへりて。重ねて。萬葉、朝露の消(ま)やすきあが身老いぬればまた若(ま)へり君を待たむ」
 又か【句】類似或は同一の事の、重ねて起りたるにいふ語。
 又しては【句】次條に同じ。傾城反響香「又しては、又しては、叶はぬ事を、吃めが」
 又しても【句】なほ懲りずして、重ねて。狂言(石神)「常常大酒を食べ、醉狂を致し、又しても、又しても、妾を打擲致します」
 又と【句】二つと。このほかに。「又とあるまじき佳景」二度と。ふたたび。かかえて。犬子集「又と見ぬ人は一花心かな」
 又と無し【句】重ねて有るべきにあらず。又も無し。無類なり。またなし。「又となき好機會」。「ねて。またと。又と再び【句】この上に又。又もかき又の【句】外(ま)の。別の。更に一つ。「又の名」。「次の。【又の目】」
 又の年【又の夜】
 又も【句】また。更に。榮花「又もなほ殘ありけり五月雨に降りつくしてし涙と思ふに」
 又も無し【句】「又と無し」に同じ。千載「又もななくただ一すちに君を思ふ戀路に迷ふ我や何なる」
 又も又【句】又しても。萬葉「又も又花に散られてうつらうつら」
 又もや【句】後になりて復(ま)するかも知れぬ意。諸國(鹿野)「斯くて都に御供せば、又もや御意の變るべき」
 また 亦【副】『また(又)と同義』これもかれと等しく。同じやうに。ひとしく。また(亦)参照。新古今「これもまた長き別

れになりやせん暮を待つべき命ならねば」

また又「接」も「また」と同義「その」

また未「副」『いまだ未』の略。漢馬跡もなくこそかきけちて失せにしか。まだ世にあらば。『よきはなれど、何れかといへば。』また、この方がよし。未しも『句』前條に同じ。『存世馬』

またあき股明「名」股の間の明きたる所。俗曲妹背山縁夢『大膽女の娘をせうと、耳を引くやら、股明より手を入れてこそぐるやら。』

またい「副」『また』の音便。『備馬樂淺縁』新京朱雀のしだり柳まだい田居となる。

またいとこ 又従兄弟「名」雙方の親が従兄弟なる人の、互に呼ぶ稱。いやいとこ。ふたいとこ。再従兄弟。三従兄弟。和名三従兄弟、萬太伊止古。

またいわう 眞大黃・土大黃「名」『植』『ま』(眞)は接頭語、薯蓣科に屬する多年生の草。莖は、平滑にして、高さ六七尺に達し、葉は互生し、長楕圓形にして、基部廣く、所に紅斑を有す。花は夏、葉腋に花莖を生じ、小白色、繖狀花序をなして開く。我國、深山の澗水の中に自生し、大黃の代用として、下痢劑に供す。からすのあぶらやまだいわう。

まただう 魔道「名」(佛)まかい(魔界)に同じ。水鏡大匠に怒りて、自ら命をほろぼし、魔道におちて、蘇我の一門、時のまに亡び失せにけり。

またうけ 又請「名」保證の保證。またうけにん 又請人「名」請人の請人。保證を更に保證する人。

またうつけい 又寫「名」寫したるものを、更に寫し取ること。まごうつけい。轉寫。傳寫。

またうづ 全人「名」(全)き人の義なる全人(全)の音便。完全なる人。關點なき人。幸若鳥帽子折佛のやうなるはまたうどなり。

またうり 又賣「名」人より買ひたる物を、更に他に賣ること。轉賣。(又買に對して)。

またえんじや 又縁者「名」縁者の縁者。親類の親類。四門親家。

またか「名」(動)鮑の幼魚。またか「名」(動)鮑の一品種。最も普通のもの、即ち殼は卵形をなし、殼面の條線顯著なるもの。

またがし 又貸「名」借りたる物を、更に他に貸すこと。轉貸。(又借に對して)。

またがしにん 又貸人「名」てんたいにん(轉貸人)に同じ。

またがひ 又買「名」買ひたる人より、更に買ふこと。轉買。(又賣に對して)。

またがり 又借「名」人の借りたる物を、更に借ること。轉借。(又貸に對して)。

またがりち 又借地「名」てんしやくち(轉借地)に同じ。

またがりてん 又借人「名」てんしやくてんに同じ。

またがる 跨る「動四自」兩足を開き張り、股の間に挟むやうにして乗る。この處よりかの處へ、又はこの時よりかの時へ互る。はちかる。「十年に跨る」。

またぎ 又木・岐木・俣木「名」又(ぎ)にたりてある木。

またぎ未「名」またぎの連用形の轉「年少の頃。古語」花冠「この頃は、殿の少將は、中納言・中將にて物せさせたまふ。まだきより、いろにおはしまして、忍びありき、いみじうせさせたまふ」。

またぎ未「副」前條の語の轉義「未だその時期に達せざるに。はやくより。かねてより。まだきに。後、花すすきほに出づる事もなきものをまだき吹きぬる秋の風かな」。

またぎき 又聞「名」聞きたる人より、更にまたぎに未「副」まだきに同じ。伊勢「夜も明けばきつにはめなんくだかけのまだきに鳴きせなを遣りつる」。

またぐ 全く「副」またぐ(全く)に同じ。笠蕪そわうの君の御もとに、これをいとまたく返し奉るは」。

またぐ「動四自」『またし參照』時を待ちかぬ。いそぐ。せまく。はやる。「古語」古今「いつしかとせまく心をはぎにあけて天の河原を今日や渡らん」。

またぐ 跨ぐ「動四他」兩足を開き張って越ゆ。踏み越す。あごむ。無料、敵人の跨いで過ぎぬ肌糸」。

またぐ 跨ぐ「動下二他」またがるやうにす。兩足を開き張り、股の間に挟むやうにす。宇治善男、夢に見るやう、西大寺と東大寺とをまたげて立ちたりと見て」。

またぐは 股鞆「名」びちゆうくは(備中鞆)に同じ。

またぐら 股座跨座「名」また(股)に同じ。

またぐら かうやく 股座膏藥跨座膏藥「名」うちまたかうやく(内股膏藥)に同じ。

まただけ 苦竹「名」(植)眞「竹の義」竹類の一種。地下に、太き根莖横走し、初夏これより筍生じ、高さ五六尺に及び、周圍も一尺五六寸に達するものあり。節間長く、平行せる二箇の環狀隆起を有す。枝は粗生し、葉は披針形又は細長卵形にして常緑。花は通常生ぜざれども、時に六七月の候、枝端に多くの穎花を出すことあり。籜(形)は帶紫色の斑點あり。竹程強靱、材質良好なること、竹類中第一なり。廣く栽培せられ、莖は建築器具の料に供す。籜は草履・笠などに作り、又包装用に供す。かはたけ。からたけ。くれたけにがたけ。をだけ。

またけらい 又家來・復家來「名」家來の家來。またもの。陪臣。

またこ 眞鮭「名」(動)『ま(眞)は接頭語』た(鮭)に同じ。

またこさく 又小作「名」小作地を、更に他に轉貸して、小作せしむること。

またこもの 又小者・復小者「名」小者の下に附く小者。

またこゆ 跨越「動下二他」跨ぎて越ゆ。「古語」『跨、跨、蛇、ヲロチヲマタコエテ』

またじ「形」『またく參照』早く迫りてあり。急なり。「古語」『急、不、能、救、急、マタキコトヲ……』

またじ 全し「形」『またし(全し)に同じ。』「古語」萬葉命をしまたくしあはばありぎぬの在りて後にも逢はざらめやも」。

またじ未「形」『形二』『またし(全し)の略』

またじ未「形」『形二』『またし(全し)の略』

またじ未「形」『形二』『またし(全し)の略』

またじ未「形」『形二』『またし(全し)の略』

またじ未「形」『形二』『またし(全し)の略』

またじ未「形」『形二』『またし(全し)の略』

またじ未「形」『形二』『またし(全し)の略』

またじ未「形」『形二』『またし(全し)の略』

またじ未「形」『形二』『またし(全し)の略』

またじ未「形」『形二』『またし(全し)の略』

またじ未「形」『形二』『またし(全し)の略』

またじ未「形」『形二』『またし(全し)の略』

またじ未「形」『形二』『またし(全し)の略』

またじ未「形」『形二』『またし(全し)の略』

またじ未「形」『形二』『またし(全し)の略』

またじ未「形」『形二』『またし(全し)の略』

またじ未「形」『形二』『またし(全し)の略』

またじ未「形」『形二』『またし(全し)の略』

またじ未「形」『形二』『またし(全し)の略』

またじ未「形」『形二』『またし(全し)の略』

末太良字利。黄斑文瓜也」

まだら「か」斑か「貌」まだらの明かに分れて見ゆるさま。「古語」名義抄「降、マダラカナリ・ニホラカナリ・ウルハシ」

まだら「か」げひり「斑鹿毛雲雀」斑鹿毛雲雀「名」馬の毛色の一。鹿毛にして、黄斑あるもの。とら「か」げ。

まだら「か」めむ「斑龜蟲」名「動」ながかめむし「長龜蟲」に同じ。

まだら「くも」斑蜘蛛「名」動「ぢまらぐも」(女郎蜘蛛)に同じ。「もの。ぶち。

まだら「げ」斑毛「名」毛色の、まだらあるまだら「こ」形「」まだら「こ」に同じ。

まだら「ご」も「斑衣」名「まだらに染めたる衣。夫木、うき戀はまだら衣のよにか」に「色」にやは袖も濡れる」

まだら「さ」も「斑鳩」名「動」鳩の一品種。體は細長くして、一寸五分乃至二寸三分に達し、色は黄褐にして、黒き斑紋を交ふ。尾部長く、尾端の囊状部小きし。熱帯温帯に産し、我國にては、琉球の八重山島に棲む。

まだら「ん」摩多羅神(梵 Mithra)「名」佛「天台宗にて崇むる神。其像は、頭に唐制の幘頭(ハシ)を被り、身に和様の狩衣を著け、左手に鼓を持ち、右手にて之を打つ姿をなす。左右に、風折(カサ)烏帽子を被り、右手に笹葉を持ち、左手に若荷を執りて舞へる姿の童子あり。中尊の兩側に、竹と若荷とあり。頂上に雲氣ありて、その内に、北斗七星を畫けり。之を崇敬する者は、往生の素懷を遂ぐと稱す。うしまつり(牛祭)参照。

まだら「だけ」斑竹「名」植「淡竹(ハシ)の一變種。莖の黄白色を呈し、紫褐色の雲状斑紋を有する點に於て、普通、淡竹との異なり。觀賞用として栽培し、莖を杖筆の柄、烟管その他裝飾器に用ふ。とら「ふ」だけ。はんちく。

まだら「らん」斑狎「名」毛色のまだらなる狎。若風鳥「まだら狎一疋」

まだら「つぎ」げ「斑月毛斑驪」名「馬の毛色の、月毛にして、斑あるもの。まだらつきげり「ひり」斑月毛雲雀「名」前條に同じ。

まだら「う」こ「形」「」まだら「こ」の音便。まだら「て」ふ「斑蝶」名「動」蝶類の一種。形大きく、翅は大にして、丸みを帯び、黒色に、藍、青、紫又は橙などの中の一色の斑紋を有して、美觀を呈す。種類多くして、多くは熱帯地方に産し、淺黄斑の一種のみは、内地に産すれども、その他は、琉球以南に屬す。

まだら「ぶ」すま「斑袋」名「斑の模様あるぶすま。萬葉」きべ人のまだらぶすまに綺さは入りなましもの妹が小床(カ)に」

まだら「ま」く「斑幕斑幔」名「一幅(ハシ)に」はんまく。和名斑幔「萬多良萬久」

まだら「ま」だ「貌」まだら「ま」埒「(カ)に」あかぬさま。ぐづぐづ。だらだら。まだら「む」斑蟲「名」動「はんめら(斑猫)に同じ。

まだら「ゆ」き「斑雪」名「はだらゆき(斑雪)に」まだら「よ」こ「斑横這」名「動」浮塵子(カ)の一品種。體長一分餘。體色黄褐にして、翅上に褐色の斑多し、頭部三角形をなす。稻、麥、馬鈴薯等の害蟲。

まだら「こ」い「形」「」次條に同じ。まだら「の」間意し「形」「」まは間の義「手間取りて遅し。てぬるし。緩漫なり。まだら「こ」し。まだら「こ」し。まだら「こ」し。まどろこし。

まだら「れ」麻垂「名」漢字の垂(シ)の一。「麻」。「庫」。「庫」などの上部にある「麻」の字。まかんむり。「同じ。

まだら「す」(蘭 Matrooms)「名」まどろ「」に「また」をひ「又甥」名「甥の子。姪孫。まち町「名」(間(カ)路(カ)の義なるべしといふ。田の中の區劃。ひざま(カ)一

敬町「参照」。「古語」和名町、末知。田區也」

宮殿また邸宅に附屬する家の、多くは同じやうなる中屋のおはしますまは、かやうの、人も住みぬべくのもやかなれど、…丑寅のまちの西の對、文勝(カ)にてあるを。空鶴、おほ殿のまちは、ことに面白き事は無くて」

「坊」馬坊、マチ。「四商店の立ち並びて、繁華なる土地。市街。町には事無かれ(句)町(カ)には事無かれに同じ。「(人)ゆり百合(カ)を見よ。

「無かれ」に同じ。「諺語」

「内股」(カ)の部分。まち「名」矢柄(カ)の切口、即ち鎌の筧代(カ)を受け入る所。まぢきは、

「待」待「名」待「こと。待にて、高き木の又、横木を結びつけて、その上に居り、木の下に鹿の來るを待ちて、狙ひ射ること。まぢ。今宜待といふことをなさんしける。それは、高き木の勝に、…」

「まち」隣寸「名」まち「隣寸」の訛。まち「待」接頭「造りて貯へ置き、買ひに來る人待つ義」品物の出來合(カ)なる意。まぢもの(待物)参照。「まち足駄」「まち直垂(カ)」

「まち」貧「名」まづしきこと。「古語」粗「貧窮、マチ」

「まち」あかす「待明す」動「他」來るを待ちつつ、夜をあかす。終夜待つ。待暮すに對して、熱必ず來なと思ふ人を待ちあかして」

「まち」あぐむ「待ちあぐむ」動「自」待ちあぐむ。倦むほど長く待つ。まちあぐむ。足駄。拾玉になひ待つ(カ)出來合(カ)のまち足駄世を行く道の物とこそ見れ」

「まち」あづけ「町預」名「徳川時代に、罪人を名主月行事家主五人組などに引き渡して、一定の期間押し込めおかしめし處刑。罪人、その期間に法を犯す時は、預りし者罰せられたり。

「まち」あはす「待合はす」動「下二自」豫め場所を定め、早く到着せし者が、他の者の來るを待ち受く。A笑人「立ちどまり、跡を振返り、二人が來るを待合はす」

「まち」あひ「待合」名「待ち合はする」と、又その場處。「茶室に附屬せる建物の一。茶席の開く合圖を待ち合はする場所。停車場にて、乗客見送人などが、乗車時間來るまで待合はす人ために設けたる室。四男女、特に藝妓と客人とが會合して、遊蕩する茶屋。かしせき。まちあひぢやや。「東京の語」

「まち」あひ「あそび」待合遊「名」待合圖にて遊興すること。まちあひ「さげ」待合酒「名」待合遊に飲まちあひ「ぢやや」待合茶屋「名」まちあひ(待合圖)に同じ。

「まち」あふ「待合ふ」動「自」互に待つ。まちあふ「ら」待油「待膏」名「饗宴の始る前に、辨少納言の座にて行ひし、内内の小宴。西宮聖待油關巡者、民部卿云、不知「先例」待」

「まち」あみ「待網」名「網を張り置き、魚の上流より下るを待ちて捕ふること、又その網。二本の竹の一方を結び、一方を開き、これに、三角形なる囊状の網を附けたるもの多し。おきあみ。

「まち」い「町醫」名「まちいしや(町醫者)の略。

「まち」いくさ「待軍」名「敵の攻め來るを待ちて戦ふこと。まちかっせん。太平記「源氏は、若干の大勢と聞ゆれば、待軍して、敵に氣を吞まれては叶はず」

「まち」いし「町醫者」名「徳川時代に、幕府大名などの保護を受けず、民間にありて開業せし醫師。まちいし。まちいし。(御殿醫に對して)

「まち」いつ「待出づ」動「下二他」待ちて、遂ひ又は見るやうにす。まちづ。古今來んといひしばかりに長月の有明の月を待ち出づるかな」増鷲春宮の御代をもえ待

を五るわ ろれるりら よゆや もめんむみま ほへふひは のねぬほ とてつちた そせすしざ こけくきか おえういあ

まちくんだり町下(名)町を、上手(形)より下手(形)に歩みゆくこと。拾玉町くどりよろほひゆきて世を見れば人のことわり皆知られけり。犬子集貞徳(上筆)「珍」賣るや袴の町くんだり」

まちぐち町口(名)町の出入口。大鏡「その家は、土御門町口なれば、御道なりけり」

まちくらす待暮す(動四他)「物事の来るを待ちつつ、日を暮す。終日待つ。(待明すに對して)後鬻待暮す日は菅の根に思ほえて逢ふ夜しもなど玉の緒ならん」久しきに互りて待つ。待ちつづく。

まちへるわ町郭(名)城郭内に、侍の宅などのあるところ。まちがまへ。

まちくわいひ町會所(名)徳川時代に、幕府の命を受け、淺草向柳原(形)に設けて、江戸各町の備荒積立金を取り扱ひし所。なほ附屬の倉庫を、柳原筋遠橋(形)内、深川大橋向及び菅村に分設せしが、明治以後、東京府の管轄に歸し、同四年、會所は京橋八丁堀姫路藩の邸跡に移り、五年廢せられたり。徳川時代に、京都大阪等にて、町内の用務のために、町役人などの寄り合ひし所。

まちげいじや町藝者(名)町中に住む藝者(遊廓内の藝者と區別していふ)足兼翁踊子は、今いふ町藝者なり」

まちえ待肥(名)「農」苗を移植せんとする時、これに先だち、その場處に穴を設けて、肥料を入れること。かまごえ。つぼごえ。「待屋形」に同じ。

まちごぶね待御座船(名)「まちやかたまちごぶね」町小使(名)「まちびきやく(町飛脚)に同じ。

まちごぼ町言葉(名)町の言葉。町方(形)特有の言葉。町人の使ふ言葉。

まちごま待駒(名)将棋の戯にて、詰の時玉の逃げ道を豫測して、先手に我駒を打つこと。詰技詰駒自序「將某……茶店(形)に客を待某(形)あり」

まちざいばい待幸(名)待ちまうけたる幸。積吉事蓋さまでもなき待幸の同じ

まちさかな待肴(名)客を待ち受くる時、その來らぬさきに座席に据おく肴。

まちさげ待酒(名)遠方より來訪し、又は戻り來る人に飲ません料として、あらかじめ造りおく酒。「古語」駕還り上(形)りませる時に、その御祖(形)息長帶日賣(形)命待酒を醸(形)みて獻らしき(形)に應じ、此方にて、又、叫ぶこと。今昔「遊の底に叫ぶ聲、聲(形)かに聞ゆ。守(形)の殿はおはしましけりといひて、待叫をするに」

まちさぶ町さぶ(動上二自)町らしく見ゆ。和合「鎌倉は町さびてゐても、神はなかなか寂(形)びねえね」

まちさやまき待鞘巻(名)出來合(形)の商品の鞘巻。七人職人我が戀はまち鞘巻の破(形)すのこぬる人の來ぬ身をいかにせん」

まちじゆう町衆(名)町の人人。町内の人たち。浮世觀仁形「町衆、二日寄合に」

まちじり町尻(名)町の末。まちはづれ。

まちじり町尻(名)姓氏の一。水無瀬(形)氏の支族。水無瀬氏の子兼後の第二子なる具英を祖とし、子孫相續きて、明治維新後、子爵を授けらる。

まちぢりぢり町尻殿(名)「人」(形)「ぢりぢりぢり」藤原道隆の異稱。日(形)ぢりぢりぢりぢり」藤原道隆の異稱。日(形)ぢりぢりぢりぢり」

まちじり待汁(名)「まちぢりぢり」(十日汁)に同じ。

まちすす待過す(動四他)待ちてすぐす。過ぐるを待つ。源兵「程經ば、少しうち紛る事もやと待ちすぐす月日に添へて」

まちすぢ町筋(名)町のとほりすぢ。まちどほり。一代玄丸の内の屋形屋形を過ぎて、町筋にかかり」

まちそぢ町育(名)町家にてそだつこと。壽の門松「怪氣ねたみは女の常引く手あまたの身の上さへ、お心堅い町そぢ」

まちぞねへ待備(名)敵軍の攻め來るに備ふる陣立。

まちたい町代(名)徳川時代の、京都の町役人の一。所管の町町の年寄を率ゐて、専ら町方の取締に從事せしもの。管する所、狭きは四十二町、廣きは二百二町に及ぶ等、一様ならず、事務の繁劇なるは、下町代を置けり。徳川時代に、町にて雇ひ、町年寄に代りて、町務を取り扱はしめし町役人。

まちたい町替間(名)町内の金持たちに取り入りて世を渡る者。語道「世間替二條室町に店借(形)したる川口屋藏右衛門といふ町替間」

まちだか箱高(名)次條の略。

まちだかばか箱高袴(名)箱を高く仕立てたる袴。多くは乗馬用とす。うまのりばかま。

まちだか町宅(名)昔、武士は、主家の屋敷に住むを普通とせし中に、特に町中に家を借りて住みしもの。

まちぢり貧鈎(名)上古、貧しくなれと誼ひたりといふ鈎針。「古語」肥「貧鈎、マヂチ」

まちぢり婿中(名)町のうちの全部。

まちぢり待女郎(名)婚禮の時新婦に付き添ひて世話する侍女。新郎の兄弟又は親友の妻女伯叔母のうち、世故に長けたる者、これを勤むを普通とす。まちぢりよらばう。妹背女(形)有合(形)の聲君様には紅葉の局、梅の局は嫁君役、殘は介添(形)待女郎と、櫻の局が指圖して」

まちつ待出(動下二他)「まちつ」待出づの約。「古語」萬葉「來すばかたみにせむと吾(形)が二人植えし松の木君を待出ぬ」

まちつ待附(動下二他)待ちて、その人又はその時に遣ふ。まちおほす。

まちつ待續(動四他)「まちつ」待續(形)に同じ。萬葉「一日こそ人も待ちつげ長きけをかく待たるればありがてなく」

まちつ待續(動四他)「まちつ」待續(形)に同じ。萬葉「一日こそ人も待ちつげ長きけをかく待たるればありがてなく」

まちつ待續(動四他)「まちつ」待續(形)に同じ。萬葉「一日こそ人も待ちつげ長きけをかく待たるればありがてなく」

まちつ待續(動四他)「まちつ」待續(形)に同じ。萬葉「一日こそ人も待ちつげ長きけをかく待たるればありがてなく」

まちつ待續(動四他)「まちつ」待續(形)に同じ。萬葉「一日こそ人も待ちつげ長きけをかく待たるればありがてなく」

まちつ待續(動四他)「まちつ」待續(形)に同じ。萬葉「一日こそ人も待ちつげ長きけをかく待たるればありがてなく」

まちつ待續(動四他)「まちつ」待續(形)に同じ。萬葉「一日こそ人も待ちつげ長きけをかく待たるればありがてなく」

まちつ待續(動四他)「まちつ」待續(形)に同じ。萬葉「一日こそ人も待ちつげ長きけをかく待たるればありがてなく」

まちつ待續(動四他)「まちつ」待續(形)に同じ。萬葉「一日こそ人も待ちつげ長きけをかく待たるればありがてなく」

まちつ待續(動四他)「まちつ」待續(形)に同じ。萬葉「一日こそ人も待ちつげ長きけをかく待たるればありがてなく」

まちつ待續(動四他)「まちつ」待續(形)に同じ。萬葉「一日こそ人も待ちつげ長きけをかく待たるればありがてなく」

まちつ待續(動四他)「まちつ」待續(形)に同じ。萬葉「一日こそ人も待ちつげ長きけをかく待たるればありがてなく」

まちつ待續(動四他)「まちつ」待續(形)に同じ。萬葉「一日こそ人も待ちつげ長きけをかく待たるればありがてなく」

まちつ待續(動四他)「まちつ」待續(形)に同じ。萬葉「一日こそ人も待ちつげ長きけをかく待たるればありがてなく」

まちつ待續(動四他)「まちつ」待續(形)に同じ。萬葉「一日こそ人も待ちつげ長きけをかく待たるればありがてなく」

まちつ待續(動四他)「まちつ」待續(形)に同じ。萬葉「一日こそ人も待ちつげ長きけをかく待たるればありがてなく」

まちつ待續(動四他)「まちつ」待續(形)に同じ。萬葉「一日こそ人も待ちつげ長きけをかく待たるればありがてなく」

まちつ待續(動四他)「まちつ」待續(形)に同じ。萬葉「一日こそ人も待ちつげ長きけをかく待たるればありがてなく」

まちなか

チトラント」待ちて、迎へ取る。まちなか。源兵中將待取りて、この品品をわきま(定めたまふ)。「る處。まち。まちなか。町中[名]町のなか。町家のあまちなし。ほかま襦袢袴[名]あんざんほか(ま行燈袴)に同じ。

まちなみ。町並[名]町家(町)の立ち並びである状態。町筋の並びである状態。琵琶山城の伏町の里は、昔繁昌の時の町並残りて。

まちなみ。町並屋敷[名]徳川時代に、町奉行と代官又はその他の者との兩支配に屬せし地域。まちやしき(町屋敷)[參照]。寺院の所有に屬して、その城外に在りて、年貢・町役等を出だすべし屋敷地。まちやしき(町屋敷)[參照]。

まちには。町庭[名]町家(町)の庭。町にある庭。太極町庭の心に足るや薄もみぢ。

まちにん。町人[名]町の人。町人(町)。御備手(和泉式部)「鞘なき守刀を添へて捨てけるを、まちにん拾ひ養育して、比叡(山へ)のぼせけり」。

まちびき。を待つ意「裁縫にて、縫止(はた)の位置のしるしに刺しおく針。

まちびきやく。町飛脚[名]徳川時代に、人の依頼に應じ、手数料を受けて、書信及び輕量の物品などの配達を職とせしもの即ち暮府大名などの抱(か)にあらぬ飛脚。まちごづかひ。

まちびけ。町火消[名]徳川時代に、幕府の定火消(御定)・大名の抱(か)の火消以外なる、江戸市街の私設の消防組。その人夫を火消人足(略して)火消又は蕭の者(略して)蕭と稱す。組をい組る組は組などの四十七組に分ち、各組とも、組取あり、その下に頭、維持(ず)・梯子持(ず)平人(蕭口を持つ者)・人足(未だ火消に加はらぬものにて、土手組ともいへり)の五階級あり。享保十五年、四十七組を一番組より十番組までの十組に大別し、後、又、三番組に、その所屬なる「て、あ、」さ、「き、ゆ、ゆ、み」の六組以外更に本組と稱するもの生ぜしたため、四十八組となり、後、なほ本所深川の十六組生じたり。

まちびさじ。待久し[形]「まちごぼし(待遠し)に同じ。五日亥日の暮るも待久しく」。

まちびたれ。待直垂[名]出來合の賣物の直垂。七一聯人歌(雲まきの)まちびたれのすきかげにさしてさきはらぬ月の袖笠」。

まちびど。町人[名]町に住める人。ちやうにん。狂言三人大名「まち人ちやと思つて懸(つ)つた」。

まちびど。待人[名]来るべき人待ちを受けを人。まちうど。

まちぶ

おぼえに書きつけおおくにて、この説、必ずよしと云ふには非ず)人華美を好むによりて、町鐘は廢れて、名だに知る人なきやうになりゆきしたるべし。(或人いふ、町鐘は、今の立鐘(た)なるべし)。

まちぶき。町夫[名]町に課せし人夫役、又その人夫。

まちぶきやく。町奉行[名]小田原の北條氏の職制の一。小田原の市街の行政司法を統轄せしものなるべし。徳川幕府の職制の一。老中の支配の下に、江戸・京都・大阪及び駿河の四箇所を行政司法警察を總攬し、特に、町人を管轄し、その訴訟を聽斷せしもの。員数は、元祿十五年以後、江戸は南北の二人、京都大阪は東西の二人、駿府は一人に、ほぼ一定し、資格は、江戸三千石、京都大阪は千五百石、駿府は千石を通常とし、知行不足の者の任命に對しては、足高(む)を給せられ、何れも美蓉間に何候し、諸大夫に敘せられ、下僚に典力・同心ありて、その事務を分擔せり。

まちぶき。町奉行所[名]町奉行が、その事務を取り扱ひ、兼ねて、その住宅に宛てし所。町奉行の定員二人ある土地のは、隔月交替に訴訟を受受理せり。俗稱、御番所。

まちぶせ。待伏[名]人を襲はるがため隠れゐて、その来るを待つこと。

まちほぼ。待納[名]「建、柱面(た)に取附けたる柄を差し込むために、敷居の端に穿つ穴。

まちほり。町彫・町雕[名]徳川時代に、幕府・諸侯の扶持を受けず、民間に自立して彫金業を營みし者の手に成りたる金

まちま

屬彫刻。横谷宗現より起り、後藤家以外、獨特の彫法を開けり。

まちま。町時繪[名]徳川時代に、民間にありて、時繪を職業とする者の手に成りたる時繪(本時繪(ま)に對して)。

まちま。馬錢番木鱘[名]「植」馬錢科に屬する常綠の喬木。高さ約十五尺に達し、葉は對生し、卵形にして、三箇乃至五箇の肋を有し、花は有限花序に排列し、萼は小く、花冠は筒状にして、果實は大きな如き黄色の漿果を呈す。種子は多く、外面に密毛を有す。原産地は、東印度・澳洲北部地方。種子の粉末より越幾斯(ま)又は丁機(ま)を製し、胃加答兒及び神經麻痺に用ひ、又、鼠大などを毒殺するに足る。ばんぼくべつ。ばんぼくべつ。

まちま。馬錢科に屬する常綠の喬木。高さ約十五尺に達し、葉は對生し、卵形にして、三箇乃至五箇の肋を有し、花は有限花序に排列し、萼は小く、花冠は筒状にして、果實は大きな如き黄色の漿果を呈す。種子は多く、外面に密毛を有す。原産地は、東印度・澳洲北部地方。種子の粉末より越幾斯(ま)又は丁機(ま)を製し、胃加答兒及び神經麻痺に用ひ、又、鼠大などを毒殺するに足る。ばんぼくべつ。ばんぼくべつ。

まちま。馬錢科に屬する常綠の喬木。高さ約十五尺に達し、葉は對生し、卵形にして、三箇乃至五箇の肋を有し、花は有限花序に排列し、萼は小く、花冠は筒状にして、果實は大きな如き黄色の漿果を呈す。種子は多く、外面に密毛を有す。原産地は、東印度・澳洲北部地方。種子の粉末より越幾斯(ま)又は丁機(ま)を製し、胃加答兒及び神經麻痺に用ひ、又、鼠大などを毒殺するに足る。ばんぼくべつ。ばんぼくべつ。

まちま。馬錢科に屬する常綠の喬木。高さ約十五尺に達し、葉は對生し、卵形にして、三箇乃至五箇の肋を有し、花は有限花序に排列し、萼は小く、花冠は筒状にして、果實は大きな如き黄色の漿果を呈す。種子は多く、外面に密毛を有す。原産地は、東印度・澳洲北部地方。種子の粉末より越幾斯(ま)又は丁機(ま)を製し、胃加答兒及び神經麻痺に用ひ、又、鼠大などを毒殺するに足る。ばんぼくべつ。ばんぼくべつ。

まちま。馬錢科に屬する常綠の喬木。高さ約十五尺に達し、葉は對生し、卵形にして、三箇乃至五箇の肋を有し、花は有限花序に排列し、萼は小く、花冠は筒状にして、果實は大きな如き黄色の漿果を呈す。種子は多く、外面に密毛を有す。原産地は、東印度・澳洲北部地方。種子の粉末より越幾斯(ま)又は丁機(ま)を製し、胃加答兒及び神經麻痺に用ひ、又、鼠大などを毒殺するに足る。ばんぼくべつ。ばんぼくべつ。

商店。太平記「その邊の町屋へ人を行ら
かし、錢五十文を以て、續松(つぎ)を十把買
ひて」

まちやくた待屋形「名」徳川時代に、賃
貸せし屋形船。まちこさぶね。
まちやく町役「名」次條の略。織置い
やといはれぬ祝言振舞、町役の野送に
は、出ぬ事成りがたし」

まちやくにん町役人「名」ちややくにん
(町役人)に同じ。

まちやくば町役場町役場「名」ちややく
くば(町役場)に同じ。

まちやくま町屋敷「名」町奉行一手
の支配に屬する地域。まちなみやしき(町並
屋敷)參照。寺院の境内にありて、
その所有に屬し、町役のみを出だす屋敷
地。まちなみやしき町並屋敷參照。

まちやくすまひ町屋住「名」町屋に住む
こと。織置浪人の町屋住(まひ)に
同じ。旗本奴(まひ)に對して

まちやくど町宿「名」町の旅宿。町にある
宿屋。一代男紅毛(まひ)は、出島(まひ)に呼
で戯れ、上方の町宿(まひ)も、自由に取寄せ」

まちゆうこ眞中古「名」文永年間、第二
世加藤藤四郎の製出せる瀬戸焼。多くは
茶壺にして、まづ茶褐色の釉を施し、上に
黄色の釉を施す。土は鼠、淺黄、白薄など
と數種あり。釉は通常柿黒にして、中に
は黄あり、青あり、黄なるは、黄瀬戸と
呼ぶ。(古瀬戸(まひ)に對して)

まちよき魔女「名」女の惡魔。

まちよき町與力「名」町奉行の屬僚
なる與力。米金の出納、戸籍の整理、及び
關所、過料などに關する事務に従ひ、又、
常に市中を巡廻して、非常を警戒し、不良
を逮捕し、及び世上の風説、異聞等を内偵
して、奉行に報告することを掌りしもの。

まちよき待鑑「名」出来合(まひ)の賣
物の鑑。接頭語のまち待參照。

まちよき待駒「名」待ち駒(まひ)の賣
物。接頭語のまち待參照。

まちよき待ち駒「名」待ち駒(まひ)の賣
物。接頭語のまち待參照。

まちよき待ち駒「名」待ち駒(まひ)の賣
物。接頭語のまち待參照。

まちよき待ち駒「名」待ち駒(まひ)の賣
物。接頭語のまち待參照。

づよき間切「名」まきり(間切)に同じ。
まちれい町禮「名」徳川時代に、家屋
敷の賣買ありたる時、名主の指圖にて、そ
の町内に、謝禮として出ださしめたる金
錢、物品。

まちわたり待渡「名」長き間待
まちわたり待佐「名」形(まひ)待ちわびて
あり。まちどほし。若風俗(若馬(まひ)は、
待佐しく、袖を枕に夢見かかる時」

まちわび待佐「名」待渡(まひ)待佐しき
に、心疲る。まちあぐむ。

まちわり町割「名」町の區劃。「畫
まちろ町繪「名」町繪師の書きたる繪
まちろ町繪師「名」徳川時代に、幕
府、大名などの保護を受けず、民間にあり
て、繪畫を職業とせし者。

まちをけ待桶「名」清酒及び醬油の醗
醗を一時その醗酵桶より小出(まひ)する
桶。こだしをけ。

まつ松「名」植松科松屬の植物の
總稱。赤松、黒松、五葉松、朝鮮松、蝦
夷松、松富土松、假松、根松、姫小
松など、種類多し。あさみぎさ。いろなぐ
さ。おきなぐさ。くもりぐさ。ことひきぐ
さ。すずくれぐさ。たむけぐさ。ちえぐさ。
ちよぎ。ちよぐさ。ちよみぐさ。ときばぐ
さ。ときみぐさ。ちよよぐさ。とはれぐさ。
ねざめぐさ。はつみぐさ。はつよぐさ。
ひきまぐさ。ひきみぐさ。みやこぐさ。
めざましぐさ。ものみぐさ。ももぐさ。
ゆふかけぐさ。ゆふみぐさ。をりみぐさ。

まつ松「名」植松科松屬の植物の
總稱。赤松、黒松、五葉松、朝鮮松、蝦
夷松、松富土松、假松、根松、姫小
松など、種類多し。あさみぎさ。いろなぐ
さ。おきなぐさ。くもりぐさ。ことひきぐ
さ。すずくれぐさ。たむけぐさ。ちえぐさ。
ちよぎ。ちよぐさ。ちよみぐさ。ときばぐ
さ。ときみぐさ。ちよよぐさ。とはれぐさ。
ねざめぐさ。はつみぐさ。はつよぐさ。
ひきまぐさ。ひきみぐさ。みやこぐさ。
めざましぐさ。ものみぐさ。ももぐさ。
ゆふかけぐさ。ゆふみぐさ。をりみぐさ。

まつ松「名」植松科松屬の植物の
總稱。赤松、黒松、五葉松、朝鮮松、蝦
夷松、松富土松、假松、根松、姫小
松など、種類多し。あさみぎさ。いろなぐ
さ。おきなぐさ。くもりぐさ。ことひきぐ
さ。すずくれぐさ。たむけぐさ。ちえぐさ。
ちよぎ。ちよぐさ。ちよみぐさ。ときばぐ
さ。ときみぐさ。ちよよぐさ。とはれぐさ。
ねざめぐさ。はつみぐさ。はつよぐさ。
ひきまぐさ。ひきみぐさ。みやこぐさ。
めざましぐさ。ものみぐさ。ももぐさ。
ゆふかけぐさ。ゆふみぐさ。をりみぐさ。

まつ松「名」植松科松屬の植物の
總稱。赤松、黒松、五葉松、朝鮮松、蝦
夷松、松富土松、假松、根松、姫小
松など、種類多し。あさみぎさ。いろなぐ
さ。おきなぐさ。くもりぐさ。ことひきぐ
さ。すずくれぐさ。たむけぐさ。ちえぐさ。
ちよぎ。ちよぐさ。ちよみぐさ。ときばぐ
さ。ときみぐさ。ちよよぐさ。とはれぐさ。
ねざめぐさ。はつみぐさ。はつよぐさ。
ひきまぐさ。ひきみぐさ。みやこぐさ。
めざましぐさ。ものみぐさ。ももぐさ。
ゆふかけぐさ。ゆふみぐさ。をりみぐさ。

まつ松「名」植松科松屬の植物の
總稱。赤松、黒松、五葉松、朝鮮松、蝦
夷松、松富土松、假松、根松、姫小
松など、種類多し。あさみぎさ。いろなぐ
さ。おきなぐさ。くもりぐさ。ことひきぐ
さ。すずくれぐさ。たむけぐさ。ちえぐさ。
ちよぎ。ちよぐさ。ちよみぐさ。ときばぐ
さ。ときみぐさ。ちよよぐさ。とはれぐさ。
ねざめぐさ。はつみぐさ。はつよぐさ。
ひきまぐさ。ひきみぐさ。みやこぐさ。
めざましぐさ。ものみぐさ。ももぐさ。
ゆふかけぐさ。ゆふみぐさ。をりみぐさ。

まつ松「名」植松科松屬の植物の
總稱。赤松、黒松、五葉松、朝鮮松、蝦
夷松、松富土松、假松、根松、姫小
松など、種類多し。あさみぎさ。いろなぐ
さ。おきなぐさ。くもりぐさ。ことひきぐ
さ。すずくれぐさ。たむけぐさ。ちえぐさ。
ちよぎ。ちよぐさ。ちよみぐさ。ときばぐ
さ。ときみぐさ。ちよよぐさ。とはれぐさ。
ねざめぐさ。はつみぐさ。はつよぐさ。
ひきまぐさ。ひきみぐさ。みやこぐさ。
めざましぐさ。ものみぐさ。ももぐさ。
ゆふかけぐさ。ゆふみぐさ。をりみぐさ。

まつ松「名」植松科松屬の植物の
總稱。赤松、黒松、五葉松、朝鮮松、蝦
夷松、松富土松、假松、根松、姫小
松など、種類多し。あさみぎさ。いろなぐ
さ。おきなぐさ。くもりぐさ。ことひきぐ
さ。すずくれぐさ。たむけぐさ。ちえぐさ。
ちよぎ。ちよぐさ。ちよみぐさ。ときばぐ
さ。ときみぐさ。ちよよぐさ。とはれぐさ。
ねざめぐさ。はつみぐさ。はつよぐさ。
ひきまぐさ。ひきみぐさ。みやこぐさ。
めざましぐさ。ものみぐさ。ももぐさ。
ゆふかけぐさ。ゆふみぐさ。をりみぐさ。

まつ松「名」植松科松屬の植物の
總稱。赤松、黒松、五葉松、朝鮮松、蝦
夷松、松富土松、假松、根松、姫小
松など、種類多し。あさみぎさ。いろなぐ
さ。おきなぐさ。くもりぐさ。ことひきぐ
さ。すずくれぐさ。たむけぐさ。ちえぐさ。
ちよぎ。ちよぐさ。ちよみぐさ。ときばぐ
さ。ときみぐさ。ちよよぐさ。とはれぐさ。
ねざめぐさ。はつみぐさ。はつよぐさ。
ひきまぐさ。ひきみぐさ。みやこぐさ。
めざましぐさ。ものみぐさ。ももぐさ。
ゆふかけぐさ。ゆふみぐさ。をりみぐさ。

まつ松「名」植松科松屬の植物の
總稱。赤松、黒松、五葉松、朝鮮松、蝦
夷松、松富土松、假松、根松、姫小
松など、種類多し。あさみぎさ。いろなぐ
さ。おきなぐさ。くもりぐさ。ことひきぐ
さ。すずくれぐさ。たむけぐさ。ちえぐさ。
ちよぎ。ちよぐさ。ちよみぐさ。ときばぐ
さ。ときみぐさ。ちよよぐさ。とはれぐさ。
ねざめぐさ。はつみぐさ。はつよぐさ。
ひきまぐさ。ひきみぐさ。みやこぐさ。
めざましぐさ。ものみぐさ。ももぐさ。
ゆふかけぐさ。ゆふみぐさ。をりみぐさ。

まつ松「名」植松科松屬の植物の
總稱。赤松、黒松、五葉松、朝鮮松、蝦
夷松、松富土松、假松、根松、姫小
松など、種類多し。あさみぎさ。いろなぐ
さ。おきなぐさ。くもりぐさ。ことひきぐ
さ。すずくれぐさ。たむけぐさ。ちえぐさ。
ちよぎ。ちよぐさ。ちよみぐさ。ときばぐ
さ。ときみぐさ。ちよよぐさ。とはれぐさ。
ねざめぐさ。はつみぐさ。はつよぐさ。
ひきまぐさ。ひきみぐさ。みやこぐさ。
めざましぐさ。ものみぐさ。ももぐさ。
ゆふかけぐさ。ゆふみぐさ。をりみぐさ。

けしき、昨日に變りたりとは見えねど、
大路のさま、松立てわたして」松
の位(まひ)の略。曾我會稽山五十餘人の松の
中、手管の上手め」

松の泡雪「名」松の枝・葉につも
れる泡雪。新葉かつ消えて庭には跡も
なかりけり空に亂るる松の泡雪」

松の石「名」松の木の化石。
松の岩根「名」松の木の根の、岩のご
とき姿を呈せるもの。新後撰「住吉の
松の岩根を枕にて敷津(まひ)の浦の月を
見るかな」

松の庵「名」松の木の下の、又は傍に
ある庵。新拾遺「筑波嶺の裾わの田居の
松のいほこのもかのもに烟立つなり」

松の庵「名」松の木の下の、又は傍に
ある庵。新拾遺「筑波嶺の裾わの田居の
松のいほこのもかのもに烟立つなり」

松の庵「名」松の木の下の、又は傍に
ある庵。新拾遺「筑波嶺の裾わの田居の
松のいほこのもかのもに烟立つなり」

松の庵「名」松の木の下の、又は傍に
ある庵。新拾遺「筑波嶺の裾わの田居の
松のいほこのもかのもに烟立つなり」

松の庵「名」松の木の下の、又は傍に
ある庵。新拾遺「筑波嶺の裾わの田居の
松のいほこのもかのもに烟立つなり」

松の庵「名」松の木の下の、又は傍に
ある庵。新拾遺「筑波嶺の裾わの田居の
松のいほこのもかのもに烟立つなり」

松の庵「名」松の木の下の、又は傍に
ある庵。新拾遺「筑波嶺の裾わの田居の
松のいほこのもかのもに烟立つなり」

松の庵「名」松の木の下の、又は傍に
ある庵。新拾遺「筑波嶺の裾わの田居の
松のいほこのもかのもに烟立つなり」

松の庵「名」松の木の下の、又は傍に
ある庵。新拾遺「筑波嶺の裾わの田居の
松のいほこのもかのもに烟立つなり」

松の庵「名」松の木の下の、又は傍に
ある庵。新拾遺「筑波嶺の裾わの田居の
松のいほこのもかのもに烟立つなり」

松の庵「名」松の木の下の、又は傍に
ある庵。新拾遺「筑波嶺の裾わの田居の
松のいほこのもかのもに烟立つなり」

松の庵「名」松の木の下の、又は傍に
ある庵。新拾遺「筑波嶺の裾わの田居の
松のいほこのもかのもに烟立つなり」

松の潜(まひ)りやうが足らぬ「名」
「松を潜(まひ)る」を見よ」年若くして、
經驗足らず。

松の位「名」「じょうしちや(松殿)たいふ
(大夫)翁を見よ」五位の官人の異
稱。「たいふ大夫」に同じ。生玉心中
「大夫の威勢備はりて、…情の縁はび
こりて、松の位と譬へられしも、憎か
らず」

松の煙「名」松を焚く煙。
松明「名」煙。其庭火のけぶり、細う
のほりたるに、…大きな木のもと
車立てたれば、松のけぶりたなびきて」

松明「名」煙。其庭火のけぶり、細う
のほりたるに、…大きな木のもと
車立てたれば、松のけぶりたなびきて」

松明「名」煙。其庭火のけぶり、細う
のほりたるに、…大きな木のもと
車立てたれば、松のけぶりたなびきて」

松明「名」煙。其庭火のけぶり、細う
のほりたるに、…大きな木のもと
車立てたれば、松のけぶりたなびきて」

松明「名」煙。其庭火のけぶり、細う
のほりたるに、…大きな木のもと
車立てたれば、松のけぶりたなびきて」

松明「名」煙。其庭火のけぶり、細う
のほりたるに、…大きな木のもと
車立てたれば、松のけぶりたなびきて」

松明「名」煙。其庭火のけぶり、細う
のほりたるに、…大きな木のもと
車立てたれば、松のけぶりたなびきて」

松明「名」煙。其庭火のけぶり、細う
のほりたるに、…大きな木のもと
車立てたれば、松のけぶりたなびきて」

松明「名」煙。其庭火のけぶり、細う
のほりたるに、…大きな木のもと
車立てたれば、松のけぶりたなびきて」

松明「名」煙。其庭火のけぶり、細う
のほりたるに、…大きな木のもと
車立てたれば、松のけぶりたなびきて」

松明「名」煙。其庭火のけぶり、細う
のほりたるに、…大きな木のもと
車立てたれば、松のけぶりたなびきて」

松明「名」煙。其庭火のけぶり、細う
のほりたるに、…大きな木のもと
車立てたれば、松のけぶりたなびきて」

松明「名」煙。其庭火のけぶり、細う
のほりたるに、…大きな木のもと
車立てたれば、松のけぶりたなびきて」

まつ

つのとぼそ。新古今山深み春とも知らぬ松の月にたえだえかかる雪の玉水」
 「松の門」に同じ。高曲光松「年のはもりの松の月に、春を迎へて、忽に」
 松の十返(り)。「句」十返(り)の花」を見よ。榮花「住吉の神のしるしに君が代は松の十かへり生ひかほるまで」
 松の辰(み)。「句」「松の戸」に同じ。拾玉「心をや御法(り)の水に洗ふらんひとり涼しき松のとぎしに」
 松の扉。「句」前條に同じ。月齋降りててて雪消えぬとも君が代をまつのとびらはなほ尋ねみよ」
 松の樞(き)。「句」前條に同じ。源氏「奥山の松のとほそを稀にあけてまだ見ぬ花の顔を見るかな」
 松の葉。「句」松の木の葉。まつば。「志は松の葉」を見よ。贈物の包紙の上などに、寸志の意を表すために記す語。
 松の花。「句」松に咲く花。「松は十年(一説に百年)に一回花咲くといふより、祝ひていふ語。「十返(り)の花」参照。金葉雪つもる年のしるしにいとどしく千とせの松の花咲くぞ見る」
 「植」まつだけ(松茸)の異稱。
 松の響。「句」松の音(り)に同じ。源氏「變らじと契りしことをたのみにて松のひびきに音(り)を添へしかな」
 松のふぐり。「句」まつふぐり(松茸)に同じ。醒睡亭橋立の松のふぐりも入海の波もてぬらす文殊じりかな」
 松の藤波(つ)。「句」松の木に懸りまがれる藤の花。續拾遺「春日山祈りの末の世世かけて昔變らぬ松の藤なみ」
 松の筆。「句」軸を松の枝にて造りたる筆。
 松の雪。「句」松の枝・葉につもれる雪。古今山には松の雪だに消えなくに都は野邊の若菜摘みけり」
 「製」まつ(る)の色の目。表は白、裏は青。冬季に用ふ。
 松の齡(い)。「句」松の生えてより枯

まつ

るるまでの、長く久しき年數。續古今「二葉より松のよはひを思ふには今日ぞ千とせの始とは見る」
 松は寸にして、棟梁の機あり。「句」梅檀は二葉より香しに同じ。「諺語」松は二葉より棟梁の思あり。「句」前條に同じ。「相手の言葉に氣にとめぬ響。空吹く風。一代女松吹く風にあしらひ、大かたの事は、返事もせず」
 松を瀆(ら)る。「句」門松の下をくぐる義。新年ごとに、年齢加はる。「松の滑りやうが足らぬ」参照。
 松を結ぶ。「句」むすびまつ(結松)を見よ。蕪葉磐代(り)の濱松が枝を引結び眞幸(り)くあらばまた歸り見む」
 「た(り)の松」。「句」能舞臺の周圍なる白洲(り)の一部橋懸(り)の前面に植ゑたる三本の若松の内、舞臺に最も近きもの。その二本目のを二の松、三本目のを三の松と呼ぶ。そですりまつ」
 「三(り)の松」。「句」前條を見よ。
 「二(り)の松」。「句」前條を見よ。
 「風(り)の松」。「句」能舞臺の橋懸の前に植ゑたる第二の松。
 まつ 末(名)こまかき粉。細末。粉末。
 まつ 待つ「動四他」。「まつたくを見よ」
 物事の來らんことを望む。「松つ・待つ」
 「來るべき物事を迎へ、又は捕へなどせむがために、用意を整へおく。駕字陀のたかきに鳴わぬ張るわがまつや鳴はさやらす」
 「待つ。資(る)る。「俟つ・待つ」
 「相俟つてその用をなす」
 「四落ひ置きて、後日の用に立たしむ」
 「その必要あるをいふ。須(な)ふ。「須つ」説明を須たすして明かす。あひしらふ。待遇す。
 待たるる内が花。「句」はな(花)内を見よ。「諺語」八笑人「謂はゆる下手(り)の長咄、御見物の吹(り)を恐れ待たるる内が花唇(り)と、毫(り)を置くこと五年」
 待たるるとも、待つ身になるな。「句」

まつ

人を待ちて、待ちあぐむつらさをいふ。「諺語」
 待たるる身より待つ身。「句」前條の略。「諺語」高曲(恒)「露衣」待たるる身より待つ身の譬」
 待つ内が花。「句」物事は、結果如何にと豫想し居る間が、最も樂し。「諺語」待つてみました。「句」演藝などにて、人氣ある者の出場する時見物人の呼ぶ掛聲。
 待つ身は長いもの。「句」待たるるとも、待つ身になるなと同じ。「諺語」
 待つ身より待たるる身。「句」人に待たるる身は、待つ身より却りて心苦し。「諺語」
 待つて暮せど。「句」いかに待ち暮し待てば海路(り)の日和(り)あり「句」次條の略。「諺語」
 待てば海路(り)の日和(り)あり「句」次條の略。「諺語」
 待てば海路(り)の日和(り)あり「句」次條の略。「諺語」
 「待てば甘露の日和あり」の轉訛。「諺語」
 待てば甘露の食を得る。「句」次條に同じ。「諺語」
 待てば甘露の日和(り)あり「句」次條の略。「諺語」
 待てば甘露の日和(り)あり「句」次條の略。「諺語」
 待てば甘露の日和(り)あり「句」次條の略。「諺語」
 命も到來す。「諺語」
 まつ 眞「接頭」ま(眞)の音便。「まつ返」
 まつ 先づ「副」ま(眞)の音便。「まつ返」
 まつ 先づ「副」ま(眞)の音便。「まつ返」
 まつ 先づ「副」ま(眞)の音便。「まつ返」
 まつ 先づ「副」ま(眞)の音便。「まつ返」
 まつ 先づ「副」ま(眞)の音便。「まつ返」
 まつ 先づ「副」ま(眞)の音便。「まつ返」
 まつ 先づ「副」ま(眞)の音便。「まつ返」
 まつ 先づ「副」ま(眞)の音便。「まつ返」
 まつ 先づ「副」ま(眞)の音便。「まつ返」

まつ

陰道第一の都會。松平氏の舊藩地。
 まつえい 末裔(名)ころえい(後裔)に同じ。
 まつえがみ 松江紙(名)出雲國松江藩祖松平直政の、舊封越前より、製紙工を徴して製出しし紙。
 まつえしげよし 松江重頼(名)「八」まつえし(松江維舟)に同じ。
 まつえしんじや 松江神社(名)出雲國松江市殿町城山に鎮坐せる神社。祭神は藩祖松平直政にして、徳川家康(直政の祖父)を配祀す。
 まつえじやう 松江城(名)出雲國八束(り)郡法吉(り)村大字末次(り)にありし城。もと末次氏の居城なりしが、その滅亡と共に廢城となりしが、慶長五年、堀尾氏、遠江國濱松より轉封後、修築し、次いで、京極高知、越前國小濱(り)より轉じて、入城し、その除封の後を承けて、松平越前宰相忠直の少子直政の治城となり、子孫相續きて、明治維新に及ぶ。本丸の址は、今、公園たり。一名、千鳥城。
 まつえだべり 松江田縁(名)濃き紺色にて、上等なる墨ベリ。
 まつえふ 末葉(名)末の時代。末期。ばつえふ(初葉・中葉に對して)
 まつえおひじやう 松江稚舟(名)「人」俳人名は重頼、通稱は大文字屋治右衛門、別號、腐俳子、乳父子。稚舟は晩年難髮後の號、又江翁と稱し、法橋に敘せらる。京都に住し、松江立徳の門に於て、俳諧を學ぶ。性狷介、嘗て立門・正式・貞實と争ひ、貞徳の門を退きて、里村懷惠庵の門に轉じ、進歌を學ぶ。延寶八年歿す。年七十四。毛吹草、犬子集等、著書多し。
 まつ 赤(名)ま(眞)は接頭語。全く赤きこと。まあか。
 眞赤な。「句」虚言なることの全く明かなる意。「まっかな噂(り)」
 眞赤になる。「名」血だらけになる。
 「眞赤なる顔の色が眞赤になる。「眞赤(り)になる」参照。

まつえい 末裔(名)ころえい(後裔)に同じ。
 まつえがみ 松江紙(名)出雲國松江藩祖松平直政の、舊封越前より、製紙工を徴して製出しし紙。
 まつえしげよし 松江重頼(名)「八」まつえし(松江維舟)に同じ。
 まつえしんじや 松江神社(名)出雲國松江市殿町城山に鎮坐せる神社。祭神は藩祖松平直政にして、徳川家康(直政の祖父)を配祀す。
 まつえじやう 松江城(名)出雲國八束(り)郡法吉(り)村大字末次(り)にありし城。もと末次氏の居城なりしが、その滅亡と共に廢城となりしが、慶長五年、堀尾氏、遠江國濱松より轉封後、修築し、次いで、京極高知、越前國小濱(り)より轉じて、入城し、その除封の後を承けて、松平越前宰相忠直の少子直政の治城となり、子孫相續きて、明治維新に及ぶ。本丸の址は、今、公園たり。一名、千鳥城。
 まつえだべり 松江田縁(名)濃き紺色にて、上等なる墨ベリ。
 まつえふ 末葉(名)末の時代。末期。ばつえふ(初葉・中葉に對して)
 まつえおひじやう 松江稚舟(名)「人」俳人名は重頼、通稱は大文字屋治右衛門、別號、腐俳子、乳父子。稚舟は晩年難髮後の號、又江翁と稱し、法橋に敘せらる。京都に住し、松江立徳の門に於て、俳諧を學ぶ。性狷介、嘗て立門・正式・貞實と争ひ、貞徳の門を退きて、里村懷惠庵の門に轉じ、進歌を學ぶ。延寶八年歿す。年七十四。毛吹草、犬子集等、著書多し。
 まつ 赤(名)ま(眞)は接頭語。全く赤きこと。まあか。
 眞赤な。「句」虚言なることの全く明かなる意。「まっかな噂(り)」
 眞赤になる。「名」血だらけになる。
 「眞赤なる顔の色が眞赤になる。「眞赤(り)になる」参照。

「古語」萬葉玉ぼこの道をた遠み間使もやる由もなし」
まつかふ真甲 [名] ま、かろ (真向) に同
まつかふくちら真甲鯨 [名] 「動」ま、か
ろ (真) (抹香鯨) に同じ。

まつかか (ま) 真反様 [名] 「ま」 (真) は
接頭語「全」のかへさま。正反對。御所
櫻「即ち剃いだその人にまつかか様の物
語さかしきこらへて、郷右衛門」

まつかへり [名] し (誣) に掛けていふ。
その理由詳かならねど、松變 (マツ) の義に
て、松は變らぬ例に引かるものなるを、
變りといひて掛けたるかといふ。萬葉ま
つかへりしひにてあれかもさ山田のをち
がその日に求めあはずけむ」

まつかみ 松紙 [名] 松葉色に染めたる
紙。紫褐色の色紙……青紙松がみ。
筆など積みて」

まつかをか 松岡 [名] 「地」相摸國鎌倉に
ある地。ららら (東慶寺) 参照。柳藤縁
をふと切つてから待つ松が岡」

まつかき 松木 [名] 松の木。五人女 (眼) (一)
赤筋立って、光強く、足、手そのまま松
木に赤としく」

まつかき 眞黄 [名] ま、きいろ (眞黄色) に
同じ。犬筑波歸るさの小尻を見ればまっ
きにて (ま) いろ (ま) じわの附ける貂 (一)
の皮」

まつかき 末期 [名] すゑの時期。終の時
時。ばつき」

まつかき 末季 [名] すゑの時期。終りの
時。ばつき」

まつかき 末枝 [名] 枝葉の技藝。即ち茶
香活花 (マ) など、すべて、學問以外の技
藝。ばつき。末藝。藤「文章は彫蟲の末枝」

まつかき 眞搗眞春 [名] 片搗の麥を日に
乾かし、又水を掛けて再び搗くこと、又そ
の搗方の麥。一代男遺手に小麥を遣れと
云はしやつたによつて、眞春にして、二依
まで、今日も運ばせ」

まつかき (獨) Mages [名] 獨逸にて、我國
の醬油のごとくに用ふる調味料。
まつかき 眞黄色 [名] 眞の黄色。純
黄色。まつき。

まつぎ たんだん 松木淡淡 [名] 「人」俳
人。大阪の人。幼名は熊之助、後、傳七と
改む。半時庵。勃察翁呂嗣。曲淵。渭北三
楊百川等の別號あり。江戸に出て、其
角 (一) 門下となり、遂に一家を成し、後
京師に移りて、半時庵を祇園南林下河原
 (一) 蜀水の邊に結び、俳名都下に開ゆ
享保中、大阪に歸りて、亦同地俳壇の雄
鎮となり、寶曆十一年歿す。年八十八。點
料によりて、歸修を極めたり」

まつぎ さん 抹金鏤 [名] 漆を塗りたる
面に、金の鏤粉 (マ) を蒔きて、畫模様を作
り、再び漆を塗り、その模様を磨き出し
し、古代の蒔繪。今の平 (マ) 蒔繪に似た
り」

まつぎ 眞暗 [名] ま、くろ (眞暗) を云ふ
こと多きよりいふなるべし」 (一) 眞暗 (一)
に同じ。

まつぎ くすみ 眞くすみ [名] ま、くすみ (眞
くすみ) の音便。竹筒 (マ) いかにも陽氣に
構へて、まくくすみにをり、綿子の頭巾を
かぶり、扇を鳴し、漉面 (マ) を作りて」

まつぎ 眞直にくだすこと。堀河渡上 (一) ち
ば突かんと云ふまに、眞くくだしにぞ
突きかかると」

まつぎ 眞直にくだすこと。堀河渡上 (一) ち
ば突かんと云ふまに、眞くくだしにぞ
突きかかると」

まつぎ 眞直にくだすこと。堀河渡上 (一) ち
ば突かんと云ふまに、眞くくだしにぞ
突きかかると」

まつぎ 眞直にくだすこと。堀河渡上 (一) ち
ば突かんと云ふまに、眞くくだしにぞ
突きかかると」

まつぎ 眞直にくだすこと。堀河渡上 (一) ち
ば突かんと云ふまに、眞くくだしにぞ
突きかかると」

まつぎ 眞直にくだすこと。堀河渡上 (一) ち
ば突かんと云ふまに、眞くくだしにぞ
突きかかると」

まつぎ 眞直にくだすこと。堀河渡上 (一) ち
ば突かんと云ふまに、眞くくだしにぞ
突きかかると」

まつぎ 眞直にくだすこと。堀河渡上 (一) ち
ば突かんと云ふまに、眞くくだしにぞ
突きかかると」

まつぎ 眞直にくだすこと。堀河渡上 (一) ち
ば突かんと云ふまに、眞くくだしにぞ
突きかかると」

まつぎ 眞直にくだすこと。堀河渡上 (一) ち
ば突かんと云ふまに、眞くくだしにぞ
突きかかると」

まつぎ 眞直にくだすこと。堀河渡上 (一) ち
ば突かんと云ふまに、眞くくだしにぞ
突きかかると」

まつぎ 眞直にくだすこと。堀河渡上 (一) ち
ば突かんと云ふまに、眞くくだしにぞ
突きかかると」

まつぎ 眞直にくだすこと。堀河渡上 (一) ち
ば突かんと云ふまに、眞くくだしにぞ
突きかかると」

まつぎ 眞直にくだすこと。堀河渡上 (一) ち
ば突かんと云ふまに、眞くくだしにぞ
突きかかると」

まつぎ 眞直にくだすこと。堀河渡上 (一) ち
ば突かんと云ふまに、眞くくだしにぞ
突きかかると」

まつぎ 眞直にくだすこと。堀河渡上 (一) ち
ば突かんと云ふまに、眞くくだしにぞ
突きかかると」

まつぎ 眞直にくだすこと。堀河渡上 (一) ち
ば突かんと云ふまに、眞くくだしにぞ
突きかかると」

まつぎ 眞直にくだすこと。堀河渡上 (一) ち
ば突かんと云ふまに、眞くくだしにぞ
突きかかると」

まつぎ 眞直にくだすこと。堀河渡上 (一) ち
ば突かんと云ふまに、眞くくだしにぞ
突きかかると」

まつぎ 眞直にくだすこと。堀河渡上 (一) ち
ば突かんと云ふまに、眞くくだしにぞ
突きかかると」

まつぎ 眞直にくだすこと。堀河渡上 (一) ち
ば突かんと云ふまに、眞くくだしにぞ
突きかかると」

まつぎ 眞直にくだすこと。堀河渡上 (一) ち
ば突かんと云ふまに、眞くくだしにぞ
突きかかると」

まつぎ 眞直にくだすこと。堀河渡上 (一) ち
ば突かんと云ふまに、眞くくだしにぞ
突きかかると」

まつぎ 眞直にくだすこと。堀河渡上 (一) ち
ば突かんと云ふまに、眞くくだしにぞ
突きかかると」

まつぎ 眞直にくだすこと。堀河渡上 (一) ち
ば突かんと云ふまに、眞くくだしにぞ
突きかかると」

まつぎ 眞直にくだすこと。堀河渡上 (一) ち
ば突かんと云ふまに、眞くくだしにぞ
突きかかると」

まつぎ 眞直にくだすこと。堀河渡上 (一) ち
ば突かんと云ふまに、眞くくだしにぞ
突きかかると」

まつぎ 眞直にくだすこと。堀河渡上 (一) ち
ば突かんと云ふまに、眞くくだしにぞ
突きかかると」

まつぎ 眞直にくだすこと。堀河渡上 (一) ち
ば突かんと云ふまに、眞くくだしにぞ
突きかかると」

まつぎ 眞直にくだすこと。堀河渡上 (一) ち
ば突かんと云ふまに、眞くくだしにぞ
突きかかると」

まつぎ 眞直にくだすこと。堀河渡上 (一) ち
ば突かんと云ふまに、眞くくだしにぞ
突きかかると」

まつぎ 眞直にくだすこと。堀河渡上 (一) ち
ば突かんと云ふまに、眞くくだしにぞ
突きかかると」

まつかき

まつぎたんだん

まつぎくすみ

まつぎくすみ

まつざり

は接頭語「ま」ことの最中。まさかり。まつざかり。もな。ただな。まつざり。末造(夏)「禮記の郊特牲篇に「諸侯之有二冠禮、夏之末造也」とあり。末世に造(る)の義。まつざり(末世)に同じ。

まつざか 松坂(名)「地」伊勢國飯南(む)郡にある町。鐵道參宮線と松坂輕便鐵道線との連絡地。貨物集散の盛んなること、南伊勢の第一なり。もと徳川氏直轄の地。舊稱、青森(む)。日(地)山城國愛宕(む)郡の一部、京都より山科(む)大津等に赴く途中に當る坂。平家木實(む)賀茂川(む)と打渡り、粟田口(む)松坂にもかりけり。日(ま)まつざか(む)松坂(む)の略。日(ま)まつざかもめん(松坂木綿)の略。日(ま)まつざかもめん(松坂木綿)の略。日(ま)まつざかもめん(松坂木綿)の略。日(ま)まつざかもめん(松坂木綿)の略。

まつざか(む)松坂(む)節(む)「名」越後國に行はれ來りし、一種の俗曲。昔伊勢參宮より歸りし男の、伊勢國松坂の歌曲を覺え來りて傳へしものといひ、今も婚禮の席などにて行はる。歌(む)松坂(む)と祭文(む)松坂(む)との二種ありて、前者は小唄、後者は段物(む)なり。

まつざか(む)松坂(む)節(む)「名」越後國に行はれ來りし、一種の俗曲。昔伊勢參宮より歸りし男の、伊勢國松坂の歌曲を覺え來りて傳へしものといひ、今も婚禮の席などにて行はる。歌(む)松坂(む)と祭文(む)松坂(む)との二種ありて、前者は小唄、後者は段物(む)なり。

まつざか(む)松坂(む)節(む)「名」越後國に行はれ來りし、一種の俗曲。昔伊勢參宮より歸りし男の、伊勢國松坂の歌曲を覺え來りて傳へしものといひ、今も婚禮の席などにて行はる。歌(む)松坂(む)と祭文(む)松坂(む)との二種ありて、前者は小唄、後者は段物(む)なり。

まつざか(む)松坂(む)節(む)「名」越後國に行はれ來りし、一種の俗曲。昔伊勢參宮より歸りし男の、伊勢國松坂の歌曲を覺え來りて傳へしものといひ、今も婚禮の席などにて行はる。歌(む)松坂(む)と祭文(む)松坂(む)との二種ありて、前者は小唄、後者は段物(む)なり。

まつざか(む)松坂(む)節(む)「名」越後國に行はれ來りし、一種の俗曲。昔伊勢參宮より歸りし男の、伊勢國松坂の歌曲を覺え來りて傳へしものといひ、今も婚禮の席などにて行はる。歌(む)松坂(む)と祭文(む)松坂(む)との二種ありて、前者は小唄、後者は段物(む)なり。

まつざか(む)松坂(む)節(む)「名」越後國に行はれ來りし、一種の俗曲。昔伊勢參宮より歸りし男の、伊勢國松坂の歌曲を覺え來りて傳へしものといひ、今も婚禮の席などにて行はる。歌(む)松坂(む)と祭文(む)松坂(む)との二種ありて、前者は小唄、後者は段物(む)なり。

まつざか(む)松坂(む)節(む)「名」越後國に行はれ來りし、一種の俗曲。昔伊勢參宮より歸りし男の、伊勢國松坂の歌曲を覺え來りて傳へしものといひ、今も婚禮の席などにて行はる。歌(む)松坂(む)と祭文(む)松坂(む)との二種ありて、前者は小唄、後者は段物(む)なり。

まつざり

また回復して、需要多し。まつざかじま。まつざか。いせもめん(伊勢木綿)参照。

まつざか(む)松坂(む)屋(む)「名」伊勢國松坂にありし料理屋。舞臺(む)津より山田まで(む)の間、食物、悉く(む)籠籠(む)なり。提世古(む)の松坂屋(む)右衛門(む)て(む)酒席の料理、少し(む)よし。故に、店上、客絶ゆることなし。

まつざか(む)松坂(む)屋(む)「名」伊勢國松坂にありし料理屋。舞臺(む)津より山田まで(む)の間、食物、悉く(む)籠籠(む)なり。提世古(む)の松坂屋(む)右衛門(む)て(む)酒席の料理、少し(む)よし。故に、店上、客絶ゆることなし。

まつざか(む)松坂(む)屋(む)「名」伊勢國松坂にありし料理屋。舞臺(む)津より山田まで(む)の間、食物、悉く(む)籠籠(む)なり。提世古(む)の松坂屋(む)右衛門(む)て(む)酒席の料理、少し(む)よし。故に、店上、客絶ゆることなし。

まつざか(む)松坂(む)屋(む)「名」伊勢國松坂にありし料理屋。舞臺(む)津より山田まで(む)の間、食物、悉く(む)籠籠(む)なり。提世古(む)の松坂屋(む)右衛門(む)て(む)酒席の料理、少し(む)よし。故に、店上、客絶ゆることなし。

まつざか(む)松坂(む)屋(む)「名」伊勢國松坂にありし料理屋。舞臺(む)津より山田まで(む)の間、食物、悉く(む)籠籠(む)なり。提世古(む)の松坂屋(む)右衛門(む)て(む)酒席の料理、少し(む)よし。故に、店上、客絶ゆることなし。

まつざか(む)松坂(む)屋(む)「名」伊勢國松坂にありし料理屋。舞臺(む)津より山田まで(む)の間、食物、悉く(む)籠籠(む)なり。提世古(む)の松坂屋(む)右衛門(む)て(む)酒席の料理、少し(む)よし。故に、店上、客絶ゆることなし。

まつざか(む)松坂(む)屋(む)「名」伊勢國松坂にありし料理屋。舞臺(む)津より山田まで(む)の間、食物、悉く(む)籠籠(む)なり。提世古(む)の松坂屋(む)右衛門(む)て(む)酒席の料理、少し(む)よし。故に、店上、客絶ゆることなし。

まつざか(む)松坂(む)屋(む)「名」伊勢國松坂にありし料理屋。舞臺(む)津より山田まで(む)の間、食物、悉く(む)籠籠(む)なり。提世古(む)の松坂屋(む)右衛門(む)て(む)酒席の料理、少し(む)よし。故に、店上、客絶ゆることなし。

まつざり

て、人より資を給せられて、昌平齋に學び、更に林述齋の家塾に入りて、佐藤一齋と切磋砥礪し、享和二年、遠江國掛川(む)藩に聘せられ、政事に參與し、文化八年、朝鮮使節の來朝するや、林祭酒に從ひて、應接す。江戸城西羽澤(む)村に隱棲し、弘化元年歿す。年七十四。

まつざか(む)松坂(む)屋(む)「名」伊勢國松坂にありし料理屋。舞臺(む)津より山田まで(む)の間、食物、悉く(む)籠籠(む)なり。提世古(む)の松坂屋(む)右衛門(む)て(む)酒席の料理、少し(む)よし。故に、店上、客絶ゆることなし。

まつざか(む)松坂(む)屋(む)「名」伊勢國松坂にありし料理屋。舞臺(む)津より山田まで(む)の間、食物、悉く(む)籠籠(む)なり。提世古(む)の松坂屋(む)右衛門(む)て(む)酒席の料理、少し(む)よし。故に、店上、客絶ゆることなし。

まつざか(む)松坂(む)屋(む)「名」伊勢國松坂にありし料理屋。舞臺(む)津より山田まで(む)の間、食物、悉く(む)籠籠(む)なり。提世古(む)の松坂屋(む)右衛門(む)て(む)酒席の料理、少し(む)よし。故に、店上、客絶ゆることなし。

まつざか(む)松坂(む)屋(む)「名」伊勢國松坂にありし料理屋。舞臺(む)津より山田まで(む)の間、食物、悉く(む)籠籠(む)なり。提世古(む)の松坂屋(む)右衛門(む)て(む)酒席の料理、少し(む)よし。故に、店上、客絶ゆることなし。

まつざか(む)松坂(む)屋(む)「名」伊勢國松坂にありし料理屋。舞臺(む)津より山田まで(む)の間、食物、悉く(む)籠籠(む)なり。提世古(む)の松坂屋(む)右衛門(む)て(む)酒席の料理、少し(む)よし。故に、店上、客絶ゆることなし。

まつざか(む)松坂(む)屋(む)「名」伊勢國松坂にありし料理屋。舞臺(む)津より山田まで(む)の間、食物、悉く(む)籠籠(む)なり。提世古(む)の松坂屋(む)右衛門(む)て(む)酒席の料理、少し(む)よし。故に、店上、客絶ゆることなし。

まつざか(む)松坂(む)屋(む)「名」伊勢國松坂にありし料理屋。舞臺(む)津より山田まで(む)の間、食物、悉く(む)籠籠(む)なり。提世古(む)の松坂屋(む)右衛門(む)て(む)酒席の料理、少し(む)よし。故に、店上、客絶ゆることなし。

まつざか(む)松坂(む)屋(む)「名」伊勢國松坂にありし料理屋。舞臺(む)津より山田まで(む)の間、食物、悉く(む)籠籠(む)なり。提世古(む)の松坂屋(む)右衛門(む)て(む)酒席の料理、少し(む)よし。故に、店上、客絶ゆることなし。

まつざり

事件。末節。まつざり。末寺(名)「ま」ま(む)し(む)や(む)末社(む)を見よ。本寺に屬する寺。本山の支配下に立つ寺。直(む)末寺(む)孫(む)末寺(む)曾孫(む)末寺等の別あり。

まつざり(む)末寺(む)「名」ま(む)ま(む)し(む)や(む)末社(む)を見よ。本寺に屬する寺。本山の支配下に立つ寺。直(む)末寺(む)孫(む)末寺(む)曾孫(む)末寺等の別あり。

まつざり(む)末寺(む)「名」ま(む)ま(む)し(む)や(む)末社(む)を見よ。本寺に屬する寺。本山の支配下に立つ寺。直(む)末寺(む)孫(む)末寺(む)曾孫(む)末寺等の別あり。

まつざり(む)末寺(む)「名」ま(む)ま(む)し(む)や(む)末社(む)を見よ。本寺に屬する寺。本山の支配下に立つ寺。直(む)末寺(む)孫(む)末寺(む)曾孫(む)末寺等の別あり。

まつざり(む)末寺(む)「名」ま(む)ま(む)し(む)や(む)末社(む)を見よ。本寺に屬する寺。本山の支配下に立つ寺。直(む)末寺(む)孫(む)末寺(む)曾孫(む)末寺等の別あり。

まつざり(む)末寺(む)「名」ま(む)ま(む)し(む)や(む)末社(む)を見よ。本寺に屬する寺。本山の支配下に立つ寺。直(む)末寺(む)孫(む)末寺(む)曾孫(む)末寺等の別あり。

まつざり(む)末寺(む)「名」ま(む)ま(む)し(む)や(む)末社(む)を見よ。本寺に屬する寺。本山の支配下に立つ寺。直(む)末寺(む)孫(む)末寺(む)曾孫(む)末寺等の別あり。

まつざり(む)末寺(む)「名」ま(む)ま(む)し(む)や(む)末社(む)を見よ。本寺に屬する寺。本山の支配下に立つ寺。直(む)末寺(む)孫(む)末寺(む)曾孫(む)末寺等の別あり。

まつざり(む)末寺(む)「名」ま(む)ま(む)し(む)や(む)末社(む)を見よ。本寺に屬する寺。本山の支配下に立つ寺。直(む)末寺(む)孫(む)末寺(む)曾孫(む)末寺等の別あり。

類の治世の豊穡なりしは、主として、その感化に本づくといふ。

まつしほ 松島松嶋 [名]「地」陸前國宮城(宮)郡松島灣内にある、無数の群島海水の浸蝕によりて生ぜしものにて、島上松樹多く、風光の美、日本三景の隨一に推さる。肥前國西彼杵(杵)郡の西北部にある島。周回、四里餘。東は僅かに一海里的海峡を隔てて、瀬戸村と相對す。西北岸に内浦灣ありて、長崎佐世保との間に、汽船の往來あり。灣頭に松島炭坑あり。田代(島)に同じ。海軍水路部の命名「まつりよら」(巖陵島)に同じ。

松島の五大観 [句]「地」次條を見よ。松島の四大観 [句]「地」松島灣内に在りて、その景勝を一陣の裡に收め得る富山(山)扇溪多門山及び大鷹森。近時、更に新富山を加へて、五大観ともいふ。

まつしまわん 松島灣、松嶋灣 [名]「地」陸前國宮城(宮)郡の東北部にあり海灣。仙臺灣の一支灣にして、灣内に松島の名勝あり。

まつしや 末社 [名]「まつじ(未寺)に似たる名稱ならんかといふ」本社に附屬せる小社の、別宮と攝社との次位にあるもの。えだがみ。えだみや。田代狂言(狂言)の一種を奏して、これを慰め、或は神應の傳達をなす。「嵐山」紅葉狩などの曲に於けるもの類。遊客を大盃といひ、大神と普通するより、本社に饗へ、太鼓持を、その末社に饗へていふ。たごもち(太鼓持)の異稱。俗「れづれ」られた末社を謂ふて、通りがけに見付けられたまつしやう 末將 [名]末位に立つ大將。まつしやう 眞正直 [名]まじしやうちまつしやうめん 眞正面 [名]まじしやうめん(眞正面)の音便。

まつしやま(り) 末社交 [名]太鼓持と一緒につきあふこと。俗「れづれ」彌七、庄右衛門都の末社交に、太夫様より(禿)。

まつじやまひ 末社舞 [名]末社(宮)の舞。まつじやまひ 秣手 [名]明治六年、陸軍の會計部に置かれて、馬草に關する事務に従事し、同年十二月廢止せられた陸軍卒。まつじよ 末書 [名]註釋の書籍。諸書本平記、四書の本書。

まつじろ 松代 [名]「地」信濃國埴科(埴)郡にある町。長野市より三十里十町。眞田(田)氏の舊藩地。舊稱、海津(津)。明治の初年設置の縣の一。四年七月、信濃國舊松代藩の地に立てしもの。同年十一月、長野縣に入る。「便」。

まつじろ 眞白 [名]まじろ(眞白)の音。まつじろ 眞白 [名]まじろ(眞白)の音。まつじろ 眞白 [名]まじろ(眞白)の音。

まつじろ 眞白 [名]まじろ(眞白)の音。まつじろ 眞白 [名]まじろ(眞白)の音。まつじろ 眞白 [名]まじろ(眞白)の音。

まつじろ 眞白 [名]まじろ(眞白)の音。まつじろ 眞白 [名]まじろ(眞白)の音。まつじろ 眞白 [名]まじろ(眞白)の音。

まつじろ 眞白 [名]まじろ(眞白)の音。まつじろ 眞白 [名]まじろ(眞白)の音。まつじろ 眞白 [名]まじろ(眞白)の音。

まつじろ 眞白 [名]まじろ(眞白)の音。まつじろ 眞白 [名]まじろ(眞白)の音。まつじろ 眞白 [名]まじろ(眞白)の音。

まつじろ 眞白 [名]まじろ(眞白)の音。まつじろ 眞白 [名]まじろ(眞白)の音。まつじろ 眞白 [名]まじろ(眞白)の音。

末世とあり」すゑの世。のちの世。ばつせい。後代。末代。未葉。まつせう 末梢 [名]まつせう(梢)に同じ。まつせう 末梢 [名]まつせう(梢)に同じ。まつせう 末梢 [名]まつせう(梢)に同じ。

まつせう 末梢 [名]まつせう(梢)に同じ。まつせう 末梢 [名]まつせう(梢)に同じ。まつせう 末梢 [名]まつせう(梢)に同じ。

まつせう 末梢 [名]まつせう(梢)に同じ。まつせう 末梢 [名]まつせう(梢)に同じ。まつせう 末梢 [名]まつせう(梢)に同じ。

まつせう 末梢 [名]まつせう(梢)に同じ。まつせう 末梢 [名]まつせう(梢)に同じ。まつせう 末梢 [名]まつせう(梢)に同じ。

まつせう 末梢 [名]まつせう(梢)に同じ。まつせう 末梢 [名]まつせう(梢)に同じ。まつせう 末梢 [名]まつせう(梢)に同じ。

まつせう 末梢 [名]まつせう(梢)に同じ。まつせう 末梢 [名]まつせう(梢)に同じ。まつせう 末梢 [名]まつせう(梢)に同じ。

まつせう 末梢 [名]まつせう(梢)に同じ。まつせう 末梢 [名]まつせう(梢)に同じ。まつせう 末梢 [名]まつせう(梢)に同じ。

とて發する語。まつて(待手)参照。まつた [接]また(又)の音便。八笑人「貴方(貴)は、……ええ、まつた、私(私)は、……」まつたい 末代 [名]まつた(世)に同じ。註「人は一代、名は末代」末記「且は末代の物語、且は當世の用心にもなれかし」佛(佛)まつせ(末世)に同じ。佛(佛)まつせ(末世)に同じ。佛(佛)まつせ(末世)に同じ。

まつたい 末代 [名]まつた(世)に同じ。まつたい 末代 [名]まつた(世)に同じ。まつたい 末代 [名]まつた(世)に同じ。

まつたい 末代 [名]まつた(世)に同じ。まつたい 末代 [名]まつた(世)に同じ。まつたい 末代 [名]まつた(世)に同じ。

まつたい 末代 [名]まつた(世)に同じ。まつたい 末代 [名]まつた(世)に同じ。まつたい 末代 [名]まつた(世)に同じ。

まつたい 末代 [名]まつた(世)に同じ。まつたい 末代 [名]まつた(世)に同じ。まつたい 末代 [名]まつた(世)に同じ。

まつたい 末代 [名]まつた(世)に同じ。まつたい 末代 [名]まつた(世)に同じ。まつたい 末代 [名]まつた(世)に同じ。

まつたい 末代 [名]まつた(世)に同じ。まつたい 末代 [名]まつた(世)に同じ。まつたい 末代 [名]まつた(世)に同じ。

まつだけ

まつだけら マツダ教 (英 Muzoism) [名] 『その善神なるアフライツタ (Ahura Mazda) の名に本づく』は『ウワハラ』(拜火教)に同じ。

まつだけすじ 松茸餅・松茸餅 (名) 餅の一種。飯をこはくたき、鹽を加へたるものと、切り茹でたる松茸とを交互に置重ね、一日貯へたる上、食するもの。

まつだけづる 松茸蔓・松茸蔓 (名) まつだけ松茸 (名) を見よ。

まつだけめじ 松茸飯・松茸飯 (名) 松茸を切り、酒・醤油などにて煮つけたるを、炊きたる飯に交ぜたるもの、又は切りたる松茸を入れ、味を附けて炊きたる飯。『茸の多く發生する山』

まつだけやま 松茸山・松茸山 (名) 松茸だけれしや 松茸列車 松茸列車 (名) 京都を中心としたる、松茸の名産地より、その産出季節に、東京方面に向けて、發送する専用の列車。

まつだけしん 松茸 (名) 『またし (全) の音便』 缺けたる處なし。揃ひてあり。十分なり。完全なり。

まつだけなま 眞直中・眞只中 (名) 『またし (眞) は接頭語』 まことのただなま。全くの中央。まんなか。もなか。平素舞ひすましたる男のまつただ中を兵 (ひ) はつと射てし。

まつだけな 松棚 (名) 床間 (マ) 書院などの脇に設くる棚の一種。

まつだけなむ 待た無し (名) 相撲云々、碁将菜などの勝負事の時、『待た』といふ語を使はず、直ちに勝負に取り掛ること。またなむ。

まつだけなみ 松田波 (名) 『またし (眞) は接頭語』 まことに平なること。

まつだけなみ 眞平 (名) 『またし (眞) は接頭語』 まことに平なること。

まつだけなみ 眞平 (名) 『またし (眞) は接頭語』 まことに平なること。

まつだり

父)より出てしものには、丹波國龜山肥前國島原豊後國杵築(名)の三藩主あり。龜山のは、三河國寶飯(名)郡形原(方原とも書く)郷に住せしことあるより、形原の松平と呼ばれ、島原のは、三河國領田(名)郡深溝城にりしことあるより、深溝の松平と呼ばれ、杵築のは、三河國領田郡能見(名)村に住せしことあるより、能見の松平と呼ばれる。又、親忠より出てしものには、三河國西尾・美濃國岩村駿河國小島(名)三藩主あり。西尾のは、三河國加茂郡荻生(名)に住せしことあるより、荻生(後、大分)と改む)の松平と呼ばれ、岩村のは、西尾の分家、小島のは、三河國加茂郡瀧脇に住せしことあるより、瀧脇の松平と呼ばれ、明治元年、瀧脇と改む。又、親忠の子長親より出てしものには、攝津國尼ヶ崎出羽國上山(名)信濃國上田(名)の三藩主あり。尼ヶ崎のは、三河國櫻井に住せしことあるより、櫻井の松平と呼ばれしが、明治に至り、櫻井と改め、上山のは、三河國藤井城に居りしことあるより、藤井の松平と呼ばれ、上田のは、上山の分家にして、以上九家、何れも、明治維新後、子爵を授けらる。又、信光より出て、三河國寶飯郡竹谷(名)に居りしことありて、竹谷の松平と稱せられし家は、慶長十六年廢絶し、信光の弟(一説に子)久親より出て、三河國寶飯郡長澤に居りしことありて、長澤の松平と呼ばれし家は、これも、後、家康の第二子秀康の後裔。美作國津山越前國福井出雲國松江・上野國廣橋(今の前橋)播磨國明石・越後國糸魚川(名)出雲國廣瀬・出雲國母里(名)の入藩主あり。

初の家は、皆、秀康の子より出て、糸魚川のは、福井の支流、廣瀬の子と母里とは、松江の支流にして、八家の祖秀康、福井に封ぜられしより、世に總稱して、越前家と呼び、明治維新後、福井(後に侯爵)松江の二家は、伯爵を、他は子爵を授けらる。四姓氏の一。徳川氏の支族。三代將軍家光の子綱重の後。綱重の長子家宣は、宗家を繼ぎて、六代將軍となり、その第二子

清武、初、家臣越智喜清の家に養はれ、越智氏を冒ししが、家宣將軍たるに及びて、松平の稱號を許され、上野國館林(名)の城主となる。子孫、陸奥國柳倉及び石見國濱田を経て、慶應三年、美作國御田に治し、明治維新後、子爵を授けらる。綱重、嘗て甲斐國を領せしより、後に甲府家と稱す。(以上、十八藩主の家を、下記の諸家と區別して、特に十八松平といふ) 四姓氏の一。信濃源氏の一流。源頼信の子井上頼季の後。裔孫光盛、信濃國高井郡保科(名)の地に居りしより、初、保科といひ、徳川秀忠の庶子(第三子)正之、その家を嗣ぎ、寛永十三年、出羽國最上(名)城に封ぜられ、同二十年、松平氏の稱號を與へらる。正保元年、陸奥國會津(名)城に移り、明治に至り、官軍に抗せしため、陸奥國斗南に移され、後、子爵を授けらる。又、正之の養父正光の弟正貞の後は、上總國飯野に封ぜられ、赤子爵を授けらる。

四姓氏の一。尾張徳川氏の庶流。義道の子なる光友の第二子義行(名)の後。初、信州に封ぜられ、元禄十三年、美濃國高須に移り、明治維新後、子爵を授けらる。四姓氏の一。紀州徳川氏の庶流。頼宣の第二子頼純の後。寛文十年、伊豫國四條(名)に封ぜられ、明治維新後、子爵を授けらる。四姓氏の一。水戸家徳川頼房の庶流。讃岐國高松・陸奥國守山(名)常陸國府中(名)常陸國宍粟(名)の四藩主あり。高松は、初、常陸國下館(名)に治したり。明治維新後、高松は伯爵を、他は子爵を授けらる。四姓氏の一。本姓は奥平。平氏より出づ。奥平信昌の第四子忠明を祖とし、忠明、徳川家康の外孫たるによりて、松平姓を許さる。諸國に明治維新後、子爵を授けらる。四姓氏の一。三河國西尾の松平乗久の子乗高を祖とす。乗高、天和元年、台命により、前項松平氏の忠明の子なる忠弘の養子となり、名を忠尚と改め、諸國に轉封の後、明和四年以後、上野國小幡(名)に治し、明治維新後、子爵を授けらる。四姓氏の一。本姓は松井。

源滿政の裔。第六世重行、源頼朝に仕へ、山城國綾喜(名)郡松井の地頭となりてより氏とす。第十二世經之の第二子宗之、三河國に移り、第四世忠直、松平清康・同廣忠(徳川家康の父)等に仕へ、その子忠次、戦功により、天正三年、松平姓を許され、名を康親と改め、その子康重、武藏國崎西(名)に封ぜられ、子孫、各地に轉封の後、慶應二年、武藏國川越に移り、明治に至りて、本姓松井に復し、後、子爵を授けらる。四姓氏の一。鷹司(名)信房の第四子信平の裔。信平、將軍徳川家光の御臺所の弟たりしため、慶安三年召し出され、承應三年、松平姓を許され、孫信清の時、上野國矢田に居り、後、矢田の地並りに姓を吉井と改め、子孫相繼ぎて、明治に至り、子爵を授けらる。四姓氏の一。久松(名)を見よ。四姓氏の一。須賀(名)を見よ。四姓氏の一。戸田(名)を見よ。四姓氏の一。中村(名)を見よ。四姓氏の一。柳澤(名)を見よ。四姓氏の一。徳川時代にて、外縁と岡山の内、前田・島津・毛利・兩池田(鳥取)と岡山の内、蜂須賀・黒田・伊達(仙臺)・淺野・鍋島・山内の十一家の宗族に與へし族稱。

まつだり

まつだり

まつだり

まつだり

まつだり

まつだり

まつだり

まつだり

まつだり

まつだり

まつだり

まつだり

まつだり

まつだり

まつだり

まつだり

まつだり

まつだり

國白川の松平(久松)氏を嗣ぎ、從四位下越中守に敘せらる。天明六年、老中となり、將軍家齊(○)を佐けて、謂はゆる寛政の好みて、朱學を正學とし、親ら編修せる集古十種、又その發意に成れる徳川實記等あり。寛政五年、致仕して、樂翁と稱し、文政十二年歿す。年七十二。

まつだひら(ひん)たらう 松平新太郎(名)「人」いけだつ(ま)き(池田光政)に同じ。

まつだひら(しゆん)がく 松平春嶽(名)「人」まつだひら(ぶ)つ(松平慶永)に同じ。

まつだひら(のぶ)つ(松平信綱)「名」徳川氏の臣。初名は正永、幼名は長四郎。實は代官大河内久綱の嫡子、松平正綱の姪にして、その嗣となる。九歳にして、家光に侍し、敏慧を以て寵用せられ、元和九年、家光將軍宣下の時、從五位下、伊豆守に敘せられ、寛永十年、老中となり、武藏國忍(○)城を賜はる。鳥原の亂に功を奏し、十六年封を川越に轉じ、侍從に進み、家光の薨後、幼主家綱を輔佐す。世人、その敏慧を稱して、智慧伊豆といふ。寛文二年歿す。年六十七。

まつだひら(はる)さ(松平治郷)「名」出雲國松江第七代の城主。未央庵、宗納、大圓庵、一齋、一閑子、蘭室、雪羽、不昧等の號あり。江戸赤坂藩邸に生れ、十五歳にして封を襲ぐ。藩の財政窮乏の間に處して、産業の發達を圖り、藩學明教館を起して、士人をして悉く學に嚮はしむ。文化三年致仕し、江戸在大崎(○)の別邸に茶事を娛みつつ、なほ藩政を忘れず、兩度歸國して、舊臣、故老を勞ひ、國事に盡きしむ。文化十五年歿す。年六十八。

まつだひら(ひで)やす 松平秀康(名)「人」ゆき(ひ)でやす(結城秀康)に同じ。

まつだひら(ひろ)た(松平廣忠)「名」さか(は)ら(徳川廣忠)に同じ。

まつだひら(ふ)ま(松平不昧)「名」まつだひら(ふ)ま(松平治郷)に同じ。

まつだひら(し)な(松平慶永)「名」越前國福井の藩主。田安齊匡の子。江戸

に生る。幼名は錦之丞、字は公寧、春嶽と號す。天保九年、松平齊善の封を襲ぎ、將軍の偏諱を賜はりて、慶永といふ。幕末多難の際に當り、意見を開陳し、公武の間に盡し、政事總裁、京都守護職、大藏大輔に歷任す。慶喜の辭官、納地に關し、居中幹旋に努められたれども、事皆齟齬して、伏見鳥羽の戦を見るに至れり。明治維新に議定に任せられ、爾後諸官に歷任し、從一位勳一等に陞り、二十三年歿す。年六十三。

まつだひら(ら)ん(英)Mitsuharu Inami「名」イツダは、波斯の拜火教の善神の名に本づく。北米合衆國のジェネラル、エレクトリック(General Electric)會社より製造、發賣する、一種のタンダステン電球。

まつだ(わ)さ(松田和吉)「名」人、淨瑠璃作者。竹田出雲、長谷川千四、三好松洛等との合作に「鬼一法眼三略卷」「城浦兜軍記」「御所櫻堀川夜討」「平假名盛衰記」など、名あり。歿年詳かならず。

まつ(ち)ん(眞土)「名」耕作に適する、良質の土壤。しん(眞土)参照。

まつ(ち)ん(眞土)参照。

まつ(ち)ん(眞土)参照。

まつ(ち)ん(眞土)参照。

まつ(ち)ん(眞土)参照。

まつ(ち)ん(眞土)参照。

まつ(ち)ん(眞土)参照。

まつ(ち)ん(眞土)参照。

まつ(ち)ん(眞土)参照。

まつ(ち)ん(眞土)参照。

まつ(ち)ん(眞土)参照。

まつ(ち)ん(眞土)参照。

まつ(ち)ん(眞土)参照。

まつ(ち)ん(眞土)参照。

まつ(ち)ん(眞土)参照。

まつ(ち)ん(眞土)参照。

まつ(ち)ん(眞土)参照。

まつ(ち)ん(眞土)参照。

まつ(ち)ん(眞土)参照。

まつ(ち)ん(眞土)参照。

まつ(ち)ん(眞土)参照。

まつ(ち)ん(眞土)参照。

まつ(ち)ん(眞土)参照。

まつ(ち)ん(眞土)参照。

まつ(ち)ん(眞土)参照。

まつ(ち)ん(眞土)参照。

まつ(ち)ん(眞土)参照。

まつ(ち)ん(眞土)参照。

まつ(ち)ん(眞土)参照。

まつ(ち)ん(眞土)参照。

まつ(ち)ん(眞土)参照。

まつ(ち)ん(眞土)参照。

まつ(ち)ん(眞土)参照。

まつ(ち)ん(眞土)参照。

まつ(ち)ん(眞土)参照。

まつ(ち)ん(眞土)参照。

まつ(ち)ん(眞土)参照。

まつ(ち)ん(眞土)参照。

まつ(ち)ん(眞土)参照。

まつ(ち)ん(眞土)参照。

まつ(ち)ん(眞土)参照。

まつ(ち)ん(眞土)参照。

まつ(ち)ん(眞土)参照。

まつ(ち)ん(眞土)参照。

まつ(ち)ん(眞土)参照。

まつ(ち)ん(眞土)参照。

まつ(ち)ん(眞土)参照。

まつ(ち)ん(眞土)参照。

まつ(ち)ん(眞土)参照。

まつ(ち)ん(眞土)参照。

まつ(ち)ん(眞土)参照。

まつ(ち)ん(眞土)参照。

まつ(ち)ん(眞土)参照。

まつ(ち)ん(眞土)参照。

まつ(ち)ん(眞土)参照。

まつ(ち)ん(眞土)参照。

まつ(ち)ん(眞土)参照。

まつ(ち)ん(眞土)参照。

まつ(ち)ん(眞土)参照。

まつ(ち)ん(眞土)参照。

まつ(ち)ん(眞土)参照。

まつ(ち)ん(眞土)参照。

まつ(ち)ん(眞土)参照。

まつ(ち)ん(眞土)参照。

まつ(ち)ん(眞土)参照。

まつ(ち)ん(眞土)参照。

まつ(ち)ん(眞土)参照。

まつ(ち)ん(眞土)参照。

まつ(ち)ん(眞土)参照。

まつ(ち)ん(眞土)参照。

まつ(ち)ん(眞土)参照。

まつ(ち)ん(眞土)参照。

まつ(ち)ん(眞土)参照。

まつ(ち)ん(眞土)参照。

まつだひら

まつだひら

まつちや

まつど

まつが

を合はせて、貞徳の三部書と呼ぶ。まつがひさひで、松永久秀〔名〕〔人〕

武將。近江國の人とも、山城國西岡〔名〕

の人ともいふ。三好長慶に仕へて、後に三好氏を逐し、大和河内の境なる信貴

〔名〕山に城を築きて根拠とす。將軍足利義輝の己を嫌惡せるを知りて、三好氏に

執し、尋いで三好三黨と不和となり、三條城等の奈良の東大寺に陣せるを襲ひて、火

を放ちて、大佛を焼く。十一年、織田信長の、足利義昭を奉じて上洛するや、これに

降りて大佛を鎮し、筒井順慶を下し、又信長の命を奉じて、三好義繼を殺して、三

好氏を滅し、一方、潜かに甲斐の武田氏、越後の上杉氏と結びて、信長を夾撃せん

とす。天正五年、終に叛せしより、信長、信忠をして討たしむ。久秀、信貴城に防

ぎて支ふる能はず、十月十日城に火して死す。年六十八。

まつがへき、松葉草〔名〕〔植〕〔ぶぢ〕〔藤〕

の異稱。〔古語〕。篠目抄「紫の青葉にまじる梢かなこやまつな草花の白浪」

まつが

國史に關する雜説を集めたるもの。四卷。藤井高尙の著。文政十二年頃刊行す。

まつぎのき、松木〔名〕。松の樹木。萬葉むか來じかと吾のがまつの木ぞ。〔古〕

ちみか〔土御門〕を見よ。〔同じ。〕〔諺語〕松の木に蟬〔句〕「大木〔名〕」の木の如

まつぎのき、松木〔名〕。松の木の如き節〔く〕れだちたる腕。傾城酒吞童子、己に撲たれて居ようかと、松の木腕を振

廻す。まつぎのき、松木柱〔名〕。松丸太の柱。〔古語〕。松丸太「よよし、斯かる海士」

まつぎのき、松木柱〔名〕。松丸太の柱。〔古語〕。松丸太「よよし、斯かる海士」

まつぎのき、松木柱〔名〕。松丸太の柱。〔古語〕。松丸太「よよし、斯かる海士」

まつぎのき、松木柱〔名〕。松丸太の柱。〔古語〕。松丸太「よよし、斯かる海士」

まつぎのき、松木柱〔名〕。松丸太の柱。〔古語〕。松丸太「よよし、斯かる海士」

まつぎのき、松木柱〔名〕。松丸太の柱。〔古語〕。松丸太「よよし、斯かる海士」

まつぎのき、松木柱〔名〕。松丸太の柱。〔古語〕。松丸太「よよし、斯かる海士」

まつぎのき、松木柱〔名〕。松丸太の柱。〔古語〕。松丸太「よよし、斯かる海士」

まつが

の詣。もと安宅松の詣と呼びしを、略せるにて、天保以來、淺草第六天前〔平右衛門町〕に移轉して、今に及べり。

まつがのせい、松精〔名〕能の狂言の一。松離子〔名〕の當番の家に人人集まり

まつがのせい、松精〔名〕能の狂言の一。松離子〔名〕の當番の家に人人集まり

まつがのせい、松精〔名〕能の狂言の一。松離子〔名〕の當番の家に人人集まり

まつがのせい、松精〔名〕能の狂言の一。松離子〔名〕の當番の家に人人集まり

まつがのせい、松精〔名〕能の狂言の一。松離子〔名〕の當番の家に人人集まり

まつがのせい、松精〔名〕能の狂言の一。松離子〔名〕の當番の家に人人集まり

まつがのせい、松精〔名〕能の狂言の一。松離子〔名〕の當番の家に人人集まり

まつがのせい、松精〔名〕能の狂言の一。松離子〔名〕の當番の家に人人集まり

まつがのせい、松精〔名〕能の狂言の一。松離子〔名〕の當番の家に人人集まり

まつがのせい、松精〔名〕能の狂言の一。松離子〔名〕の當番の家に人人集まり

まつがのせい、松精〔名〕能の狂言の一。松離子〔名〕の當番の家に人人集まり

まつが

この神は、葛野〔名〕の松尾に坐〔す〕鴨鏡〔名〕の神なり。〔古〕まつのをしんじや〔松尾神社〕の略。〔古語〕。一。松尾明神の

まつのをしんじや、松尾神社〔名〕。山城國葛野〔名〕郡上山村松尾に鎮坐せる官

まつのをしんじや、松尾神社〔名〕。山城國葛野〔名〕郡上山村松尾に鎮坐せる官

まつのをしんじや、松尾神社〔名〕。山城國葛野〔名〕郡上山村松尾に鎮坐せる官

まつのをしんじや、松尾神社〔名〕。山城國葛野〔名〕郡上山村松尾に鎮坐せる官

まつのをしんじや、松尾神社〔名〕。山城國葛野〔名〕郡上山村松尾に鎮坐せる官

まつのをしんじや、松尾神社〔名〕。山城國葛野〔名〕郡上山村松尾に鎮坐せる官

まつのをしんじや、松尾神社〔名〕。山城國葛野〔名〕郡上山村松尾に鎮坐せる官

まつのをしんじや、松尾神社〔名〕。山城國葛野〔名〕郡上山村松尾に鎮坐せる官

まつのをしんじや、松尾神社〔名〕。山城國葛野〔名〕郡上山村松尾に鎮坐せる官

まつのをしんじや、松尾神社〔名〕。山城國葛野〔名〕郡上山村松尾に鎮坐せる官

まつのをしんじや、松尾神社〔名〕。山城國葛野〔名〕郡上山村松尾に鎮坐せる官

どりたるもの。「松葉栴檀」「松葉車」「松葉櫻」「松葉菱」などの種類あり。

松葉の鎖「句」松葉の一方の尖端を、他の一方に貫きて、略輪状に作り、その輪状内に、更に、他の松葉の一方を容れて、前と同じ方法にて輪状に作り、かくて長く聯ねて、鎖の如くにして翫ぶもの。まつばつなき。

まつば 的場的場「名」まこば(前場)の轉訛。運歩色葉藝的場、マツバ

まつば 末派「名」分れ流るる水の末の方。目藝術宗教などの流派の末の方。末流。目或流派又は黨派などに屬して、價値なき者。技術などの劣れる者。

まつばい 末輩「名」末派のやから。つまらぬ人。輕輩。

まつばいろ 松葉色「名」松の葉のごとく。深綠色。まつば。傾城島原蛙合殿「千代」を染め込む松葉色

まつばうど 松葉獨活「石」石「植」あすばら(龍鬚菜)に同じ。

まつばかかみ 松葉鏡「名」松葉を縮ねて、その結合點を、他の松葉にて貫き留めたるもの。更に松葉にて、鏡臺に擬せしものを作り、その上に安置す。

まつばがき 松葉垣「名」まつがき(松垣)に同じ。孕常竹の柱や松葉垣

まつばがさ 松葉傘「名」松葉より産する雨傘。(鱗場蟹)に同じ。

まつばがに 松葉蟹「名」動「たらばがに」まつばがに 松葉貝「名」動「腹足類に屬する軟體動物。殻は陣笠状を呈し、や一方に長く、二寸に達し、汚色にして、多くの褐色の放射脈を有す。我國小笠原島に産す。うしのつめがひ。

て、日蓮は、此處に妙法の弘通に努め、出でては隣街小町(三)小路、鎌倉倉庫車場と並行して、その東方にある街衢に辻説法を試みたり。附近、今も、日蓮宗の寺院多き中に、妙法寺は當時の遺址なるが如く、なれど、安國長勝の二寺も、各舊跡なる旨を主張せり。ほん(三)本國寺(三)参照。

まつばかれば 松葉鯉「名」動「めいたがれ」(目板鯉)に同じ。

まつばき 眞椿「名」ま(眞)は接頭語「つばき」椿の美稱。「古語」馬葉びるゆつまつばき

まつばきく 松葉菊「名」植「番杏」科に屬する常綠植物。莖は、やや灌木状にして、通常横臥し、葉は多肉にして、細長く、對生す。花は紫紅色、菊花状にて美しく、六月頃、葉腋より分れたる枝の頂ごとに開く。原産地は亞非利加喜望峯。觀賞用として栽培す。はなつるな。

まつばきり 松葉切「名」松葉の股を、互に引き掛けて引きあひ、切れたる方を眞とする遊戯。

まつばきんばらげ 松葉金鳳毛「名」植「さきんばらげ」(絲金鳳毛)に同じ。

まつばくさ 松葉草「名」植「一種の草。古松の下に生じて、長さ三四寸に達し、葉は松葉の似て、清香を有し、これを服する者は長生すと、本草綱目に見ゆれども、實物は詳かならず。

まつばこんぶ 松葉昆布「名」まつこんぶまつはし縫掖「名」次條の略。

まつはしの衣「名」(句)次條に同じ。まつはしの袍「名」(句)まつはしは纏の義「ほうえき」(綴袂)に同じ。和名、纏腕、萬那波之乃字、節乃岐奴

まつはらし 纏「名」(句)まつはらしむ。常に傍に添ひて、離れざらしむ。纏も召しまつはし參りなれたるものを

まつばすけ 松葉菅「名」植「莎草」科に屬する草。高さ一尺。葉は平行脈を有し、細長くして尖り、互生して、三稜列に排列す。花は穗狀花序をなして、莖の頂上に集まり、單性にして、雄花は上部に附く。我國、平野に自生す。

まつはだ 松肌「名」植「幹の皮、松の肌似たるよりいふ」(三)いらもみ刺襪に同じ。「えぞまつ」(蝦夷松)に同じ。

まつはだか 眞裸「名」まはだか(眞裸の香便)。太藪蚊帳(三)釣るや夜學を好むまつばだか

まつはつなぎ 松葉繫「名」松葉の鎖まつはつる 松葉杖「名」松葉の形をなし、中間に手を當つべき横木のある杖。片足(三)不具なる者が用ふ。

まつはなほ 赤花「名」(三)次條に同じ。まつはなんじん 松葉人參「名」植「亞麻」科に屬する一年生の草。高さ一二尺に達し、全體亞麻に似たれども小さく、葉は互生し、線形にして尖り、花は小形、淡紫色にして、離瓣花冠を有す。果實は蒴。本州並びに北海道の山野に自生す。まつばなほ

まつばなほ 松葉蜂「名」動「蜂類に屬し、松又はこれに類似の針葉樹の葉を食害する昆蟲。成蟲は、その體、他の蜂類に比して肥大し、雌雄によりて、その色彩と形態を異にし、殊に、觸角は、雄にありては、羽毛状をなせども、雌は然らず。歐米及び我國に十餘種あり。

まつばびたん 松葉牡丹「名」植「馬齒莧」科に屬する一年生の草。莖は肉質柔軟にして、高さ四寸乃至六寸に達し、分枝多く、葉も肉質にて、線形をなし、基部に長き毛を有し、互生す。夏季、日中開く。花は五瓣にして、紫、紅、黃、白等あり。原産地は南亞米利加。我國所在に栽培し、觀賞とす。あめりかさう。いはばたん。ほろべし。

まつばん 末班「名」すゑの班次。すゑの位次。末位。

まつばも 松葉藻「名」植「藻」科に屬する一年生の草。莖は肉質柔軟にして、高さ四寸乃至六寸に達し、分枝多く、葉も肉質にて、線形をなし、基部に長き毛を有し、互生す。夏季、日中開く。花は五瓣にして、紫、紅、黃、白等あり。原産地は南亞米利加。我國所在に栽培し、觀賞とす。あめりかさう。いはばたん。ほろべし。

まつばや 松葉屋「名」江戸新吉原の江戸町一丁目角にありし遊女屋。名妓瀨川の出でし家なり。道中(六)こなきさんは

江戸の吉原で全盛の松葉屋の瀨川どのぢやの」(川)を見よ。

まつばやし 松林「名」松の木のはやし。まつばやし 松拍子「名」松の木の拍子。まつばやし 松拍子「名」松の木の拍子。まつばやし 松拍子「名」松の木の拍子。

まつばやし 松拍子「名」松の木の拍子。まつばやし 松拍子「名」松の木の拍子。まつばやし 松拍子「名」松の木の拍子。

まつばやし 松拍子「名」松の木の拍子。まつばやし 松拍子「名」松の木の拍子。まつばやし 松拍子「名」松の木の拍子。

まつばやし 松拍子「名」松の木の拍子。まつばやし 松拍子「名」松の木の拍子。まつばやし 松拍子「名」松の木の拍子。

まつばやし 松拍子「名」松の木の拍子。まつばやし 松拍子「名」松の木の拍子。まつばやし 松拍子「名」松の木の拍子。

まつばやし 松拍子「名」松の木の拍子。まつばやし 松拍子「名」松の木の拍子。まつばやし 松拍子「名」松の木の拍子。

まつばやし 松拍子「名」松の木の拍子。まつばやし 松拍子「名」松の木の拍子。まつばやし 松拍子「名」松の木の拍子。

まつばやし 松拍子「名」松の木の拍子。まつばやし 松拍子「名」松の木の拍子。まつばやし 松拍子「名」松の木の拍子。

まつばやし 松拍子「名」松の木の拍子。まつばやし 松拍子「名」松の木の拍子。まつばやし 松拍子「名」松の木の拍子。

まつばやし 松拍子「名」松の木の拍子。まつばやし 松拍子「名」松の木の拍子。まつばやし 松拍子「名」松の木の拍子。

小さく、腹部は大、聴器は前脛節の外側にのみ存し、觸角と第三肢とは頗る長く、尾端に二條の尾狀突起あり。野草或は松林の叢中に多く、雄は秋夜鳴き、ちんちりんと聞ゆ。古はこれに鈴蟲の名を當て、今日の鈴蟲を松蟲と稱せり。すずむし。〔金琵琶〕

〔動〕すずむし(鈴蟲)に同じ。〔古語〕目(動)まつせみ(松蟬)に同じ。〔動〕動松に生ずる、一種の毛蟲。期衣。松蟲のその木にもよらで、いかで斯く名を附けたるならん。毛生ひ、むくつけき蟲にも同じ名ありて、松を枯らし、人に疎まる。〔芝居の六部の出端〕

〔動〕めぼせ(眼刺)に同じ。まつむしがね(松蟲鈺)の略。〔謡曲の一〕攝津國阿部野の里人、市に出て酒を賣るに、松蟲を愛して、死にし人の亡靈あらはれて、酒を酌み酔舞し、蟲の音をめでなどする事を作れるもの。古今和歌集の序文に、松蟲の音に友を忍ぶといふ語あるに本づくものなり。

まつむし(か) 松蟲鈺(名) 松蟲(名)を入れて飼ふか。 若風(相坂)の轉蟲、住吉の松蟲籠

まつむし(が) 松蟲鈺(名) まつむし(松蟲)に用ふるよりいふたがね(鐵鈺)に同じ。

まつむし(さ) 松蘂草・山蘂菊(名) 〔植〕山蘂菊科に屬する多年生の草。高さ二三尺に達し、細毛ある羽狀複葉對生し、下部の葉はやや菜菔(サ)の如し。花は、夏、花軸の頂に、頭狀花序をなして開き、その外圍のものは大形にして厚狀、淡紫色を呈し、中部のものは小形にして筒狀、淡色なり。果實は長楕圓形にして、兩端狹し。山野に自生す。いたのぎく。けんもつかう。たまむし(さ)。のだいこん。はこねぎく。やまぎく。りんぼらぎく。

まつむし(ご) 山蘂菊科(名) 〔植〕顯花植物。雙子葉門。被子類。合瓣花區に屬する科。多くは、地中海の沿岸に産す。さんらぶくわ。

まつむし(り) 松毛(名) 〔動〕菊蕨(サ)に似たる小鳥なりといふ。夫亦、山木の雪

ふるすより浮れ來て軒端に傳ふ松むしりかな

まつむら(けい) 松村景文(名) 〔人〕四條派の畫家。京都の人。字は子藻、華溪と號す。景文はその名。畫法を兄月溪に受けて、妙手に至る。最も花鳥を能くし、墨色の鮮麗なる兄に勝る所ありしといふ。天保十四年(一に弘化元年)歿す。年六十五。

まつむら(げ) 松村月溪(名) 〔人〕畫家。四條派の祖。京都の人。名は春、字は伯望、通稱は嘉右衛門允伯又は存伯とも號す。壯年の頃、攝津國吳服(サ)の里に遊び、酒造家某の家に寓して、新年を迎へし縁により、吳を氏とし、吳春ともいへり。大西碎月與謝蘇村を師として、南宗文人の畫風を究め、兼ねて俳句を學ぶ。蘇村の歿後、圓山應舉の筆意を喜び、遂に畫風を一變し、最も花鳥人物を巧みにす。その家、京都四條通東洞院の東に在りしより、世にその風を四條派と呼ぶ。文化八年歿す。年六十。〔前條に同じ。〕

まつむら(じゆん) 松村吳春(名) 〔人〕まつも(松藻) 〔植〕褐色藻類に屬する海藻。長さ七八寸に達し、茶褐色にして、形狀松の如く、一本の中軸を有し、周圍に線狀の、柔軟粘滑なる葉あり。多く北海道越中能登などの寒地の海中、石上に生ず。若きものは、食用に供す。又鹽藏し、中に松葉を貯れば、兩三年間殆ど生時の如しといふ。〔きんぎよ(金魚藻)に同じ。〕 條下を見よ。

まつもと(松本) 〔地〕信濃國にある市。犀川の右岸。鐵道篠井(サ)線の停車場あり。戸田氏の舊藩地。舊國府の所在地なり。信府ともいふ。舊稱深志(サ)庄(内)也。〔地〕明治の初年設置の縣の一。四年七月、信濃國舊松本藩の地に立てしもの。同年十一月、筑摩(サ)縣に入り、筑摩縣はその後、今日長野縣の一部となる。〔地〕長門國阿武(サ)郡椿郷(サ)東分(サ)村の大字。萩町の東にして、松本川を以て相隔つ。陶器萩焼

は、この地の土を材料とせしより、松本燒ともいひ、又、吉田松陰(松)の下村塾(サ)ともいひ、この地に在り。〔地〕近江國大津市の東邊。大嘗會の卜占によりて、滋賀郡の獻稻を命ぜらるる時は、この地のを獻すること多かりき。太平記、大津松本の東西の宿、園城寺の燒跡、志賀唐崎如意ヶ嶽まで充滿したり。〔平安朝時代の太政官廳の曹司の一。〕 百鍊抄、二月九日、内裏官廳、天皇御朝所、次遷松本曹司。〔聖武内わたためてたくて過ぎせたまふほどに、火出でて焼けぬ。御門も、宮も、松本といふ處にわたらせたまひぬ。〕

まつもと(き) 松擬(名) 松葉の形に切るよりいふとぞ。 茄子を細かく切り、油を加へて煮たる羹。

まつもと(けい) 松本奎堂(名) 〔人〕勤王の士。三河國の人。名は衡、字は士樞、通稱は謙三郎。武技に達し、儒學に精しく、夙に皇室の式儀を嘆じ、幕府の專横を憤りて、夫に攘夷の説を唱へ、藤本鐵石等同志の王と謀りて、中山忠光を奉じ、文久三年九月、義兵を大和國五條に擧げ

し、事成らずして自殺す。年三十四。

まつもと(げん) 松本謙三郎(名) 〔人〕前條に同じ。

まつもと(じやう) 松本城(名) 信濃國松本市にありし城。もと永正年間より島立氏の居城ありて、深志(サ)城と呼び、天文年間、小笠原氏の有に歸し、更に武田氏の手に移り、武田氏滅亡の後、小笠原氏の一族小笠原貞慶、少しく城地を移して改修し、始めて、松本城と稱し、後、石川氏代りて入城し、大改築をなす。慶長十八年、小笠原氏、飯田より轉じて入城し、以後、戸田松平、堀田水野氏等を経、享保年間、戸田氏再び入城し、明治維新に及べり。

まつもと(せん) 松本錢(名) 寛永十四年より同十七年まで、信濃國松本にて鑄造せし寛永銅錢。

まつもと(せん) 松本仙翁・剪春羅(名) 〔植〕石竹科に屬する多年生の草。有毛の植物。高さ二尺内外に達し、葉は、對生し、卵形又は長卵形にして、紫綠色を呈し、全邊にして尖り、花は聚繖花序に排列し、花冠は天鷲(サ)の如く、毛を有し、更に細き缺刻を有す。白色又は黃赤色もあり。原産地は北部亞細亞。觀賞用として栽培す。まつもと。

まつもと(さ) 松本利直(名) 〔人〕槍術家。陸奥國の人。通稱は理左衛門。初、建孝流の槍術を學びて、遂に一家を成し、一旨流を開く。〔後節(サ)を見よ。〕

まつもと(さ) 松本節(名) ぶんど(名) 豊本(名) 〔名〕 〔名〕 〔名〕 〔名〕

まつもと(さ) 松本流(名) 弓術の流儀の一。吉田流の祖、吉田上野介重賢の季子、子部(名)の創めしもの。

まつもと(さ) 松本流(名) 弓術の流儀の一。吉田流の祖、吉田上野介重賢の季子、子部(名)の創めしもの。

まつもと(さ) 松本流(名) 弓術の流儀の一。吉田流の祖、吉田上野介重賢の季子、子部(名)の創めしもの。

まつもと(さ) 松本流(名) 弓術の流儀の一。吉田流の祖、吉田上野介重賢の季子、子部(名)の創めしもの。

まつもと(さ) 松本流(名) 弓術の流儀の一。吉田流の祖、吉田上野介重賢の季子、子部(名)の創めしもの。

まつもと(さ) 松本流(名) 弓術の流儀の一。吉田流の祖、吉田上野介重賢の季子、子部(名)の創めしもの。

まつもと(さ) 松本流(名) 弓術の流儀の一。吉田流の祖、吉田上野介重賢の季子、子部(名)の創めしもの。

まつもと(さ) 松本流(名) 弓術の流儀の一。吉田流の祖、吉田上野介重賢の季子、子部(名)の創めしもの。

まつもと(さ) 松本流(名) 弓術の流儀の一。吉田流の祖、吉田上野介重賢の季子、子部(名)の創めしもの。

まじ

にして、形を異にし、静止せる時は、水平に曇む。前翅は革質にして、四箇の黒紋あり。後肢は扁平となり、縁毛多く、游泳に適す。池沼に棲息し、水面を行く時は常に背部を下面に向けて、恰もボートを漕ぐが如くし、夜間は燈火を追ひて飛行す。ばつらむし。

まつや 的矢、マツマヤ(的矢)の轉訛。

まつや おり 松屋織(名) 元和頃、松屋某の支那の金紗に擬して織り出しし織物。

まつや く 抹薬(名) ぬりくすり(塗薬)に同じ。運歩色葉集、抹薬、マツヤク。

まつや に 松脂(名) 松及びその他の松杉科植物の樹脂、即ちその莖葉より分泌する液。ビニル酸、ピマル酸、アビエネト酸などより成る。傷口を封じ、雨水の浸潤を防ぐに用ひ、又、明松(名)を作り、テレピン油製造の原料となし、醫料として、硬骨及び軟骨を製するに供す。しやうし。

まつや に あら 松脂油(名) てれびんゆ(的列並油)に同じ。

まつや に から やく 松脂膏藥(名) ばんざうか(絆創膏)に同じ。

まつや に いら 松脂蠟燭(名) 長さ約一尺の圓き棒に造りたる松脂を、笹の葉に包み、蠟燭に代用するもの。形、松(名)に似、古奥羽地方にて多く用ひたりといふ。又、魚油を和して造りたるもありて、薩摩蠟燭といへり。

まつや ま 松山(名) 松の樹の多くある山。古名、松山に戀しき人や入りにけん解ふりたてて鳴くほととぎす。

まつや ま 松山(名) 明治の初年設置の縣の一。四年七月、伊豫國の内松山、西條(名)、小松今治(名)の四藩を廢して、それぞれ同名の縣とし、その十一月、合併して立てた。後、石鉄(名)縣と改め、六年、神山縣(宇和島の改稱)と合はせて、愛媛(名)縣を立つ。九年、香川縣を愛媛縣に併せしが、二十一年、再び分離して、今日に及べり。 地、伊豫國にある市。中央に勝山峯え、愛媛縣廳所在の地

まつや

にて、道後(名)温泉の東にあり。 武藏國比企(名)郡にある町。郡の首邑。川越より熊谷への通路に當る。 四まつみね(松嶺)を見よ。 田すまのまつやま(末松山)の略。 後、岸もく潮なし満ちなば松山を下にて浪はこさんとぞ思ふ。 備中國にある山といふ。 新語古今、十かへりの松咲きぬらし松山のこずをを高めつもの白雪。

まつや ま か が み 松山鏡(名) 諸曲の一。越後國の山家の一女、未だ見たることなき鏡を、母の形見として貰ひ、己が姿の映るを、母の影さと思ひて慕ひ悲しむ事を作れるもの。 みやげのかかみ(土産の鏡)参照。

まつや ま が す り 松山総(名) 伊豫國松山市より産出する木綿織。いよがすり。

まつや ま じ ょ 松山御所(名) まつやまのじょ(松山御所)を見よ。

まつや ま じ ょ う 松山城(名) 伊豫國松山市の中央にありし舊松平(久松)氏の居城。慶長八年、加藤嘉明の築造に係る。後、蒲生秀知の居城となり、又、使番川勝彦嗣、御國目付として在番せしが、寛永十二年以來、松平氏入りて、明治に及べり。一名、金龜城。 武藏國比企(名)郡西吉見村根小屋にありし松平氏の居城。應永年中上杉(扇谷)氏の家老、上田左衛門尉の創築に係る。後、北條氏を経て、徳川氏關東に移るに及び、松平家廣ここに居り、慶長六年家廣遠江國濱松に移りて、廢墟となれり。

まつや ま て ん ぐ 松山天狗(名) 諸曲の一。西行上人、讃岐國松山にて、崇徳上皇の靈にまみえ奉りし事を作れるもの。

まつや ま の じ ょ 松山御所(名) 崇徳上皇、讃岐國に播遷の時今の綾歌郡林田村なる、在廳野大夫高任(一説に高遠の家を御所に充てられしもの。後、三年を経て、同郡府中村鼓岡に遷りたまへり。一名、雲井の御所。

まつや さ ら 松雪草(名) 石蒜(名)科に屬する多年生の草。徑六七分の鱗莖あり。葉は肉質にして、線状をなし、白色を帯び、五寸乃至七寸に至る。一對の

まつや

葉の間に、三四寸の花莖出て、初春、その頂に、白色の下垂せる花單生し、内花蓋は先端綠色を呈す、重瓣花なる變種もあり。原産地は歐洲。觀賞用として栽培す。 まつや さ ま 眞横様(名) まことの横様。太平記、雲霞の如くに打圍みたる敵の中を、眞横様に駆通りて。

まつや し 待宵(名) 次の夜の月を待つ義。陰曆十四日(多くは、八月のいふ)の夜。 續猿蓑(名) 待宵の月にゆかしや定飛脚。 一代男、十三夜の月、待宵名月。

まつや ひ ん 待宵草(名) 植(名) 夕刻に至り、花開くによりていふ。 柳葉菜(名) 科に屬する二年生の草。高さ二三尺に達し、枝を分ち、基部は半灌木をなす。葉は線状披針形にして、粗鋸齒を有し、無柄にして互生す。莖葉共に毛有り。花は大形にして、黄色の四瓣を有し、葉腋に變色して、凋落する性あり。繁殖力甚だ旺盛なり。原産地は南亞米利加。ぬまめぐり、ゆげしやう。よしのきすげ。 つまみさう(月見草)参照。

まつや ひ ん 待宵小室節(名) たんば(名) 丹波(名)の舊稱。 まつや ひ の じ ょ 待宵小侍從(名) 一人。 待宵にふけゆく鐘の聲聞けばあかね別れの鳥は物かはしといふ歌を詠みしによりて得たる名。 女歌人。石清水別當光清の女。高倉院の侍女。一名、阿波局(名)。千載、新古今玉葉等の作家。ものかはのくろ(名) 物かはの藏人(名) 参照。

まつや 船舶の屈曲接合部を強固ならしむるために用ふる曲材。

まつや 松浦(名) 肥前國の一部。後、郡名となり、室町時代に上下の二郡に分れ、明治十三年、東、西、南、北に分れて、東松浦(名)、西松浦、南松浦郡北松浦郡といふ。(まつやと訓するに至りしは、中世以後の事なるべしといふ)

まつや 松浦(名) 平戸松浦ともいふ。 姓氏の一。 松浦(名)の一部るな平戸(名)の下松浦(平戸松浦ともいふ)の裔。少貳氏の被管となり、少貳氏滅亡の後、大内氏に従ひ、天正中、隆信龍造寺に

まつや

屬し、豊臣秀吉の九州征服の時、子鎮信(名)と共に降りて、本領を安堵し、關ヶ原の役後、豊臣氏の召に應ぜざりしによりて、徳川氏より、更に本領を安堵せり。 明治維新後、伯爵を授けらる。 分家に鎮信の第二子昌(名)を祖とするものあり。 元祿二年、本家所領の一部を分與せられ、明治維新後子爵を授けらる。(これも、地名と同じく、多くまつやと訓す)。 まつやらう松浦黨参照。

まつや 眞面(名) まがほ(眞顔)を卑しめていふ語。 和合(名)菓子屋の畜生め、眞面になつてからみつきゃあがつて。

まつや かせう 松浦設沼(名) 一人。 儒者。 播磨國の人。 名は儀、字は頑卿、通稱は儀右衛門。 京都に出て、南部草薙に學ぶ。 又、木下順庵に就き、祇園南海と共に、世に木門の二妙と稱せらる。 學成りて、對馬侯に仕ふ。 享保十三年歿す。 年五十三。

まつや 松浦潟(名) 玄海灘及び壹岐海峡の南方、東は筑前國糸島半島より、西は肥前國北松浦半島に至る近海の總稱。 唐津灣伊萬里(名) 灣等も、その一部にして、又、東松浦半島を堺として、以東を上松浦潟、以西を下松浦潟ともいふ。 萬葉まつら潟さよ姫の子が領巾(名) 振りし山の名のみや聞きつつをらむ。

まつや 松浦川(名) 肥前國の中部を北流する川。 水源二あり。 唐津町と滿島村との間を過ぎて、唐津灣に注ぐ。 一名、唐津川。 但し、萬葉集のは、玉島の小河七瀬流なりといふ。

まつや さ よ め 松浦佐用姫(名) 一人。 大伴狹手彦(名)の妻。 ひれふるま(名) 領巾振山参照。 萬葉、遠つ人まつらさよ姫つまごひに領巾(名) 振りしより貢へる山の名。

まつや 松浦黨(名) 肥前國松浦地方を中心として蕃衍したる武士の一團體。 九州本土の東、西松浦郡に住せしを上松浦黨、平戸、五島等海上に住せしを下松浦黨といふ。 嵯峨源氏の一流にして、源融(名)四代の孫渡邊綱より出づとする説普通なれど、平家物語には、安倍宗任(名)

九州に流され、その子孫の蕃衍せる由に記し、或は、宗任の後には松浦黨、綱の後には主源頼光の肥前守となるや、従ひて下りしものにて、源平壇ノ浦の戦には、平家に屬して、大いに活動し、元寇の役にも奮戦大いに努め、南北朝時代には、兩朝に分屬して、團結破れられたれど、主として、足利氏に付き、後一族相争ひ、平戸松浦氏のみ盛んなり。まつら(松浦)参照。

まつら(松浦) 松浦路(名) 肥前國松浦に行道中。萬葉百日(名)も行かぬ松浦路今日行きて明日は來なむを何か障(名)れる。

まつら(松浦) 松浦濱(名) 鯨の骨の或部分を酒の粕に漬けて、饅頭としたるもの。肥前國より産す。

まつら(松浦) 松浦肉桂(名) やまびんけ(數肉桂)に同じ。

まつら(松浦) 松浦宮(名) 次條に同じ。源氏君に心たがはば松浦なる鏡の神をかけて誓はん。……ただ、松浦の宮の渚と、かの姉御もとの別るるをなん顧みせられて、悲しがりける。

まつら(松浦) 松浦明神(名) 肥前國の領巾振(名)山に鎮座せる神社。この山、神功皇后征韓の時、頂に寶鏡を捧げて、神祇を祭りたまへりとの傳説あり、因りて、一名を鏡山といひ、この神社も、皇后を祀れるなりといふ。十訓「この山を領巾(名)の峰といふ。この山は肥前國にあり。松浦の明神とて、今におはしますは、この佐用姫(名)のなれるといひ傳へたり」

まつら(松浦) 松浦宮物語(名) 平安朝時代に、大納言橘冬明の子に、辨の君といふあり。選ばれて、遣唐副使となりし母、別離を悲しむ。送唐りて、肥前國松浦に至り、宮を造りて歸朝を待ちしが、辨の君は、かの地にて、皇帝の信任を得、君の公主と親しみ、公主、皇帝共に世を去りし後、國難起りし時、辨の君、一身十體に現じてこれを救ひ、後、松浦の宮に歸著し、先に公主より得し名

琴も、雲に乗じて來れりといふ筋の物語。一卷。鎌倉時代の作。作者不詳。

まつら(松浦) 服ふ順ふ(動四自) まつらふ服(名)に同じ。「古語」髪はふ蟲も大君にまつらひ」

まつら(松浦) 松浦船松浦舟(名) 肥前國松浦(名)の船。萬葉「夜ふけて堀江漕ぐなる松浦船(名)の音(名)高しみを高みか」其角見てのみや盜めぬ船か松浦船」

まつら(松浦) 松浦山(名) 「地」ひれふるま(領巾振山)に同じ。新古今言松浦山夕越え來れば玉島の里の續きに立つ烟かな」

まつら(松浦) 祭(名) まつること、そのわざ。祭祀。祭禮。祭典。田山城國なる加茂神社の祭。かもまつり。あふまつり。空鷲四月まつりの日、葵、かづら、いといつくしうらるはしきまにて」 祭花祭など、いとさわがしくて過ぎぬ」 男女女の交接。(主に接頭語(御)を添へていふ)「俚語」

祭の車(名) 加茂神社の祭禮を見物するのために物懸ける牛車(名)。祭花四月、祭など、物懸しくして過ぎぬ。祭の車、一條院のしもべ打ちたりなどいふことありて」

祭の官(名) さいくわん(祭官)に同じ。祭過ぎての柄麵棒(名)「句」「喧嘩過ぎての棒きり(名)に同じ。『諺語』

祭の主(名) さいしゆ(祭主)に同じ。正徳記「中臣(名)の祖大庭島(名)の神を祭の主とす。又、大幡主(名)といふ人を大神主となしたまふ」

祭の使(名) 加茂の祭の時に、奉幣のために、朝廷より遣さるる使。其内侍のすけなどいひ出て、をりをり内へ参り、祭の使などいひ出てたるも、おもただしからずやはある」

祭の庭(名) さいだん(祭壇)に同じ。祭の渡つた後(名)のやう「句」「大風(名)の後(名)のやう」に同じ。『諺語』

臨時(名)の祭(名) 次條に同じ。祭花「三月二十日餘に、石清水(名)のりうじの祭に」

臨時(名)の祭(名) 例祭以外、臨時に行ふ祭。日本祭以外に行ふ祭、山城國賀茂神社にて、毎年陰曆十一月下の酉の日に行ひしもの、石清水(名)八幡宮にて、陰曆三月中の午の日に行ひしもの、祇園神社にて、陰曆六月十五日に行ひしものなど。又、賀茂・石清水などのこの祭の試樂(選立)などの時、清涼殿の前庭に座を設けて、樂人・舞人何候し、主上御して御覽ある處を、庭(名)の座(名)といへり。枕「なほ世にめでたきもの、臨時の祭の御前ばかりの事は、何事にかあらん」 養老抄「骨色(文同)黃龍」臨時祭庭座(略弓)、「弓場始(名)等被用之」

まつり(末利) 末利(名) まつさく(末作)を見よ」商工業の利益。末項なる利益。わづかの利益。

まつり(茉莉) 名「植」木犀(名)科に屬する灌木。幹はやや攀縊性を具へ、葉は單葉或は三出複葉にして對生し、質剛く、光澤を有し、楕圓狀卵形又は廣卵形、全縁にして、先端尖り、葉脈著しく、葉柄は短く、上方に向ひて急に彎曲す。花は三乃至十二筒簇生し、急なしにして、大さ錢の如く、萼片は線狀にして繊細、花冠は長さ三四寸の筒部を具へ、各裂片は長楕圓形もしくは圓形にて、芳香有り、初は白く、後、黄に變ず。原産地は印度。もうりんくわ。

まつり(末流) 名「川」川の流の末。まつり。末の世。末世(名)。まつり。血すぢの末。子孫。後裔。末裔。まつり。流派の末。末派。まつり。まつらぬ流派。瑣末なる流儀。まつり。末流を汲む(名) 川の流の末の水を汲む。下流を汲む。ある流派の系統を傳ふ。瑣末なる流儀を學ぶ。まつり(末流) 祭客(名) 産土神(名)の祭禮の日に、酒宴に招かれて來る客。瀬川流派六月七日、祇園會の……折しも今日祭客の祭客。

まつり(茉莉花) 名「茉莉」の花。

まつり(まつり) 政(名) 動四自「次條の語の語尾を變化せしめたる語のり(詔つ)はかり(謀つ)ひざり(獨言つ)参照」まつり(まつり)をなす。政治を行ふ。「古語」源氏世をまつりごたんにも」 祭花「今、行く末に、世をまつりごち直させたまはん」 統べつかさどり。處理すをまつりごちたまふ」

まつり(まつり) 政(名) 「祭事の義」せいぢ(政治)に同じ。紀「朝機、ミカドノマツリゴト」

まつり(まつり) 政(名) 「政所」に同じ。政を行ふ建物。官廳。政廳。まつりごち。和名「廳、萬都利古度度乃」

まつり(まつり) 政(名) 「政」の政始(名)と「外記」の政始(名)とを見よ。せいぢ(政治)に同じ。せいぢ(政治)に同じ。

まつり(まつり) 政(名) 「政人」の義はんくわん(判官)に同じ。「古語」後鐔淡路のまつりごちとびとの任果て」

まつり(まつり) 政(名) 「まつりごち」の政(名)に同じ。

まつり(まつり) 祭込む(動四他) 老朽者などを、閑散なる地位に据う。

まつり(まつり) 奉出す(動四他) 「まつり」にす(奉り出す)の約「たまつる(奉る)に同じ。「古語」萬葉、まそ鏡かけてしぬべとまつりだすかたみの物を人に示すに」

まつり(まつり) 祭主(名) さいしゆ(祭主)に同じ。

まつり(まつり) 松林檎樹(名) 「植」あななす(鳳梨)に同じ。

まつり(まつり) 祭屋(名) 神靈を祭るための建物。廟(名)「古語」楚、祖廟、マツリヤ」

まつり(まつり) 祭(名) 「祭は、何時に限らず、物を供へてするをいふ字、祀は

まつり(まつり) 祭(名) 「祭は、何時に限らず、物を供へてするをいふ字、祀は

まつら

一定時にするにいふ字。敬を致し儀を整へて神に事ふ。萬葉わが祭る神にはあらずますらをにとめたる神ぞよく祭るべき。神と祀奉て、一定の場所に鎮まらしむ。奉祀す。

まつる 奉る【助動】たてまつる(奉る)に同じ。萬葉たてなはる青垣山の山つみのまつるみつきと。

まつる 奉る【助動】たてまつる(奉る)に同じ。萬葉まつる(ぬ人をもやし掃き清め仕へまつりて)。

まつる 奉る【助動】たてまつる(奉る)に同じ。萬葉まつる(ぬ人をもやし掃き清め仕へまつりて)。

まつる 奉る【助動】たてまつる(奉る)に同じ。萬葉まつる(ぬ人をもやし掃き清め仕へまつりて)。

まつる 奉る【助動】たてまつる(奉る)に同じ。萬葉まつる(ぬ人をもやし掃き清め仕へまつりて)。

まつる 奉る【助動】たてまつる(奉る)に同じ。萬葉まつる(ぬ人をもやし掃き清め仕へまつりて)。

まつる 奉る【助動】たてまつる(奉る)に同じ。萬葉まつる(ぬ人をもやし掃き清め仕へまつりて)。

まつる 奉る【助動】たてまつる(奉る)に同じ。萬葉まつる(ぬ人をもやし掃き清め仕へまつりて)。

まつる 奉る【助動】たてまつる(奉る)に同じ。萬葉まつる(ぬ人をもやし掃き清め仕へまつりて)。

まつる 奉る【助動】たてまつる(奉る)に同じ。萬葉まつる(ぬ人をもやし掃き清め仕へまつりて)。

まつる 奉る【助動】たてまつる(奉る)に同じ。萬葉まつる(ぬ人をもやし掃き清め仕へまつりて)。

まつる 奉る【助動】たてまつる(奉る)に同じ。萬葉まつる(ぬ人をもやし掃き清め仕へまつりて)。

まつる 奉る【助動】たてまつる(奉る)に同じ。萬葉まつる(ぬ人をもやし掃き清め仕へまつりて)。

まつりか

郡にある町。鏡子街道に當り、鐵道總武線の一驛。もと一寒村なりしが、明治元年、遠江國掛川(掛)城主太田資美(資)一時この地に移封せられて、陣屋を置きしより一聚落を爲すに至れり。明治の初年設置の縣の一。四年四月、上總國舊松尾藩(老山藩の改稱)の地に立てしもの。同年十一月、木更津縣に入る。

まつりか 松岡(名)【地】常陸國多賀郡にある村。陸前濱街道に當り、水戸侯の家老中山氏の居城ありし處。

まつりか 松岡(名)【地】越前國吉田郡にある村。勝山街道に當り、福山市の東二里、九頭龍(龍)川の岸。一時、福井藩主支族の第宅在りし處。明治の初年設置の縣の一。四年七月、常陸國舊松岡藩の地に立てしもの。同年十一月、茨城縣に入る。

まつりか 松岡(名)【地】常陸國多賀郡にある村。陸前濱街道に當り、水戸侯の家老中山氏の居城ありし處。

まつりか 松岡(名)【地】越前國吉田郡にある村。勝山街道に當り、福山市の東二里、九頭龍(龍)川の岸。一時、福井藩主支族の第宅在りし處。明治の初年設置の縣の一。四年七月、常陸國舊松岡藩の地に立てしもの。同年十一月、茨城縣に入る。

まつりか 松岡(名)【地】常陸國多賀郡にある村。陸前濱街道に當り、水戸侯の家老中山氏の居城ありし處。

まつりか 松岡(名)【地】越前國吉田郡にある村。勝山街道に當り、福山市の東二里、九頭龍(龍)川の岸。一時、福井藩主支族の第宅在りし處。明治の初年設置の縣の一。四年七月、常陸國舊松岡藩の地に立てしもの。同年十一月、茨城縣に入る。

まつりか 松岡(名)【地】常陸國多賀郡にある村。陸前濱街道に當り、水戸侯の家老中山氏の居城ありし處。

まつりか 松岡(名)【地】越前國吉田郡にある村。勝山街道に當り、福山市の東二里、九頭龍(龍)川の岸。一時、福井藩主支族の第宅在りし處。明治の初年設置の縣の一。四年七月、常陸國舊松岡藩の地に立てしもの。同年十一月、茨城縣に入る。

まつりか 松岡(名)【地】常陸國多賀郡にある村。陸前濱街道に當り、水戸侯の家老中山氏の居城ありし處。

まつりか 松岡(名)【地】越前國吉田郡にある村。勝山街道に當り、福山市の東二里、九頭龍(龍)川の岸。一時、福井藩主支族の第宅在りし處。明治の初年設置の縣の一。四年七月、常陸國舊松岡藩の地に立てしもの。同年十一月、茨城縣に入る。

まつりか 松岡(名)【地】常陸國多賀郡にある村。陸前濱街道に當り、水戸侯の家老中山氏の居城ありし處。

まつりか 松岡(名)【地】越前國吉田郡にある村。勝山街道に當り、福山市の東二里、九頭龍(龍)川の岸。一時、福井藩主支族の第宅在りし處。明治の初年設置の縣の一。四年七月、常陸國舊松岡藩の地に立てしもの。同年十一月、茨城縣に入る。

まつりか 松岡(名)【地】常陸國多賀郡にある村。陸前濱街道に當り、水戸侯の家老中山氏の居城ありし處。

まつり

まつり 松尾浦(名)【地】まつのほのうら(松帆浦)に同じ。

まつり 松尾芭蕉(名)【人】俳人。正風(正)の祖。伊賀國柘植の莊の人。儀左衛門の第三子(一説に興左衛門の第二子)。幼名は金作半七郎。其七郎などいふ。十歳の頃より、伊賀上野の城代藤堂良精の嫡子良忠に仕へて、小小姓(小)となり、良忠俳諧を好み、北村季吟の門に學びて、蟬吟と號せしに感化せられ、斯道に入り、寛文六年、致仕して、京都に赴き、季吟に從ひて、和歌俳諧を學び、又、伊藤坦庵に詩を學ぶ。その頃、泊船堂桃青、釣月軒宗茂と稱せり。尋いて、西國を遊歴し、十二年、江戸に下り、小澤下尺、杉山杉風等の家に寄寓し、後、延寶三年、三十一歳にして、薨歿して、風蘿坊といひ、又、杖錦子、裾褶齋と號し、杉風の深川六間堀の別墅を宿とし、古風、談林風以外、閉寂の句風を創む。後、好みて四方を遊歴し、元祿七年、浪華に入り、門人岡女の褒應を受け、胃腸を害し、御堂(前)の花屋左衛門の裏座敷を借りて病臥し、翌年歿す。年五十一。近江國義仲(寺)に葬る。著書多し。

まつり 松尾山(名)【地】美濃國不破(郡)關原(村)大字松尾の南にある山。今須(村)峠に連なり、高さ九五七尺、藤川と竹之尾川と、その麓を繞り、山頂に平地あり、關ヶ原を俯瞰するを得。關ヶ原の役、小早川秀秋の陣を設けて、兩軍の形勢を觀望し、終に約に背きて、西軍を撃つに至りし所。

まつり 松尾流(名)【茶】茶道の流派の一。松尾宗二の創めしもの。

まつり 眞手(名)【茶】左右兩方の手。兩手(名)【茶】、雙手、山釜(みたら)しにわかれすすて宮人のまてに捧げて御戸



(をせばをつま)

まつ

開くなり。【まてな人】まて【名】律義(律)。實直。「中國の方言」まて【西(Mate)】名。【まて】これをに入れて、熱湯を注ぐに用ふる容器の名。南米ペラグワイ國、ブラジル國の數種の灌木の葉より製し、我國の茶と同様に、熱湯を注ぎて飲用するもの。その葉を若枝と共に刈り取り、香氣ある木を焚くその上に吊し、その乾きたし、袋に入れて販賣す。茶と同く、粗片となし、袋に入れて販賣す。茶と同く、茶葉を含め、その量は、茶よりも少く、飲用するには、一種の細き管にて吸ふ。えらば、げらぐわい茶。

まつ 馬蛤過刀(名)【動】鱗類に屬する軟體動物。我國、東海より西南諸州にかけての淺海に産し、殻は長さ三四寸に及び、長方形をなし、前後の兩端開け、外面は黄褐色、内面は淡黄色を呈す。味美ならず。いたがひ。かみそりがひ。まてがひ。【鳥】一の洲(一)都の客とまて取りに。

まつ 待て【動他】まつ待つ(の)命令形。待て【暫(心)】し【句】すこしの間待つて居よ。新後舞待てしばし夜深き空のほととぎすまだ寐さめぬ人もこそあれ。【自】自ら省みて、自己の行動を差し控ふる時にいふ語。保馬只一矢に射落さんと打擧げいふ語、待て【暫】し【まて】【動自】まて待つ(の)連用形なる【まて】の略。【古語】拾遺初瀬(まてける道に)。

まつ 迄迄【助】距離、時日、程度などの極端を示す語。(動詞)形容詞及び助動詞に添ふ場合に、普通連體形に續けども、稀には、終止形に續けるもあり。古今「朝ぼらけ有明の月と見るまてに吉野の里に降れる白雪」【句】の切目(まて)に添ひて、その意を強むるに用ふる語。【足利】時代より徳川時代前期にかけての語。狂言鳥山伏(いづ方へも參らねども、そなたが事ぢや、行(まて)てやらうまて)五人女「やうも、やうも二人連れ下向した事ぢやまて」

まつ までも無し【句】云云の事までする

まつ までも無し【句】云云の事までする

まつ までも無し【句】云云の事までする

まつ までも無し【句】云云の事までする

まつ までも無し【句】云云の事までする

まつ までも無し【句】云云の事までする

まつ までも無し【句】云云の事までする

まつ までも無し【句】云云の事までする

まつ までも無し【句】云云の事までする

まつ までも無し【句】云云の事までする

必要なし。正統記「太上天皇の詔にて、この天皇立たせたまひぬ。親王の宜旨までもなし。まづ皇太子とし、即ち受禪あり」

【助】まで送(送)に同じ。狂言吟響「表に案内があるが、誰ぢや知らぬまでい」狂言どぶかち「石は無いかぢやまでい」

【名】次條の略。
マデイラ酒(英 Malalta wine) (名) 大西洋上、モロッコ(Morocco)の西方約四百哩に在る葡萄牙領マデイラ島に産する。一種の葡萄酒。西班牙・伊太利兩國の人殊に愛飲す。までい。

【馬蛤潟】(名)「植」まではし(馬刀葉推)に同じ。

【馬蛤】(名)「馬蛤」に同じ。「物」(物)に同じ。

【馬刀柄】(名)「馬刀柄」に同じ。「語」(語)に同じ。

【馬刀】(名)「馬刀」に同じ。「物」(物)に同じ。

【馬刀】(名)「馬刀」に同じ。「物」(物)に同じ。

【馬刀】(名)「馬刀」に同じ。「物」(物)に同じ。

【馬刀】(名)「馬刀」に同じ。「物」(物)に同じ。

【馬刀】(名)「馬刀」に同じ。「物」(物)に同じ。

は五月五日、右近衛府のは、同六日に行ふを例としたり。

【待無】(名)「待無」に同じ。「待無」(待無)に同じ。

【馬蛤】(名)「馬蛤」に同じ。「物」(物)に同じ。

【馬刀】(名)「馬刀」に同じ。「物」(物)に同じ。

【馬刀】(名)「馬刀」に同じ。「物」(物)に同じ。

【馬刀】(名)「馬刀」に同じ。「物」(物)に同じ。

【馬刀】(名)「馬刀」に同じ。「物」(物)に同じ。

【馬刀】(名)「馬刀」に同じ。「物」(物)に同じ。

【馬刀】(名)「馬刀」に同じ。「物」(物)に同じ。

【馬刀】(名)「馬刀」に同じ。「物」(物)に同じ。

【馬刀】(名)「馬刀」に同じ。「物」(物)に同じ。

うし、時人、呼びて、後の三房といふ。

【馬刀】(名)「馬刀」に同じ。「物」(物)に同じ。

【馬刀】(名)「馬刀」に同じ。「物」(物)に同じ。

【馬刀】(名)「馬刀」に同じ。「物」(物)に同じ。

【馬刀】(名)「馬刀」に同じ。「物」(物)に同じ。

【馬刀】(名)「馬刀」に同じ。「物」(物)に同じ。

【馬刀】(名)「馬刀」に同じ。「物」(物)に同じ。

【馬刀】(名)「馬刀」に同じ。「物」(物)に同じ。

【馬刀】(名)「馬刀」に同じ。「物」(物)に同じ。

【馬刀】(名)「馬刀」に同じ。「物」(物)に同じ。

【馬刀】(名)「馬刀」に同じ。「物」(物)に同じ。

【待】(動)「待」(待)に同じ。「待」(待)に同じ。

【窓】(名)「窓」(窓)に同じ。「窓」(窓)に同じ。

【窓】(名)「窓」(窓)に同じ。「窓」(窓)に同じ。

【窓】(名)「窓」(窓)に同じ。「窓」(窓)に同じ。

【窓】(名)「窓」(窓)に同じ。「窓」(窓)に同じ。

【窓】(名)「窓」(窓)に同じ。「窓」(窓)に同じ。

【窓】(名)「窓」(窓)に同じ。「窓」(窓)に同じ。

【窓】(名)「窓」(窓)に同じ。「窓」(窓)に同じ。

【窓】(名)「窓」(窓)に同じ。「窓」(窓)に同じ。

【窓】(名)「窓」(窓)に同じ。「窓」(窓)に同じ。

【窓】(名)「窓」(窓)に同じ。「窓」(窓)に同じ。

まて

まて

まて

まて

まどあかり

まどあかり 窓明・窓明(名)窓よりさし入る光。[義]「時雨るるや黒木積む屋の窓あかり」

まどい 的射(名)的を立てて、射術を練習すること。[義]「百貫神無月たつらの弓を引きつる今日や的射の初なるらん」

まどいを 的魚(名)「動」まどいを(的思)に同じ。[鯛]に同じ。

まどらだひ 的鯛(名)「動」まどらだひ(的鯛)に同じ。[鯛]に同じ。

まどらうど 真人(名)「律義」なる人。[幾内及び東國の方言]

まどらうを 的魚(名)「動」かがみだひ(鏡鯛)に同じ。[まらだ]の(的鯛)に同じ。

まどか 圓か(貌)「動」圓くて、缺けたる處なきさま。まらまる。まらやか。まららか。[義]「久方の月のまどかになる頃は紅葉染むともしぐれざらん」

まどかかみ 圓鏡(名)圓き形の鏡。[父子相違]法身、まどかなれば

まどかかく 角(名)「ふきぬきかく」(吹貫角)に同じ。

まどかけ 窓掛・窓掛(名)「し」込む光線を遮るために、窓に掛くる物。かあてん。まどかた 的形(名)「地」次條の略。[義]「ますら男がさつ矢手袂み立向ひ射るまどかたは見るにさやけし」

まどかたの 的形浦(名)「地」『風土記逸文』に、地形的に似たりとて名づけしものといへり。伊勢國多氣郡東黒部村の海に接せし時代の海岸の稱。今は、海岸より十餘町の距離に在り、その大字垣内(名)に、麻刀方(名)神社あり。まどかたの 皮(名)「昔」射術を練習する時の、か(名)の後に張りたる皮、又は布の幕。古くは、鹿又は熊の皮を用ひしが、後には、布を用ひたり。

まどかり

まどかり 的がり(名)「小」的の輪。前條なるをいふなり。[の語]参照。

まどかむ 的串(名)「的」を懸け、又は扱むに用ふる柱、的の種類によりて、大小様ならず。こうぐし。[義]「的串の前を射ん」

まどくは 窓歎・窓歎(名)「風呂無」の(鏡)に二箇の孔あるもの。[床]の美稱。[古語]「眞床、マトコ」

まどくを 窓越窓越(名)窓を隔ててあること。[義]「窓越しに月おし照りて足引の風吹く夜は君をしぞ思ふ」

まどくろ 間所(名)「へや」室。[義]「常間所も多ければ、ゆるゆるの休息遊ばせや」

まどくろ 政所(名)「まんごころ」(政所)の轉。[古語]「空鶴まどくろの別當ども」

まどくろ 魔所(名)「ましよ」(魔所)に同じ。まどくろけい 政所家司(名)「まんごころけい」(政所家司)の轉。[義]「まどくろけいしども、三十人ばかり」

まどくろ 貧(名)「形」(まじ)「貧」に同じ。[義]「財多ければ、身を守るにまどくろ」

まどくろ 窓下(名)「窓の下に當る處」。

まどくろ 窓障子・窓障子(名)「窓」に「せん」窓障・窓障(名)「窓」の數に應じて出す税金。こまかな。其角窓障の浮世をはたす雪見かな

まどくろ 的立(名)「射」射藝の時の、的を立てること、又その役。東馬射者騎馬、的立役人者步行也

まどつけ

まどつけ 的附(名)「射」射藝の時、射手の勝負を書きつける役。北山抄「取、成就、的附座」

まどつけ 的附文(名)「射」射藝の時、附の勝負を記したる文書。北山抄「以、的附文、奏上卿」

まどつけ 窓月(名)「葉子」の最中(名)の、皮を方形にし、その中に、月の形をあらはしたるもの。

まどつけ 的場(名)「的」を懸けて、弓・鐵砲などの射撃を行ふ場所。[義]「的を懸けてある處(弓場)に對して、太平駕敵を(一)的場の内に攻寄せたれば、今はかうと、大いに悦びて」

まどつけ 的場(名)「駿河國安倍郡有渡」村小吉田(名)にありし料理屋。[義]「府中から江尻まで二百て乗せた且那が、小吉田の的場で、たらふく酒を振舞はしやうた」

まどつけ 惑はかす(名)「動」(惑はかす)に同じ。[義]「心だましひを惑はかせたまふものかな」

まどつけ 縫掖(名)「次條」の略。まつけは縫掖(名)の袍(名)。「句」縫掖(名)の袍(名)に同じ。

まどつけ 的始(名)「ゆぼほしめ」(弓場始)に同じ。東馬正月…六日。壬寅…御酒宴最中、有、御的始

まどつけ 纏はる(名)「動」纏ひつくやうになす。まつけは「馴れ親しみて附きまよふやうになす。まつけは。源氏何心もなくむつれまとはしきこえたまふ」

まどつけ 惑はかす(名)「動」(惑はかす)に同じ。[義]「困惑せしむ。まどはかす。源氏幼き人惑はしたりと、甲將の憂へしは」

まどつけ 纏はる(名)「動」(纏下二目)まどとひつはる。醒睡、ねだれて物を取る者…せて二百せよとぞまとはれける

まどひ

まどひ 纏(名)「まとふこと」。「うまじ」(馬標)に同じ。[義]「四州古戦、纏を、春風に吹返させ」

まどひ 纏(名)「まとふこと」。「うまじ」(馬標)に同じ。[義]「四州古戦、纏を、春風に吹返させ」

まどひ 惑(名)「まとふこと」。

まどひ 惑(名)「まとふこと」。

まどひ 纏(名)「まとふこと」。

まどひ 纏(名)「まとふこと」。

まどひ 纏(名)「まとふこと」。

まどひ 纏(名)「まとふこと」。

まどひ 纏(名)「まとふこと」。

まどひ 纏(名)「まとふこと」。

まどひ 纏(名)「まとふこと」。



「車より落ちぬべうまどひたまへば」
 「正しからぬ事を思ふ。考へちがふ」
 「迷國、マドヘルルカフヨト」**まどふ**
 (迷ふ)と同じ。落窪「黒塗の箱の九寸ばかりなるが、深きは三寸ばかりにて、古めきまどひて、處處兀けたるを」落窪「黒塗の箱の……ふるめきまどひて」
 惑(へる)者は牛毛の如し、知る人は鱗角の如し(牛毛)「學ぶ者は牛毛の如く、成る者は鱗角の如しを見よ」愚人は多く、智者は稀なる譬。「諺語」さめごと「惑へる者は牛毛の如し、知る人は、鱗角の如し」

まどぶ (動四他) 「缺けたるを埋(め)あはせて、圓(○)かならしむる義なるべし」つぐなふ。辨償す。「京都・大阪の語」一代五「兩の銀子は、私がまどひます」
まどぶぎやう 的奉行(名)弓場始(ひ)の時、矢敷を書きつくる事を掌りし職。
まどぶた 窓蓋窓蓋(名)窓の蓋(ふた)。五人女「枕に近き窓蓋を突きあげ、秋この暑き間はといへば」

まどほ 間遠(名)「まどほきこと。源氏「まどほに聞きならひたまへる御耳に」
 「織目の粗(き)きこと。萬葉「須磨のあまの體やき衣のふぢごころもまどほにしあればいまだ著馴れず」
まどほ 閑遠(形)「場所又は時間遠くへだたりてあり。萬葉「まどほくの雲に見ゆる妹が家(こ)にいつか至らむ歩め我(わ)が駒」

まどま 的的(名)古、射場にて、的の傍に居りて、矢の中(の)りたる時、旗をあげて報告すること、又その役の人。やままし。和名司箭、末止萬字之、執旗司射、中當(の)前(の)まへ。
まどまり 纏(名)「まどまること。まどまりが附く」句「まどまる(纏まる)に同じ。」

まどまる 纏まる(動四自)「一團に統へらる。一括せらる。統一せらる。統括せらる。」

らる。「紛争解く。まるく納まる。」
まどむ 纏む(動下二他)「一團に統へらる。一括す。統括す。」紛争を解く。まるく納む。
まどん 女(英 Antonia) (名)「もと伊太利語にて、佛蘭西語より出でたる英語の Madonna と同義」繪畫又は彫刻に表したる、聖母マリヤの像。多くは、幼時の基督を抱けるさまに表はす。
まども 眞體(名)「船の體」の眞正面の方向。まむき。「海上にて、風の後方より眞直に吹くこと。おひて。五人女「この風、眞體でござる」

まども 正面(名)「前條の語」の轉義「まどむる(眞正面)と同じ」
まども 眞體走(名)「船の、眞體の風に帆を揚げて、まどむるに走ること」
まどま 的屋(名)やは(矢場) (名)に同じ。新米代藏「河原の涼(ひや)も、歩くばかりは錢の入らぬ事とて、人だち多し。なかなかの屋敷店、水茶屋、まして、夜食の料理など、暇(ひま)人は稀なり」

まどや 的矢(名)的と矢と。「的を射るに用ふる、練習用の矢。その製種種なれども、三節の醜(みに)かに箭管(や)を取り付け、箭羽を抜き、鐵は平題(へら)を用ひたり(征矢)に對して、平箭鷹の羽で別いだりける的矢一手ぞきし添へたる」
 的矢の如く(名)常に離れず親しむるに、和殿法師になりたまひて」

まどや 的矢(名)「地志摩國志摩郡にある村。鳥羽(つ)港を南に距ること五里、安乘(やす)崎と明神崎と灣口を扼し、安全なる碇泊地を作り、安乘崎には、燈臺あり」
まどやか 圓やか(貌)「まどか(圓か)に同じ」
まどやま 的山(名)「的を立つる小山。あづち。太平記、草山の的山ばかりになりける」

まどゆがけ 的碟(名)「的を射る時の碟の義」右の手にのみ著くる碟。もうゆがける」

(諸碟)参照。
まどゆみ 的弓(名)「的を射るに用ふる、練習用の弓。宇道、白河院の武者所の中に宮造式成(なり)源清則(もと)の、殊に的弓の上手なり」と
まどり 眞鳥(名)「動」ま(眞)は美稱の接頭語「わし」の異稱とも、う鶴(う)の異稱とも、又、(徳)なりとも、き(雉)なりともいへど、矢羽にいふは、驚なること確かなるが如し。萬葉「眞鳥住む雲梯(う)の杜(の)のすがの根をきぬにかきつけ著せむ子もがも」安土日記、矢筈、眞鳥の羽を付け」
まどり 間取(名)「一月の家屋の内の、部まどりへまどり草(まどり草)に同じ。まどり(苦參)に同じ。源朝臣、苦參クララ、又、マトリグサ」
まどり 地(英 Madrid) (名)「地」西班牙國の首府。
まどり 眞鳥羽(名)「驚の尾羽を矢羽に用ふる時にいふ語。まば」
まどり 間取る(動四自)「暇(ひま)が、工面なされて」
まどろ 一(形)「まどろに同じ」
まどろす (蘭 Matsuro) (名)「木夫。船頭。またろす」(徳川時代より明治初年へかけての語)「氣の利かぬ人を罵りていふ語。ばんつく。〔俚語〕」
まどろす ば(蘭 Matsuro 英 Pine) (名)「火皿甚だ大にして、吸口の彎曲せるパイプ。材は木製、鑲物(う)多し」
まどろ 一(形)「まどろの音便」
まどろみ (名)「まどろむこと。精神(しん)にもあらぬ旅旅のまどろみにほの見し夢を人に語るな」
まどろみ 入る(動四自)「十分にまどろむ。寐入る。爽々例よりもまどろみ入りはべりにけるも」

まどろむ (動四自)「目が濁(にご)り、少時とろとろと眠る。しばし眠る。微睡す。源兵若き人は、何心なく、いとよくまどろみたるべし」
まどわか 窓枠窓枠(名)「窓の周囲のわく。上下窓(の)の(の)附きたる場合の窓枠に、箱枠(の)の名あり」
まどお 圓居(名)「人人、圓く居ならぶこと。人人の、親しく集まり會ふこと。くるまぎ。團樂。古今「思ふどちまどおせる夜は唐親したましく惜しきものにぞありける」
まどお 親したましく集まり會へる人。繁花「このまどおしたく、皆、聽衆に請衆にて」
まどお 圓居る(動下一自)「まどおをなす。團樂す」(古語)「空閑氏人のまどおる今日は春日野の松にも藤の花ぞ咲くらん」

まど 眞魚(名)「ま(眞)は美稱の接頭語、食物に供する魚。ま(眞)の祝(の)時の食物」(眞菜)「眞菜の祝(の)句」小兒に、生後、始めて、魚肉を食はしむる儀式。古は通常三歳、室町時代には、生後百一日目、徳川時代には、百二十日目に行へり。魚味(い)の祝。まはな本字。
まな 眞名(名)「漢字。まんな。〔眞字〕(假名)に對して、枕「まんな、かんなも」源兵草(の)にも、まんなも、書きませたまへり」句「つみやう(實名)に同じ。源歩色葉集「實名、まな」
まな 眞菜(名)「稱」ま(眞)は美稱の接頭語「あぶな(油菜)に同じ。〔唐菜〕(唐菜)に同じ」
まな 副(制)止むるにいふ語。「古語」まなまな参照。配「勿争、マナアラガフコト」
まな 愛(接頭)「眞女の義にて、まは美稱の接頭語、なは親愛の義なるべし。まな(眞女)参照「親しむ愛する意の語」〔眞名施(ま)愛兒(ま)〕
まな といふ兒(の)「句」愛らしき兒女。「古語」萬葉足引の山澤人の人さはにまなといふ兒があやにかなしき」

まな いた 組板・組(名)「眞魚(の)板の義」厨にて、魚肉・野菜などを切り割くに用ふる、木製の具、厚くして、兩脚ありいた。さいばん。そ。空懸「まな板ども立てて、魚・鳥作る」

まな いた 組板・組(名)「眞魚(の)板の義」厨にて、魚肉・野菜などを切り割くに用ふる、木製の具、厚くして、兩脚ありいた。さいばん。そ。空懸「まな板ども立てて、魚・鳥作る」

まなびた

組板の魚【句】「組上(の)の魚」に同じ。「諺語」
まなびた【い】組板石・組石魚板石【名】
組板のごとき形の石。和合人・窟の前の魚板石に至る。

まなびた【えほ】組板鳥帽子組鳥帽子・魚板鳥帽子【名】たてえほし(立鳥帽子)を嘲りていふ稱なるべし。太平記納言・宰相など、路次に行進ひたるを見て、あはや、例の長袖垂れたる魚板鳥帽子と、聲を學び、指を差して輕慢しける間、公家の人人、いつしか言ひも習はぬ坂東聲を使ひ、著も馴れぬ折鳥帽子に額をあらはして。

まなびた【き】組板木・組木【名】「形、やや組板に似たるよりいふ」極(の)の水門の戸の上部に取付けて、その戸を上下するに用ふる木。天の網鳥(極)の組板木に、しつかと括り。

まなびた【なほほ】組板直組直【名】眞宗の寺にて、報恩講の最後の日に、精進落(の)の意味にて、大なる鯉を組板に載せ、袈裟(を)著けたる料理人、これを料理して、参詣の群集に頒つこと。

まなびた【びらき】組板開組開【名】東京市淺草區北清島町なる東本願寺派の寺院報恩寺にて、毎年一月十二日、書院の大廣間に式場とし、開祖性信上人の繪像の前に供へたる二尾の大鯉を、善男、善女著座の前にて料理人、古式の禮法によりて料理する年中行事。

まなびた【眞中】眞中【名】兩端より同距離に當る部分。ただなか。まんなか。もなか。まただなか。中央。正中。

まなびた【間半】間半【名】長さ一間の半分。藤栗毛「うらが長松(の)の嫡あは、蛸よなあ、あせき、蛸だとおもしろやえ、八間(の)まなかに足だけ」

まなびた【眞鹿鹿】眞鹿鹿【名】「動」『まな(愛)を見よ』か(鹿)の美稱。「古語」鹿眞名鹿の皮を全剥(の)にして。

まなびた【眞那伽】眞那伽【名】『南洋マラッカ』(T. H. Coon)の轉訛にて、その地の産なるにより

まなび

ていふとぞ」香木の一種。上・中・下三種あれども、品格高尚の材多く、香氣は甘・酸・辛・鹹苦の五味ありとせられ、聞きわけ難きよにて、香道にては、初心の者には聞きしめず。ちんかう(沈香)參照。

まなびた【眞馬書眞字書】眞馬書眞字書【名】漢字にて書くこと、又その書きたる物。(假名書に對して)

まなびた【眞魚鯉】眞魚鯉【名】「動」硬鱗類に屬する魚。長さ二尺に及び、體形楕圓をなし、頭部小さく、眼も口も小にして、齒を有せず。頸部縮み、背部闊く、腹部は側扁して、斜方形をなし、鱗甚だ細かく、背脊兩端はやや大に、尾鱗又大にして深く正交し、背部は褐色、腹部は淡く、頭部と鱗部とは、淡黑色を呈す。中國地方の遠海に多く、常には外海に在り、六月の産卵期には、内海に入り、往往河口に來る。脂多くして、味濃し。いけがと。

まなびた【眞長浦】眞長浦【名】「地」近江國高島郡三尾(の)即ち今の高島村、三尾村の邊の海岸の地なるべしといふ。

まなびた【眼聞】眼聞【名】「は助辭の轉音、かひ(間)かひ(映)かひ(類)」と語源を同じくす。眼の前。眼前。目前。「古語」萬葉いづくより來りしものぞまなかひにもなかりて安寝(の)しなきな

まなびた【眞魚食・眞魚昨】眞魚食・眞魚昨【名】魚類を料理して食物とする。「古語」虱口大分(の)尾鱗(の)さわさわに控依(の)せ騰(の)けて、拆竹(の)をとををとををに天(の)の眞魚昨獻らむ

まなびた【眞魚廚】眞魚廚【名】魚などを料理する處。くりや。「古語」字彙、廚、萬奈久利也

まなびた【目】目【名】「目の子の義。なは助辭の轉音」めだま。まなこだま。眼珠。目(目)に同じ。目要點。眼目(目)に同じ。眼に餘る【句】「目(に)餘る」に同じ。六畜畜合(の)月のすむ空はよそにも變らじをまなこに餘る廣澤の池

まなびた【目に角】目に角【句】「目(に)角を立つ」に同じ。狂言生捕物木(大)のまなこに角を立て

まなびた【眼に盡く】眼に盡く【句】悉く眼底に映す。講曲(三笑)「三千世界は眼に盡き、十二因縁は、心の中(に)際(も)無し」

まなびた【眼の壺血】眼の壺血【句】めだま(眼球)に同眼は天を走る【句】いかなる事をもよく見とほす聲。「諺語」眼を腹(み)らす【句】「目を腹らす」に同じ。

まなびた【眼を驚かす】眼を驚かす【句】「目を驚かす」に同眼を曝(め)す【句】絶間なく常に讀む。風來(の)全集(放屋後集)「天下の書に眼を過ぐ【句】「雲煙(の)過眼」を見よ」「目を過ぐ」に同じ。

まなびた【眼を閉づ】眼を閉づ【句】眼目す。死ぬ。精進今(の)は果の事をとて、……かのありし山寺にてぞする。……眼閉ぢたまひし處にて、經の心説かせたまはんとにこそありけれ

まなびた【眼を抜く】眼を抜く【句】「目を抜く」に同じ。本朝傳記事(御本尊を埋めおき、翌(の)日、それを顯し、京都の風聞致させ、何れの賣僧(の)とか馴合ひて、散錢取込むべき仕懸、疑無し。……佛の眼を抜くこと、かれこれ以て悪人なり」

まなびた【眼を塞ぐ】眼を塞ぐ【句】「目を塞ぐ」に同じ。竹庚申(黄泉(の)の)底の底までも、心にか

まなび

かるは、千代一人、明日が日、眼を塞ぐとも」
眼を見開く【句】「目を見開く」に同じ。一代男(不思議や、この女兩のまなこを見開き、笑顔して)

まなびた【眞砂】眞砂【名】まさご(眞砂)に同じ。萬葉相摸路(の)よるぎの濱のまなごなす兒らしかなしと思はるかも」

まなびた【眞名子・愛子・愛兒】眞名子・愛子・愛兒【名】愛しいつくしむ子。いとしご。萬葉(父君に再(の)は眞名子ぞ)

まなびた【眼差眼指】眼差眼指【名】まなざし(眼差)に同じ。若風(島俄かに口走って、亂氣のまなこざし)

まなびた【眼玉】眼玉【名】めだま(目玉)に同じ。新永代(眼玉をひっくり返して稼ぎける。新永代)

まなびた【眞砂路】眞砂路【名】まさごぢ(眞砂路)に同じ。萬葉(豊國の)まなごの濱邊のまなごぢのまなほにしあらばいかで嘆かむ

まなびた【ぶれ眼漬】ぶれ眼漬【名】目のつぶれてあること、又その人。いきら。藤栗毛(逃ぐるはずみに、按摩に行き當たる。あいた、あいた、あいた、眼漬めが、べら坊め)の唇。

まなびた【眼居】眼居【名】まなざし(眼差)に同じ。萬葉(驚は、……まなこみなど、うたて、よろづになつかしからねど)

まなびた【背毗】背毗【名】「目(に)な先の義。なは助辭の轉音」まなざし(背)に同じ。名義(背)マナサキ・マナジリ

まなじかたま 無目堅間 無目籠 [名] 目を密に堅く編みたる籠。古代の船の骨格にて、その外側に、獸皮などを張りて、水に泛べしなるべしといふ。「古語」

まなじかたま 無目堅間 [名] 前條に同じ。「古語」 蜀天無間勝間の小船を造りて、その船に載せまつりて」

まなじかたま 眞名序 眞字序 [名] 眞名文の序文。假名序に對して

まなじかたま 眞名目 [名] 日の後 [義] めじり [目尻] に同じ。字彙背、萬奈志利 [義] 皆にかかる [句] 見 [ゆ] 目にとまらんと思はぬ者は無かりけり」

まなじかたま 摩那斯龍王 [梵] Manasi [名] 佛 [太身] と譯す 八大龍王の一。阿修羅海を排して、喜見城を浸せし時、この龍身を榮らして、その海水を過めたりと云ふ。

まなじかたま 動四自 [名] まなじり [世] の語尾を變化せしめて、動詞としたる品名が目にに見遣る。若風俗、この人、語形 [か] の諸色 [世] にすぐれ、賢愚貴賤共に一度時 [世] れば手の舞ひ、足の踏む所を忘れ、惱ませ」

まなせだうさん 曲直瀬道三 [名] 一人 醫者。京都の人。父を堀部左門親貞といふ。名は正盛、字は一溪、道三はその通稱。雖知苦齋又は盡壽齋と號す。初、僧となりて、後、自ら曲直瀬と稱す。享祿元年、東遊して、下野の足利學校に學び、又、志を醫道に寄せ、田代三喜に從學し、十餘年にして、京都に歸り、醫治を專にし、啓迪集八卷を編し、正親町天皇の御覽に入る。又、將軍足利義輝、細川晴元三好長慶、松永久秀毛利元就等の厚遇を得、門人數百人に達し、文祿四年歿す。年八十九。

まなせだうさん 動 [動] しらぎめ [白鯨] に同じ。

まなせだうさん 眞南蠻 眞盤 [名] 印度の東岸

まなせだうさん 眞南蠻 眞盤 [名] 印度の東岸

まなせだうさん 眞南蠻 眞盤 [名] 印度の東岸

まなせだうさん 眞南蠻 眞盤 [名] 印度の東岸

まなせだうさん 眞南蠻 眞盤 [名] 印度の東岸

まなせだうさん 眞南蠻 眞盤 [名] 印度の東岸

まなせだうさん 眞南蠻 眞盤 [名] 印度の東岸

まなたり 面 [副] まのあたり [面] の約。「古語」 起唯愁不面、マナタリツカヘマツラズナリマルコトヲラウレフ」

まなち [名] 動 [くろだひ] [黒網] に同じ。

まなち 眞夏 [名] 夏のまきかり。盛夏。まなち 眞夏 [名] 夏のまきかり。盛夏。まなち 眞夏 [名] 夏のまきかり。盛夏。

まなち 眞夏 [名] 夏のまきかり。盛夏。まなち 眞夏 [名] 夏のまきかり。盛夏。

まなち 眞夏 [名] 夏のまきかり。盛夏。まなち 眞夏 [名] 夏のまきかり。盛夏。

まなち 眞夏 [名] 夏のまきかり。盛夏。まなち 眞夏 [名] 夏のまきかり。盛夏。

まなち 眞夏 [名] 夏のまきかり。盛夏。まなち 眞夏 [名] 夏のまきかり。盛夏。

まなち 眞夏 [名] 夏のまきかり。盛夏。まなち 眞夏 [名] 夏のまきかり。盛夏。

まなち 眞夏 [名] 夏のまきかり。盛夏。まなち 眞夏 [名] 夏のまきかり。盛夏。

まなち 眞夏 [名] 夏のまきかり。盛夏。まなち 眞夏 [名] 夏のまきかり。盛夏。

まなち 眞夏 [名] 夏のまきかり。盛夏。まなち 眞夏 [名] 夏のまきかり。盛夏。

まなち 眞夏 [名] 夏のまきかり。盛夏。まなち 眞夏 [名] 夏のまきかり。盛夏。

まなち 眞夏 [名] 夏のまきかり。盛夏。まなち 眞夏 [名] 夏のまきかり。盛夏。

まなち 眞夏 [名] 夏のまきかり。盛夏。まなち 眞夏 [名] 夏のまきかり。盛夏。

まなち 眞夏 [名] 夏のまきかり。盛夏。まなち 眞夏 [名] 夏のまきかり。盛夏。

まなびや 學舎 [名] 學舎。學校。

まなびや 學舎 [名] 學舎。學校。

まなびや 學舎 [名] 學舎。學校。

まなびや 學舎 [名] 學舎。學校。

まなびや 學舎 [名] 學舎。學校。

まなびや 學舎 [名] 學舎。學校。

まなびや 學舎 [名] 學舎。學校。

まなびや 學舎 [名] 學舎。學校。

まなびや 學舎 [名] 學舎。學校。

まなびや 學舎 [名] 學舎。學校。

まなびや 學舎 [名] 學舎。學校。

まなびや 學舎 [名] 學舎。學校。

まなびや 學舎 [名] 學舎。學校。

まなびや 學舎 [名] 學舎。學校。

まなびや 學舎 [名] 學舎。學校。

まなぶ 學ぶ [動上二他] 前條に同じ。千載「この歌の道をまなぶる事をいふに、唐國、日本の本の廣きまなぶる道をまなびず」

まなぶ 學ぶ [動上二他] 前條に同じ。千載「この歌の道をまなぶる事をいふに、唐國、日本の本の廣きまなぶる道をまなびず」

まなぶ 學ぶ [動上二他] 前條に同じ。千載「この歌の道をまなぶる事をいふに、唐國、日本の本の廣きまなぶる道をまなびず」

まなぶ 學ぶ [動上二他] 前條に同じ。千載「この歌の道をまなぶる事をいふに、唐國、日本の本の廣きまなぶる道をまなびず」

まなぶ 學ぶ [動上二他] 前條に同じ。千載「この歌の道をまなぶる事をいふに、唐國、日本の本の廣きまなぶる道をまなびず」

まなぶ 學ぶ [動上二他] 前條に同じ。千載「この歌の道をまなぶる事をいふに、唐國、日本の本の廣きまなぶる道をまなびず」

まなぶ 學ぶ [動上二他] 前條に同じ。千載「この歌の道をまなぶる事をいふに、唐國、日本の本の廣きまなぶる道をまなびず」

まなぶ 學ぶ [動上二他] 前條に同じ。千載「この歌の道をまなぶる事をいふに、唐國、日本の本の廣きまなぶる道をまなびず」

まなぶ 學ぶ [動上二他] 前條に同じ。千載「この歌の道をまなぶる事をいふに、唐國、日本の本の廣きまなぶる道をまなびず」

まなぶ 學ぶ [動上二他] 前條に同じ。千載「この歌の道をまなぶる事をいふに、唐國、日本の本の廣きまなぶる道をまなびず」

まなぶ 學ぶ [動上二他] 前條に同じ。千載「この歌の道をまなぶる事をいふに、唐國、日本の本の廣きまなぶる道をまなびず」

まなぶ 學ぶ [動上二他] 前條に同じ。千載「この歌の道をまなぶる事をいふに、唐國、日本の本の廣きまなぶる道をまなびず」

まなぶ 學ぶ [動上二他] 前條に同じ。千載「この歌の道をまなぶる事をいふに、唐國、日本の本の廣きまなぶる道をまなびず」

まなぶ 學ぶ [動上二他] 前條に同じ。千載「この歌の道をまなぶる事をいふに、唐國、日本の本の廣きまなぶる道をまなびず」

まなぶ 學ぶ [動上二他] 前條に同じ。千載「この歌の道をまなぶる事をいふに、唐國、日本の本の廣きまなぶる道をまなびず」

まなむす

「語」落蓬と寄りて、一足づつ蹴る。…君、まなまなとそら制しをしたまふ。
まなむすめ 眞名娘・愛娘〔名〕『まな(眞名)は接頭語』愛しいつくしむ娘。『豊後(の)の介(の)のまな娘』(備馬樂我門附)「あやめの郡の大領のまな娘といへ」
まなら 眞槽〔名〕「槽」おほなる(大槽)に同じ。
まに 摩尼(梵 Mani)〔名〕「佛」寶珠の名。龍王の腦中より出づといふ。又、帝釋天の持てる金剛にして、修羅と戦ふ時碎けて、鬪浮提に落ち、變じてこの珠となるといひ、又、過去久遠佛の舍利にして、その佛の法既に盡きぬれば、變じて、この珠となるともいふ。この珠を得れば、所願意の如く成るとて、如意珠ともいふ。摩尼珠。摩尼寶珠。如意珠。如意寶珠。
まに 隨〔副〕まにに(隨)に同じ。『古語』萬葉すめろぎの出でましましに……」
まにあはせ 間合〔名〕「間」に合はす。を見よ。間(こ)に合ふやうにすること。急場の用に當つること。

まにあひ 間合〔名〕「前條に同じ。『浮世文の手本を書く人が、古學のまにあひをするからさ』」
まにあひがみ 間合紙・間合紙〔名〕「間」長き形に流きて、半間の間に合ふやうに造りたる紙の義。古來攝津國有馬郡鹽瀨村大字名鹽紙の特産に係る。襖紙用の、一種の鳥子紙(ウツリ)に、一種の纖維に、その地特産の粘土を多量に混じて漉きしものなれども、近來は、三種(皮製紙等の反古を集め用ひ居れり。まにあひ。なほかみ名鹽紙)みなごがみ(漆紙)参照。
まにあひこ 間は 間合言葉〔名〕出まかせの言葉。博多小女郎浪遊、問詰められてまにあひ言葉」

まにあふ 間に合ふ〔句〕ま(間)の條下
まにけら 摩尼教・末尼教(英 Manichaeism)〔名〕波斯(の)の拜火教に本づき、基督教と佛教との要素をも加味したる宗教。西暦二百十九年頃、バビロニアに生

れし摩尼(Mani)即ちクアクリクス(Cathartes)の唱導に係る。摩尼は磔刑に處せられ、この教活動の中心は、後サマルカンドに移り、西暦第三世紀頃、羅馬にも傳はり、亞弗利加の北海岸にも傳はれり。けんけら。摩尼火祇教。
まにくわ けんけら 摩尼火祇教・末尼火祇教〔名〕前條に同じ。『三天の』
まにざう てん 摩尼藏天〔名〕「佛」三十一(天満寺山)に同じ。
まにし 眞西〔名〕「正」正しく西の方角なること。まんにし。正西。正しく西の方角より吹く風。
まにしゆ 摩尼珠〔名〕「佛」まに(摩尼)に
まにせん 馬耳山〔名〕「佛」梵 Asvanta(須彌羯荼)の譯語。七金山(の)の第五。善見の外、象鼻山の内にあり。
まにせん 摩尼殿〔名〕「佛」兜率(の)天の内院に在る、彌勒(の)菩薩の宮殿。摩尼珠を以て莊嚴(の)すといふ。兜率天宮(の)宮。如意殿。

まにや

まにやう てん 摩尼寶殿〔名〕「佛」まに(摩尼)殿の美稱。
まに 隨隨意〔副〕次條に同じ。『古語』萬葉かまくも君がまにまと斯くしこそ見もあきらめめ」
まにまに 隨隨意〔副〕名詞の下にある助辭のがに續きて、相手の心、事の成行などに任する意。まにまに。まに。まに。萬葉天(の)へ行かば汝(が)まにまにに
まにんげん 眞人間〔名〕まことの人間。人道にはづれぬ人間。正道(の)なる人。まもの。ほんにんげん。和合人(眞人間)な一度で済む事を、毛の不足なのは、仕方の無えもんだ」

まにらう あさ 麻尼刺麻(英 Mania hemp)〔名〕フィリッピン諸島より産する一種の芭蕉の纖維にて製したる、麻の如き物絹糸状の光澤あり。粗大なるは、繩に製し、その性よく水に堪ふるが故に、船舶用に適し、纖細なるは、編物布の製造に適す。
まにらう 眞(動)自(は)にかむ〔副〕に同じ。遠江國の方言」

まぬ 摩菟(梵 Manu)〔名〕印度の古傳説にて、吾人類をいふ語。もとは外道(の)の言ふ所の劫初(の)の魔女なりしなり。摩菟の法典〔句〕印度の古法典中、最も有名にして、又最も長篇なるもの。婆羅門教時代の印度の風習を知るに便なり。編成は西暦第二世紀頃なるが如けれども、内容は、一層古き時代のものに屬す。
まぬ 眞野〔名〕「地」まの(眞野)の古稱。萬葉眞野の池の小管を笠に縫はずして人のとふ名を立つべきものか」
まぬ 眞似〔動下二他〕他に似せてなす。まねをなす。ならふ。模倣す。

まぬかる 免る〔動下二自〕おのづから、又は特に避けて、或範圍の外に立つ。中(の)がら。まのかる。まのがる。
まぬがる 免る〔動下二自〕前條に同じ。

まぬ

免れて、恥無し〔句〕「論語の爲政篇に子曰、道之以、政齊之、以、刑、民免而無恥」とあり、いかなる惡事を爲しても法律に觸れず、刑罰を免れたにすれば、榮支なしとして、恥づる所無し。〔諺語〕
まぬ 間抜く〔動四他〕間(こ)にある物を抜き取る。うろぬく。徒然ままだてといふ事をするに、……、數へあてて、一つを取りぬれば、その外はのがれぬと見れど、又又數ふれば、かれこれ間抜きゆくほどに」
まぬ 間抜〔名〕間(こ)の抜けたること。又、その人を罵りていふ語。とんま。ぶま。ほんや。愚鈍。

まぬら 眞(動)に馬(ら)の意といふ。『古語』萬葉はしたての熊來酒屋(の)にまぬらるやつこわし誘(ひ)立てゐて來なましをまぬらるやつこわし」
まぬる 間緩し〔形〕「爲す事遅くして、間(こ)に合はず。遅緩なり。まのろし。
まぬ 眞似(に)合はす。遅緩なり。まのろし。摸倣。摸擬。太平野足手をあがき、手に溺れたる眞似して」
まねえ (英 Money)〔名〕かね。ぜに。
まねえ (英 Mungoo)〔名〕支配人。監督。世話人。

まねかた 眞似形〔名〕まねたる形。水鏡「生年二十などまては、男の眞似かたにて、世に立ちまじらひはべりしかども」
まねき 招〔名〕まねくこと。『その状、手を上下して、人を招くに似たるよりいふ』機(の)の一部、足の大指にて踏みて、線(の)を上下せしむる具。和名機、萬福板。立烏帽子(の)の前面の上部、突き出でたる所。曾我五人兄弟烏帽子のまねきを、はたと打ちて、落す」
まね 手長(の)旗の小さくして、幟の竿頭に添へて附け、又は指物(の)として用ふるもの。見物人を招き寄する目的にて設けたる物、即ち看板又は店頭の飾物など。
まね 木戸藝者を見よ。

免れて、恥無し〔句〕「論語の爲政篇に子曰、道之以、政齊之、以、刑、民免而無恥」とあり、いかなる惡事を爲しても法律に觸れず、刑罰を免れたにすれば、榮支なしとして、恥づる所無し。〔諺語〕
まぬ 間抜く〔動四他〕間(こ)にある物を抜き取る。うろぬく。徒然ままだてといふ事をするに、……、數へあてて、一つを取りぬれば、その外はのがれぬと見れど、又又數ふれば、かれこれ間抜きゆくほどに」
まぬ 間抜〔名〕間(こ)の抜けたること。又、その人を罵りていふ語。とんま。ぶま。ほんや。愚鈍。

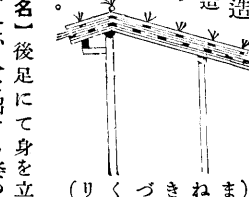
招の船梁(しのべ)〔句〕十二船梁(十二船梁)の一。

まねぎ 招〔名〕まねぎ(招)〔動〕に同じ。
まねぎ うらうらぎ 招随木〔名〕〔建〕招軒(まねぎ)を支ふる桁の支(し)とする腕木。

まねぎ おほかみ 招狼〔名〕山中にて、狼の人を食はんとす、多く現れ出づる前に、最初に出来て来るもの。

まねぎ かんばん 招看板〔名〕江戸の劇場にて、釣的(つてき)に大入札を貼り附けるものあり。又、人形を切り出したるものも有り。まねぎかんばん(庵看板)を云ふ。〔京都・大阪の語〕

まねぎ つぶり 招造(まねぎ)〔名〕〔建〕屋根の造り方の一。棟より一方の屋根は流(なが)と長く、他方は短くして肩庇(かた)の如き形をなすもの。



まねぎ ねこ 招猫〔名〕後足にて身を立て、右の前足を擧げて、人を招ける姿の猫。右に書き、又は幾物に造りなどし、客商賣の家に、かざり置く。「き方の軒」

まねぎ のき 招軒〔名〕〔建〕招屋根の短き他の大棟を連結する下隅棟(したぐみ)、即ち高き屋根の隅棟の一部。「の屋根」

まねぎ やね 招屋根〔名〕〔建〕招造(まねぎ)を上下し、又は他の相圖を用ひて、人を呼び寄す。さしまね。使者又は書状を人の許に送りて、その人の来るやうに誘ふ。招待す。招請す。災害などを發せしむ。ひきおこす。誘致す。

まねぐ 招ぐ〔動四他〕前條に同じ。
まねごと 眞似事〔名〕眞似て、假りに行ふこと。かた。

まねじ 眞似爲(まね)〔名〕他人の眞似をなすこと多し人。〔關西の語〕

まねじ〔形〕回数又は日數多し。繁し。多し。〔古語〕 經記己が氏(おの)をも滅し。

す人等まねく在り」萬葉止まらず行かば人目を多まねくゆかば人知りぬべみ」
まねび 學〔名〕まねびぶこと。まなび。平並御まねびを遊はず申しけるなり」増鏡「資朝も、山伏のまねびして、柿の衣に綾蘭笠(あやに)といふ物著て」芝居の狂言にて、人間界以外の状態を演ずること。八笑人「すべ者、龍宮玉取のまねびとなる」十訓心得ぬ者は、まねびには、必ず失脚の出で来るなり」

まねび 立つ 學立つ〔動下二他〕まねぶ(學ぶ)を強めていふ語。源兵その程の儀式なども、まねびたてんに、いと更なりや」

まねび ざる 學取る〔動四他〕學びてわが有とす。まなぶ。ならひとる。源氏「西の方に侍る人は、琵琶を心に入れて侍る。さもまねび取りつべくや覺え侍らん」

まねぶ 學ぶ〔動四他〕まねぶ(學ぶ)に同じ。枕時鳥も、しのはねにやあらん、鳴くを、いとよまねび似せて」源氏「かき鳴らしはべりぬるを、あやしうまねぶ者の侍るこそ」見聞したる物語を、そのまな語り告ぐ。其申しつる事を、さなんとまねび啓して」兼光日討今めかしくすまかにをかききき、まねびつ」

まねり〔名〕植(うゑ)のり(の)を糊樹(かじ)に同じ。
まねる 眞似る〔動下二他〕まね(眞似)の口語。

まの 眞野〔名〕〔地〕近江國滋賀郡にある村。琵琶湖の西岸。野洲(の)川の吐口と相對し、歌枕として名あり。眞野川と呼ぶ小流、歌より來りて、湖に注ぎ、今は開かれて、田となれり。一説に、歌枕のは、次の攝津國のなりともいひ、また、次の攝津國の項に説ける淀の織橋及び眞野の小池も、この地なりといふ説もあり。郡吉、鴨鳴く眞野の入江の濱風に花波波よる秋の夕ぐれ」攝津國神戸市林田村の内、駒ヶ林・荻藻川の吐口の地。風光絶佳にして、和田の八景の一とす。荻藻川の downstream に淀の織橋あり、又、林田村の

内、西尻池に眞野の池あり。柿本人丸の古蹟に赴く途中、その乗馬の足を洗ひし石に於て、今は小池なれども、古は頗る大なりきといふ。佐渡國佐渡郡の村。眞野灣の東岸。まのみさき(眞野陵)まのみや(眞野宮)參照。

まの あたり 面〔名〕目の當の義。め(ま)。眼前。目前。相手に對して、直接に親しく爲(な)ること。空齋「これ、まのあたりにて參らせよ」源兵まのあたりならずとも、さるべからん曹司(し)に承らんと」

まの あたり 面〔副〕相手に對して、直接に親しく爲(な)るさま。面(ま)と向つて、ま(ま)のわたり。

まの かしら 間頭〔句〕まのかしら(午まのかる)免る〔動下二他〕まぬ(免る)に同じ。名義抄・鐔鐔・マノカル・ヌカ・ル・ソク

まの がる 免る〔動下二他〕前條に同じ。
まの じ 目伸(まの)すこと。目を見張るべきこと。字源その法師引張れとのたまへば、聖(み)、まのしをして、阿彌陀佛申して、疾く疾くいかにもしたまへと云ひて

まの す 目伸す〔動四他〕目を見張る。宇山山伏が顔を見れば、すこしも事と思ひたるけしきもせず、すこしまのしたる様に、その次に籠めたるぞと、つれなう言ひたる時に」

まの のいりえ 眞野入江〔名〕〔地〕まのわん(眞野灣)の古稱。まの(眞野)を見よ。平家、かれは志賀唐崎、これは眞野の入江、交田(の)の浦と申しければ」

まの のみさき 眞野陵〔名〕順徳天皇の御火葬所。佐渡國佐渡郡眞野村大字眞野に在り。但し御骨は、埋葬の翌年、即ち寛元元年四月、京都に齎し、五月、大原の法華堂に藏め奉り、これを大原陵といふ。

まののみや 眞野宮〔名〕佐渡國佐渡郡眞野村眞野に在る神社。祭神は順徳天皇。菅原道眞・日野資朝を配祀す。もと天皇の御陵と祭事とは、國分寺の司る所なりしが、延寛七年、一旦、天皇の靈を水無瀬宮に合祀せしめられたれしが、里民の遺棄衰へざりしより、翌八年、朝廷、更に劍を賜ひて神體とし、社殿を起されてに始まる。まのび間延(まの)音楽にて、間(ま)の長きこと。間緩(ま)のこと。

まの まへ 眼前〔名〕め(ま)へ。まのあたり(ま)。空齋「まのまへに、ゆゆしき様にて死なんを見んよりは」

まの ろじ 間鈍し〔形〕まぬる(間鈍し)に同じ。

まの わたり 目渡〔副〕まのあたり(目當)の轉訛。繁葉記成親卿は、平治の逆亂の時、信頼の卿の有様をまのわたり見しぞかし」

まの わん 眞野灣〔名〕〔地〕佐渡國の西岸にある灣。一名二見(の)灣。繁葉記「二十四差したる眞羽の矢の射殘したるを眞ひ」

まは かす 廻す〔動四他〕まはす(廻す)に同じ。今昔めぐりに、錦の幕引きまはしたり」狂言内杉太「そのやうに目をまはかすなりて、公事(の)はなりましたまじぞや」

まは き 眞剥皮魚・眞鱈魚(ま)〔動〕まは(剥)き(魚)〔名〕同。〔剥皮魚〕に同じ。
まは ぎ 眞秋・眞棟(ま)〔名〕〔棟〕まは(眞)は接頭語(ま)はき(眞)の美稱。萬葉住吉(ま)の遠里小野(ま)の眞様もてする衣のさかり過ぎゆく」

まは じ 廻(ま)はすこと。めぐらすこと。力士登場の時、腰に纏ふ布帛。その特に節を施したるものを化粧廻といふ。けしやうまは(化粧廻)參照。五十年歌合、まは(ま)は(ま)は(ま)かか(ま)か(ま)か(ま)、來(ま)い、見(ま)せう」目廻(ま)合羽(ま)、又はマント。目廻(ま)合など、輪番に行ふこと、又その番當。醒酒樂隨意講のまはし、始まれり」一人の娼妓が、一夜のうちに、輪次に多くの客の相手となること。まはる(廻る)參照。まは(ま)は(ま)は(ま)の略。春花九大方

「深川のまはし仲間でも、小口もきく彌助」和船にて、船床(ま)の一端を、舷の外に出さずして、別に添木をなし、綱を

に方向を轉ずるやうに造りたる階段。まはりばしご。まはりだん。

まはりかじ(形)「つづけい(滑稽)に同じ。他我身の上滑稽の兩字を、まはりかしこしと訓ませたり」

まはりかね(名)「運轉する金。融通する金。五十年忌歌會、廻金の無き時は、主人の金を手前(加へ)は、……」

まはりかみゆひ(名)「家家を廻り歩き結ぶ髪結(内結)に對して」

まはりき(名)「氣を廻すを見よ」

まはりくど(形)「廻くどし」

まはりけんち(名)「廻檢地」

まはりく(名)「五に異なる方面の道を取りて、同一の地點に早く達するを勝とする競争。まはりく」

まはりけんち(名)「廻檢地」

まはりく(名)「五に異なる方面の道を取りて、同一の地點に早く達するを勝とする競争。まはりく」

まはりこんじやう(名)「廻根性」

まはりか(名)「廻掛」

まはりしたき(名)「廻下著」

まはりしやうぎ(名)「廻將棋」

に代用し、振りて、盤上に落し、その立ち、横たはり、伏しなどする状態によりて、豫め定め置きたる数だけ、盤をめぐる、一つの駒を進め、早く中心の一格に達したる方を勝とし、又は互に盤の縁をめぐるて進み越したるを勝とす。

まはりしやく(名)「廻酌」

まはりす(名)「廻六」

まはりす(名)「廻六」

まはりす(名)「廻六」

まはりせん(名)「廻膳」

まはりせり(名)「廻臺詞」

まはりだ(名)「廻臺」

まはりだ(名)「廻臺」

まはりだ(名)「廻臺」

まはりだ(名)「廻臺」

まはりだ(名)「廻臺」

まはりだ(名)「廻臺」

馬その他種種の形を切り抜きたるを貼り附け、中央に軸を立て、その上部に取り附けたる風車の廻轉に連れて、貼り附けたる人馬等の形、内部の燈火により、外側の紙又は布帛の上に畫像となりて映り、馳驅するがごとく見ゆる装置の燈籠。影燈籠。舞燈籠。走馬燈。其角見る人も廻燈籠にまはりけり」



まはりど(名)「廻遠」

まはりど(名)「廻遠」

まはりど(名)「廻遠」

まはりど(名)「廻遠」

まはりど(名)「廻遠」

まはりど(名)「廻遠」

まはりど(名)「廻遠」

まはりど(名)「廻遠」

まはりど(名)「廻遠」

まはりど(名)「廻遠」

まはりど(名)「廻遠」

まはりど(名)「廻遠」

ひて、圓形をなし、別に一人を中央に立たせ「まはりまはりの小佛」は、なぜ背が低いと唱へつ、一廻轉しては、それて肩め、中央の者、指先にて、周囲の者の頭を、任意の者より始めて、「線香抹香花抹香」の花でりをさまたと、言ひて敷へ、その文句の終に當りたる者、新たに中央に立ち、前に中にありし者は、これに代りて、周囲の人の一人となり、又、初のとほりに繰り返すもの。

まはりみち(名)「廻路」

まはりもち(名)「廻持」

まはりもの(名)「廻者」

まはりもの(名)「廻者」

まはりもの(名)「廻者」

まはりもの(名)「廻者」

まはりもの(名)「廻者」

まはりもの(名)「廻者」

まはりもの(名)「廻者」

まはりもの(名)「廻者」

まはりもの(名)「廻者」

まはりもの(名)「廻者」

まはりか

まはりか

まはりか

まはりか

まひ

まひ舞〔名〕音樂又は歌謡の節奏に伴ひて、媚雅に面白く、身體手足を動かすこと。西洋には、舞と踊との區別なく、何れもダンス又はダンシングといひ譯して、舞路の或は舞師といふ。「舞」能樂にて、歌謡を伴はず、笛又は鼓の譜によりて舞ふ。『まひは(舞葉の略舞の臺(ツツ))』舞樂を行ふ舞臺。ぶたい。謡曲梅(翠)の明(つ)には、舞の臺の飾(つ)に、梅と柳を立てらるる舞の頭(つ)。「句(つ)らかぶ(鳥兜)に同じ。和名雲冠、萬比乃加之良」

まひ幣〔名〕捧物。禮物。「古語」寫なほ救さざりければ、その腰なる玉を解きて、その國王(つ)の子に幣(つ)しつ。萬葉「若ければ道行き知らじまひはせむしたべの使負ひて通らせ」

まひ眞日〔名〕『ま(眞)は接頭語』ひ(日)の美稱。「古語」寫三采(つ)のその中つにをかぶつくまひにはあてず」

まひ麻痺〔名〕『ます(麻痺)を見よ』しびること。感覺を失ふこと。

まひ間日〔名〕『あひまの日。いとま。大藏(庚申)申子、一夜の間日もある事か』

まひせん八專及びつち(土日)を見よ。『徳(つ)の熱の發らぬ日。おこり(徳)を見よ。小島の口(つ)に「瘧病(つ)にさへ煩ひて、……一夜はとまりつつ間日はかりてあり道の行く先」

まひあがる舞上る。「動四自」鳥など、羽をひろげて動かしながら、空へ上る。(舞下(つ)に對して)後京極殿三百首青麥にはいりの雲雀かりかねて舞ひあがる鷹をいかにとどめん。『風に吹かれたなとして、颯り動きながら空中へ上る。』

まひあそぶ舞遊ぶ。「動四自」舞ひて遊び楽しむ。狂言茶番舞(舞樂)奏して遊ぶ。『鳥(つ)など、飛びめぐりて遊ぶ。』

まひあそび舞扇。「舞(つ)を舞ふ時」に用ふる扇。一代女(舞扇)の風しんしんと。『植(羽扇)の變種。葉は、深く分裂して、殆ど其脚に達し、一見

まひあそ

掌狀複葉の如く、各裂片は披針形を呈し、鋸齒を有す。觀賞用として栽培す。

まひあそびの「みつまる」舞扇三丸〔名〕紋所の一。舞扇を揃けたる形を、三筒組み合はせて、圓形をなすやう揃けるもの。

まひいじやう舞衣裳〔名〕舞を舞ふ時着用する衣裳。まひぎぬ。

まひいづ舞出づ。「動下二自」舞ひて現れ出づ。舞ひはじむ。無村(月令)宵主の翁舞出づ。

まひうど舞人〔名〕まひびと(舞人)の音便。昔臨時の祭の舞うど。

まひえはき舞葉萩〔名〕「植」まひはき(舞萩)に同じ。〔舞下る)に同じ。』

まひおる舞下る。「動上二自」まひさがるまひかじ。眞東〔名〕正しく東の方角より吹き來る風。

まひかぜ舞風〔名〕せんふう(旋風)に同じ。舞又は音樂を奏す。かなづ。舞手を擧げ、膝を打ち(舞)ひかなで、歌ひ参る。榮少將は、御賀に舞ひかなでんとすらん。』

まひき開引〔名〕まびくこと。うろぬまびき。開引菜〔名〕開びきたる菜。うろぬきの菜。織置(開引菜)の品。

まひきぬ舞衣〔名〕舞を舞ふ時に著る衣。まひいしやう。

まひぎね舞杵・轉杵〔名〕から(ぎ)運枷を云ふ。「京都の語」

まひぎり舞錐〔名〕刃の部分、三叉をなしたる錐の呑口などを穿つに用ふる錐。まはしきり。中央に孔ある横木をゆるく貫き、横木の兩端と軸の上端とに絲を結び、横木を上下す



(りぎい)ま

まひく

れば、絲の上部、軸の上部に絡みつ解けつして、軸を廻轉せしむる装置の錐。てろくろ。ねざきり。ろくろざきり。織置(針屋の弟子となる身は、舞錐のせはしく)

まひく開引く。「動四他」畑に萌え出でたる野菜などを、よく發達せしむるために、ところどころ間を置きて抜き取る。うろぬく。一家に子多き時、人数を減ずるために、親自ら生兒を殺す(昔、僻地の住民の間に行はれたり)柳屋女島まびく薬は正氣散

まひくせ舞曲〔名〕能樂にて、地謡(つ)に合はせて舞ふ曲。あせ(居曲)参照。

まひくたり舞下〔名〕舞ひながら罷り下ること。狂言三人百姓「めてたい和歌を上げ、舞下にせい」

まひくたふ舞狂ふ。「動四自」狂ふがごとくに舞ふ。はげしく舞ふ。著因(御前に参りて舞ひくるひければ)

まひくま舞車〔名〕だし(山車)に同じ。花登(花登)有祇園會(舞車、御所へ参る)謡曲の一。遠江國見附(つ)の宿の祇園祭に、相別れし男女のめぐり逢ふ事を作れるもの。

まひく舞子〔名〕舞ひて、酒宴の興を添ふる小妓。をどりこ。おしやく。半玉(舞)舞妓。「京都大阪の語」二花男舞子を集め

まひく舞子〔名〕「地」播磨國明石郡垂水の村大字西垂水より山田に互れる一帯の海濱。同國明石(つ)と攝津國須磨との間に位し、北は丘陵を貫ひ、南は明石海峡を隔てて、淡路島に對し、風景明媚、夏季は、海水浴場として有名なり。

まひく「迷子」名「まよひ(迷子)の訛」道に迷ひてさまよふ小兒。まよひこ。

まひくだけ舞子茸・舞子菌〔名〕「植」まひたけ(舞茸)に同じ。

まひくご舞事〔名〕舞のわざ。若風(若)の少女(若)……物事しとやかに、舞事すぐれ

まひくごた「迷子札」名「小兒、迷子となりたらん時、人に知られ易からしめんた

まひく

め、住所・姓名を記して、帯などに結び下ぐる小札。八笑人(歸)に道が知れようか……。迷子札でも附けて來ればよかつた

まひくご舞込む。「動四自」舞ひつつ入り來る。『思ひがけなく入り來る。』

まひさか舞坂〔名〕「地」遠江國濱名郡にある町。濱名湖の東岸。西は濱名を隔てて、新居(つ)町と對し、その間に、濱名橋あり。北は濱名湖に臨み、南は今切(つ)を隔てて、外洋に面し、夏季は海水浴場として賑ふ。鐵道東海道線の辨天島停車場あり。

まひさか馬鹿一里、船に乗るも馬鹿、乗らぬも馬鹿。〔句〕徳川時代に、遠江國濱名湖口の兩端なる舞坂驛と新居(つ)驛との間は、渡船にて連絡を取り、距離は僅かに一里半なれども、風波險惡なるよりに、この語。「諺語」

まひさかのり舞坂海苔〔名〕遠江國舞坂の名産なる海苔。

まひさがる舞下る。「動四自」鳥など、羽をひろげて動かしながら、空中より下る。

まひおる(舞上)「(つ)に對して」舞ふ如く動きつづ下る。御伽草子(梵天國)傘ほどの雲雲……。姫君の御前に舞ひさがる。

まひさし眉庇〔名〕「まゆ(眉)ひさし(庇)の略」兜の鉢の前方・下端より、額を深く被ふやうに、庇の如くさし出でたる部分。表を雨走(つ)、裏を見上(つ)と稱す。かたびさし。『建(窓)の上の狭き庇。つけまびさし。』

まひさらひ舞凌舞復習〔名〕舞の師匠が、弟子を集めて、教へたる藝を演ぜしむること。又その時の舞。

まひし舞師〔名〕古の雅樂寮に屬して、雅樂を教ふることを掌りし職員。

まひしま舞仕舞ふ。「動四他」まひまむ(舞納む)に同じ。俳諧新選(舞)舞仕舞ふ(舞納む)に同じ。舞裝束〔名〕かざねしやうぞく(裝裝束)に同じ。

おえういあ
こけきさ
そせすし
とてつちた
のねぬにな
ほへふひは
もめんむみ
よゆや
るれるりら
ををわ

まびやく馬柄杓(名)馬に水を飼ふに用ふる柄杓。徳川時代には、諸侯のは、漆を塗りて、内は朱色とし、外は黒色に紋を描き、馬丁、これを腰に絞して、先に駈けたり。松の葉「馬方いやよ、いやよ。腰に馬柄杓、手にや、又、煙管」

まひすます舞澄す(動四他)心を散らさずに舞ふ。落ちつきで舞ふ。盛衰記胡德樂といふ樂に、河南浦の庖丁を舞ひすましたりけり」

まひせいちばり麻痺性癡呆(名)「醫」『羅』Dementia paralytica 微毒の腦脊髄に傳播するによりて發する精神病。多くは、微毒に罹りてより十年以後に發し、概ね三、四十歳の人、中にも、男子に多く、初期の症候は神經衰弱に類し、後、漸次記憶の減退、判斷の耗弱、理解の不良等、癡呆の状態に陥り、興奮、粗暴の行をも伴ふことありて、遂に死の轉機を取る。

まひたいり舞大夫(名)舞舞(舞)の音曲家。「徳川時代の語」

まひたけ舞茸重菰(名)「植」擔子菌類に屬する菌類。蕈菌(菌)の類。蕈菌體は、肉質にして、形狀、玉菜(菜)に似不規則なる扁平、葉狀の枝を多く生じ、初は白色、漸次帶黄色、帶褐色に變ず。針葉樹林に生じ、食するを得。まひこだけ。今昔「この芋を食ひて食はんと思ひて、乞ひて食ひける後より、又、木伐る人どもも、心ならず舞はれけり。...。それより後、この草をば、舞茸といふなりけり」

まひつたつ舞立つ(動四自)廻りてはねあがる。舞蓬(蓬)の、車に押ししげれたるが、輪のまひ立ちたるに、近うかかへたる香も、いとをかし」

まひつる舞鶴(名)「鳥」松風村東帝「舞鶴の舞ひ悦ぶや」紋所の一。鶴の翼を張りたる



(三)づひま

形を描けるもの。曾我貞八「舞鶴を家の紋に許すなり」

まひつる舞鶴(名)「地」もと、田邊と稱せしを、明治維新の初、紀伊國の田邊藩と混同しやすきより、今の稱に改む。丹後國加佐郡にある國中第一の町。舞鶴灣に臨み、北國街道の要衝に當り。鐵道舞鶴線の舞鶴・海舞鶴の二驛あり。牧野氏の舊藩地。東方一里餘に、海軍鎮守府の所在地なる新舞鶴町あり。俗に、前者を西舞鶴後者を東舞鶴と呼び、又、中間の餘部(部)町と併せて、三舞鶴の稱あり。『羽前國米澤』の舊稱。『地』明治の初年設置の縣の一。四年七月、丹後國舊舞鶴藩の地に立てしもの。同年十一月、京都府に入る。

まひつるさう舞鶴草(名)「植」百合(科)に屬する多年生の草。高さ四寸乃至六寸に達し、葉は二三筒あり。心臟形にして尖り、平行脈を有し、互生し、花は白色、小形にして、四片あり。總狀花序をなし、果實は球形、帶褐色の漿果なり。我國、山地に自生す。つるねぐさ。はくさんあふぶ(甲府城)の異稱。

まひつるてんなんじやう舞鶴天南星(植)らしま(浦島草)に同じ。

まひつるのまる舞鶴丸(名)紋所の一。鶴の丸に似て、一層複雑なるもの。

まひの(名)まひは(舞羽)に同じ。萬葉代名記「くるべきは、和名云、辨色立成云、反轉、久流閉積、...。絲を懸けて練る物なり。變(ま)といふ物は似て大きななり。然れば今の俗、まひのはといふ物にて、株(ま)にかけたたる絲を、それにかけて、それを練りて、變へは移すなり」

まひつるわん舞鶴灣(名)「地」丹後國加佐郡の中部にある灣。灣口は北に向ひ、東に博奕(博)岬西に金ヶ岬あり、これを扼し、露領浦羅斯德及び朝鮮元山津と相對し、我國北方の要地たり。

まひと眞人(名)天武天皇の十三年に制定せられたる八色の姓(姓)の第一位。まうと。まっと。まひと舞戸(名)ひらきと開戸(開)に同じ。まひどうろう舞燈籠(名)まはりどうろう(廻燈籠)に同じ。まひと眞人言(名)「ま(眞)は接頭語」他人の言葉。人のうはき。「古語」萬葉まつが浦にさはらち立ちまひとと思はずなるも吾がもほのすも」

まひはたけき舞萩(名)「植」豆(科)に屬する一年生の草。高さ三四尺に達し、葉は下部のは單葉なれども、上部のは三小葉より成り、その中央の一葉は、大なる長橢圓形を呈すれども、他の二葉は、細小なる線形にして、一見托葉に似又、葉片は晝夜共に上下運動を行ひ、殊に大葉片の睡眠運動は著しく、花は淡紅色の蝶形花冠を有し、種粒花序をなす。原産地は印度。まひえふはぎ。まひよはぎ。まひはたらき舞働(名)はたらき(働)に同じ。まひばやし舞囃子(名)能(能)の一部を、樂器を伴奏して演ずるもの。樂師は、能の場合と同じ席に、床几を用ひず著座し、仕手は、地謡の前に坐して、演奏を始め、立ちて舞ふもの。上下又は袴を着用し、杖、雄刀等の道具は用ふれども、作物(物)は用ひず、多く謡曲の「さし」と稱する所より曲舞(曲)の論議を経て、切まてを演じ、又、後仕手(後)の待謡より切まてもあり、その場合は、半能と同じ範圍なれども、囃子は進退共に橋掛(橋)を使用せざるによりて、その趣を異にす。(居)囃子番囃子に對して)まひびと舞人(名)舞を舞ふ人。まひらど。ぶに。源兵衛まひ人がく人。まひびとじやうぞく舞人裝束(名)倭舞(舞)東遊(東)の如き我國固有の舞樂に、舞人の着用する裝束(裝束)裝束に對して)まひひめ舞姫(名)舞を舞ふ女。ぶき。社「宮の、五節(節)出させたまふに、...。舞姫は、相尹(相)の馬の頭(頭)のむすめ」まひぶり舞振(名)舞を舞ふ時のそぶり。舞態。舞容。まひほうわう舞鳳凰(名)紋所の一。鳳凰を舞鶴の形に描けるもの。まひま舞舞(名)「樂器を用ふるこ」となく、扇拍子にて舞ふ、一種の舞曲。白拍子(拍子)の男舞より出て、もとは、女の專業なりしもの如し。幸若(若)大拍(拍)の二派ありたれども、今は殆ど廢絶せり。くせまひ。運歩色葉集「舞舞、マヒマ

まびやく

まひつる

まひと

まひはた

まへがき

まへがき 前掛 [名] 衣服の汚れぬやうに、その上の前方に蔽ひ掛くる布帛。即ち膝掛、エプロンなどの類。まへだれ。

まへかけなほ 前掛綱 [名] 次條に同じ。まへかけなほ 前掛綱 [名] 和船にて、船の前へ廻して、車立(カ)にとむる綱。おほまはし。かぢうちまはし。かぢくびつな。まへかけつな。

まへがし 前貸 [名] 後日に拂ひ渡すべき金銭を、期日に先きだちて貸し與ふること。

まへがしら 前頭 [名] 前相撲(カ)の頭の義なるべしといふ。相撲(カ)の小結(カ)の次位にあるもの。

まへかた 前方 [名] その時より前。まへまへ。まへかど。狂言難立(カ)「使にやらうと存ずる程に、前方より參れと申し付けうと存ずる」。まへふるくさきこと。陳腐。置土産、そんな前方なる仕掛、四も五もくはぬ事。

まへかた 前方 [副] その時より前に。以前に。嘗て。従前。まへつかた。

まへかど 前廉 [名] まへかた(前方)に同じ。一代男前廉の書出(カ)。

まへかね 前金 [名] ぜんきん(前金)に同じ。二代男、年切増して、前銀なれども百五十目。

まへかはらけ 前土器 [名] 茶の湯にて、風爐(カ)の五徳の前に立て置きて、火を防ぐために用ふる土器。

まへかまち 前櫃 [名] 建長棟建押入(カ)の中欄(カ)の櫃。

まへがみ 前髪 [名] 二座以上の神を祀れる神社の、主たる神以外の神。まへ。まへがみ 前髪 [名] 童男又は婦人の、額上の毛を別に束ねたるもの。ぬかがみ。

まへがみ

まへがみ 前髪 [名] 役者の髪を、若衆歌舞伎禁止の後、野郎歌舞伎時代に行はれし、簡單なるもの。附髪(カ)をしたるものにて、野郎歌舞伎にては、若衆歌舞伎時代のごとく、前髪なきため、扮する人物次第に結髪する自由を失ひ、剃りたる前髪をおほふために、初は置手、坊頭巾などを用ひしが、漸次に進みて、この髪巾なりしなり。

まへがみ 前髪 [名] 女の前髪を押ふるに用ふる具。

まへがみ 前髪 [名] 若衆ざかり。若衆の、愛らしき盛。若衆ざかり。若衆「よくよくの思入、惜しや、前髪ざかりに」。

まへがみ 前髪 [名] 昔、男子の元服前にて、前髪を附けてありしこと、又その男子。若衆前髪だての時、五とせ餘の念(カ)比(カ)、なほ年長けても。

まへがみ 前髪 [名] 女子又は若衆の、前髪を高く張り出すために、その中に入れて用ふる。鯨骨にて作れる物。元祿時代に流行せり。

まへかん 前勘 [名] 次條の略。「俚語」

まへかん 前勘 [名] 代價を前以て支拂ふこと。まへかん。

まへから 前巻 [名] きぬまき(絹巻)を云ふ。「東國の方言」

まへがら 前緒 [名] きぬまき(絹巻)を云ふ。「下總國の方言」

まへがら 前緒 [名] 後日受くべき金銭を、期日前に借ること。前借(カ)。「し」。

まへがら 前緒 [名] まへがら 前緒 [名] 二つ出して

まへがら

まへがら 前緒 [名] 呼出奴に同じ。

まへがら 前緒 [名] 前板(カ)のみに桐の材を用ひたること。(總稱)に對して

まへがら 前緒 [名] 文、連歌又は俳諧の附合(カ)にて、互に隣接せる兩句の内、前の方の句(附句)に對して(まへがら)。

まへがら 前緒 [名] 宗長法師の雜話に、附句は、只、前句に離れて、しかも離れぬやうにあるべし、……と

まへがら 前緒 [名] 前句集(カ)の前句を集め載せたる冊子。騷(カ)川柳眞の前句集を思ひ出だせば「し」の一部。

まへがら 前緒 [名] 俳諧の宗匠より、前句を出し、人人、これに附句(カ)を添へ、その巧拙によりて、賞を行ふこと。例へば、「安いことかな、安いことかな」に對して、「一文と思のままに辛がらせ」と附け、宇佐の祭の宵のにぎはひに對して、「見ぬふりて投げつけてやる梯の種と附くる類。もと俳諧の席上にて、附合(カ)練習の法として行はれしものなれど、俳諧の如き去嫌(カ)などの煩雜なる拘束なきため、俗間に盛んに弄ばれるに至り、元祿の初頃より流行し、多くは長句を出し、短句を、その前句として附くることとなりぬ。かむりつば(冠帽)みかきつば(笠附)参照。浮世床居候置候を裸にしと、前句附にあるとほり、恩を知らぬ者よ」。

まへがら 前緒 [名] 前九年合戦

まへがら 前緒 [名] 前九年合戦

まへがら 前緒 [名] 前九年合戦

まへがら 前緒 [名] 前九年合戦

まへがら 前緒 [名] 前九年合戦

まへがら

まへがら 前屈 [名] 上半身を、前方に曲げて、こむこと。「する小作」

まへがら 前腰 [名] 袴腰(カ)の、前方のもの。(後腰(カ)に對して) 著圍袴の前腰を取らんとしけるを。

まへがら 前腰 [名] 前方へ屈む。前腰に爲(カ)る[句] 前方へ屈む。を見よ。

まへがら 前腰 [名] 次條を見よ。前強の大口(カ) [句] まへばり相ほ(カ) (前張大口)に同じ。

まへがら 前腰 [名] 物の前部の、その後部よりもさがりであること。(前上(カ)に對して) 昔、和田の前さがりにさしたまふ刀こそ、妻(カ)がものよ」。

まへがら 前腰 [名] 腰提(カ)の一種。昔、巾著の上に、紐通(カ)を附け、帯革にて、腰の前部に提げしもの。まへぎんちやく。浮世床(カ)金唐革(カ)の前提に、蚯蚓ががじりつて

まへがら 前腰 [名] 婦人の簪。鬢の前方に挿すもの。(中挿後挿(カ)に對して)

まへがら 前腰 [名] せんじつ(前日)に同じ。本朝徳比事「この事かてて工(カ)み、前日(カ)掘る時、御本尊を埋めおき、翌(カ)の日、それを顯し」

まへがら 前腰 [名] 中入(カ)ある能(カ)の曲にて、その前半に出づる仕手。例へば、「船辨慶」の曲に於ける前仕手は、靜御前なる類。初仕手(カ)。(後)仕手に對して

まへがら 前腰 [名] 植(カ)いまが(カ)今居にて、その日の狂言を開始するに先だち、式三番(カ)の後なほ、人寄(カ)のために語りし淨瑠璃。昔昔昔昔は堺町(カ)の操(カ)……式三番を能(カ)の如く濟まし、その次に、人寄(カ)とて、和田酒盛一流、前淨瑠璃にして濟まし、その跡にて、その日の本淨瑠璃を始むる」

まへがら 前腰 [名] 前淨瑠璃

まへじよく前卓「名」佛前に据えて、佛具を乗する器具
まへじり前尻「名」陰部と尻と。正堂千句「氣のちがふ人こそ不便至極なれ」といふ句にどこともいはず出す前尻

まへじり前後「名」まへうしろ(前後)に同じ。左と右と。左右。源氏殿上人どもも、つきづきしき限は、皆、まへしりへの心こまどりに方わきて

まへすだれ前簾「名」牛車(ま)などの前面に懸る簾。(後簾に對して)
まへすね前臍「名」前足の臍(後臍(ま)に對して) 會我會格出乗入れもせぬ野髮の馬、……前すね撥いて、商をたたき、人をおどして鼻嵐

まへすまふ前相撲「名」相撲の、幕の内より以下なる地位、又その地位にある相撲取。まへまがしら(前頭)参照。同じ
まへせん前銭「名」せんきん(前金)に同じ
まへそで前袖「名」牛車(ま)の袖の、前方に在るもの。(後袖(ま)に對して)

まへせな前備「名」せんちん(先陣)に同じ。(後備(ま)に對して)
まへだ前田「名」姓氏の一。尾張國愛知郡荒子の城主藏人利昌(一説に利春又は利昌)の裔。利昌の祖は、菅原道真に出て、利昌の祖父仲利、美濃國安八(今)郡前田の住人前田利倫の女を娶りてより、前田氏を稱すとも、又、本姓は藤原にして、六波羅の奉行人齋藤玄基の孫前田利世の裔なりとも、又一説に、菅原氏の裔、太宰府宮公廟の邊、前田の地に住して氏とし、その子孫尾張國に移りしなりともいふ。利昌の子利家に及び、加賀國金澤の城主として、徳川氏に至り、諸大名中、領土最も廣大、幕府の待遇も、外様(ま)大名中に冠たりし家。利家、秀吉より羽柴の姓を與へられ、その子利長も、徳川氏より、松平の號を與へられしが、明治維新後、侯爵を授けらる。利家の孫なる利常の第二子利次を祖とする越中國富山城主、利常の第三子利治を祖とする加賀國大聖寺行苺城主、利家の第四子利孝を祖とする上

野國七日市の領主の三家ありて、明治維新後富山のは伯爵、他の二家は、子爵を授けらる。別に、明治三十三年、本家舊金澤藩の一門利武、別に男爵を授けらる。
まへだ前田「名」次條の略。「三枚鑑、日の丸の前立打ったる兜」

まへだ前田「名」次條の略。「三枚鑑、日の丸の前立打ったる兜」
まへだ前田「名」次條の略。「三枚鑑、日の丸の前立打ったる兜」

まへだ前田「名」次條の略。「三枚鑑、日の丸の前立打ったる兜」
まへだ前田「名」次條の略。「三枚鑑、日の丸の前立打ったる兜」

まへだ前田「名」次條の略。「三枚鑑、日の丸の前立打ったる兜」
まへだ前田「名」次條の略。「三枚鑑、日の丸の前立打ったる兜」

まへだ前田「名」次條の略。「三枚鑑、日の丸の前立打ったる兜」
まへだ前田「名」次條の略。「三枚鑑、日の丸の前立打ったる兜」

まへだ前田「名」次條の略。「三枚鑑、日の丸の前立打ったる兜」
まへだ前田「名」次條の略。「三枚鑑、日の丸の前立打ったる兜」

將。尾張國荒子城主前田利昌(一説に、利春又は利則)の第五子。母は竹野氏。幼名は犬千代。十四歳の時より織田信長に仕へて、多く戰功を重ね、信長薨れてより、羽柴秀吉と柴田勝家との間を調停せし及び、賤ヶ嶽(ま)の役、勝家に従ひ、敗軍に及び、秀吉、追撃して、單身、利家に會して和し、爾來、金澤當時、尾山と稱す。城主となる。秀吉の五大老に列し、秀吉の薨後、能くその遺臣不和の間に處して、事無きを待しむ、文祿四年薨す。歳六十二。

まへだ前田「名」次條の略。「三枚鑑、日の丸の前立打ったる兜」
まへだ前田「名」次條の略。「三枚鑑、日の丸の前立打ったる兜」

まへだ前田「名」次條の略。「三枚鑑、日の丸の前立打ったる兜」
まへだ前田「名」次條の略。「三枚鑑、日の丸の前立打ったる兜」

まへだ前田「名」次條の略。「三枚鑑、日の丸の前立打ったる兜」
まへだ前田「名」次條の略。「三枚鑑、日の丸の前立打ったる兜」

まへだ前田「名」次條の略。「三枚鑑、日の丸の前立打ったる兜」
まへだ前田「名」次條の略。「三枚鑑、日の丸の前立打ったる兜」

まへだ前田「名」次條の略。「三枚鑑、日の丸の前立打ったる兜」
まへだ前田「名」次條の略。「三枚鑑、日の丸の前立打ったる兜」

まへだ前田「名」次條の略。「三枚鑑、日の丸の前立打ったる兜」
まへだ前田「名」次條の略。「三枚鑑、日の丸の前立打ったる兜」

まへだ前田「名」次條の略。「三枚鑑、日の丸の前立打ったる兜」
まへだ前田「名」次條の略。「三枚鑑、日の丸の前立打ったる兜」

まへだ前田「名」次條の略。「三枚鑑、日の丸の前立打ったる兜」
まへだ前田「名」次條の略。「三枚鑑、日の丸の前立打ったる兜」

まへだ前田「名」次條の略。「三枚鑑、日の丸の前立打ったる兜」
まへだ前田「名」次條の略。「三枚鑑、日の丸の前立打ったる兜」

まへだ前田「名」次條の略。「三枚鑑、日の丸の前立打ったる兜」
まへだ前田「名」次條の略。「三枚鑑、日の丸の前立打ったる兜」

まへだ前田「名」次條の略。「三枚鑑、日の丸の前立打ったる兜」
まへだ前田「名」次條の略。「三枚鑑、日の丸の前立打ったる兜」

まへだ前田「名」次條の略。「三枚鑑、日の丸の前立打ったる兜」
まへだ前田「名」次條の略。「三枚鑑、日の丸の前立打ったる兜」

まへだ前田「名」次條の略。「三枚鑑、日の丸の前立打ったる兜」
まへだ前田「名」次條の略。「三枚鑑、日の丸の前立打ったる兜」

まへだ前田「名」次條の略。「三枚鑑、日の丸の前立打ったる兜」
まへだ前田「名」次條の略。「三枚鑑、日の丸の前立打ったる兜」

まへだ前田「名」次條の略。「三枚鑑、日の丸の前立打ったる兜」
まへだ前田「名」次條の略。「三枚鑑、日の丸の前立打ったる兜」

まへだ前田「名」次條の略。「三枚鑑、日の丸の前立打ったる兜」
まへだ前田「名」次條の略。「三枚鑑、日の丸の前立打ったる兜」

まへだ前田「名」次條の略。「三枚鑑、日の丸の前立打ったる兜」
まへだ前田「名」次條の略。「三枚鑑、日の丸の前立打ったる兜」

まへだ前田「名」次條の略。「三枚鑑、日の丸の前立打ったる兜」
まへだ前田「名」次條の略。「三枚鑑、日の丸の前立打ったる兜」

まへだ前田「名」次條の略。「三枚鑑、日の丸の前立打ったる兜」
まへだ前田「名」次條の略。「三枚鑑、日の丸の前立打ったる兜」

まへだ前田「名」次條の略。「三枚鑑、日の丸の前立打ったる兜」
まへだ前田「名」次條の略。「三枚鑑、日の丸の前立打ったる兜」

まへだ前田「名」次條の略。「三枚鑑、日の丸の前立打ったる兜」
まへだ前田「名」次條の略。「三枚鑑、日の丸の前立打ったる兜」

まへだ前田「名」次條の略。「三枚鑑、日の丸の前立打ったる兜」
まへだ前田「名」次條の略。「三枚鑑、日の丸の前立打ったる兜」

まへだ前田「名」次條の略。「三枚鑑、日の丸の前立打ったる兜」
まへだ前田「名」次條の略。「三枚鑑、日の丸の前立打ったる兜」

まへだ前田「名」次條の略。「三枚鑑、日の丸の前立打ったる兜」
まへだ前田「名」次條の略。「三枚鑑、日の丸の前立打ったる兜」

まへだ前田「名」次條の略。「三枚鑑、日の丸の前立打ったる兜」
まへだ前田「名」次條の略。「三枚鑑、日の丸の前立打ったる兜」

まへだ前田「名」次條の略。「三枚鑑、日の丸の前立打ったる兜」
まへだ前田「名」次條の略。「三枚鑑、日の丸の前立打ったる兜」

まへだ前田「名」次條の略。「三枚鑑、日の丸の前立打ったる兜」
まへだ前田「名」次條の略。「三枚鑑、日の丸の前立打ったる兜」

まへだ前田「名」次條の略。「三枚鑑、日の丸の前立打ったる兜」
まへだ前田「名」次條の略。「三枚鑑、日の丸の前立打ったる兜」

まへだ前田「名」次條の略。「三枚鑑、日の丸の前立打ったる兜」
まへだ前田「名」次條の略。「三枚鑑、日の丸の前立打ったる兜」

まへだ前田「名」次條の略。「三枚鑑、日の丸の前立打ったる兜」
まへだ前田「名」次條の略。「三枚鑑、日の丸の前立打ったる兜」

まへだ前田「名」次條の略。「三枚鑑、日の丸の前立打ったる兜」
まへだ前田「名」次條の略。「三枚鑑、日の丸の前立打ったる兜」

まへだ前田「名」次條の略。「三枚鑑、日の丸の前立打ったる兜」
まへだ前田「名」次條の略。「三枚鑑、日の丸の前立打ったる兜」

まへだ前田「名」次條の略。「三枚鑑、日の丸の前立打ったる兜」
まへだ前田「名」次條の略。「三枚鑑、日の丸の前立打ったる兜」

まへ

まへのらんくわ 前野蘭化〔名〕「八」次條に同じ。

まへのりやうたく 前野良澤〔名〕「人」蘭學者。名は燕字は子悅、良澤は通稱、蘭化、樂山など號す。家は、世世蘭を以て、中津侯に仕ふ。四十七歳に赴きて、通詞青木昆陽に學び、又、長崎に赴きて、通詞吉雄、梅林等に就き、明和八年、江戸の小塚原に刑死者の解剖の擧あるや、杉田玄白、桂川甫周等と赴きて、和蘭の解剖圖譜に照査し、自ら盟主となりて、圖譜の翻譯に著手し、四年にして、その業成り、辭體新書と名づく。蘭學の我國に開くる、多くの擧の影響に依る。享和三年歿す。年八十。

まへへば 前齒〔名〕「人」類などの口中の前面に、上下各四枚並びてある齒。ぬかば。むかふば。むかふば。板齒〔名〕。門齒〔名〕。下駄の齒の、前方にあるもの。八笑人「前齒のかけた下駄は、どうだ」

まへへばさみ 前袂〔名〕「前」方に挟みてあること、又その物。二代男前袂の帶、自然と解けて

まへへばし 前橋〔名〕「地」上野國にある市。利根川の東邊にして、廣瀬川市街を貫流す。群馬縣の所在地。松平氏の舊藩地。舊稱、麻橋〔名〕。明治の初年設置の縣の一。四年七月、上野國舊前橋藩の地に立てしもの。後、群馬縣に入る。

まへへばしよ 前場所・前場所〔名〕相撲〔名〕の、前回の興行。

まへへばなを 前鼻緒〔名〕「穿物」の鼻緒の間にありて、拇指とその次の指との間に挟まる緒。まへつば。まへを。横鼻緒に對して

まへら

明治三年、延臣と譏合はずして、故山に去り、六年、佐賀の亂に、山口縣下の土族を慰諭して、名聲頗かに揚りしが、九年、熊本神風連の事あるに及び、同志横山俊彦、奥平謙輔等と、兵を募り擧げ、敗れて、謙輔等と出雲國に逃れんとし、伯耆國境港に捕へられ、萩に斬らる。

まへへらひ 前拂〔名〕「貴人」の通行する前路の人拂〔名〕。さきばらひ。鴉いやとんごとなき人の肩ばかりこそ、前ばらひあれ、よきし人は、制しわづらひぬかし。ぜんきんばらひ〔前金拂〕に同じ。

まへへらひうんちん 前拂運送〔名〕「名」さきばらひ〔先拂運賃〕に同じ。

まへへらひうんちん 前拂運賃〔名〕前條に同じ。

まへへらひむねさ 前原宗房〔名〕「人」赤穂四十七士の一人。通稱は伊助、淺野長矩に仕へて、中下姓たりしが、復讐の議決するや、米屋五兵衛と稱し、吉良〔名〕家に入出して、その動靜を探る。元祿十六年二月四日、死を賜はる。年四十。

まへへらひおほくち 前張大口〔名〕大口の袴の、前面を、太糸の織地にて仕立てて、前方に張り出づるやうに仕立て、公家〔名〕にて着用せしもの。後張〔名〕大口に對して

まへへらひ前原 前原〔名〕「地」筑前國にある町。糸島郡役所の所在地。肥前別街道唐津路に沿ふ。福岡市の南西約五里半。

まへびき

まへへびき 前引〔名〕「前」に供へたる引出物。太平記、飯後に、旨酒三獻過ぎて、茶の懸物に、百物百の外に、又、前引の置物をしけるに、初度頭の人は

まへへびき 前膝〔名〕「膝」の前面。義經記「馬の太腹、前膝、ばらりばらりと斬りつけ」

まへへびき 前足〔名〕「左」の前足の白色なるもの。馬の毛色、右の前足の白色なるもの。前右足白〔名〕に對して

まへへびき 前廣〔名〕「副」あらかじめ。前以て。かねてより。ひさりさき「古の俳諧は、來る幾日の興行なりと、前廣に定めおきて」

まへへびき 前船〔名〕「劇場」の引船の、前後三側に分れたる内の、前側の處。後船〔名〕に對して

まへへびき 前觸〔名〕「前」以て告げ知らす

まへへびき 前幌〔名〕「轎」の前方。曾我「股野が前ほろを掴んでさししけ」

まへもり

まへへもり 前以て〔副〕事に先だちて。あらかじめ。かねてより。

まへへもり 前厄〔名〕「厄」年の前の年。厄年と同様に忌み嫌ふ。後厄〔名〕に對して。壁栗毛、前厄て、今年、嗚〔名〕めを死なしたはい

まへへもり 前弓〔名〕「番」ひて、弓を射る時、最初の番に當れる人。後弓〔名〕に對して

まへへもり 前禮〔名〕「茶」の湯に招待せられたる人の、取り敢へず承諾の旨返答しおき、その前日に自ら先方に赴き、又は書狀にて、翌日の禮を、前以て述ぶること。

まへへもり 前輪〔名〕「鞍橋」の、前後の、鞍橋の形をなして高まる處。まへつわ。後輪〔名〕に對して。保正、鞍の前輪より、鐙の草指を、尻輪かけて、矢先三寸あまりぞ射通したる。前方にある車輪。後輪〔名〕に對して

まへへもり 前渡〔名〕「金」錢又は品物を、期日より前に渡すこと。てきん

まへへもり 前互〔名〕「相撲」の手の一。異本會野、前互、後互、走互……相撲の、手ども、數を盡して



(い に が ほ ま)

くは語らひたまはぬ。さすがに憎しなど
思ひたるさまにはあらずと知りたるを、
いと怪しくなん」源氏(草)の手に、か
んなの所に書きませて、まほの日記に
あらず」(ま)とともに。真正面。源氏「い
とほしと思せば、まほにも向ひたまはず」
【植】棟(マ)科に属する常緑喬木。高さ
八十尺に達し、葉

は偶数羽状複葉
にして四對の卵
狀披針形を呈する
小葉より成り、花は
圓錐花序をなして、
葉腋に生ず。熱帯植
物にして、原産地は北
亞米利加の東南部及
び中央亞米利加。木材は赤黒色を呈し、
質堅牢にして、殊に水に強し。

幸ぼし(助動)『まは、未來の助動詞むの
轉、ほしは欲しの義』たし(度し)に同じ。
(まうしに對して)「源氏もるこし」にも
わたり傳へまほしげなる世の中の文(さ)
大變したり顔に笑ふ顔つき、繪に書かま
ほしく見ゆ」

幸ぼし(眞星)【名】①的の中央の星。②
物事の中心點。③
眞星を指す【句】物事の中心點を言ひ
中つ。全く星を指す。

幸ぼし(目映し)【形二】まぶし(目映し)に
同じ。【中國の方言】
幸ぼし(間程)【名】音楽の間(さ)の程あ
ひさ。藤原又座敷にて、どどとの間程も、
さすが藝者の調子」

幸ぼし(魔法)【名】魔力にて、不思議なる
事を行ふ術。妖術。魔法。幻法。呪術。魔術。
まほふ(つかひ)魔法使【名】魔法を行ふ
人。妖術使。化人。
まほふ(びん)魔法瓶【名】『英 Thermo』
中に入れたる湯などが、長時間同温度を
保つやうに装置したる瓶。保温水筒。
まほん(魔梵)【名】『佛』慾界第六天の魔

まほかに

王と色界(天)の梵天王と。
まほめ(つ)けう 摩哈麥教 摩哈墨教(英
Moham medanism) Malommedanism)
【名】亞刺比亞のメッカの人マホメットの
四十歳の時(西曆六一〇年)、ヒラ(Hira)
山上に天啓を受けたりと稱して創めし宗
教。猶太教と基督教とに基き、自國在來の
異種の宗教の傳説をも渾融せる一宗教。
經典をコラン(Koran)といひ、嚴肅な
る宿命説を奉じ、信條・祈禱・布施・斷食・
巡禮を信仰・宗儀を通じての五要點とし、
信徒は一生に少くとも一度は、メッカの
本山に巡禮すべきを規定す。亞刺比亞及
び、西は亞非利加の北部と歐洲の一部と
に東は土耳其、波斯、中央亞細亞と印度・
支那の一部とに行はれ、分派多し。むは
めつど教。もはめつど教。ふるふる教。い
すらむ教。回回教。回教。

幸ぼら(眞)【名】秀(さ)の義にて、らは
接尾語なるべし。一説に、ほらは洞の義な
るべしといふ。中央の秀てたるところの
意ならん。【古語】萬葉この照す日月完
(さ)の下(さ)は、天雲(さ)のむかぶすきは
み、谷(さ)のさわたるきはみ、きこしをす
國のまほらぞ。一國のまほらを、つばら
かに示したま(ば)

幸ぼら(眞)【名】秀(さ)の義にて、らは
接尾語なるべし。一説に、ほらは洞の義な
るべしといふ。中央の秀てたるところの
意ならん。【古語】萬葉この照す日月完
(さ)の下(さ)は、天雲(さ)のむかぶすきは
み、谷(さ)のさわたるきはみ、きこしをす
國のまほらぞ。一國のまほらを、つばら
かに示したま(ば)

幸ぼら(眞)【名】秀(さ)の義にて、らは
接尾語なるべし。一説に、ほらは洞の義な
るべしといふ。中央の秀てたるところの
意ならん。【古語】萬葉この照す日月完
(さ)の下(さ)は、天雲(さ)のむかぶすきは
み、谷(さ)のさわたるきはみ、きこしをす
國のまほらぞ。一國のまほらを、つばら
かに示したま(ば)

幸ぼら(眞)【名】秀(さ)の義にて、らは
接尾語なるべし。一説に、ほらは洞の義な
るべしといふ。中央の秀てたるところの
意ならん。【古語】萬葉この照す日月完
(さ)の下(さ)は、天雲(さ)のむかぶすきは
み、谷(さ)のさわたるきはみ、きこしをす
國のまほらぞ。一國のまほらを、つばら
かに示したま(ば)

幸ぼら(眞)【名】秀(さ)の義にて、らは
接尾語なるべし。一説に、ほらは洞の義な
るべしといふ。中央の秀てたるところの
意ならん。【古語】萬葉この照す日月完
(さ)の下(さ)は、天雲(さ)のむかぶすきは
み、谷(さ)のさわたるきはみ、きこしをす
國のまほらぞ。一國のまほらを、つばら
かに示したま(ば)

まほめ

の來るか來るかと思ふまに北斗の星をま
ぼりあかしつ」
守(ま)る旗【句】「守(ま)る旗」に同じ。
甲陽軍鑑「まぼる旗、遊軍押勢(様)など
と申す事わり候ひて」

まぼる(幻)【名】『まは目の義、ほらはほ
る』の義は助辭なるべし。【無】無き物
の姿が、有るが如く、見えて、程程と消失
するもの。幻影(ま)。字邊つつから
御夢にもまぼろしにも御覽せば、さとは
知らせたまへ。土御門陸奥「まぼろしをう
つばかりに慰めてまださめやらぬ夢の
かよひ路」【幻術】幻術を行ふ人。魔法つか
ひ。方士。持運沖つ島雲井の岸を行き
か(り)文(さ)通はさんまぼろしもがな
源氏大空を通ふまぼろし夢にだに見え
ぬ魂(さ)のゆくへ(たつねよ)

まぼら(眞)【名】秀(さ)の義にて、らは
接尾語なるべし。一説に、ほらは洞の義な
るべしといふ。中央の秀てたるところの
意ならん。【古語】萬葉この照す日月完
(さ)の下(さ)は、天雲(さ)のむかぶすきは
み、谷(さ)のさわたるきはみ、きこしをす
國のまほらぞ。一國のまほらを、つばら
かに示したま(ば)

まぼら(眞)【名】秀(さ)の義にて、らは
接尾語なるべし。一説に、ほらは洞の義な
るべしといふ。中央の秀てたるところの
意ならん。【古語】萬葉この照す日月完
(さ)の下(さ)は、天雲(さ)のむかぶすきは
み、谷(さ)のさわたるきはみ、きこしをす
國のまほらぞ。一國のまほらを、つばら
かに示したま(ば)

まぼら(眞)【名】秀(さ)の義にて、らは
接尾語なるべし。一説に、ほらは洞の義な
るべしといふ。中央の秀てたるところの
意ならん。【古語】萬葉この照す日月完
(さ)の下(さ)は、天雲(さ)のむかぶすきは
み、谷(さ)のさわたるきはみ、きこしをす
國のまほらぞ。一國のまほらを、つばら
かに示したま(ば)

まぼら(眞)【名】秀(さ)の義にて、らは
接尾語なるべし。一説に、ほらは洞の義な
るべしといふ。中央の秀てたるところの
意ならん。【古語】萬葉この照す日月完
(さ)の下(さ)は、天雲(さ)のむかぶすきは
み、谷(さ)のさわたるきはみ、きこしをす
國のまほらぞ。一國のまほらを、つばら
かに示したま(ば)

まぼら

まほ(眞)【名】『まはは(復母)』の約轉「まほ」
(繼母の義)の轉辭なるべし。假の母。乳
母などといふ。執僧都の君の御めのと
のまほと、……、御前に參りて、
まほ(眞)【名】『まはは(復母)』の約轉「まほ」
(繼母の義)の轉辭なるべし。假の母。乳
母などといふ。執僧都の君の御めのと
のまほと、……、御前に參りて、

まほ(眞)【名】『まはは(復母)』の約轉「まほ」
(繼母の義)の轉辭なるべし。假の母。乳
母などといふ。執僧都の君の御めのと
のまほと、……、御前に參りて、

まほ(眞)【名】『まはは(復母)』の約轉「まほ」
(繼母の義)の轉辭なるべし。假の母。乳
母などといふ。執僧都の君の御めのと
のまほと、……、御前に參りて、

まほ(眞)【名】『まはは(復母)』の約轉「まほ」
(繼母の義)の轉辭なるべし。假の母。乳
母などといふ。執僧都の君の御めのと
のまほと、……、御前に參りて、

まほ(眞)【名】『まはは(復母)』の約轉「まほ」
(繼母の義)の轉辭なるべし。假の母。乳
母などといふ。執僧都の君の御めのと
のまほと、……、御前に參りて、

まほ(眞)【名】『まはは(復母)』の約轉「まほ」
(繼母の義)の轉辭なるべし。假の母。乳
母などといふ。執僧都の君の御めのと
のまほと、……、御前に參りて、

まほ

李タ

（タ）に近き地なりしより、歌枕として、都人の間にも知られたり。萬葉かつしかの真間の入江にうち靡く玉藻列りけむ手兒奈し思ほゆ。

真間の繼橋（タ）【句】下總國真間の丘陵に在りて、歌枕として有名なる繼橋。今、真間の弘法（沙）寺の礎道下の南の方なる細流真間川に架せる小橋を繼橋と呼び、これその遺蹟なりといふ。萬葉足（ツ）の音せず行かむ駒もがかつしかの真間の繼橋やます通はむ。真間の手兒奈（ツ）【句】古、下總國真間の一貧家の美女。多くの男子に言ひ寄られて、一身を思ひあつつかひ、入江に投身して死せりと傳へ、萬葉集に、山邊赤人を始とし、高橋連蟲磨等のこれを追弔する和歌數種を載せ、藤原清輔の奥飛抄にも傳説を記す。今、その祠、真間の繼橋の東方に在り。文龜元年九月九日、弘法（沙）寺の僧日興、靈夢によりて建立する所といひ、その日を以て、毎年、の祭日とす。又、婦人の安産を祈願すれば、効驗ありとて、參拜者多し。

李タ 間關【副】をりをり。ときどき。往々。八笑入樂屋眼（ツ）をしたがる人物。またあるものなり。

李タ 繼【接頭】復（タ）母（タ）の約轉にて、本は繼母の意なるを、擴めていふなるべし。【名義】名義は親子なれども、血縁なき間柄なる意。「まます親」「まます母」【兄弟、姉妹の關係はあれども、腹ちがひなる意。「まます兄（タ）」「まます妹」

李タ おや 繼親【名】繼父（タ）又は繼母【名】おや 繼親【名】繼父（タ）又は繼母【名】おや 繼親【名】繼父（タ）又は繼母

李タ 継木【名】まますゆみ（継木弓）の略。

李タ

萬八思百首「まます射る大官人は今日やさは冬のゆみ場に立ちほはむらん」繼木の弓【句】まますゆみ（継木弓）に同じ。夫といかにせんまますの弓のともすれ引放ちつつあはぬきを

李タ や 繼木矢【名】まます弓と共に用ふる矢。鐵又は銅にて、鐵を作りたる的矢なりといふ。鐵の兄弟、姉妹。

李タ ころやうだい 繼兄弟【名】腹ちがひ義にて、木と竹とを粘（ツ）合はせて、作り上げ、古は射るにのみ用ひたる弓なりとも、又、眞弓に、籐にのみ構へても卷きたるものともいふ。和名、射射、此間云、末末岐由美、是也。

李タ ころはう【名】飯（タ）食はらの義にんめんさう（人面看）に同じ。繼子【名】二度添の妻の、その夫の先妻と夫との間に生れたる子に對する關係、または二度添の夫の、その妻の先夫と妻との間に生れたる子に對する關係。その子、男なる時は、繼息子といひ、女なる時は、繼娘といふ。まます。空稱「まますなりし人のために、親の實とす帶を取隠して」【疎外せらるる人の覺。まます。】

後（タ）下（カ）の繼子【句】繼子根性の子の義。心おかれて、進取の乏しき子を嘲りていふ語。【諺語】

李タ ころ 繼粉【名】粉に水などを加へて捏ぬる時、粒だちて、こなれずに残る粉。まます。

李タ ころ あつかひ 繼子扱【名】特に、他と異なりて、疎外せる取扱をなすこと。まます。こあつかひ。

李タ ころ ちめ 繼子虐【名】繼子をいぢむこと。繼子を虐待すること。まます。こちめ。 李タ ころ かひづき 繼子傅【名】繼子扱の養育。源氏すずるなるまますかひづきを。 李タ ころ こんじんじやう 繼子根性【名】繼子

李タ

の懷き難き、ひがみである根性。まます。李タ ころ ざん 繼子算【名】繼子立及びそれ類する和算の法。即ち白、黒各同數の碁石を輪の如き形に並列し、その數に應じて、定められたる他の數だけ順に數へて、數へ當りたる石を除きゆく時、残れるは、何れなるかを答とする問題の解法の名目あり。

李タ ころ たつなみ 繼子立波【名】「植」はなし（毛無繼子菜）に同じ。 李タ ころ だて 繼子立【名】昔、或豪農の家に、前妻の子と後妻の子と、各十五人ありて、後妻己が所生の子、後妻に立てんとし、或時、夫に提議して、三十人を交へ、十番目に當る者を除きゆき、最末に残れる者に家を繼がしめんといひ、その承諾を得て、次の如く立たしめ、順に數へ、十四人の繼子を除き終りに、最後に残り留まりし一人の繼子、今度、我を數へはじめと、逆に數へて除き去らんことを請ひしより、その言の如くせしに、後妻の子は、悉く除かれて、その繼子一人のみ留まりて、繼嗣となるを得、後妻の目的遂に破れたりとの俗話によりていふ。碁石を、黒二、白一、黒三、白五、黒二、白二、黒四、白一、黒一、白三、黒一、白二、黒一、白一の如く並べ置き、數へて、十に當る石を除くことを數回繰り返す時は、白石皆無となる遊戲。徒給まます立といふ程は、雙六の石にて作りて、まます並べたる程は、取られぬ事、いづれの石とも知らねども、數へてて、一つを取りぬれば、その外はのがれぬと見れど、又又數ふれば、かれこれまますゆきゆくほどに、何れものがれざるに似たり。

李タ ころ づめり 繼子抓【名】他人を背酷に食事などの眞似をして遊ぶこと。まます。こづめり。 李タ ころ であそび 飯事遊【名】前條に同

李タ

李タ ころ ね 繼子菜【名】「植」玄參（タ）科に屬する一年生の草。高さ一二尺に達し、枝細く、葉は長卵形、小頭にて對生し、花は小形、淡紅紫色の唇形花冠を有し、各花下に、鋭き鋸齒を有する卵形の苞を具へ、穗状花序をなして排列す。我國、山野の草叢に混じて生じ、主として、禾本科植物に寄生す。みやこぐさ。

李タ ころ のうみ 繼子憎【名】繼子を憎むこと。俗語、金淵雙級巴「あんまり可愛いと、胸窓が交つて、繼子にくみになるもの」 李タ ころ のうみ 繼子戻拭【名】「植」蓼の科に屬する一年生の草。高さ四五尺に及び、著しく分岐して、四角形をなし、角に添ひて、無數の逆鉤、即ち刺を具へ、所所紅色を呈し、葉柄にも逆刺有り、葉は三角形、花は頭狀に排列して、分岐し、淡紅色にして、六七月に開く。我國、各地に産す。【ウシじかは（紅板屋）に同じ。】

李タ ころ さい 繼子孫【名】まますしき孫。繼子の子。慶長記、三浦大介……。大介は、あはれ同じくは、島山に見合ひて斬らればや、繼子孫なり、そのゆかり陸まじと思ひければとも。

李タ ころ も 繼子次條に同じ。 李タ ころ うち 繼子冬青【名】「植」はないかだ（花袋）國に同じ。

李タ ころ 繼 繼親繼子又は腹違なる關係にあり。【名義】「まますしき中」胤陣八島姉は、妾と繼（タ）しき中なれば。 李タ ころ 繼兄 庶兄【名】腹がはりの兒。【古語】字鏡、庶兄、萬萬兄。

李タ ころ 飯炊 飯炊【名】めしたき（飯炊）に同じ。天の網鳥子供の乳母（タ）か、まますき。 李タ ころ 飯炊場 飯炊場【名】淨瑠璃（彌羅）の先代萩の六段目、即ち鶴喜代の乳母が、鶴喜代の、奸臣家老、新戸刑部の一、味なる波會銀兵衛及び妻八沙を始め、御膳番一同のために毒殺せられんとするを防がむるために自らその食物を作りて進むる場面。

まむたつ

まむたつ つみ 茨田堤「名」「地」まんだつ

まむたつ のいげ 茨田池「名」「地」まんだの

まむたつ (英田池)の古稱。

まむたつ (間)の音便しあはせ。まは

まむたつ (間)の音便しあはせ。まは

まむたつ (間)の音便しあはせ。まは

まむたつ (間)の音便しあはせ。まは

まむたつ (間)の音便しあはせ。まは

まむたつ (間)の音便しあはせ。まは

まむたつ (間)の音便しあはせ。まは

まむたつ (間)の音便しあはせ。まは

まむたつ (間)の音便しあはせ。まは

まむたつ (間)の音便しあはせ。まは

まむたつ (間)の音便しあはせ。まは

まむたつ (間)の音便しあはせ。まは

まむたつ (間)の音便しあはせ。まは

ま

極めて稀なること。運歩色葉集「萬希

マンガマレ」

萬に一つ「句」まんにち(萬一)に同じ。

甲陽軍鑑さありて、詮なき友達の命を失

はせ申しては、屍の上の恥なるべし。萬

に一つ仕すましても」

まむたつ (間)の音便しあはせ。まは

まむたつ (間)の音便しあはせ。まは

まむたつ (間)の音便しあはせ。まは

まむたつ (間)の音便しあはせ。まは

まむたつ (間)の音便しあはせ。まは

まむたつ (間)の音便しあはせ。まは

まむたつ (間)の音便しあはせ。まは

まむたつ (間)の音便しあはせ。まは

まむたつ (間)の音便しあはせ。まは

まむたつ (間)の音便しあはせ。まは

まん

まん えふ がくじや 萬葉學者「名」萬葉

集の研究を専門とする學者。萬葉家。

まん えふ がな 萬葉假名「名」まな(真名)

に同じ。

まん えふ け 萬葉家「名」まん えふ がくじや

(萬葉學者)に同じ。萬葉代記凡例一(略

居)妙先生の萬葉考以來、世の萬葉家と

稱する人だちの註本には、専ら誤字の説

を唱へて」

まん えふ け 萬葉集「名」「書」萬葉に

傳はるべき集の義。一説に、萬(万)の言の

葉の義。我國、最古の歌集。仁徳天皇の

元年より淳仁天皇の天平寶字三年まで、

凡そ四百四十六年間の歌四千四百九十六

首、長歌二百六十二首、短歌四千七百三

首、旋頭歌六十一首を収む。二十卷。撰

まん

まん えふ じふずおせう 萬葉拾穂抄「名」

「書」萬葉集を註釋せるもの。二十卷。三

十册。北村季吟の著。徳川時代の萬葉

註釋書の最初のものにして、未だ精確を

以て許しがたし。

まん えふ じふせう 萬葉集抄「名」「書」

せんがくせう(仙覺抄)に同じ。

まん えふ じふだいいじやうき 萬葉集代匠

記「名」「書」代匠とは、もと下河邊長

流の、光圓の喝を受けたるまま著手せず

して病歿せる後、契沖代りて、これを作り

しより、工匠に依る意にて名づく。源光

圓の依喝に依りて、萬葉集を註釋し、本文

四十五卷に、總釋三卷、雜說一卷、枕詞釋

二卷、拾遺三卷を添へたるもの。但し古

略本なり。釋契沖の著。萬葉集全註の最

まんえんぶようじかく 萬葉用字格【名】

【書】萬葉集中の特殊の用字を選出し、五十音の順に排列して、出所を記し、略註を加へ、正音略音、正訓・義訓、略訓、約訓、借訓、戲書等に分類したるもの。一巻。本居宣長の門人僧春登の著。

まんえん 萬延【名】『後漢書』に「豊千億之子孫歴萬載一而永延」とあるに本づく。孝明天皇の年號(紀元二五二〇—二五二一年)。

まんえん 蔓延【名】延びひろがること。まんえん 蔓衍【名】『漢書』の編錯傳に「土山丘陵蔓衍相屬」とあり。はびこること。『蔡邕』の文に「繁多而蔓衍、非三所謂理約而達一也」とあり。言葉多く、くどくどしきこと。

まんえんいちばんきん 萬延一分判金【名】徳川幕府の通貨の一。萬延元年より、慶應三年にかけて發行したる一分判金。縦四分五厘、横二分五厘。新一分判金。新一分金。

まんえんおぼはんきん 萬延大判金【名】次條。徳川幕府の通貨の一。萬延元年より、文久二年にかけて、發行したる大判金。縦四三分五厘、横二寸六分。新大判金。萬延大判。

まんえんごばんきん 萬延小判金【名】次條の總稱。新金。『略』。まんえんごばんきん 萬延小判金【名】徳川幕府の通貨の一。萬延元年より、慶應三年にかけて發行したる小判金。縦一寸一分五厘、横六分五厘。新小判金。新小判。萬延小判。『次條の略』

まんえんじゆばんきん 萬延二朱判金【名】徳川幕府及び明治政府の通貨の一。萬延元年より、明治二年にかけて、發行したる二朱判金。縦四分弱、横二分五厘弱。新二朱判金。新二朱金。萬延二朱金。

まんえんにぶきん 萬延二分金【名】次條に同じ。

まんえん 満開【名】花の十分に開くこと。はなざかり。まんが 馬鉄【名】まぐは(馬鉄)の訛。まんかい 満開【名】花の十分に開くこと。はなざかり。まんがい 満開【名】花の十分に開くこと。はなざかり。まんがい 満開【名】花の十分に開くこと。はなざかり。

條に同じ。

まんえんにぶはん 萬延二分判金【名】次條に同じ。まんえんにぶはんきん 萬延二分判金【名】徳川幕府及び明治政府の通貨の一。萬延元年より、明治二年にかけて、發行したる二分判金。縦六分五厘強、横四分。新二分判金。新二分判。萬延二分金。萬延二分判。

まんが 馬鉄【名】まぐは(馬鉄)の訛。まんかい 満開【名】花の十分に開くこと。はなざかり。まんがい 満開【名】花の十分に開くこと。はなざかり。まんがい 満開【名】花の十分に開くこと。はなざかり。

まんがく 萬角字【名】紋所の「萬」の字を角字に描きたるもの。まんがち 萬【名】甚しく氣短なること。日本武尊妻雲出し抜いて、まんがちに乗出すな。梅鷹情(か)を知らぬ雲介ども、寺の破戸(か)を引放ち、お長(か)を押ししきあさあ、まんがちをするな、圖取だぞ、圖取だぞと、既に危き地獄の責。『我先にと競ふこと。腰裏毛、お前さんもまんがちな。明日の事になされませいな』

まんがにん(英Manganin)【名】理。銅百分の八十四、滿佈百分の十二、ニッケル百分の四の合金。電氣抵抗、極めて大にして、抵抗の標準を造るに用ふ。『J』。

まんがび 萬貫【名】まんびき(萬引)に同株が、募集定數に満つること。まんがく 萬角字【名】紋所の「萬」の字を角字に描きたるもの。まんがち 萬【名】甚しく氣短なること。日本武尊妻雲出し抜いて、まんがちに乗出すな。梅鷹情(か)を知らぬ雲介ども、寺の破戸(か)を引放ち、お長(か)を押ししきあさあ、まんがちをするな、圖取だぞ、圖取だぞと、既に危き地獄の責。『我先にと競ふこと。腰裏毛、お前さんもまんがちな。明日の事になされませいな』

まんがにん(英Manganin)【名】理。銅百分の八十四、滿佈百分の十二、ニッケル百分の四の合金。電氣抵抗、極めて大にして、抵抗の標準を造るに用ふ。『J』。

まんがび 萬貫【名】まんびき(萬引)に同株が、募集定數に満つること。まんがく 萬角字【名】紋所の「萬」の字を角字に描きたるもの。まんがち 萬【名】甚しく氣短なること。日本武尊妻雲出し抜いて、まんがちに乗出すな。梅鷹情(か)を知らぬ雲介ども、寺の破戸(か)を引放ち、お長(か)を押ししきあさあ、まんがちをするな、圖取だぞ、圖取だぞと、既に危き地獄の責。『我先にと競ふこと。腰裏毛、お前さんもまんがちな。明日の事になされませいな』

まんがにん(英Manganin)【名】理。銅百分の八十四、滿佈百分の十二、ニッケル百分の四の合金。電氣抵抗、極めて大にして、抵抗の標準を造るに用ふ。『J』。

まんがにん(英Manganin)【名】理。銅百分の八十四、滿佈百分の十二、ニッケル百分の四の合金。電氣抵抗、極めて大にして、抵抗の標準を造るに用ふ。『J』。

まんがん 滿儼(獨Mangan)【名】「化」帶赤灰色の光澤ある、一種の金屬元素。概して、鐵に類すれども、鐵より硬くして脆く、化學性も鐵より強く、濕(へる)空氣中にては、外部は速かに酸化し、稀硫酸又は稀鹽酸などに容易に溶解し、水素を發生す。酸素と化合せる鐵石、特に軟滿儼となりて、天然に存在し、種類多し。主に滿儼鋼を製するため、又銅・眞鍮・ニッケル等に和するに用ふ。『くわんざん(わまんがん)』(過酸化滿儼の俗稱。無名異名)。

まんがんかう 滿儼鋼【名】「化」百分の十三内外の滿儼と、百分の八十七内外の鐵との合金。滿儼は脱酸劑として用ふるものにて、従つて硬度著しく加はり、耐重大なるを以て、汽車などの鐵輪の製造に實用せらる。

まんがんさんかりうむ 滿儼酸加榴膜【英Potassium Manganate】(名)「化」二酸化滿儼に、苛性加里を加へ、焙焼して得らるる暗綠色の塊。硝石又は鹽酸加里を附加すれば、一層多量に得。水に溶解易く、溶くれば深綠色となり、その溶液を、多量の水にて稀釋するか、若しくは穩かに温めかする時は、過滿儼酸となり、又酸を加ふれば、過滿儼酸加里となる。

まんがんじゆう 滿儼節【名】「紀元節。天長節又は皇禮節を發すべき日などに、在泊中の軍艦が、旗幟、電燈などにて、各橋頭及び艦首より艦尾にかけての全部を飾ること。汽船・帆船などに、同様の飾を施したるを、滿儼船といふ。『婦人などの、盛んに著飾すること。盛裝。』(俚語)まんがんせいじゆう 滿儼青銅【名】眞鍮に百分の二・三の滿儼を含むもの。まんがんじゆう(滿儼鋼)参照。

まんがんじゆう 滿儼鋼【名】「英 Ferro-manganese」普通百分の二十五乃至八十の滿儼を含める、特殊の銑鐵。主として、熔鑄機もしくは電氣爐にて製造せられ、色は黃白を帯び、細粒をなし、熔鋼製錬に際し、鋼内の酸化鐵と硫黃に對する害を除き去るに用ふ。

まんがんじゆう 滿儼鋼【名】「英 Ferro-manganese」普通百分の二十五乃至八十の滿儼を含める、特殊の銑鐵。主として、熔鑄機もしくは電氣爐にて製造せられ、色は黃白を帯び、細粒をなし、熔鋼製錬に際し、鋼内の酸化鐵と硫黃に對する害を除き去るに用ふ。

まんがんじゆう 滿儼鋼【名】「英 Ferro-manganese」普通百分の二十五乃至八十の滿儼を含める、特殊の銑鐵。主として、熔鑄機もしくは電氣爐にて製造せられ、色は黃白を帯び、細粒をなし、熔鋼製錬に際し、鋼内の酸化鐵と硫黃に對する害を除き去るに用ふ。

まんがんじゆう 滿儼鋼【名】「英 Ferro-manganese」普通百分の二十五乃至八十の滿儼を含める、特殊の銑鐵。主として、熔鑄機もしくは電氣爐にて製造せられ、色は黃白を帯び、細粒をなし、熔鋼製錬に際し、鋼内の酸化鐵と硫黃に對する害を除き去るに用ふ。

まんがんじゆう 滿儼鋼【名】「英 Ferro-manganese」普通百分の二十五乃至八十の滿儼を含める、特殊の銑鐵。主として、熔鑄機もしくは電氣爐にて製造せられ、色は黃白を帯び、細粒をなし、熔鋼製錬に際し、鋼内の酸化鐵と硫黃に對する害を除き去るに用ふ。

まんがんじゆう 滿儼鋼【名】「英 Ferro-manganese」普通百分の二十五乃至八十の滿儼を含める、特殊の銑鐵。主として、熔鑄機もしくは電氣爐にて製造せられ、色は黃白を帯び、細粒をなし、熔鋼製錬に際し、鋼内の酸化鐵と硫黃に對する害を除き去るに用ふ。

まんがんじゆう 滿儼鋼【名】「英 Ferro-manganese」普通百分の二十五乃至八十の滿儼を含める、特殊の銑鐵。主として、熔鑄機もしくは電氣爐にて製造せられ、色は黃白を帯び、細粒をなし、熔鋼製錬に際し、鋼内の酸化鐵と硫黃に對する害を除き去るに用ふ。

まんがんじゆう 滿儼鋼【名】「英 Ferro-manganese」普通百分の二十五乃至八十の滿儼を含める、特殊の銑鐵。主として、熔鑄機もしくは電氣爐にて製造せられ、色は黃白を帯び、細粒をなし、熔鋼製錬に際し、鋼内の酸化鐵と硫黃に對する害を除き去るに用ふ。

まんがんじゆう 滿儼鋼【名】「英 Ferro-manganese」普通百分の二十五乃至八十の滿儼を含める、特殊の銑鐵。主として、熔鑄機もしくは電氣爐にて製造せられ、色は黃白を帯び、細粒をなし、熔鋼製錬に際し、鋼内の酸化鐵と硫黃に對する害を除き去るに用ふ。

まんがんじゆう 滿儼鋼【名】「英 Ferro-manganese」普通百分の二十五乃至八十の滿儼を含める、特殊の銑鐵。主として、熔鑄機もしくは電氣爐にて製造せられ、色は黃白を帯び、細粒をなし、熔鋼製錬に際し、鋼内の酸化鐵と硫黃に對する害を除き去るに用ふ。

まんがんじゆう 滿儼鋼【名】「英 Ferro-manganese」普通百分の二十五乃至八十の滿儼を含める、特殊の銑鐵。主として、熔鑄機もしくは電氣爐にて製造せられ、色は黃白を帯び、細粒をなし、熔鋼製錬に際し、鋼内の酸化鐵と硫黃に對する害を除き去るに用ふ。

まんがんじゆう 滿儼鋼【名】「英 Ferro-manganese」普通百分の二十五乃至八十の滿儼を含める、特殊の銑鐵。主として、熔鑄機もしくは電氣爐にて製造せられ、色は黃白を帯び、細粒をなし、熔鋼製錬に際し、鋼内の酸化鐵と硫黃に對する害を除き去るに用ふ。

まんがんじゆう 滿儼鋼【名】「英 Ferro-manganese」普通百分の二十五乃至八十の滿儼を含める、特殊の銑鐵。主として、熔鑄機もしくは電氣爐にて製造せられ、色は黃白を帯び、細粒をなし、熔鋼製錬に際し、鋼内の酸化鐵と硫黃に對する害を除き去るに用ふ。

まんがんじゆう 滿儼鋼【名】「英 Ferro-manganese」普通百分の二十五乃至八十の滿儼を含める、特殊の銑鐵。主として、熔鑄機もしくは電氣爐にて製造せられ、色は黃白を帯び、細粒をなし、熔鋼製錬に際し、鋼内の酸化鐵と硫黃に對する害を除き去るに用ふ。

まんがんじゆう 滿儼鋼【名】「英 Ferro-manganese」普通百分の二十五乃至八十の滿儼を含める、特殊の銑鐵。主として、熔鑄機もしくは電氣爐にて製造せられ、色は黃白を帯び、細粒をなし、熔鋼製錬に際し、鋼内の酸化鐵と硫黃に對する害を除き去るに用ふ。

まんがんじゆう 滿儼鋼【名】「英 Ferro-manganese」普通百分の二十五乃至八十の滿儼を含める、特殊の銑鐵。主として、熔鑄機もしくは電氣爐にて製造せられ、色は黃白を帯び、細粒をなし、熔鋼製錬に際し、鋼内の酸化鐵と硫黃に對する害を除き去るに用ふ。

まきこ

まんきんたん 萬金丹 [名] 伊勢國朝熊(一)山より製出する丸薬。箱根醫學博士「こなたにも、何ぞ饑餓が進ぜたいものぢやが、おお、有る有ると、紙入りより、心は千金、萬金丹」

まんきやう 萬鏡 [名] 佛一切の境界。萬鏡水室「月も燦々水の面、萬鏡を映す鏡のこころ」

まんきやう 萬行 [名] 佛人の修むるさまざまの行。又、念佛に對して、餘の一切の行。淨土和讃「諸善萬行ことごとく」

萬行の少善多功(一)句「佛」「南無阿彌陀佛」の六字の念佛に攝する善根福徳の無量なるに比すれば、爾餘の萬行は、少善根・少福徳なること。

まんきやくくろお 蔓脚類 [名] (動) 甲殼類中の切甲類に屬する節足動物。體は介殼にて被はれ、海岸の岩石、海中の木片、介殼などの表面に固著して生活し、頭部に不完全なる觸角あり、胸部には、六對の脚あり、數多の小節より成り、すべて二裂し、その先端の蔓狀をなせる部分を、殻口より出だし、水を口に送り、以て食物を探り、又は呼吸す。雌雄同體にして、共に外觀は、介類に似たれども、幼蟲は、體の構造、全く他の甲殼類と同じく、一箇の眼と三對の脚とを有して、自由に水中を遊ぎ、遂に頭部を以て、他物に固著するに至る。龜手(カマ)・烏帽子貝(カマ)・藤壺(カマ)など、これに屬す。

まんきやう 漫興 [名] 〇そぞろに興を催すこと。それと定めたる所もなき興味。

まんきん (漫吟) 〇同じ。「供」の略。

まんきん 曼供 [名] 佛「まんだらく」曼陀羅

まんきん あはせ 萬句合 [名] 書「川柳點附(カマ)」の祖柄井(カマ)川柳の出題せる前句(カマ)の高點の句一萬づつを、毎年乃至五枚に、頒布したるもの。大半紙三枚乃至五枚に、細字にて、發端に、前句の題を數稱記し、次に附句(カマ)を並擧す。安永の末までも續きて、多く出版せられ、體裁、古の伊勢曆に似たるより、世に曆摺(カマ)と呼ばれたり。「柳梅(カマ)」の根源をな

まきこ

せるものなり。
まんぐらす (英 Mongools) [名] (動) 食肉類に屬する哺乳動物。形、鼯鼠(カマ)に似、尾長し、好んで、蛇・野鼠などを捕食す。原産地は、印度にして、埃及(カマ)にも、一種を産す。

まんぐら 萬猷 [名] まんのら (萬龍) 〇同じ。「關西の方言」

まんぐら 万龍 [名] (植) 熱帯及び亞熱帯の海岸、潮の満干する所に生じ、一種特異の生態を有する樹林を形成する常緑小喬木乃至灌木の總稱。中にも紅樹科の白花蛇木(カマ)屬と馬鞭草(カマ)科のアビセニヤ(Avicennia)屬とのものを主とす。何れも、密生せる枝と常緑革質の葉とを具へ、滿潮の際には、海中の森林に似たり。「の果」



(すうぐんま)

まんぐら 万龍 [名] (佛) 滿業(カマ) 〇所感たる畫。まんびつぐわ。〇事物の特色を誇張して、滑稽的に又は醜惡なる状態に描く畫。かりかちゅあ。

まんぐら 満會 [名] 會期の満了すること。無盡等の、終期となること。〇同じ。

まんぐら 満月 [名] まんげつ (滿月) に三月の尊容 [句] (佛) 大般若經の卷三〇八十一に「世尊面輪、其猶如三日月。又、龍樹上二禮讚に「面善圓淨如三日月」とあり。佛陀の面相のすぐれたるを形容していふ語。平家・東大寺は、金銅(カマ)十六丈の盧遮那(カマ)佛、烏瑟(カマ)高に顯れて、半天の雲に隠れ、白毫(カマ)高く拜ませさせたまへる滿月の尊容も、御首(カマ)は焼け落ちて」

まんぐら 満月尊 [名] 佛「満月の尊容」を見よ。佛の徳號。

まんぐら 萬卷 [名] 多くの巻物。多くの書籍。我輩會書山「萬卷の譬書を探しても」

まんぐら 満願 [名] 願を満たすこと。日數を定めて、神佛に祈願する時、その日

數の満つること。
まんげ 漫戲 [名] たしかなる目的なき戲。浮世島「この女湯の小説は、素より漫戲の書といへども」

まんげい 満刑 [名] 刑期の満つること。まんげい 蔓荊子 [名] はまごう (蔓荊) を見よ。

まんげつ 満月 [名] 〇全面の輝きて見ゆる月。望月(カマ)。〇太陰曆にて十五夜の月。〇通俗編に見ゆ「子を孕みて、十月月に満つること。四「北史の波固傳に「刺史李式、坐、事被、收、時、式子、靈、生、始、滿、月」とあり。一箇月に満つること。〇堂」を見よ。

まんげつ 満月寺 [名] うきみだう浮御を開けたる遊棚。

まんげん 漫言 [名] 多くの言葉。物いふこと、又その言。そぞろごと。〇漫語。「漫言」

まんげん 漫言 [名] たかぶりたる言。滿期日となること。

まんげん 萬華會・萬花會 [名] (佛) 多くの花を盛りて、供養する法會。天長八年、金剛峯寺(カマ)にて、萬燈會とこの法會とを、毎年一回づつ行ふべきこととし、本元興寺にては、承和十年六月十五日、この法會を行ひ、十月十五日萬燈會を行ひ、共に恒例とせしなど、必ず萬燈會に對して、行ふ例なり。

まんご 漫語 [名] まんげん 漫言に同じ。

まんご 漫語 [名] まんげん 漫言に同じ。

まんご 漫語 [名] まんげん 漫言に同じ。

まんご 漫語 [名] まんげん 漫言に同じ。

まんご 漫語 [名] まんげん 漫言に同じ。

まんご 漫語 [名] まんげん 漫言に同じ。

まんご 漫語 [名] まんげん 漫言に同じ。

まんご 漫語 [名] まんげん 漫言に同じ。

まきこ

は核果にして、長さ四五寸、外皮は柔滑にして青白色、熟すれば黄色又は紅色を呈し、中に長大なる核あり。仁は蠶豆(カマ)の種子の形をなし、栗の如き美味を有し、未熟のものは、ジャム又は砂糖漬とし、材は薪とす。原産地は東印度。

まんご 漫語 [名] まんげん 漫言に同じ。

まんご 漫語 [名] まんげん 漫言に同じ。

まんご 漫語 [名] まんげん 漫言に同じ。

まんご 漫語 [名] まんげん 漫言に同じ。

まんご 漫語 [名] まんげん 漫言に同じ。

まんご 漫語 [名] まんげん 漫言に同じ。

まんご 漫語 [名] まんげん 漫言に同じ。

まんご 漫語 [名] まんげん 漫言に同じ。

まんご 漫語 [名] まんげん 漫言に同じ。

まんご 漫語 [名] まんげん 漫言に同じ。

まんご 漫語 [名] まんげん 漫言に同じ。

まんご 漫語 [名] まんげん 漫言に同じ。

まんご 漫語 [名] まんげん 漫言に同じ。

まんご 漫語 [名] まんげん 漫言に同じ。

まんご 漫語 [名] まんげん 漫言に同じ。

萬歲有られ(句)「それは敬語の助動詞の命令形」たうか(踏歌)「見よ」

まんざい 萬歳 [名] 俗曲の一。天保十四年、市村座にて演出せる「魁香樹」及びせ物語に始まる。その際は常磐津(勢)及び長唄、富本竹本等相混じて出演し、萬歳才藏・白酒賢・大工・俳諧師・巫子(子)など出て、種種の所作事ありしが、明治以後「乗合船恵法萬歳(ツツサキ)」と改題し、常磐津のみに屬するものとなりたり。作詞者は第三世櫻田治助、作曲者は常磐津は第五世岸澤式佐、振脚は西川七郎次。

まんざい あぶき 萬歳扇 [名] 萬歳(子)の用ふる、下等なる扇子。

まんざい きすお 満載吃水 [名] 船に、荷物その他を満載したる時の吃水(空載吃水に對して)

まんざい きやうかじふ 萬歳狂歌集 [名] 「書」萬葉集に擬して名づけ、萬歳の意をも含めたもの「狂歌を集めたるもの」十七卷。太田蜀山人の撰。續編に、徳和歌後萬載集(行勢) (十五卷)あり。

まんざい たらへ 萬歳樂 [名] 平調曲に屬する舞樂の一種。支那唐の武后の時の作とも、隋の煬帝(子)大樂令白明達をして作曲せしめしものとも又、用明天皇御即位の時、新に作曲せしめられしものともいふ。鳥歌萬歳樂、煬帝萬歳樂、萬歳樂(子)。「たうか(踏歌)」に同じ。

まんざい たらか(踏歌) [名] 俗に、災を祓ふとして、唱ふる呪文。八笑人「ええ、桑原、桑原、萬歳樂、萬歳樂、己(子)あ、もうもう身が縮むほど好(子)かな(子)てならぬえに」

まんざい たらふ 萬草 [名] 多くの草。すべて「まんざい 萬草」[名] つるくき。はびこりたる草。「蔓草、寒煙の中に在り」

蔓草もなほ除くべからず(句)「左傳の隱公元年の條に「姜氏何厭之有、不(子)如早爲之所、無使滋蔓、蔓(子)也、蔓草猶不可除、況君之寵(子)也、蔓草」微細の中に處置せざれば、增長して、如何ともなしがたきに至る譬」

「謬語」

まんざく 満作 [名] 穀物の十分に實ること。豐作。希萬豊年ぢや、満作ぢや

まんざく 萬作・金縷梅 [名] 「植」金縷梅(子)科に屬する落葉喬木又は灌木。高さ三丈内外に達し、葉は互生し、楕圓形又は倒卵形を呈し、質厚くして、縁邊は波状。花は黄色の細長き花瓣を有し、早春葉に先立ちて開く。我國山地に自生し、又、觀賞用とす。うめす。

まんざく くわ 金縷梅科 [名] 「植」顯花植物被子類、雙子葉門の科。木または草。凡そ四十二屬八百二十種を含み、我國に自生するもの、凡そ三屬四十種あり。きんるばい(子)くわ。

まんざく 万雑公事 [名] さまざまの租・調・課役などを、一括していふ語。東鑑可下早令(子)安房國須宮(子)免(子)除(子)萬雑公事(子)事(子) 紅葉(子)市もりが壁の柱の根は朽ちて萬雑公事にまじる他の論」

まんざん 萬參 [名] 祈願ありて、日參の確定の數に達すること。講齋編(子)五條の天神(子)丑の時まうでを仕り候ふ。今日満參にて候ふ程に」

まんざん 満跚 [名] 足元のよろめくさま。ひよろひよろ。樂冊(子)。

まんざん 満山 [名] 山の全體。山ぢゆう。一山。一山中の僧の全體。寺中。一山。太平記(子)満山歎きて、年を経る處に」

まんざん 満更 [名] 副。全く。まさしく。玉鬘(子)五奉行を始め、この義は、満更徳善院と帶刀(子)がしわざなれば、一代男(子)少しは慰にもなりて、まんざんの木男よりはまさらべし」(子)下に形容詞その他の語を省きていふことあり。和合(子)隨分まんざら(子)無(子)え酒だ」

まんじ 満紙 [名] 紙面の全部。紙上一文字(子)の略。「まんじょうまんじ(子)満洲文字」に對して、全字を完成せるもの。(半字に對して)

まんじ 半字・萬字 [名] 「佛」梵 Svatvatsakṣipna(至利鉢蹉洛利蹉)の譯

語、原語は、吉祥海雲の義にて、羅什(子)支那は徳字と譯せしを、魏の菩提流支(子)十地經論の卷十二に、萬字と譯せり。至利鉢蹉即ち半字と譯せしは、功德圓滿の義なれば、吉祥海雲の義譯として可なれども、洛利那は相(子)の義にて、字と譯せしは、惡利那と混ぜり誤なり。康熙字典に「字彙補、内典萬字、旃咸詩、蓮花(子)字由(子)天(子)と見ゆ」印度・西藏(子)などに相傳する吉祥の徽號、即ち半字及び半文字なりといふ説もあれど、單に徽號たるに止まり、大乘の説にては、佛及び第十地の菩薩の胸上に描き、その吉祥相として、三十二相の二に數ふれども、小乗の説に據れば、胸上に限らず。もと、火の炎上に象れるものにて、梵天の法は、火を最大清淨、最大吉祥となすに基き、佛を敬禮するに右繞三匝、佛の眉間の白毫(子)に右旋婉轉、すて、右旋を吉祥となすに由るといふ。佛家にて、人を葬る時、その額などに、これを書き習もありたり。半字又は半の如き形。佛蘭西(子)建(子)柱(子)若(子)半(子)ほろりと開けたり」目紋所の一。半字又は半に象りたるもの。「角立(子)萬字(子)左萬字(子)右萬字(子)などの種類あり。

まんじょう 満洲 [名] 「地」清朝の祖の、この地に興起するや、西藏(子)よりの表文に、滿珠室利(文殊師利)に同じ、文殊菩薩(子)皇帝と尊稱せしに因り、國號を發音相近き文字に改めていへるなりとも、又、肅慎の音の轉じて、珠申となりしもの更に滿珠となり、滿洲となりしものもいふ」支那の一部、その本部の東北に位置する、一大地域。東は鴨綠江を隔てて朝鮮に、北は西比利亞に、西は蒙古に隣し、内に奉天、吉林、黑龍江の三省あり。本部の十八省に對して、東三省(子)ともいひ自然の形勢に因りて、黑龍江の流域地方を北滿洲、遼河・鴨綠江の流域地方を南滿洲といふ。

まんじょう げんりゅう 満洲源流考 [名] 「書」滿洲の地理を記したるもの。二十卷。支那清の乾隆四十三年、阿桂等の勅を奉じて撰せしもの。

まんじょう 満洲語 [名] 滿洲人の用ふる言語。ウラル・アルタイ語族のツングウス系に屬し、第十七世紀の後半、清朝の興隆と共に、その語彙しき支那本部の支那語中に混入し、滿洲語自身の中にも、多數の支那語を攝取し、文法上の變化も生じて、古色を失へり。

まんじょう も 満洲文字 [名] 支那滿洲人の點に行はるる文字。蒙古文字を基本とし、點又は圈を加へて、滿洲語の音を示すに至りしものにて、別、又、字體を定めて、支那語をも記し得るに至れり。清の太祖の制定に著手せしに始まり、太宗の時に成せり。滿字、滿文。

まんじょう 萬秋樂 [名] 「音」盤渉(子)調の唐樂。婆羅門僧正の百濟國より傳へしものといふ。まんじょう。

まんじょう 半字朝字朝 [名] 紋所及び模様の一。半字の四周の末畫を、更に同一方向に折り曲げ、殆ど十字を方形に容れしが如き狀をなすもの。

まんじょう 満室 [名] 室内に満つること。部屋(子)ぢゆう。

まんじょう 半字繫半字繫 [名] 綸字及び紗綾(子)などの白地に、白く織り出す紋。模様の一。

まんじょう 満身 [名] ぜんしん(全身)に同じ。慢心 [名] 誇りたかぶること。又その心。自慢。慢氣。字彙(子)かばかりの行者はあらはれ、時々慢心起りけり」見よ「自慢する者は、他に恥ぢしめらる」(謬語)

まんじょう 満洲 [名] 滿洲より起りて、支那を統一せしものなるよりいふしん(清)に同じ。



(しづくじんま)

まんじや

まんじやら 満城【名】城市に満つること。都城の全部。「まてにつぐこと。」

まんじやく 満酌【名】酒を、盃に満つる

まんじゆ 萬壽【名】ばんじゆ(萬壽)に同じ。詩經に、樂只君子邦家光、樂只君子萬壽無疆とあるに據る。後一條天皇の御代の年號(紀元一六八四—一六八八年)。「じゆ(文殊)に同じ。」

まんじゆ 萬殊曼殊、滿滿【名】(佛)もんまんじゆきく 萬壽菊【名】(植)せんじゆき(千壽菊)に同じ。

まんじゆくわ 萬壽果【名】(植)ばんくわじゆ(蕃瓜樹)に同じ。

まんじゆ 萬壽寺【名】京都市下京區本町(芝)東福寺の北門内にある臨濟宗の寺。本尊は藥師如來。永長二年、六條内裡に於ける福芳門院藤原暲子の持佛堂を白河上皇勅して、寺とせられ、世に六條御堂と稱す。正嘉年中、十地上人覺空、その弟子慈一人齊覺と共にこの寺に在りて、淨土教を修し、後、東福寺の圓爾聖一國師に就きて、禪を傳へ、萬壽寺と稱し、爾來禪刹となり、後、十刹の一、又、五山の一となり、永享六年火災に罹り、尋いで再建し、天正年間、三聖寺に合併して、兩寺號併立し、明治以後、單に萬壽寺と號す。

まんじゆけ 曼殊沙華(梵 Mandarajava)【名】(佛)赤華、小赤團華、藍花、柔軟など譯す。佛經に見えたる、一種の天華。四華(華)の隨一。赤色の蓮華。平治「かの塔の下には、摩訶曼陀羅華・摩訶曼殊沙華、四種の天華の(開けたり)」石蒜(ヒヤドリギ)科に屬する多年生の草。地下に球狀の鱗莖あり、これより葉を叢生す。葉は水仙のより狭く、平行脈を有し、鈍頭、平滑柔軟にして、深緑色を呈す。秋季、花莖を出だし、頂に數箇の花を著く。花は繖形花序をなし、紅色にして裂片反曲し、雄葉は長くして、花外に突出す。我國、山野に自生す。有毒植物なれども、鱗莖より食用澱粉を探ることを得、いろいろいばな、かみそりばな、からすのまくら、きつねのかみそり、さんまいばな、した

まんじゆ

まがり。しびとばな。すてごばな。てんがいはな。とうろうばな。はなみづさう。ひがらばな。「石蒜科」

まんじゆじやくわ 石蒜科【名】(植)顯花植物、單子葉、被子類門の科。凡そ七十一屬七百五十五種を含み、通常多年生の草にして、我國に生ずるもの、凡そ二十屬三十二種。ひがらばな、わ。せきさく、くわ。「萬壽節」に同じ。

まんじゆせつ 萬壽節【名】ばんじゆせつまんじゆらく 萬秋樂【名】まんじゆらく(萬秋樂)に同じ。

まんじゆおん 曼殊院【名】山城國愛宕(料)郡修學院村大字一乘寺にある、天台宗の門跡。本尊は阿彌陀如來。もと比叡山に在り、最澄の開創に係ると傳ふ。然るに、天慶の頃、是算に至り、西塔北谷に地を選びて建立し、東尾坊と號せしもの、その起原にして、世世、北野神社別當に補せらるるを例とせしが、明治四年、門跡號を廢せられ、同十八年、又これを復せられ、爾來天台宗の一本山となれり、一名、竹内門跡。

まんじゆ 萬庶【名】ばんしよ(萬庶)に同じ。盛衰詞百官、扶を絞り、萬庶、悲を含めり。

まんじゆどう 萬松洞【名】(地)山城國嵯峨の天龍寺の背後、松林の中にある洞窟。太平亂、白雲平閑萬松洞、不言開、笑枯花嶺。

まんじゆおん 萬松院【名】(人)あしかがよほる(足利義晴)を見よ。

まんじゆらうじん 卍字老人【名】(人)かつしかほくさい(葛飾北齊)の別號。

まんじゆらん 卍字欄中字欄【名】(和漢)の詩に「卍字欄干菊半開」とあり。梵字の卍の字の形に組み成せる欄干。

まんじり 貌にまじりむさま。まじまじ。まじり。博多小女郎「心たまぎりや、夜ぎとくなつて、身ども、まんじりとせない」

まんず 満す【動佐變自】期限満つ。日限至る。期達す。平造「千日の間、祈禱をなす。千日に満じける夜」

まんず

まんず 慢す【動佐變自】自慢す。慢心す。ほこる。正統武刺へ人に驕り、物に慢ずる人もあるべきにや。

まんすち 萬筋【名】綿の、千筋よりも細かく、二本づつ色の異なる經絲を配列せるもの。萬筋綿。

まんすちしま 萬筋綿【名】前條に同じ。

まんずらく 萬秋樂【名】(音)まんじゆらく(萬秋樂)の約。「り満つること。」

まんすお 満水【名】河水などのみなぎ質。(急性)慢性【名】病氣の、長びく性質。(急性)慢性【名】(生植物)を見よ。

まんせい 蔓生【名】まんせいしよ(蔓)に同じ。

まんせい 蔓菁【名】(植)かぶら(蕪菁)に同じ。

まんせい 萬世【名】まんせいばし(萬世橋)に同じ。

まんせいしよ 蔓生植物【名】(植)つる(蔓)を見よ。

まんせい 萬世橋【名】東京市神田區神田川に架れる橋。徳川時代には、筋違(びだま)橋といひて、少し下流に在り、明治以後、位置を轉じて、石造の、拱橋(きりぎり)とし、橋底の二箇のアアチ、水に映じて、眼鏡の如く見ゆるより、眼鏡(めがね)橋と呼びたり。よろづばし。

まんせん 滿鮮【名】(地)支那滿洲と朝鮮と。

まんぜん 萬善【名】(佛)種種の善事。一萬善の妙諦(めづり)【句】(佛)佛道の妙理は、萬善の歸趣なるよりいふ。佛道の妙理。大原問答青葉集「念佛は至極大乘にして、萬善の妙諦なれば」

まんぜん 漫然(貌)とりとめたる所なきさま。何の氣もなきさま。そぞろ。

まんせん 満船飾【名】まんかんじよ(滿船飾)を見よ。

まんそうく 萬僧供【名】次條の略。

まんそうく 萬僧供養【名】次條に同じ。

まんそうく 萬僧會【名】一萬人の僧侶を集めて供養すること。一萬僧會。萬僧供養。

まんぞく

まんぞく 満足【名】満ち足ること。十分。完全。梅屋目鼻たちが満足て、色の白がお仕合(めが)【句】(佛)圓滿具足すること。例へば、三十二相の中に、足跟満足相とある類。望満ち足りて、不平なきこと。狂言八幡舞「放生川へお出でなされうと仰せらるる。満足に存ずる」

まんぞく 英(英)【名】方程式の未知數に、或値を代入したる結果、その方程式の兩項が等しくなりたる時にいふ語。即ち、その時、その未知數の値は、方程式を満足すといふ。

まんぞく 満足【句】(佛)じぶがう(十號)を見よ。十號を圓滿具足せること。即ち佛陀の萬徳を具へたるをたてていふ語。盛衰記「神通第一の目蓮、竹杖外道に亡され、満足十號の釋尊提婆達多(た)に打たれたまひけり」

まんぞく 満足【副】堪能(めづり)して。とやかういはずその儘に。喜んでみづから進んで。源平引籠(腕)が、かたし紛失した。満足渡しませす。

まんた 位置の比較的高き遊女。「京都・大阪の語」

まんた 曼陀【名】(佛)まんたら(曼陀羅)の略。「曼荼」

まんた 曼茶【名】(植)まんたら(曼陀羅華)の略。

まんた 茨田【名】(地)河内國の舊郡の一。明治二十九年、讀良(みよ)・交野(ま)の二郡と合して、北河内郡となる。

まんたい 幔臺【名】屏帳を立つる臺。延喜式「裝飾大極殿高御座(……)幔臺一十二臺、立三高御座東西各四間」

まんたい 萬體佛【名】萬體の佛像。二花男「思の數、萬體佛の事」

まんたう 滿堂【名】堂中に満つること、又、堂中に居る人の全部。滿座。

まんたきに 曼陀枳尼(梵 Mandarini)【名】(佛)初利天(……)の上にあるといふ池。榮馬かの初利天女の、快樂(めが)を受けて、……、劫波樹(……)の白玉の盤上に坐し、曼陀枳尼の殊勝の池に浴し

まんたじゆ 曼陀殊【名】(佛)曼陀羅華

選記、曼陀羅木のものと」

まんだらづつみ 茨田堤 [名] [地] 澁川南岸の堤防。外堤は河内内郡北河内郡枚方(今茨)より守口(今茨)を経て、大阪に至り、内堤は、北河内郡大和田(今茨)・四宮(今茨)の諸村に亘る。仁徳天皇の時、既に修築の事見え、以後、屢ば土工を要せし事あり。徳川時代に至り、枚方町より攝津國東成(今茨)郡野田村まで、七里の間を重修して、京街道とせり。

まんだのいけ 茨田池 [名] [地] 古河内國北河内郡に在りし池。今の九箇莊(今茨)村の池田と友呂木(今茨)村の平池・石津との間の低地、その址なりといふ。

まんたまんじうらん 曼荼羅萬秋樂 [名] まんじうらん(萬秋樂)に同じ。

まんたら 曼陀羅曼荼羅滿茶羅(梵 Mandaravajra) [名] [佛] 『舊譯』には、壇又は道場と譯し、新譯には、輪圓具足又は聚集と譯す。『密教』にて、法界一切の萬徳を具備するもの。佛證悟の境界。一具圓滿の法門。又これを圖畫に表はしたるもの、胎藏・金剛の二曼荼羅の如き、是れなり。『淨土』などの相を畫けるもの。淨土曼荼羅・十界曼荼羅の如き、是れなり。『聖衆集會の處。念誦壇場。又、菩提道場。』

まんたらげ(曼陀羅華) [名] 曼陀羅の弓 [句] まんだらゆみ(曼陀羅弓)に同じ。

爪切(ツメ)の曼陀羅 [句] 相摸國鎌倉の日蓮宗の妙隆寺に在りし十界曼陀羅。第二世日親、應永の頃、親ら誓ひて、一日に一指づつ、十指の爪を割ぎ取り、百日の間に治癒せば、祈願成就せんと、寺後の池にて、十指より出づる血を洗ひ、その水を汲みて作りしものとす。後世、法論により、住持退隱の時、これを持ち去り、今、その所在を失す。

まんたらへび 曼陀羅蝦 [名] [動] へびま(車蝦)に同じ。

まんたらへん 曼陀羅葉 [名] 『英』 Thion-apple leaves 花時に採集し、乾燥したる曼陀羅華 [名] の葉。藥品とす。主成分は、

ヒヨスチアミン(Hyoscyamin)と少量のアトロピン(Atropin)として、鎮痙及び鎮痛の藥とし、又、喘息煙草として用ふ。

まんたらへん 曼陀羅葉 [名] 曼陀羅の葉。藥品とす。主成分は、ヒヨスチアミン(Hyoscyamin)と少量のアトロピン(Atropin)として、鎮痙及び鎮痛の藥とし、又、喘息煙草として用ふ。

まんたらへん 曼陀羅葉 [名] 曼陀羅の葉。藥品とす。主成分は、ヒヨスチアミン(Hyoscyamin)と少量のアトロピン(Atropin)として、鎮痙及び鎮痛の藥とし、又、喘息煙草として用ふ。

まんたらへん 曼陀羅葉 [名] 曼陀羅の葉。藥品とす。主成分は、ヒヨスチアミン(Hyoscyamin)と少量のアトロピン(Atropin)として、鎮痙及び鎮痛の藥とし、又、喘息煙草として用ふ。

まんたらへん 曼陀羅葉 [名] 曼陀羅の葉。藥品とす。主成分は、ヒヨスチアミン(Hyoscyamin)と少量のアトロピン(Atropin)として、鎮痙及び鎮痛の藥とし、又、喘息煙草として用ふ。

まんたらへん 曼陀羅葉 [名] 曼陀羅の葉。藥品とす。主成分は、ヒヨスチアミン(Hyoscyamin)と少量のアトロピン(Atropin)として、鎮痙及び鎮痛の藥とし、又、喘息煙草として用ふ。

まんたらへん 曼陀羅葉 [名] 曼陀羅の葉。藥品とす。主成分は、ヒヨスチアミン(Hyoscyamin)と少量のアトロピン(Atropin)として、鎮痙及び鎮痛の藥とし、又、喘息煙草として用ふ。

まんたらへん 曼陀羅葉 [名] 曼陀羅の葉。藥品とす。主成分は、ヒヨスチアミン(Hyoscyamin)と少量のアトロピン(Atropin)として、鎮痙及び鎮痛の藥とし、又、喘息煙草として用ふ。

まんたらへん 曼陀羅葉 [名] 曼陀羅の葉。藥品とす。主成分は、ヒヨスチアミン(Hyoscyamin)と少量のアトロピン(Atropin)として、鎮痙及び鎮痛の藥とし、又、喘息煙草として用ふ。

まんたらへん 曼陀羅葉 [名] 曼陀羅の葉。藥品とす。主成分は、ヒヨスチアミン(Hyoscyamin)と少量のアトロピン(Atropin)として、鎮痙及び鎮痛の藥とし、又、喘息煙草として用ふ。

まんたらへん 曼陀羅葉 [名] 曼陀羅の葉。藥品とす。主成分は、ヒヨスチアミン(Hyoscyamin)と少量のアトロピン(Atropin)として、鎮痙及び鎮痛の藥とし、又、喘息煙草として用ふ。

まんたらへん 曼陀羅葉 [名] 曼陀羅の葉。藥品とす。主成分は、ヒヨスチアミン(Hyoscyamin)と少量のアトロピン(Atropin)として、鎮痙及び鎮痛の藥とし、又、喘息煙草として用ふ。

まんたらへん 曼陀羅葉 [名] 曼陀羅の葉。藥品とす。主成分は、ヒヨスチアミン(Hyoscyamin)と少量のアトロピン(Atropin)として、鎮痙及び鎮痛の藥とし、又、喘息煙草として用ふ。

いぢやちきゆう(一張弓)に同じ。

まんち 満池 [名] 地上二面に満ちわたる池。『漢書』に「頂上は八葉にして、内に満池を湛へたり」

まんち 萬治 [名] 『唐書』に「正本、則萬事治」、史記に「衆民乃定、萬國爲治」とあるに據る。後西院天皇の御代の年號(紀元二二一―二二二―二二三一年)。

まんちえすたあがくは マンチエスタア學派(英 Manchester school) [名] [經] 英國にて、第十九世紀の初、マンチエスタア商業會議所を中心勢力とし、コブデン(Cobden)・ブライト(Bright)兩氏の指導の下に、穀物條例に反對する同盟を組織し、保護制度の撤廢を絶叫して、條例廢止の目的を達し、永く英國の國是たりし經濟的自由主義を、佛蘭西に移植せしセエ(譯)・パスチヤ(Pastie)・獨逸に宣傳せしフアウヘル(Fraueher)・ミハエリス(Michaelis)等の人人。英國以外歐洲の思想界、實際界に、大影響をもたせし。

まんちたか 萬治高尾 [名] [人] たか(高尾)を見よ。『墨水銷夏録』「淺草三谷(譯)町なり。ここに高尾の墓あり。按ずるに二代目の高尾なり。これを萬治高尾といひ、又伊達(譯)高尾ともいふ」

まんちやう 満場満場 [名] その場所に満つること、又その場所に居る人の全部。擧場。

まんちやう ころがし 萬丈轉 [名] 昔、高山にて、罪ある者を簀巻にして、山上より谷底に突き落しし私刑。

まんちやく 瞞著 [名] 『ちやく(著)』は接尾語、人の目をくらますこと。ごまかすこと。

まんちゆう 饅頭 [名] 『漢字の宋音』「饅は、もと曼にて、幔と同じく、被覆すべき皮の義、頭は宴會の頭(譯)に出す義といふ」小麦粉に、甘酒の液の搾り取りたるを加へて捏ね、掌上にて伸ばし、中に餡を容れ、丸く平たき形に作りて蒸したる菓子。野菜又は肉などを包みて作ることもあり。近時は、甘酒の代りにベエキングパウダを用ふることあり。もと支那のものにて、我國にては、宋人林淨因の歸化して、奈良にて、賣り出ししに始まる。又普通の饅頭の外に、田舎(譯)饅頭、蕎麥(譯)饅頭、葛(譯)饅頭、時雨(譯)饅頭、あり。『漢書』に「饅頭、米(譯)饅頭、中(譯)饅頭、餅(譯)饅頭」の略。『土藏の大折釘(譯)饅頭の座として、漆喰(譯)にて、半球形に塗り固めたるもの。』

まんちゆうがひ 饅頭貝 [名] [動] たこの殻を包みたるもの。

まんちゆう ころ 饅頭錠 [名] 兜の錠

菓子。野菜又は肉などを包みて作ることもあり。近時は、甘酒の代りにベエキングパウダを用ふることあり。もと支那のものにて、我國にては、宋人林淨因の歸化して、奈良にて、賣り出ししに始まる。又普通の饅頭の外に、田舎(譯)饅頭、蕎麥(譯)饅頭、葛(譯)饅頭、時雨(譯)饅頭、あり。『漢書』に「饅頭、米(譯)饅頭、中(譯)饅頭、餅(譯)饅頭」の略。『土藏の大折釘(譯)饅頭の座として、漆喰(譯)にて、半球形に塗り固めたるもの。』

まんちゆうがひ 饅頭貝 [名] [動] たこの殻を包みたるもの。

まんちゆう ころ 饅頭錠 [名] 兜の錠

まんちゆうがひ 饅頭貝 [名] [動] たこの殻を包みたるもの。

まんちゆうがひ 饅頭貝 [名] [動] たこの殻を包みたるもの。

まんちゆうがひ 饅頭貝 [名] [動] たこの殻を包みたるもの。

まんちゆうがひ 饅頭貝 [名] [動] たこの殻を包みたるもの。

まんちゆうがひ 饅頭貝 [名] [動] たこの殻を包みたるもの。

まんちゆうがひ 饅頭貝 [名] [動] たこの殻を包みたるもの。

まんちゆうがひ 饅頭貝 [名] [動] たこの殻を包みたるもの。

まんちゆうがひ 饅頭貝 [名] [動] たこの殻を包みたるもの。



(さがうゆぢんま)



(りどりんま)

一。鋼鐵盔甲又は羽莖などに作りたる撥(カサ)にて彈奏す。絃の数は、獨逸式のは四絃、ミラン式のは六絃、ネエブル式のは八絃、西班牙式のは十二絃、土耳其式のは十四絃等、一定す。最も廣く行はるるネエブル式は、八絃なれども、月琴と同じく、二絃づつ同音に調子を取るが故に、四絃と同様に歸し、バイオリンのごとく二重音、三重音及び四重音をも出すことを得。特に顔音のごとく同一の音を速かに繰り返すを得る特色を有す。第十七世紀頃歐洲の南部にのみ用ひ初めたり。

まんねん (英Mandolin) [名] **まんねん** と同じ。
【がまんねん】 (瓦斯まんねん) の略。

まんねん (英Manna) [名] 南歐に産し、木犀科に屬する一種の落葉小喬木の樹皮を傷て、滲出せる液を採取、乾固したる、類黃色結晶性の塊片藥料。成分は、メント、葡萄糖及び一種の砂糖にして、緩和劑として用ふ。太古、イストラエル人は荒野旅行中に食用としたりといふ。

まんねん 眞名眞字 [名] **まな** (眞名) の音便。梵「たど」たどしきまんに書きたらんも、見ぐるし。

まんねん 眞中 [名] **まなか** (眞中) の音便。保平、兄にて候ふ義朝などこそ騙け出でんずらん。それも、まん中指して射通し候ひなん。

まんねん 眞名眞字書 [名] 漢字にて書きてある書。漢籍。「古語」漢式部日記「なでふ、女が、まんなぶみは讀む。昔は、經讀むをだに、人は訓しき」

まんねん 眞直 [名] **まん** を直すこと。運(カ)をよくなるやうにすること。藤栗毛「旦那まんなほしに、安く召して下さりませ」

まんねん 萬日 [名] 次條の略。本朝櫻蔭比事「御出家様を引留め、都の庵を取立てて、亡き人のために萬日を申すべし」

まんねん 萬日供養 [名] 多くの日數の間行ふ供養。まんねん

まんねん 萬年 [名] よろづの年。多くの年月。萬歳。ばんねん。

まんねん 萬年草 [名] 通草科に屬する常緑の蔓狀灌木。葉は掌狀複葉にして、その形様(カ)の似たり。白色の花を開き葉果を結ぶ。せんだんかつら。

まんねん 萬年紙 [名] 厚紙に漆を塗り、文字などを書きたる後、拭ひ去れば、何回にも使用に堪ふるやうにせるもの。まんねんし。

まんねん 萬年草 [名] 景天科に屬する多肉の草。莖は地に臥し、處處に根を下す。大・小二形ありて、大形のものは、雌(メ)の萬年草とも「たか」のめ」とも稱し、長さ六七寸、葉は狭長にして尖り、三片づつ輪生し、小形のものは、雄(オ)の萬年草とも「こまのつめ」とも稱し、長さ二三寸、葉は互生し、鈍頭、扁平の圓柱形をなし、共に小黄花を開く。あまのすてぐさ。いつまでもぐさ。ほとけのつめ。「佛甲草」**【まんねんすき】** 萬年草(カ)に同じ。心中萬年草「これのお山の萬年草は、人の命の生死を示したまふ」

まんねん 萬年紙 [名] **まんねん** がみ 萬年紙 [名] 厚紙に漆を塗り、文字などを書きたる後、拭ひ去れば、何回にも使用に堪ふるやうにせるもの。まんねんし。

まんねん 萬年草 [名] 景天科に屬する多肉の草。莖は地に臥し、處處に根を下す。大・小二形ありて、大形のものは、雌(メ)の萬年草とも「たか」のめ」とも稱し、長さ六七寸、葉は狭長にして尖り、三片づつ輪生し、小形のものは、雄(オ)の萬年草とも「こまのつめ」とも稱し、長さ二三寸、葉は互生し、鈍頭、扁平の圓柱形をなし、共に小黄花を開く。あまのすてぐさ。いつまでもぐさ。ほとけのつめ。「佛甲草」**【まんねんすき】** 萬年草(カ)に同じ。心中萬年草「これのお山の萬年草は、人の命の生死を示したまふ」

まんねん 萬年候補者 [名] いつまでも、單に候補者として立つのみにて、當選採用等の榮譽を得ぬ人。

まんねん 萬年草 [名] 「植」**【まんねんすき】** 萬年草に同じ。**【まんねんすき】** 萬年草に同じ。**【年紙】** に同じ。

まんねん 萬年紙 [名] **まんねん** がみ 萬年紙 [名] **まんねん** がみ 萬年紙 [名] **まんねん** がみ 萬年紙 [名] 加はりて、若しさを失はぬ婦人、まんねんむすめ。とをさめ。「訛」

まんねん 萬年新造 [名] 前條のまんねんすき 萬年紙 [名] 酒と酢とに水

まんねん 萬年紙 [名] **まんねん** がみ 萬年紙 [名] **まんねん** がみ 萬年紙 [名] 加はりて、若しさを失はぬ婦人、まんねんむすめ。とをさめ。「訛」

まんねん 萬年新造 [名] 前條のまんねんすき 萬年紙 [名] 酒と酢とに水

を加へ、密封すること數十日にして成り、一盞を酌み取れば、又、一盞の酒を加へおきて、常にその量の減せぬやうにして使用する酢。

まんねん 萬年杉、玉柏、千年柏、萬年松 [名] 「植」**【石松】** 科に屬する多年生りて、石松(カ)の科に屬する多年生の常緑半喬木。根莖の所より高さ二三寸乃至六七寸の地上莖を出だし、これより多くの枝分岐し、葉は細長くして尖り、密に互生し、恰も杉の如く見ゆ。晩夏の頃、枝頂に長さ一寸、幅三分ほどの子囊穗を抽出す。この草は、枯るとも、形色は變せず、我國、深山に自生す。ありませぬ。びろおとすき。

まんねん 萬年青 [名] 「植」おもしろ(萬年青)の漢名。

まんねん 萬年茸、柴芝 [名] 「植」**【れん】** 靈芝に同じ。「の略」

まんねん 萬年通寶 [名] 次條

まんねん 萬年通寶 [名] 天平寶字四年に鑄造せる銅錢、徑八分強、重量一匁二分にて、面に「萬年通寶」の文あり。一箇を、萬錢の十箇に當たり。

まんねん 萬年弦 [名] 牛の筋を麻の中に交せ、練り合はせて、容易に切れぬやうに造れる弓弦。「腐糊」に同じ。

まんねん 萬年節 [名] 節の高き竹三四十本を麻繩(カ)にて縛りて、埋めたる下種。

まんねん 萬年柄杓 [名] 亞鉛又はブリーキなどに作りたる柄杓。

まんねん 萬年筆 [名] 英 Fountain pen。インキ又は墨汁などを入れて貯へ置くやうにせる管をペン軸とし、その先に、金ペンを取り付け、使用の際、管中のインキ又は墨汁の、隨時ペンに傳はり出づる装置をなせるもの。まんねんふで。

まんねん 萬年筆 [名] **まんねん** へん 萬年筆 [名] **まんねん** へん 萬年筆 [名] **まんねん** へん 萬年筆 [名] 加はりて、若しさを失はぬ男子。

まんねん 萬年紙 [名] **まんねん** がみ 萬年紙 [名] **まんねん** がみ 萬年紙 [名] 加はりて、若しさを失はぬ婦人、まんねんむすめ。とをさめ。「訛」

まんねん 萬年新造 [名] 前條のまんねんすき 萬年紙 [名] 酒と酢とに水

まんねん 萬年紙 [名] **まんねん** がみ 萬年紙 [名] **まんねん** がみ 萬年紙 [名] 加はりて、若しさを失はぬ婦人、まんねんむすめ。とをさめ。「訛」

まんねん 萬年新造 [名] 前條のまんねんすき 萬年紙 [名] 酒と酢とに水

まんねん 萬年娘 [名] **まんねん** しん 萬年新造 [名] 同。海道川崎驛にありし有名な掛茶屋。和合、川崎へ行きやあ、萬年屋の前は、素通(カ)もされねえから

まんねん 萬年蠟 [名] 「植」唇形科に屬する常緑小灌木。葉は對生し、線形にして革質をなす。春夏の候、淡紫色の花を枝上葉腋に著く。枝葉は藥用とす。かをりぐさ。

まんねん 萬年蘭 [名] 「植」**【りゅうぜつ】** 龍舌蘭に同じ。

まんねん 萬年香 [名] 「植」唇形科に屬する常緑小灌木。葉は線狀革質、花は、早春開き、白色又は青白色又は淡紫色の唇形花冠を有し、總狀花序をなす。原産地は南部歐羅巴。葉は通經藥に用ひ、又、枝葉を蒸溜して得たる揮發油を、外用藥又は化粧品として、稀には、内用藥にも供す。まんねんさう。まんねんさう。

まんねん 萬能 [名] **【ばんのう】** 萬能 [名] 同。狂言「八幡舞」このあたりに、萬能足らうた人がある**【備中】** 備中に、一層輕便なる農具。三四寸の扁平又は圓く尖れる商杆より成る鏡に、八十五六度の角をなして、長き柄を嵌めたるもの。形によりて、油揚(カ) 萬能角(カ) 萬能 銀杏(カ) 萬能などの名あり。「關東東北地方の方言」

萬能 一心 [句] **【萬能】** 一心 [句] 同。萬能一心 [句] 竹馬(カ) 心の誠なからん人は、何事につけても、人眼の待るまじきなり。萬能一心と申すも、かやうの事に「**【萬能】**」

萬能 備はりて、一心足らず [句] **【萬能】** 備はりて、一心足らず [句] **【萬能】** 備はりて、一心足らず [句] **【萬能】** 備はりて、一心足らず [句] 萬能足りて、一心足らず [句] **【萬能】** 備はりて、一心足らず [句] **【萬能】** 備はりて、一心足らず [句] 萬能(カ) 一心の善には若かず [句] **【萬能】** 一心の善には若かず [句] **【萬能】** 一心の善には若かず [句]

まんねん 萬年紙 [名] **まんねん** がみ 萬年紙 [名] **まんねん** がみ 萬年紙 [名] 加はりて、若しさを失はぬ婦人、まんねんむすめ。とをさめ。「訛」

まんねん 萬年新造 [名] 前條のまんねんすき 萬年紙 [名] 酒と酢とに水

まんねん 萬年紙 [名] **まんねん** がみ 萬年紙 [名] **まんねん** がみ 萬年紙 [名] 加はりて、若しさを失はぬ婦人、まんねんむすめ。とをさめ。「訛」

まんねん 萬年新造 [名] 前條のまんねんすき 萬年紙 [名] 酒と酢とに水

まんのう

まんのうのう 萬能膏(名)すべての疵腫物に効能ある膏藥。八美人摺刺疵膏や打疵(一心足らぬ萬能膏)

まんのうのうのう 満濃池萬農池萬濃池(名)「地」讃岐國仲多度郡神野(の)村に在る池。この國にて、灌溉用に穿ちたる約一萬八千八百の池の中の最も大なるもの。東西八町、南北十五町、周二里二十五町、面積八十一町歩。弘仁十二年僧空海の開鑿に係り、徳川時代にも數回の改修を経たり。下流を金倉(砂)川といひ、琴平町を過ぎ、丸龜の西に至りて海に入る。

まんば 漫罵(名)みだりにのしることを。漫罵(名)あなどりのしることを。漫罵(名)あなどりのしることを。

まんば 萬波(名)ばんば(萬波)に同じ。まんばう 翻車魚(名)「動」うき(椋魚)に同じ。

まんばう 萬寶(名)「動」ばんば(萬寶)に同じ。伊勢參宮の途中に霧(む)ぎける。一種の玩具。長さ四寸ほどの細き竹を、赤き紙にて巻き、兩端の口に赤き綿を附け、又、兩端の口より出でて、相連なる赤き糸ありて、その中央に、鈴守とて、土製の鈴を結び附けたるもの。

まんばうのうを 翻車魚(名)「動」まんば(翻車魚)に同じ。まんばうがひ 萬寶貝(名)「動」腹足類に屬する軟體動物。長さ五六寸。殼は、形展れて、質堅固に、螺塔低く、兩唇はやや反曲して、肉紅色を呈し、殼の表面には、結節多く、葡萄色の地に、褐斑と白斑とを交ふ。我國南海に産す。

まんばうのうを 翻車魚(名)「動」まんば(翻車魚)に同じ。まんばうせんじよ 萬寶全書(名)「書」古今の書畫、器物などの事を記せるもの。六卷。菊本嘉保の著。

まんばち 萬八(名)「萬」の中にて、八つは眞なる義。いつはり。うそ。虚言。深きたくらみ。「江戸及び尾張國・上野國の方言」。

「酒に酔へば、口より出ま

まんばち

かせの言を吐くよりいふなるべし」さけ(酒)の異稱。足兼翁萬八とは、酒の事なり。下に見えたる百韻の末の詞書に、吉田のなにがしが言ったごとく、筆をひくれば、物かんなくらふべき事をなん思ふ、ば、萬八をまなくらふべき事をなん思ふ、とあるに合せ見るべし。

まんばち 萬八(名)次條の略。御座新藤「酒樓之夥亦冠于都下、日川長、日萬八」

まんばちちう 萬八樓(名)江戸淺草平右衛門町、柳橋の北角にありし料理屋。書畫會又は歌舞、插花の演習會など、盛んに行はれたり。江戸名物狂詩選萬八樓上書畫會、不、拘、晴雨、御來臨、先生席上皆揮毫、帳面頒付納金。

まんばつ 満罰満罰(名)懲罰の期限の満つること。「に備はること。まんば 満備(名)満ち備はること。十分

まんび 満尾(名)終を告ぐること。藤栗毛「今日は、これまで」の筆をおくに如くこととなし、漸く満尾し。

まんびま 萬引(名)買物をするやうに見せかけて、店先の商品を掠め取ること、又その人。まんびつ 漫筆(名)筆のまにまに、何とけなしに、書きつくること、又そのかきつけたるもの。雜筆。隨筆。漫録。

まんびつとわ 漫筆畫(名)まんびつ(漫畫)に同じ。まんびやう 萬病(名)よろづの病氣。一切の病。謠風は萬病の本(註)。

まんびやう 漫評(名)筆のまにまに、何とけなしに批評すること。まんびやういぢどくせつ 萬病一毒説(名)寛保延享の頃、吉益東洞の唱へし古醫方。専ら激劑を用ひて、醫法を一變せり。

まんびやう 萬病圓(名)萬病に効能ありといふ丸藥。重難手早く疑せて、疾く起し、畫あがかせたが萬病圓

まんぶ

まんぶ 萬部(名)「佛」まんぶごきやう(萬部讀經)の略。「萬部の法會」

まんぶ 慢舞(名)ゆるゆると舞ふこと。「緩歌・慢舞」

まんぶいち 萬分(名)あなどりからんする分(一)に同じ。まんぶく 萬福(名)ばんぶく(萬福)に同じ。まんぶく 満腹(名)食物又は食物の腹に満ちて飽き足ること。腹一杯。飽腹。

まんぶく 満幅(名)ぜんぶく(全幅)に同じ。まんぶく 萬福寺(名)「開山禪師の、明の開州なる黄葉山(山中に藥樹多きに因るといふ)萬福寺の名を取りて、名づけしもの」山城國宇治郡宇治村にある黄葉宗の大本山。黄葉山と號す。本尊は釋迦如來。脇侍は迦葉(分)・阿難の二尊者。開山は隱元隆琦禪師。

まんぶくじ 萬福寺派(名)「佛」もと臨濟宗の一派なるよりいふ「わうばくじゅう(黃葉宗)に同じ。まんぶくじや 萬福長者(名)だいいぶぶくじや(大福長者)に同じ。

まんぶごきやう 萬部讀經(名)「佛」一人又は萬人にて、萬部の經を讀誦すること。萬部。「文字」に同じ。まんぶん 滿文(名)まんじらもんじ(滿洲まんぶんのいち 萬分(名)萬分したるその一。ごくわづか。まんぶいち。萬(一)に同じ。

まんべん 滿遍(名)「佛」平均。平等(平均)。下界業滿遍、平均義也。「ゆきわたること。遍滿。まんべん 滿遍無し(名)「形」「なしは、せしなしなどのなしと同じく、いたし(痛し)即ち甚しの義」ゆきわたらぬ所無し。あまねくゆき届きてあり。あまねし。ておちなし。

まんば 漫歩(名)何處といふあてもなくありこと。そぞろあるき。散步。まんばう 滿眸(名)まんもく(滿目)に同じ。

まんぼおる 人孔(英 Manhole) (名)水道及び下水に於て、管の検査掃除を爲す人の出入する孔道。水道にては、管の交叉點に下水にては、管の交叉點、勾配の變する所、又は曲折する所に置く。又、地下電線路の途中にも設け、電線の検査修理、試験などの行ふに便す。圓形方形などあり、混凝土(コンクリート)石煉瓦などにて造り、鐵石にて蓋をなす。ひとあな。汽罐の内部を洗ふため、上部に設けて、人の出入するやうにしたる口。「に同じ。まんば 萬法(名)「佛」しよほふ(諸法)萬法一如(イサ)「佛」往生十因に「而今覺知法界唯眞萬法一如(無三煩惱可斷、煩惱即菩提、無二生死可厭、生死是涅槃)とあり。萬法は、さまざまの狀態に分れてはあれども、歸する所は一體なり。法界平等(びやうどう) 自我法界平等なり。何者かありて、邪とも、又、正(ちやう)とも隔てん。萬法一如にして、阿字本不生(あじほんじやう)の願をなしたまへ」萬法皆空(まんにやう)「佛」諸法皆空に同じ。水鏡萬法皆空と思ひし觀念の至りけるとおぼえて」。「心に同じ。まんま 飯(名)「佛」三界(さんざい)唯(飯)を云ふ。おまんま。「幼児の語」まんまく 幔幕(名)幕の一種。上下の兩端を横幅(よこぢ)とし、その間を縱幅として縫ひ合はせ、は又上端のみ横幅なるもの、又は縱幅のみにて、全く横幅を缺けるもの、どんすまく。まんのまく。俯つれづれ「幔幕を絞れば、解語花とも顯はれ」まんまご 飯事(名)ままご(飯事)に同じ。小野野時雨よりまんまごとなり五月雨。

まんまご 旨旨と【副】「うらうまご旨旨まんまご」の音便。うまく。まんまんと。首尾よく。狂言(水滸)「まんまんと水を仕掛けておいたが、……はあ、水が来る」るは、来るは。まんまるとい

まんまん 萬萬 [副] ばんばん(萬萬)に同じ。背庚申まんまん千代めが悪いになさ

まんまん 漫漫 [貌] ひろびろとして、又は長く遠くして、果の無きさま。

まんまん 満満 [貌] 満ち溢(ひ)ひてあるさま。なみなみ。萬葉千載、囊中、おのづからまんまんたりしが

まんまん いち 萬萬劫 [副] まんいち(萬)を強めていふ語。ばんばんいっつ。

まんまん 一 萬萬劫 [名] 「佛」おんじふ(億劫)に同じ。

まんまん 一 眞圓 [名] まんまんに同じ。狂言、悪坊「まんまんと寐入らせました」

まんまん 眞丸 [副] まる(丸)に同じ。胸

まんまん 眞丸 [副] まる(丸)に同じ。胸

まんまん 眞丸 [副] まる(丸)に同じ。胸

まんまん 眞丸 [副] まる(丸)に同じ。胸

まんまん 眞丸 [副] まる(丸)に同じ。胸

まんまん 眞丸 [副] まる(丸)に同じ。胸

まんまん 眞丸 [副] まる(丸)に同じ。胸

まんまん 眞丸 [副] まる(丸)に同じ。胸

まんまん 眞丸 [副] まる(丸)に同じ。胸

よりいふ 舊象の一。洪積期に、アルプス山脈カウカス山脈等より北の歐亞大陸と、メキシコ以北の亞米利加大陸に棲息せしものにて、大いさと重きとは、現在種の最大なるものと等しけれども、身長は、やこれより高く、全身、黒色の長剛毛と暗褐色の波状毛とにて蔽はれ、共に防寒の用をなせり。二本の牙(門齒)は長大にして、上方へ多少螺旋状に曲れり。その遺骸は、西比利亞の水層中及び歐羅巴の北部地方より發掘せられ、殊に、レナ河沿岸地方、新西比利亞島などに多く、古來同地方の重要産物をなせり。厚き毛を有するを以て「毛ある象」とも稱す。ま

まんもん (英 Mammoth) [名] 西洋の財貨

まんもん 幔門 [名] 屏幔に設けたる門戸なるべしといふ。西宮記仁壽殿東庭南北並三面曳幕、南北各有二幔門

まんもん 幔門 [名] 屏幔に設けたる門戸なるべしといふ。西宮記仁壽殿東庭南北並三面曳幕、南北各有二幔門

まんもん 幔門 [名] 屏幔に設けたる門戸なるべしといふ。西宮記仁壽殿東庭南北並三面曳幕、南北各有二幔門

まんもん 幔門 [名] 屏幔に設けたる門戸なるべしといふ。西宮記仁壽殿東庭南北並三面曳幕、南北各有二幔門

まんもん 幔門 [名] 屏幔に設けたる門戸なるべしといふ。西宮記仁壽殿東庭南北並三面曳幕、南北各有二幔門

まんもん 幔門 [名] 屏幔に設けたる門戸なるべしといふ。西宮記仁壽殿東庭南北並三面曳幕、南北各有二幔門

まんもん 幔門 [名] 屏幔に設けたる門戸なるべしといふ。西宮記仁壽殿東庭南北並三面曳幕、南北各有二幔門

まんもん 幔門 [名] 屏幔に設けたる門戸なるべしといふ。西宮記仁壽殿東庭南北並三面曳幕、南北各有二幔門

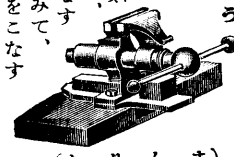
まんもん 幔門 [名] 屏幔に設けたる門戸なるべしといふ。西宮記仁壽殿東庭南北並三面曳幕、南北各有二幔門

まんもん 幔門 [名] 屏幔に設けたる門戸なるべしといふ。西宮記仁壽殿東庭南北並三面曳幕、南北各有二幔門

まんもん 幔門 [名] 屏幔に設けたる門戸なるべしといふ。西宮記仁壽殿東庭南北並三面曳幕、南北各有二幔門

まんもん 幔門 [名] 屏幔に設けたる門戸なるべしといふ。西宮記仁壽殿東庭南北並三面曳幕、南北各有二幔門

まんもん 幔門 [名] 屏幔に設けたる門戸なるべしといふ。西宮記仁壽殿東庭南北並三面曳幕、南北各有二幔門



(きりんま)

りやち(千兩)を見よ。

まんりよ 萬兩 [名] 「植」前條に同じ。

まんりよ 萬兩 [名] 「植」前條に同じ。

まんりよ 萬兩 [名] 「植」前條に同じ。

まんりよ 萬兩 [名] 「植」前條に同じ。

まんりよ 萬兩 [名] 「植」前條に同じ。

まんりよ 萬兩 [名] 「植」前條に同じ。

まんりよ 萬兩 [名] 「植」前條に同じ。

まんりよ 萬兩 [名] 「植」前條に同じ。

まんりよ 萬兩 [名] 「植」前條に同じ。

まんりよ 萬兩 [名] 「植」前條に同じ。

まんりよ 萬兩 [名] 「植」前條に同じ。

まんりよ 萬兩 [名] 「植」前條に同じ。

まんりよ 萬兩 [名] 「植」前條に同じ。

まんりよ 萬兩 [名] 「植」前條に同じ。

豆を煮るに其(ハラ)を然(ク)く(句)「七歩の才」を見よ」兄弟相害する譬(「諺語」)

豆を炒(イ)るやう(句)「遠方の戰場より、彈丸發射の音の續きて聞ゆる形容。豆を曬(イ)す(句)「徳川幕府にて、節分の時、豆打の役が將軍の御座處の上段の塗縁に、祝文を唱(つ)つ、炒豆(イ)を三處に置き、引きさがる。まめはやし(「豆曬」參照)

豆を播(ク)くやう(句)「馬の拍子よく行く形容。棋客の碁を早く打つ形容。

まめ 肉刺 [名] 「形」豆に似たるよりいふ「履物との摩擦又は荒仕事のために、手又は足に生ずる、小さき水腫。のいずみ。

まめ 忠實 [名] 「まじめ。信實。誠實。實體。本氣(氣)」。著實。甚とのる所をだに賜はりたらば、いみじうまめにさぶらひなん」源氏「おこなひをまめにしたまひつ、明し暮したまふ」勞を厭はずして、よく勤め働くこと。勤勉。字造したる事はなけれども、まめに使はれて年頃になりければ、醒睡高忠といひける侍の、夜晝まめなるが、冬なれど、帷子をなん著たりける」日身體のすこやかなること。ぢやうぶ。達者。息災。俗曲與話情存名横標「お前も、無事でまめな顔、よう、まあ、見せて下さんした」

まめ 豆 [接頭] 「豆粒ほど」を見よ「小さき意。『豆本』豆小僧『豆ランプ』

まめ あぶら 豆油 [名] まめのあぶら(豆油)に同じ。

まめ あめ 豆飴 [名] 豆の粉と飴とを煉りあはせて、三角の竿の形に作り、竹の皮にて包みて、縦に數條のすぢの附くやうにし、断面の洲濱形をなすやうにして、菓子。京都の名産。すはまあめ。すはま。あめちまき。雍州府志洲濱飴、或謂「豆飴」

まめ いし 豆石 [名] 「鑛」結晶質方解石の一種。炭酸のしうむが温泉中に沈澱して、豆粒大の塊となれるもの。

まめ 豆を煮るに其(ハラ)を然(ク)く(句)「七歩の才」を見よ」兄弟相害する譬(「諺語」)

まめいた

まめいた 豆板(名) 次條の略。胸算用「鼻紙入に、一步二つ三つ、豆板三十ばかりも入れて」炊豆(豆)と砂糖の煮溶したるものとを交せて、丸く扁く展へ固めた菓子。

はめいたぎん 豆板銀(名) 徳川幕府にて鑄造したる豆状の銀貨幣。即ち慶長豆板銀、元禄豆板銀、享保豆板銀、元文豆板銀、新文字豆板銀、天保豆板銀、安政豆板銀の類。明治元年五月、通用を禁止せらる。まめいたぎん。つばぎん。こだまぎん。こだま。ぎんまめ。

まめいり 豆炒(名) 豆を火にて炒ること、又その豆。いりまめ。豆米あられなどを炒りて、砂糖に塗(て)したるもの。雛祭の時、供へ又は食ひなどす。いりごめ。いりもの。

まめうち 豆打(名) 追儼(びんご)に、「福は内、鬼は外」と唱へつつ、豆を打ち撒くこと。まめまき。まめはやし。

まめうちだい 豆打臺(名) 農具の一。四脚を有する木の框(かま)に、割竹を並列したるもの。豆の實を其(かま)より分くるに用ふ。

まめうちまじ 豆甘し(句) 班鳩(うら)の鳴聲なりといふ。著(あ)るがよまめうちまじとは誰もさぞひじりこきとは何を鳴くらん。

まめうり 豆賣(名) 豆を賣り歩くこと、又その人。七(やく)人歌鳥豆賣。我等が豆も、いまだあきなひ遅く候ふぞ。

まめらるばらちやう 豆植庖丁(名) 農具の一。形、庖丁に似て、大豆、小豆、大豆(豆)などを植うるに用ふるもの。

まめかぎ 豆柿(名) 「植」しながき(信濃柿)に同じ。 「植」ぶたがき(蒲葡萄)に同じ。

まめかぎ 豆描(名) 友禪染の下繪を描くに生地(ちぢ)を火に炙りつつ、豆油(ま)を交ぜたる繪具にて描くこと。あぶりかぎ。

まめかぎ 豆描友禪(名) 豆描にしたる友禪。友描(り)友禪。

まめかす

まめかす 豆粕(名) 大豆の搾滓。大豆より油を搾り取りたる殘の滓。肥料及び飼料に用ふ。 「片假名」に同じ。

まめかた 豆假名(名) 豆假字(名) かたかなまめかたに豆蟹(名) 「動」海邊の沙地に棲む極めて小き蟹。甲殼、膨れて圓く、眼は柄を有して長し。いそそがに。くもがた。

まめかぶ 豆粥(名) 大豆の煮たるを交るものと、糞、字糞、豆加良。 「豆」がらば、扱げば、べちげちと音して、せはしきよりいふ。性急なる人の聲。

まめきく 豆菊(名) 花實は花序の極めて小き菊。

まめきび 豆黍(名) 「植」たうもち(玉蜀黍)を云ふ。 「陸奥國、越後國の方言」。

まめきん 豆銀(名) まめいたぎん(豆板銀)の略。

まめきんかん 豆金柑(名) 「植」きんかん(金柑)に同じ。

まめくち 豆口(名) 「動」いかる班鳩(うら)に同じ。

まめくひ 豆食(名) はやちかた(早打屋)類、雙子葉門、離花區の一科。多年生喬木。灌木、半灌木、若しくは、二年生又は一年生の草にして、凡そ四百三十五屬。一萬二千餘種を含み、分布區域は、全世界に互り、我國に自生し、又は栽培せらるるは、凡そ八十六屬、二百七十餘種なり。とうくわ。

まめくわね 豆慈姑(名) 「植」あぎなしにまめくわね 豆金龜子(名) 「動」金龜子(てんぐ)の一品種。體は長さ約四分、やや扁平にして黒綠色。觸角は赤褐色。茸科植物に害をなし、主に百日紅(ひやくにち)・蒲萄などに多し。

まめくわねむし 豆金龜子(名) 「動」前まめくわね 豆苦螺磨草(名) 「植」まめつた(豆葛)に同じ。

まめこころ 忠實心(名) 忠實(ち)なる心。まじめなる心。勞を厭はざる心。死「忠、マメゴコロ」。

まめこ

まめこ 忠實事(名) まじめなる事。著實なる事件。實用上の事。用事。まめわさ(徒事)に對して。 「まめ」事など言ひあはせて「たまへる」に。源氏年頃、まめ事に、あだ事に、召しまつはし、参りなれたるものを。

まめこりん 豆こりん(名) 一種の菓子。糖衣(とうい)その紙に包んだ物は、何(なに)だ。 「こ」已(お)あ、又豆こりんかと思つた。

まめさいく 豆細工(名) 幼稚園又は小学校にて、細竹と大豆を用ひて、種種の外形を作るもの。

まめさう 豆蔵(名) 「貞享」元祿の頃、攝津國にて、重き物をささげて、錢を乞ひし乞食の名より出づとも、又、眞似(まね)の訛かともいふ。昔、種種の身振(みぶ)と滑稽なる早口にて人を笑はせ、錢を乞ひし乞食。ちよぼくれの類。藤栗毛、北野の下(森)…。至て賑かに、芝居などもあり、見世物・豆蔵・讀賣講釋。 「よ」しやべる人を嘲りていふ語。和合人。いつも變らぬ麗文の滑稽、唯筆先の豆蔵とも見たま(か)し。 「目」紙を切りぬきて、人形を作り、細き竹の兩端に豆を挿したるを、左右の手に擬したるもの。

まめさうむし 豆象蟲・豆象鼻蟲(名) 「動」鞘翅類に屬する昆蟲。體長一分餘。形、鞘翅に近く、口吻は、他の象蟲の如く長からず。頭は小さく、觸角は鋸齒状をなし、前翅は四角形にして、赤褐色を呈し、灰白と暗褐との斑紋あり。豆類を食害す。別に、これよりは形や小さくして、觸角總狀をなし、小豆(ま)を食害するものに、小豆象蟲又は蠶心象蟲と呼ぶものあり。

まめさき 豆咲(名) 豆科の植物の大部分に共通せる形の花、即ち蝶形花冠を有する花。

まめさきま 忠實様(名) まめなるさま。まじめなるさま。源氏「あやしきまめさまをかくのたまふ」。

まめした 忠實し「形」まめまめし。まじめにたのもし。丹波與作「まめしげもなき世の中や」。

まめし

まめしき 豆色紙(名) 最も小形なる色紙にして、方二寸寸のもの。

まめしじや 豆齒架(名) 羊齒(ひげ)螺磨草(名) 「植」まめつた(豆葛)に同じ。

まめしじや 豆自動車(名) 極めて小さく作りたる自動車。

まめしじり 豆絞(名) 豆粒ほどの小き圓を並べあらはしたる絞染。けしだま(芥子玉)参照。

まめす 塗す「動」他「まぶす」に同じ。名義抄「塗、マメス、マミル」。

まめすけ 豆助(名) 「すけ助」は人名のやうに言ひなして添(そ)へたる語。身體の小き者を嘲りていふ語。

まめぞめ 豆染(名) 青黒き染色。

まめだいこ 豆太鼓 豆太鼓(名) 扁く小さい太鼓の兩耳より絲を出だして、その先端に、大豆を一箇づつ附け、柄を持ちて振れば、その豆、太鼓の面を打ちて鳴るやうにせる玩具。

まめたき 豆敵(名) 「動」いかる班鳩(うら)に同じ。

まめたつ 忠實立つ「動」自「まじめ」なる態度になる。本氣になる。 「い」みじうまめだちて恨みたまふ。源氏「いたう世を憚り、まめだちたまひける程に」。

まめたに 豆田螺(名) 「動」腹足類に屬する軟體動物。長さ約三分の小貝にて、やや圓筒状を呈し、赤褐色の表皮を被る。我國、北海道より臺灣にかけての海濱に産す。

まめだぶ 豆倒(名) 「植」旋花(ひま)科に屬する一年生の草。莢(えん)絲子(ひげ)の類にて、發芽の際は、根を存すれども、生長すれば、帶黃白色にして、長さ數尺の細き銅線狀をなせる莖は、所所に存する吸盤にて、大豆又はその他の豆科植物に纏ひ付き、同時に、その吸盤を以て、養分を吸収して、これを枯死せしむ。八月頃帯黄色の花を開く。

まめ「ちや」豆茶〔名〕炒りたる大豆を、鹽茶に入れて飲みもの。

まめ「ちやや」豆茶屋〔名〕徳川時代に、大阪南區瑞龍寺の表門より一町東を南へ通ずる路の西角にありし茶店。炒豆(ちや)を賣りしよりの名から、豆茶を客に出だしたため名が残りて、茶屋は既に存在せざりきといふ。膝栗毛(きりぎりす)夏は難波(なんば)新地の納涼に螢を狩り、豆茶屋に腹を肥やし。

まめ「ちやく」豆猪口〔名〕小さき猪口。浮世風呂(うきふろ)豆猪口(まめ)を小さき猪口(ちやく)に急須(いそ)から茶を注(つ)いで。

まめ「ちやく」豆猪口〔名〕孔安國の尙書序に「錯亂摩滅、非可後知」とあり。文字などの摩滅の結果、消滅すること。〔佛〕司馬遷の報三任安、書に「古者富貴而名廢滅、不可勝計」、寶積經の卷九十六に「須彌河海盡燃燄、畢竟廢滅歸虛空」とあり「すれ消ゆるやうに消滅すること。次條参照。

まめ「つぎ」豆搗、大豆搗、大豆麩〔名〕まなこ黄粉)と同じ。和名大豆麩、末女豆(まなこ)。

まめ「つた」豆蔕〔名〕「植」水龍骨(すいりゅうこ)科に屬する多年生の羊齒植物。山野の岩石又は樹木などに匍匐する細長き莖を有し、根によりて、他物に著生し、葉は無性葉、有性葉の二種ありて、前者は、卵形又は楕圓形をなし、多肉にして厚く、後者は、線状筒形にして、下方へ向ひて漸く細く、子葉群は、有性葉の邊緣と中肋との中間に、二條をなして並列す。いしませめ。あをなまごけ。まめごけ。まめづる。〔蝶智草〕。いしなひは(犬枇杷)に同じ。

まめ「つち」豆鏈〔名〕彫金に用ふる、小さき鐵槌(てつち)。こかなづち。

まめ「つぶ」豆粒〔名〕まめつぶ(豆粒)の音便。

まめ「つぶ」豆粒〔名〕豆の一つ一つつづ。豆粒ほど(豆)極めて小なる形容。

まめ「つぼ」豆ぼう(豆)「動」いかるが(斑鳩)に同じ。

まめ「つる」豆蔓〔名〕「蔓」科植物にある卷鬚。豆の蔓。〔植〕まめつた(蔓)に同じ。〔植〕みやま(深山海桐)に同じ。

まめ「つばら」豆鐵砲〔名〕幼児の、豆を彈丸として打つ、小さき竹製の鐵砲。

まめ「てんきう」豆電球〔名〕甚だ小さき電球。懐中電燈の電球など、これなり。

まめ「どん」豆殿〔名〕江戸岡場所(おかし)にて、遊女に給事せし少女。即ち吉原遊廓(よしげん)の禿(かぶ)の類。小職(せうしやく)江戸花街(はなまち)の禿(かぶ)の稱號は吉原のみ用ひ、岡場所などにては豆(まめ)ん小職(せうしやく)などと言ひ慣はしたり。

まめ「どり」豆鳥〔名〕「動」いかるが(斑鳩)に同じ。

まめ「どろぼう」豆泥棒〔名〕豆を盗むこと。又その人。〔まめ(豆)を見よ〕女と密通し、夜這(よだ)などすること。又その人。まめぬすびと。〔俚語〕

まめ「なごう」豆納豆〔名〕普通の納豆を、漬名納豆と區別していふ語。

まめ「にんぎやう」豆人形〔名〕けしにんぎやう(芥子人形)に同じ。

まめ「ぬすびと」豆盗人〔名〕豆泥棒をする人。八犬傳(はつけんでん)豆盗兒(まめぬすびと)にはふきはしき連枷(せう)がはりに、これ(豆)はせん。

まめ「ねち」豆振〔名〕蒸りたる大豆を、餡(あん)状をなせる砂糖にて寄せ固めたる菓子。

まめ「のあぶら」豆油〔名〕まめの(豆油)に同じ。

まめ「のから」〔名〕「植」あま(石蓴)に同じ。豆粉・大豆粉〔名〕まなこ黄粉)に同じ。曾我曹(そがそう)何れも辛子(から)はお嫌(きら)にて、砂糖(さとう)大豆(まめ)の粉(こな)。

まめ「の」豆油豆の(名)大豆を水に漬け、石灰を加へて、白にて碾(こ)き、又は搗鉢(たね)にて搗り、綿布にて搾り濾したる。乳状の汁。植物性蛋白質を含み、豆腐を凝固せしむるに用ひ、又、染物の止(と)し、或は油繪の繪具に用ふ。ご。ごう。まめのあぶら。

まめ「のこめじ」豆粉飯〔名〕まなこめじ(黄粉飯)に同じ。芭蕉(ばしょう)似合(に)はしや豆粉飯(まめ)に同じ。〔粉餅)に同じ。櫻狩(おうかり)。

まめ「のこもち」豆粉餅〔名〕まなこもち(黄粉餅)に同じ。豆(まめ)つくばね(衝羽根)に同じ。〔疣鯛)に同じ。

まめ「の」豆蔕〔名〕「植」つくばね(衝羽根)に同じ。豆(まめ)つくばね(衝羽根)に同じ。

まめ「の」豆餅〔名〕まなこ餅(豆餅)に同じ。豆(まめ)つくばね(衝羽根)に同じ。

まめ「の」豆餅〔名〕まなこ餅(豆餅)に同じ。豆(まめ)つくばね(衝羽根)に同じ。

まめ「の」豆餅〔名〕まなこ餅(豆餅)に同じ。豆(まめ)つくばね(衝羽根)に同じ。

まめ「の」豆餅〔名〕まなこ餅(豆餅)に同じ。豆(まめ)つくばね(衝羽根)に同じ。

まめ「の」豆餅〔名〕まなこ餅(豆餅)に同じ。豆(まめ)つくばね(衝羽根)に同じ。

まめ「の」豆餅〔名〕まなこ餅(豆餅)に同じ。豆(まめ)つくばね(衝羽根)に同じ。

まめ「の」豆餅〔名〕まなこ餅(豆餅)に同じ。豆(まめ)つくばね(衝羽根)に同じ。

まめ「の」豆餅〔名〕まなこ餅(豆餅)に同じ。豆(まめ)つくばね(衝羽根)に同じ。

まめ「の」豆餅〔名〕まなこ餅(豆餅)に同じ。豆(まめ)つくばね(衝羽根)に同じ。

まめ「の」豆餅〔名〕まなこ餅(豆餅)に同じ。豆(まめ)つくばね(衝羽根)に同じ。

まめ「の」豆餅〔名〕まなこ餅(豆餅)に同じ。豆(まめ)つくばね(衝羽根)に同じ。

まめ「の」豆餅〔名〕まなこ餅(豆餅)に同じ。豆(まめ)つくばね(衝羽根)に同じ。

まめ「の」豆餅〔名〕まなこ餅(豆餅)に同じ。豆(まめ)つくばね(衝羽根)に同じ。

まめ「の」豆餅〔名〕まなこ餅(豆餅)に同じ。豆(まめ)つくばね(衝羽根)に同じ。

まめ「の」豆餅〔名〕まなこ餅(豆餅)に同じ。豆(まめ)つくばね(衝羽根)に同じ。

まめ「の」豆餅〔名〕まなこ餅(豆餅)に同じ。豆(まめ)つくばね(衝羽根)に同じ。

まめ「の」豆餅〔名〕まなこ餅(豆餅)に同じ。豆(まめ)つくばね(衝羽根)に同じ。

まめ「の」豆餅〔名〕まなこ餅(豆餅)に同じ。豆(まめ)つくばね(衝羽根)に同じ。

の度(ど)き(無)くば、いとつらうもあるべきかなと、まめ文の端に書き添(そ)へり。……かれば、まめなる事にて、月日は過(と)しつ。

まめ「ほん」豆本〔名〕極めて、小形に絞(し)ちまめ(豆)本多(まめ)〔名〕本多(豆)の一(ひと)を詰めて、極めて小さく、番(ばん)の間に小さく結ぶもの。中年以上の通人の間に行はれたり。浮世風呂(うきふろ)抜きあげたる額(かぶた)にて、髪は豆本(まめ)田(た)に結(む)したる男(おとこ)。

まめ「まき」豆撒〔名〕豆の種子を畑に蒔(ま)くこと。〔豆蒔(ま)播(ま)〕まめ(豆)まめ(豆)打(う)に同じ。

まめ「まき」豆蒔車〔名〕農具の一。太鼓状にて孔あり、豆の種子を蒔(ま)くに用ふる車。推進(おし)し行くにつれて、その錠(は)に穴あきて、中に入れたる種子の落(お)つるやうに装置(ちやう)す。

まめ「まは」豆廻〔名〕「動」「轉(ま)る聲(こゑ)、豆(まめ)をころがすに似たりといふ」いかるが(斑鳩)に同じ。

まめ「まじ」忠實(まじ)し〔形二〕極めてまめやかなり。甚だまじめなり。甚だ(まじ)實意(まじ)あり。實際上(じつじやう)に甚だ必要(ひつやう)なり。源氏(げんじ)まめまめしき筋(すぢ)を立てて、耳(みみ)はさみがち(ま)にびさるな(ま)家(いへ)と(ま)じ。同(ま)をか(ま)しき(ま)まの(ま)さるものにて、まめまめしき筋(すぢ)におぼし(ま)寄(よ)らぬ事(こと)なし。

まめ「めん」麻綿絲〔名〕麻に綿花を混(ま)じて紡績(ほうげん)したる絲。麻綿(まめん)絲(いと)。

まめ「めんぼう」麻綿紡絲〔名〕前條(まへぢょう)に同じ。

まめ「めいげつ」豆名月〔名〕「くりめいげつ(粟名月)に同じ。

まめ「めい」豆飯〔名〕大豆又は豌豆などを、茶飯(ちあひ)のごとく炊(ゆ)きこみたる飯(いり)。豆餅(まめ)〔名〕黑豆又は大豆を、水(みづ)に浸(ひ)し、餅飯(もちあひ)と共に蒸籠(むす)に入れ、蒸(ゆ)して製したる餅。

まめ「もの」忠實者〔名〕まめびと(忠實人)に同じ。用明天皇(もちあす)人(ひと)律師(りし)義者(ぎしや)で、達者(たつしや)で、心(こゝろ)のまめなまめものよ。

まめ「もや」豆蒔〔名〕豆を蒔(ま)くこと、又その蒔(ま)したるもの。豆の蒔(ま)。

まめ

まめ

まめ

まめ

まめやか

まめやか 忠實やか【貌】まめなるさま。まじめなるさま。忠實(シヤク)。蜂(ハチ)「さるべき人して、あるべきに書かせて遊りつ。それをしよ、まめやかにうち喜びて、しげう通はす」【假初(ハチ)ならぬさま。大鏡よしなし事よりは、まめやかなる事を申し出でん】源氏雪、いたう、降りてまめやかに積りにけり」

まめやか(郭公)に同じ。

まめやか(鳥)に同じ。

まめやか(陰莖)に同じ。

まめやか(煩悩を切捨つ)とは、いかにと問ひたまへば、くは、これを御覽せよといひて衣の前をかき上げて見すれば、眞にまめやか物はなくて、ひげばかりなり

まめやか(豆奴)に同じ。

まめやか(大豆を首とし、細き丸竹の中央に立てたる槍持奴の、絲をからくるによりて、左右に廻る仕掛の昔の玩具)に同じ。

まめやか(眞目詰)に同じ。

まめやか(豆落雁)に同じ。

まめやか(蒸大豆)に同じ。

まめやか(豆洋燈)に同じ。

まめやか(忠實業)に同じ。

まめやか(豆割)に同じ。

まめやか(豆繪)に同じ。

まめやか(粗雑なる人物畫なれど、又、奏書摺の美しきものもあり。元祿頃始めて行はれ、嘉永頃までに及べり。

まめやか(忠實男)に同じ。

まめやか(伊勢昔、男ありけり。西のみやに女ありけり。それを、かまめ男、うち物語らひて

まめやか(前項の伊勢物語の文句に本づいていふ)ありはらなり(在原業平)の異稱。むかしをとく。柳(ヤナギ)「まめ男衣冠正しく不埒をし」

まめやか(風流にて、色好みする男)に同じ。

まめやか(豆男)に同じ。

まめやか(夕霧阿波歌)に同じ。

まめやか(新玉のここに年取る)に同じ。

まめやか(新玉のここに年取る)に同じ。

まめやか(新玉のここに年取る)に同じ。

まもり

まもり 豆男【體格の小さき男。こをとく。まもり(名)い(も)苦(く)を云ふ。【女の語】

まもり(間も無く)に同じ。

まもり(大船)に同じ。

まもり(多)に同じ。

まもり(眞物)に同じ。

まもり(眞者)に同じ。

まもり(眞人)に同じ。

まもり(眞人)に同じ。

まもり(眞人)に同じ。

まもり(眞人)に同じ。

まもり(眞人)に同じ。

まもり(眞人)に同じ。

まもり(眞人)に同じ。

まもり(眞人)に同じ。

まもり(眞人)に同じ。

まもり(眞人)に同じ。

まもり(眞人)に同じ。

まもり(眞人)に同じ。

まもり(眞人)に同じ。

まもり(眞人)に同じ。

まもり(眞人)に同じ。

まもり(眞人)に同じ。

まもり(眞人)に同じ。

まもり(眞人)に同じ。

まもり(眞人)に同じ。

まもり(眞人)に同じ。

まもり(眞人)に同じ。

まもり(眞人)に同じ。

まもり(眞人)に同じ。

まもりあ

まもりあ 方に著けて見詰む。太平記「諸國の軍勢、唯、徒に城を守り上げて居たるばかりにて、するわざ、一つも無かりけり」

まもりあ(蛇)に同じ。

まもりあ(女)に同じ。

まもりあ(顔)に同じ。

まもりあ(短刀)に同じ。

まもりあ(護身)に同じ。

まもりあ(守神)に同じ。

まもりあ(守神)に同じ。

まもりあ(守神)に同じ。

まもりあ(守神)に同じ。

まもりあ(守神)に同じ。

まもりあ(守神)に同じ。

まもりあ(守神)に同じ。

まもりあ(守神)に同じ。

まもりあ(守神)に同じ。

まもりあ(守神)に同じ。

まもりあ(守神)に同じ。

まもりあ(守神)に同じ。

まもりあ(守神)に同じ。

まもりあ(守神)に同じ。

まもりあ(守神)に同じ。

まもりあ(守神)に同じ。

まもりあ(守神)に同じ。

まもりあ(守神)に同じ。

まもりあ(守神)に同じ。

まもりあ(守神)に同じ。

まもりあ(守神)に同じ。

まもりあ(守神)に同じ。

まもりあ(守神)に同じ。

まもり

まもり(見張る人)に同じ。

まもり(見張る人)に同じ。

まもり(見張る人)に同じ。

まもり(見張る人)に同じ。

まもり(見張る人)に同じ。

まもり(見張る人)に同じ。

まもり(見張る人)に同じ。

まもり(見張る人)に同じ。

まもり(見張る人)に同じ。

まもり(見張る人)に同じ。

まもり(見張る人)に同じ。

まもり(見張る人)に同じ。

まもり(見張る人)に同じ。

まもり(見張る人)に同じ。

まもり(見張る人)に同じ。

まもり(見張る人)に同じ。

まもり(見張る人)に同じ。

まもり(見張る人)に同じ。

まもり(見張る人)に同じ。

まもり(見張る人)に同じ。

まもり(見張る人)に同じ。

まもり(見張る人)に同じ。

まもり(見張る人)に同じ。

まもり(見張る人)に同じ。

まもり(見張る人)に同じ。

まもり(見張る人)に同じ。

まもり(見張る人)に同じ。

まもり(見張る人)に同じ。

まもり(見張る人)に同じ。

まや 兩下 [名] 眞屋の義といふ。切妻屋根(まや)の家作。(四阿(まや)に對して)「古語」和名兩下、麻夜。千藍山風にまやの葺ぶきあれにけり枕にやどる夜はの月かげ」

まやの餘分(まや) [句] 簾の、柱より外の方へ餘り出てたる處、即ち葺卸(まや)の端。俳諧(東屋)「あづまのまやのあまりの雨(まや)そそぎ我立ち濡れぬその戸開かせ」

四阿(まや)の兩下(まや) [句] 寢殿は四阿造、對(まや)の屋(まや)は兩下造なるよりいふ。寢殿の對の屋、續拾遺「あづまのまやの軒端のみじか夜にあまり程なき夏の夜の月」玉葉「あづまのまやの軒端に雨すきて露ぬきとむるさき蟹の絲」

まや 摩耶(梵マヤ) [名] 人。「幻・幻生・幻術・幻智又は妙など譯す」古代印度拘利(まや)城主善覺の妹(一説には女)。迦比羅(まや)太子(即ち後の釋迦牟尼佛)を生みて、七日にして歿す。具さには、摩迦(まや)摩邪といふ。尊稱して、佛母(まや)といふ。

まやかじ [名] まやかすこと、又その物。まやし。

まやかじもの まやかし物 [名] まやかす物。にせもの。いかさまもの。

まやかす [動四他] まぎらはしく見せかく。こまかし迷はす。まやす。

まやく 麻藥麻藥 [名] ますめ(麻酔)を見よしひれぐすり(痺藥)に同じ。

まやう 摩耶城 [名] 攝津國摩耶山(まやう)の山腹にありし城。正慶二年、赤松圓心の築造に係り、六波羅の兵五萬餘を防ぎて、敵の屍、山麓より武庫(まやう)川まで絶えざりきといふ。

まやうく 兩下造 [名] 屋根を兩下の形式に造る。きりづまづくり。

まやぶき 兩下葺 [名] 兩下(まやぶき)の形式に葺くこと、又その葺方の家。「を見よ。まやぶきにん 麻耶夫人 [名] 人。まや、麻耶。まやまわり 摩耶參 [名] 二月初午の日、攝津國摩耶山の頂上にある切利天上(まやまわり)寺に參詣すること。この日、飼馬の無難を祈ると、馬を牽きて詣づる者多く、又、土産として、昆布を買ひて歸る習慣ありて、これを摩耶昆布といふ。

まゆ 眉 [名] 上眼瞼の上、少し離れた處、左右に一箇處づつ並び、額の上に、全形、横に弓状をなして生ずる短き毛。汗・塵埃などの眼中に入るを防ぐ用をなし、兼ねて、顔面の裝飾となる。和名眉萬由。まゆすみ 眉鬚 [名] 略。承安二年廣田社合「むこの海を風きたる朝に見渡せば眉も亂れぬ阿波の島山」目鳥帽子の前面・下部の中央、尖りたる鬘(まゆ)の下に、やや出張りたる所。四牛車(まゆ)の屋形の前後にある軒。普通、方形の角をやや削り落したる如き形なれども、又、兩眉(まゆ)とて、唐摺風造(まゆ)のものありて、唐車(まゆ)及び尼眉車(まゆ)のものあり。大鏡「大宮の一の車の口のまゆに、香囊掛けられて」目日の出の際、太陽の上にはほのぼのと見ゆる雲。(船乗の語)

まゆ 虹梁(まゆ) 又は破風(まゆ)などの下方の線形(まゆ)。形に、種種あり。

眉上(まゆ) [句] 孔稚圭の北山移文「眉軒三席次」とあり。激昂し、又は意氣盛んなる結果、眉毛(まゆ)つり上る。眉こぼる [句] 女の容貌美しき形容。御伽草子和泉式部「年の程二十ばかりな女房の、眉はこぼれて、よしありて」眉半(まゆ) [句] 頭巾などを、眉の半分

ほどに達するまでに、深くかぶる。と。太平記「頭巾(まゆ)眉半に賣め」眉に皺 [句] 次條に同じ。非箇葉年河内通「きよと驚く眉に皺」眉に皺を寄す [句] 眉を擗(まゆ)に眉に霜を垂る [句] 年老いて、眉毛、白く長くなる。平家老僧の白髮なるが、眉には霜を垂れ、紙に浪を墨み」眉に唾(まゆ)吐く [句] 次條に同じ。眉に唾を擗(まゆ) [句] 次條に同じ。眉に唾を塗る [句] 眉に唾を附くれは、狐・狸・蛇(まゆ)などに眉毛を數へらるる事なしとの俗説によりてするなりとぞ。他に欺かれぬ用心をなす。眉毛に唾を附く。まゆ(まゆ)の眉唾物 参照。眉に火が附く [句] 焦眉(まゆ)の急に同じ。平家女護島「急なること、眉に火の附く同然」眉の懸(まゆ) [句] 眉(まゆ)を見よ。眉毛の生え工合(まゆ)。我眉八家「眉のかかり、額つき」眉の毛 [句] まゆげ(眉毛)に同じ。眉の毛を逆(まゆ)になす [句] 眉毛(まゆ)を逆立つに同じ。鬘(まゆ)の毛を逆になし、血眼に見えて、庭上を狂ひまはりければ」眉の如し [句] 眉(まゆ)の如しに同じ。中堂日記「駿河の海も、一つに見えて、薩埵山(まゆ)の眉の如し」眉の霜 [句] 眉毛の白き形容。眉の根(まゆ) [句] まゆ根(眉根)に同じ。眉を開く [句] ひそめたる眉、おのづから開く。芽(まゆ)着なめ伸び開く。春は柳の眉ひらけ花の袂もほころびて」眉を上ぐ [句] 李白の與三韓荆州書「不使白揚眉吐氣、激三昂青雲」眉とあり「激昂し又は意氣盛んなる結果、眉毛(まゆ)をつり上ぐ。眉毛を逆立つ。字並額を赤くなし、眉をあげ、聲聲に泣叫び罵る」眉を集む [句] 眉を擗(まゆ)に同じ。無村青梅に眉集めたる美人かな」

眉を置く [句] 作眉(まゆ)をなす。眉を書く。眉を引く。眉墨を引く。眉を落す [句] 眉を剃り去る。昔、俳優、既婚の婦人の間に行はれし習なり。眉毛を落す。「眉書参照。眉を書く [句] 前前條に同じ。まゆ(まゆ)を去る [句] 眉を拭(まゆ)に同じ。眉を作る [句] 唐書の安樂公主傳に「方覽鏡作眉」とあり「眉を置く」に同じ。

眉を拭ふ [句] 爽ある時、眉墨を拭ひ去る。(昔、播神家にてせし事なり)眉を掃(まゆ)ふ。親長記「生拭眉、此度舊院御事切之後(去年十二月二十七日)、女房去、眉可如何哉」眉を伸ばす [句] 漢書の薛宣傳に「可三復伸眉於後」黃潛の詩に「軒然談笑一舒眉」とあり「憂去りて、安心したる結果、眉と眉の間のひややかになる。眉を開く。眉をひろく。愁眉を開く。「眉を擗(まゆ)むに對して」。「女の語」眉を拂ふ [句] 眉を置くに同じ。眉を掃(まゆ)ふ [句] 眉を拭(まゆ)に同じ。和長壽記「雖三卷纒猶不掃眉」眉を引く [句] 眉を置くに同じ。眉を擗(まゆ)む [句] 心中に憂ひ危み、又は他人の忌はしき行爲に對して、顔をしかむ。眉に皺を寄す。擗(まゆ)す。「眉を伸ばす」に對して。徒然「眉をひそめ、人目を憚りて、捨てんとし」眉を開く [句] 眉を伸(まゆ)ぶに同じ。眉を今、はた、更に眉を開く時になりて、男にわたれら、何の憚かあらん」太平記速かに供養の儀式を整へたまひしかば、一山、眉を開き」眉を廣ぐ [句] 眉を伸ば(まゆ)に同じ。忠見集花の顔今朝はいかにぞ君がため眉ひろげたる草の上の露」眉を擴ぐ [句] 前條に同じ。忠見集「よろづ世の人々のわかゆる菊の上に眉をひろげて友を待つかな」同じ。眉を讀まる [句] 「嘘(まゆ)を讀まる」に

おえういあ こそすしき とてつちた のねにほ ほへふひは もめんむみま よゆや るれるりら をあむわ

まや

まやう

まゆ

まゆ

伊呂波字類「射騎、マユミ」

まゆみ 檀 桃葉衛矛「名」〔植〕「往時、弓に作りしよりいふ」衛矛〔科〕に属する落葉小喬木。高さ一丈餘に達し、樹皮は縦に裂目あり。葉は桃の似て、長楕圓形又は長卵形を呈し、葉柄と鋸齒とを具へ、對生し、花は小形、淡緑・白色にして、暗紫色の葯を具へ、聚繖花序をなし、果實は大きく、熟すれば美觀なり。材は器具用に供す。我國、山地に自生す。いぬまゆみ。かはくまつら。やまにしきま。

まゆみ 淵の細川山に立つ檀弓〔弓東〕〔名〕巻くまで人に知らえじ〔名義抄〕には「梅檀、マユミ、セムダン」とあれど、檀の字に因はれたる誤なるべし。

檀の紙〔句〕だし〔檀紙〕に同じ。空種「まゆみの紙あをかみ・まつかみ」

まゆみがみ 檀紙〔名〕〔檀〕の紙に同じ。〔名〕〔檀〕に同じ。

まゆみくわ 衛矛科「名」〔檀〕に同じ。

まゆみのき 檀木・桃葉衛矛「名」〔檀〕に同じ。源氏「まゆみの木の下に打松おどるおどろしからぬ程に置きて」

まゆみのをか 眞弓丘・檀岡「名」〔地〕大和國高市〔郡〕坂合〔村〕大字眞弓の丘陵。檀岡〔川〕の西岸。

まゆみのをの 眞弓丘・檀岡「名」〔地〕大和國高市〔郡〕坂合〔村〕大字眞弓の丘陵。檀岡〔川〕の西岸。

まゆみのをの 眞弓丘・檀岡「名」〔地〕大和國高市〔郡〕坂合〔村〕大字眞弓の丘陵。檀岡〔川〕の西岸。

まゆみのをの 眞弓丘・檀岡「名」〔地〕大和國高市〔郡〕坂合〔村〕大字眞弓の丘陵。檀岡〔川〕の西岸。

まゆみのをの 眞弓丘・檀岡「名」〔地〕大和國高市〔郡〕坂合〔村〕大字眞弓の丘陵。檀岡〔川〕の西岸。

まゆみのをの 眞弓丘・檀岡「名」〔地〕大和國高市〔郡〕坂合〔村〕大字眞弓の丘陵。檀岡〔川〕の西岸。

まゆみのをの 眞弓丘・檀岡「名」〔地〕大和國高市〔郡〕坂合〔村〕大字眞弓の丘陵。檀岡〔川〕の西岸。

まゆみのをの 眞弓丘・檀岡「名」〔地〕大和國高市〔郡〕坂合〔村〕大字眞弓の丘陵。檀岡〔川〕の西岸。

まゆみのをの 眞弓丘・檀岡「名」〔地〕大和國高市〔郡〕坂合〔村〕大字眞弓の丘陵。檀岡〔川〕の西岸。

れ、後父の仇なりとなして、天皇を弑し、幾もなくして、誅せらる。

まよ 眉「名」まゆ〔眉〕に同じ。〔古語〕

まよ 蘭「名」まゆ〔蘭〕に同じ。〔古語〕

まよ あひ 眉間「名」まゆあひ〔眉間〕に同じ。〔古語〕

まよ 眉 字鏡額、眉間也。萬與安比也。

まよ 古語 記「まよがき濃」にかき垂れ逢はしし女行。

まよ げ 魔除「名」魔をよくること、又その効ある物。やくよけ。まもり。神符。

まよ こ 眞横「名」全く横なること。盛衰記「眞横に歩ませ塞ぐ」

まよ こもり 蘭箱「名」まよこもり〔蘭箱〕に同じ。〔古語〕

まよ ね 眞夜中「名」まことの夜中。深夜。兼貞眞夜中や米の上の捨小舟。

まよ ね 眞夜中の月「名」〔子〕の刻、即ち今の夜十二時に出づるよりいふ。陰曆二十三日の月。

まよ ね 眉根「名」まゆね〔眉根〕に同じ。〔古語〕

まよ ね 眉根を搔く「句」〔眉根〕を搔く。〔古語〕

まよ ね 眉根を搔く「句」〔眉根〕を搔く。〔古語〕

まよ ね 眉根を搔く「句」〔眉根〕を搔く。〔古語〕

まよ ね 眉根を搔く「句」〔眉根〕を搔く。〔古語〕

まよ 迷「名」まよふこと。まどひ。〔佛〕めいご〔迷悟を見よ〕悟り得ぬこと。生死〔行〕を超越し得ざる。事理を轉倒すること。迷妄。迷夢。地獄の世一つの事にもあらざらめども、迷のおろかなる前には、なほいと怪しかりし。新後撰「悟るべき道とて更に道もなし迷ふ心も迷ならねば。』明かに見えわかぬこと、又その場合。まされ。源氏朝ぼらけ霧立つ空のまよひにも行きすぎがたき妹が門かな。』同「人のまよひに、物のうしろに入りたまひて。』四布帛の縦糸又は横糸の、亂れ片寄ること。〔織〕〔古語〕萬葉今年行くにひさきもりが麻ごろも肩の間亂るはたれか取り見む。』髪のもつれ亂ること。

迷の雲「句」迷の、思慮分別を妨ぐるを、雲に譬へていふ語。新後撰「暗き夜の迷の雲の晴れぬればしづかに澄める月を見るかな。』曲曲魯願寺「十惡八邪の迷の雲も空晴れ」

まよ いて 迷出づ「動下二自」行き著くあてもなく、家を出づ。玉葉草枕ただかりそめに迷ひ出でてあはれいく夜の旅寝しつらん。』太平記「そとも知らず迷ひ出でさせたまひける御有様こそ、あさましけれ」

まよ いかみ 迷神「名」まよはしがみ〔迷神〕に同じ。字鏡この邊には、まよひ神よあんなる邊ぞかし」

まよ びき 眉引「名」まよびき〔眉引〕に同じ。〔古語〕

まよ びき 眉引「名」まよびき〔眉引〕に同じ。〔古語〕

まよ びき 眉引「名」まよびき〔眉引〕に同じ。〔古語〕

まよ びき 眉引「名」まよびき〔眉引〕に同じ。〔古語〕

まよ びき 眉引「名」まよびき〔眉引〕に同じ。〔古語〕

まよ びき 眉引「名」まよびき〔眉引〕に同じ。〔古語〕

まよ びき 眉引「名」まよびき〔眉引〕に同じ。〔古語〕

まよ びき 眉引「名」まよびき〔眉引〕に同じ。〔古語〕

まよ びき 眉引「名」まよびき〔眉引〕に同じ。〔古語〕

まよ びき 眉引「名」まよびき〔眉引〕に同じ。〔古語〕

まよ びき 眉引「名」まよびき〔眉引〕に同じ。〔古語〕

まよ びき 眉引「名」まよびき〔眉引〕に同じ。〔古語〕

を立つることなく、大手筋の爲す所に做ひて、萬一の徳伴を得んとするのみなる者。〔取引所の語〕

まよ 迷ふ「動四自」目〔醉〕のふの轉かといふ。思ひ亂る。いかにせばよきか、わからず。目あて定まらず。まどふ。

明かに見えわかぬこと、又その場合。まされ。源氏朝ぼらけ霧立つ空のまよひにも行きすぎがたき妹が門かな。』同「人のまよひに、物のうしろに入りたまひて。』四布帛の縦糸又は横糸の、亂れ片寄ること。〔織〕〔古語〕萬葉今年行くにひさきもりが麻ごろも肩の間亂るはたれか取り見む。』髪のもつれ亂ること。

迷の雲「句」迷の、思慮分別を妨ぐるを、雲に譬へていふ語。新後撰「暗き夜の迷の雲の晴れぬればしづかに澄める月を見るかな。』曲曲魯願寺「十惡八邪の迷の雲も空晴れ」

まよ いて 迷出づ「動下二自」行き著くあてもなく、家を出づ。玉葉草枕ただかりそめに迷ひ出でてあはれいく夜の旅寝しつらん。』太平記「そとも知らず迷ひ出でさせたまひける御有様こそ、あさましけれ」

まよ いかみ 迷神「名」まよはしがみ〔迷神〕に同じ。字鏡この邊には、まよひ神よあんなる邊ぞかし」

まよ びき 眉引「名」まよびき〔眉引〕に同じ。〔古語〕

まよ びき 眉引「名」まよびき〔眉引〕に同じ。〔古語〕

まよ びき 眉引「名」まよびき〔眉引〕に同じ。〔古語〕

まよ びき 眉引「名」まよびき〔眉引〕に同じ。〔古語〕

まよ びき 眉引「名」まよびき〔眉引〕に同じ。〔古語〕

まよ びき 眉引「名」まよびき〔眉引〕に同じ。〔古語〕

まよ びき 眉引「名」まよびき〔眉引〕に同じ。〔古語〕

まよ びき 眉引「名」まよびき〔眉引〕に同じ。〔古語〕

まよ びき 眉引「名」まよびき〔眉引〕に同じ。〔古語〕

まよ びき 眉引「名」まよびき〔眉引〕に同じ。〔古語〕

まらうど

「おのれがまらを切るよしして、懐に持ちたる龜の首を投げ出したり」

「まらいんぐ」馬來群島【名】「地」まれいんぐの馬來群島に同じ。

「まらうど」客賓【名】「まらびと」(客)の音便。他より訪ひ來たる人。まらびと。まれうど。まらと。客(マラウド)。客人。記「客、マラウド」土佐(主分)も、まらうども

「まらうど」客賓。主賓。古語。伊勢、左中辨藤原のまさちかといふをなんまらうどざねにて

「まらうど」掌客【名】支那唐の鴻臚寺の被管典客署の職員なる掌客に倣へるなり。王朝時代に、外國使臣來朝の際、臨時に設け、滯留中の雜事を掌りし職。しやうきやく。まらとのつかさ。

「まらうど」のみや 客人宮【名】きやうじんのみや(客人宮)に同じ。平家「山門に訴へんとて、白山(シ)中宮の神輿……をば、客人宮へ入れ奉る。客人と申すは、本地(シ)白山妙理權現にておはします。申せば、父子の御中なり」

「まらうど」客居 賓居【名】家の一部、來客を通す所。いてゐる。客間(マラウド)。客殿。古語。源氏「まらうどゐる方におはするにつけても」

「まらうど」(英 Malaga) 【名】西班牙國より産する白葡萄酒。晩熟種の葡萄を原料とし、濃厚にして、美味なるもの。まらが酒。

「まらうど」マラガ酒 (英 Malaga wine) 【名】前條に同じ。

「まらうど」(英 Marathon) 【名】次條の略。マラソン競走(英 Marathon race) 【名】もと、昔、波斯のダリウス(Darius)第一世の軍の希臘に侵入せし時、アテネ(Athens)の兵のこれと戦を交へし地にして、此處より援兵を乞ふために遣されし軍使が、二五哩四分の

まらうど

一を駆けし事蹟より出づ。徒歩競走の一、耐久力を試むるために行ふものにして、古代のオリムピックの競技にこれを加へ、西曆一八九二年、國際オリムピック復活したる後は、二五哩とし、今は、又、二十六哩三八五碼(マ)となれり。まらうどれえす。まらうど

「まらうど」(英 Marathon race) 【名】「植」いかりさう(稔草)に同じ。古語。和名「淫羊藿……俗名仙靈毗草是漢語抄云、仙靈毘草、末良多介里久佐」

「まらうど」客賓【名】「まらびと」(客)の略。まらびと(客)に同じ。次條参照。古語。まらうど(マ)つかさ 掌客【名】まらうど(マ)つかさ(掌客)に同じ。記「掌客、マラトノツカサ」

「まらうど」摩羅坊【名】「人」しだらけん(志)に來る人の義。れの音の、まの韻に引かれて、阿列音らに變りたるなるべし。まらうど(マ)客に同じ。古語。記「客、マラビト」

「まらうど」麻痺病 麻痺病【名】かんざ(疝瘡)に同じ。

「まらうど」麻拉利亞 (英 Malakia) 【名】「惡」しき空氣の義。沼澤、濕地又は腐敗せる植物などよりの蒸發氣など、すべて健康に害ある物質を含有せる氣。瘴氣。一種の原蟲が、赤血球に寄生する、によりて起る病。感染後、二週間に於て、固有の發熱發作あり、惡寒、發熱、頭痛、眩暈などありて、一度健康狀態に復し、更に日を経て、同一の發作を反復す。故に間歇熱とも稱せらる。北海道・北越地方臺灣などに最も多く流行し、翅斑蚊(マ)は、これが媒介をなす。まらうど

「まらうど」麻拉利亞蚊【名】「動」はまだら(翅斑蚊)に同じ。

「まらうど」麻拉利亞熱【名】「醫」まらうど(マ)麻拉利亞熱に同じ。

「まらうど」毬【名】「まる(丸)」と、語源、相同心(マ)とし、絲にてかがりたるもの、革製なるもの、又、護謄製なるもの、木製なるものなど、種種あり。紋所の一。鞠に象(マ)りたるもの。「絹鞠」「蹴鞠」などの種類あり。

「まらうど」毬【名】「まる(丸)」と、語源、相同心(マ)とし、絲にてかがりたるもの、革製なるもの、又、護謄製なるもの、木製なるものなど、種種あり。紋所の一。鞠に象(マ)りたるもの。「絹鞠」「蹴鞠」などの種類あり。

まり

なるもの、又、護謄製なるもの、木製なるものなど、種種あり。紋所の一。鞠に象(マ)りたるもの。「絹鞠」「蹴鞠」などの種類あり。

「まり」毬【名】「まる(丸)」と、語源、相同心(マ)とし、絲にてかがりたるもの、革製なるもの、又、護謄製なるもの、木製なるものなど、種種あり。紋所の一。鞠に象(マ)りたるもの。「絹鞠」「蹴鞠」などの種類あり。

「まり」毬【名】「まる(丸)」と、語源、相同心(マ)とし、絲にてかがりたるもの、革製なるもの、又、護謄製なるもの、木製なるものなど、種種あり。紋所の一。鞠に象(マ)りたるもの。「絹鞠」「蹴鞠」などの種類あり。

「まり」毬【名】「まる(丸)」と、語源、相同心(マ)とし、絲にてかがりたるもの、革製なるもの、又、護謄製なるもの、木製なるものなど、種種あり。紋所の一。鞠に象(マ)りたるもの。「絹鞠」「蹴鞠」などの種類あり。

「まり」毬【名】「まる(丸)」と、語源、相同心(マ)とし、絲にてかがりたるもの、革製なるもの、又、護謄製なるもの、木製なるものなど、種種あり。紋所の一。鞠に象(マ)りたるもの。「絹鞠」「蹴鞠」などの種類あり。

「まり」毬【名】「まる(丸)」と、語源、相同心(マ)とし、絲にてかがりたるもの、革製なるもの、又、護謄製なるもの、木製なるものなど、種種あり。紋所の一。鞠に象(マ)りたるもの。「絹鞠」「蹴鞠」などの種類あり。

「まり」毬【名】「まる(丸)」と、語源、相同心(マ)とし、絲にてかがりたるもの、革製なるもの、又、護謄製なるもの、木製なるものなど、種種あり。紋所の一。鞠に象(マ)りたるもの。「絹鞠」「蹴鞠」などの種類あり。

「まり」毬【名】「まる(丸)」と、語源、相同心(マ)とし、絲にてかがりたるもの、革製なるもの、又、護謄製なるもの、木製なるものなど、種種あり。紋所の一。鞠に象(マ)りたるもの。「絹鞠」「蹴鞠」などの種類あり。

「まり」毬【名】「まる(丸)」と、語源、相同心(マ)とし、絲にてかがりたるもの、革製なるもの、又、護謄製なるもの、木製なるものなど、種種あり。紋所の一。鞠に象(マ)りたるもの。「絹鞠」「蹴鞠」などの種類あり。

「まり」毬【名】「まる(丸)」と、語源、相同心(マ)とし、絲にてかがりたるもの、革製なるもの、又、護謄製なるもの、木製なるものなど、種種あり。紋所の一。鞠に象(マ)りたるもの。「絹鞠」「蹴鞠」などの種類あり。

まり

リオットは、ポールの後、この法則を、獨立して發見せる佛蘭西人の名。ほいる(マ)り(マ)ールの定律)に同じ。

「まり」かき 鞠懸【名】「鞠の懸(マ)り」に同じ。西機集「百濟寺西谷の曼陀羅堂の前に古、鞠懸あり」

「まり」かき 鞠垣 鞠垣【名】鞠懸(マ)りの周圍に設けたる垣。方六間にして、内、一方には、鞠を張り、他の面には、貴人の入口、普通人の入口、掃除口等を開く。一代女「紅の袴を召したる女、あまた、香音靜かに、鞠垣に袖を懸して」

「まり」かき 鞠形【名】蹴鞠のかたち。七一職人歌合「鹽釜や河原の院のまりかたのまろきは月をうつすなりけり」

「まり」かき 鞠革【名】蹴鞠を造るに用ふる革。七一職人歌合「毛がはりを取合せたる鞠革の思ひもあはぬ人に懸ひつつ」

「まり」かき 魔力【名】人を迷はす不思議なる力。まりよく。

「まり」かき 鞠括【名】蹴鞠用の鞠を括り作る職人。七一職人歌合「鞠括、難波(マ)り(マ)り、大がたを御好みある」

「まり」かき 鞠杏【名】蹴鞠の遊に穿く杏。七一職人歌合「杏造、鞠くつは、はだかなるがわるき」

「まり」かき 鞠會【名】古の蹴鞠の會。東鑑に三鶴岡別當法印雪下坊有「鞠會」

「まり」かき 鞠蹴【名】二人以上の者二組に分れ、相對して、鞠を蹴あふ遊戲。

にもてはやす盆山の石に、鞠子石とて、見事なる石を出す」

まりき 鞠竿・鞠棹 [名] 古の蹴鞠の時、鞠の木の枝などにかかりたる時、これを落すに用ふる竹棹。甲陽軍鑑「鞠の枝に溜りたる時は、鞠竿にて落すべきなり」

まりりてん 摩利支天 (梵 Mārīcī-devī) [名] 『佛』『陽炎』と譯す。日光を神化したもの。形は、目にも見えず、手にも取られず、帝釋の天の眷屬にして、日天に附隨し、常にその前驅として、天下を巡行し、民國の保護に従ふといふ。これを忿怒する者は、一切の災厄を免れ、又よく隱形(隠形)の術を得るといふにより、武士の守護神として、尊崇せられたり。形像は、天女に似、右手は、臂を屈して上に向け、左手は、左乳の間に在りて、卍字を書きたる天扇を把る。太平記「隱形の呪を、御心の中に唱へてぞおはしける。……これ、偏に摩利支天の冥應(冥應)」



(んてしりま)

まりしてんきやう 摩利支天經 [名] 『書』『次條の略。甲陽軍鑑』かの文官なる者が、摩利支天經を日日夜夜に誦誦すと聞く。『陀羅尼集經(十二卷)中の第十卷に收めてある佛經。中印度の阿地羅多(びび)三藏の漢譯。』

まりしてんぼさつ だらにきやう 摩利支天菩薩陀羅尼經 [名] 『書』佛經の。一卷。支那唐の不空の漢譯。

まりじやうぞく 鞠裝束 [名] 蹴鞠の時、に著用する裝束。

まりりづきん 鞠頭巾 [名] 丸頭巾に似て、やや異なる所ある頭巾。寛永發句帳「寒きとも誰かゆるしの鞠頭巾」

まりなげ 鞠投 [名] 鞠を投げて遊ぶこと、又その遊戲。まりはふり。まりりば 鞠場・鞠場 [名] 「鞠の庭」に同じ。萬忠百首「山里の木の下草のしげから

ぬ春くる人のまりばなりけり」

まりはじめ 鞠始 [名] 年改まりて後始めて、蹴鞠の遊をなすこと、又その式。東鑑御鞠始也、左金吾令立給」

まりりばな 鞠花 [名] 「植」漢名の菊に「鞠」の字を充てたるを訓讀していへる名。『き』(菊)の異稱。同じ。まりりばふり 鞠投 [名] まりなげ鞠投にまりりばのうら 麻里布浦 [名] 「地」周防國玖珂郡の海濱。地點不明なれど、室木(室木)浦をそれと推定して、今、麻里布村の名設けらる。萬葉「まかちぬき舟しりかざれば見れど飽かぬ麻里布の浦にやどりせましを」

まりりや まりり矢 [名] 古代の一種の矢。目在矢(目在)にて、鎗矢の類なりとも、又、下に引ける日本書紀には、末利柳とあれど、奈利柳の誤にて、鳴り響く矢ならんといひ、又、一説にて、征矢(征矢)なりともいふ。『古語』「紅規弓(紅規)にまりり矢をたぐへ」

まりりや 鞠屋 [名] 蹴鞠に用ふる鞠を製造又は販賣する家、又その人。まりりや 摩利耶 (羅 Mārīcī) [名] 「人」基督の母。夫ヨセフ (Joseph) と婚約中、天使(Gabriel)現れ、神の力によりて、救世主を産むべき旨を告げたる結果、基督を生めるなれば、基督は、肉の子にあらずして、靈の子なりといひ、マリヤを處女マリヤ・童貞マリヤ・聖母(聖母)マリヤ・聖母など呼ぶ。西洋の中世期、騎士道の婦人崇拜に伴ひて、基督と並びて崇拜せらる。まりりやくわんおん 摩利耶觀音 [名] 「音」の字、觀の韻に引かれてノンと發音す。徳川時代に、基督教禁止後、肥前國長崎にて、聖母摩利耶を、表面は觀音なりとして崇拜せしもの。殊に、同地丸山の遊女たちの間に信仰せられたりといふ。

まりりよく 魔力 [名] まりき(魔力)に同じ。まりりよく 鞠桶 [名] 鞠を入れる桶。持蕪天皇歌集「鞠桶を拵げ、罷り出で」

まる 丸 [名] 丸まるき形。圓形。球形。『缺けたる所なきこと。全部揃ひであること。完全。』『築きめぐらす形、ほぼ

圓形なるよりいふ』城郭の内部。位置によりて、本丸(本丸)・二ノ丸(二ノ丸)・出丸(出丸)などの名あり。『信長記』瀧川左近將監、惟任(惟任)五郎左衛門尉、攻口より東の丸(丸)へ乗入れ、四(四)形の圓きよりいふ。金銭の隱語。まるしき。まるじるし。まるてき。まる。まるまる。まるもの。『動』すづん(盤)の異稱。「京都大阪の語」すずん丸(盤)とは何(何)だ。御當地にいふ籠(籠)ぢやがな。『鶴の臍』鷹の語。『無疵(無疵)』。うぶ。純粹。一代(一代)いまだ男心を知つた子ではなし、まるてき(まるてき)まるやき(丸焼)の略。和合人「焼芋でも、丸は、ちと烟(煙)のつてえのだ。』紋所の一。一箇の圓(圓)を描けるもの、又その中に、他の形を描き添へたるは、それぞ丸(丸)に何何と呼ぶ。『字』に同じ。丸(丸)の「の」字「句」まるの(丸)の丸の虎子(丸)一幼兒・病者などの大小便を受くるに用ふる、桶の如き器。おかは。おまる。便器。

まる 丸 [動四] 大小便をなす。ひる。『古語』記「大嘗(大嘗)開しめ殿に尿まり散しき」字(字)女(女)の童(童)の糞まりおて侍るを」

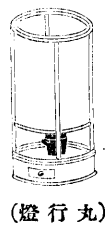
まる 丸 [副] 年月日時の或期間の總量を示す。満(満)。天の綱(綱)丸(丸)三年も馴染(馴染)まいて。まる 丸 [接頭] 丸(丸)き形の意。まる。「丸(丸)類」丸袖(丸袖)『全き意。缺けたる所なき意。』丸皮(丸皮)丸勝(丸勝)丸焼(丸焼)丸(丸)その儘なる意。まる。「丸木」丸寝(丸寝)田舎者(田舎者)丸出(丸出)の言葉」

まる 丸 [接尾] 丸(丸)麻呂に同じ。大鏡「故大政のおとど貞信公の、藏人の少將と申しし折の小舎人童(童)大犬丸ぞかし」丸(丸)に同じ。『發音』まことに能き馬なりければ、伊豆守、使者を以て、召上置かれ候し木下(木下)丸通のしたまふべき山中したり。『目刀(目刀)丸通の下に附けて用ひし語。』蜘蛛切(蜘蛛切)丸(丸)小鳥丸(小鳥丸)四(四)船船の名の下に附けて用ふる語。『日本(日本)丸(丸)常陸丸(丸)』

まる 丸 [助數] 日本紙を數ふるに用ふる語。一丸の量は、半紙は六締(六締)美濃紙、典具帖紙、コッピ紙は四締(四締)程村・半切(半切)奉書、圖引紙などは十束(十束)、杉原は八束、牽紙・元結紙などは五束、小菊紙は九締等、紙の種類によりて一様ならず。まるあき 丸明 [名] 全くあきてあること。まるあけ 丸揚 [名] 切り刻まずに、その形のままの揚物(揚物)。八笑人「丸揚のお蔭」

まるあじかため 丸脚圍 [名] 「建」普通の脚圍(脚圍)即ちその幅、柱幅より狭からざるもの(半(半)脚圍に對して)「きも。まるあち 丸鏝 [名] 「動」鏝の一種。體、丸まるあはび 丸飽 [名] 切らずに、その形のままにて乾したるあはび。鹿洲往來(鹿洲往來)削物者干鏝(干鏝)圓飽」

まるあんどん 丸行燈 圓行燈 [名] 普通の行燈の方形なるとは違ひて、圓形に造れる行燈。まはしあんどん。燈州行燈(州行燈)(角行燈)に對して)圓圍(圓圍)はなし「小判は、これにありと、丸行燈の陰より投げ出せば」



(燈行丸)

まるあめ 丸飴 [名] 丸く固めたる飴。二代男丸飴賣(丸飴賣)斬端(斬端)に」

まるあらひ 丸洗 [名] 衣服などを、解かずに洗ふこと。(つまみ洗に對して)まるあり 丸蟻 [名] 「建」接合法の一。普通の蟻の三角形をなすとは違ひて、丸みを帯びたるもの。

まるいし 丸石 [名] 丸まるき形の石。まるいた 丸板 [名] 茶の湯の風爐(風爐)の敷板の一。大板を丸くしたるもの。勝手にて用ひ、表むきには出ださずといふ。まるいち 丸一 [名] 〇の中に、一の字を書きたる形。商標などとして用ふ。まるうち 丸打 [名] 組紐の組方の、丸き形に造るもの、又その組方の紐。(平打(平打)袋打に對して)まるうち 丸打 [名] 丸打紐 [名] 前條に同じ。まるうて 丸茹 [名] 切らずに、全形のままに茹でること、又その茹でたる物。

まるつけ丸漬〔名〕切らずに、全形のま
ま、漬物とすること、又その漬物。(切漬
などに對して) 「(漬瓜)に同じ。
まるつけうり丸漬瓜〔名〕「植」つけうり
まるつど丸毡〔名〕女の髮の、たばを丸
き形にせしもの。(角髷(カクガシ)に對して)
まるつば丸鏢・圓鏢〔名〕刀劍の鏢の、

を丸取りにし」
まるな丸名〔名〕武家時代に、鎌倉に
て、十三石の田地を一名として、その全部
の稱。(半名(ハナナ)に對して)
まるに丸煮〔名〕切らずに、その形のま
まにて煮ること、又その煮たる物。
まるにいなづま丸に電〔名〕紋所の一。

を突かねば立つも立たれず(さいふ句)年
よれば小便すれば圓の字」
まるのひ丸日〔名〕「正月は、松の内の
七日間と十四日十五日二十日とが紋日
なりしより、合はせて、十日といふべき
「十」の字の代りに、丸の字に、一點を加へ
たる「丸」の字を用ひしに出でたるものに
て、もとは、正月の紋日のみに限りしを、
後には、廣義に用ふるに至りしなりとい

懸鉤に酷似す。つるいもど。
まるぼうちりめん丸紡縮緬〔名〕經(タタ)に生絲(タタ)・緯(タタ)に全部強撚の紡績絹絲
を使用して、平織とし、製織の後、糊抜精
練などを施したる縮緬。
まるばらつき丸葉空木〔名〕「植」虎耳
草(トラミ)科に屬する落葉喬木。高さ六七
尺に達し、葉は楕圓形にて、やや圓く鋸
齒と毛と短き葉柄とを具へ、對生し、花は

和者 題(程)程(程)の見よげなり

まれら【貌】『ら』は接尾語『まれ』(稀)に同

じ。『古語』拾遺、岩の上の松にたとへん

我君は世にまれなる種ぞと思へば」新

勲語まれらなる法を聞きつる道しあれば

まれをどと稀男【名】たぐひ稀なる男、

まれもの。冥途飛脚、象眼の國細工には

まれ圓・丸【名】まる(丸)圓に同じ。塵添

塵抄、錢をまるともいふなり。常には、そ

の形の圓きを以ていふなりと思へども、

その由ありていふなり。漢書に、太公

爲周立三九府圓法云云、圓法とは、錢の

田 學業を磨くことの譬。研磨。

まろしうち 丸打【名】全部打ち破ること。

鶏籠合殿「きやつぱら、まろ打にして、武具

まうけんといへば」

まろか 圓か【貌】まろきさま。まどか。

『古語』字鏡集同、マロカ」

まろがし 搏【名】まろがすこと、又まろ

がしたる物。まるめたる物。かたまり。

まろがせ。名義抄「搏、マロガシ、ネヤス」

太平記「天狗道の苦患(つむ)に、熱鐵のまろ

がしを、又三度吞む」

まろがしら 圓頭【名】髪を剃り落した

る頭。坊主あたま。圓顛。袈衣、物見の

橋に同じ。夫木橋【名】まるきほし丸木

丸木橋、これもや琴の音に通ふらん」

まろきふね 丸木船・丸木舟【名】まるき

ふね(丸木船)に同じ。

まろく 圓く、丸く【動下二他】圓くす。

固めてまろくす。まろむ。まるぐ。

一まとめとす。寄せ集む。まとむ。まろ

がす。字鏡集の金(利)を取りて、...、箔

ろけて、皆買はん人もがなと思ひて」

まろくら 丸倉、圓倉【名】こめくら(米倉)

に同じ。『古語』和名、倉圓曰、圓、

名廣、萬呂久良」

まろこすけ 丸小菅【名】極菅の一種。

義勢、幡、マロハタ・ハタホコ」

まろびあふ 轉合ふ【動四自】互にまる

ぶ。互にまるび寄る。備馬樂總角「あげま

きや、たうたら、尋(さ)ばかりや、たうた

う、さかりて寝たれども、まろびあひにけ

り、たうたら、かよりあひにけり、たうた

う」

まろびいつ 轉出づ【動下二自】ころが

まろびいつ 轉入る【動四自】まろびて

入る。ころげこむ。源兵「この水の音、け

はひを聞くに、我もまろび入りぬべく悲

しく」

まろびおつ 轉落つ【動上二自】まろび

て落つ。ころがりて落つ。まろびおつ。

源兵「車よりもまろび落ちぬべきを」

まろびね 轉寢轉寐〔名〕ころびね(轉寢)に同じ。

まろびのく 轉退く〔動四自〕まろびて退く。ころがりしざる。源氏「少しまろびのきて臥しませり」

まろびよる 轉寄る〔動四自〕まろびて寄る。ころがりて近寄る。其やをらまろび寄りて、衣引上ぐるに」

まろぶ 轉ぶ〔動四自〕まろ(圓)に語尾の添ひたるものころがる。ころぶ。まろぶ。萬葉戀ひまるるびひぶ泣けども」

まろ(ぶ) 丸臥〔名〕まろね(丸寢)に同じ。無衣待ちわびて今宵ばかりのまろぶしに幾たび我は寝ざめしつらん」東國紀行まどろむむまだに無かりつる草の枕のまろぶしなれば」

まろ(ぼ) 丸寓生〔名〕寓生(寓)のさまを、丸き形に描きあらはしたるもの。平家「まろぼや摺つたる金覆輪の鞍」

まろまかす 轉まかす〔動四他〕まろまかす(轉ばかす)に同じ。船着御本陣、その手で、圍子をまろまかす」

まろむ 丸む 圓む〔動下二他〕まろむ(丸む)に同じ。圓形に作る。わががけ。築花「蓬菜作りたるを、箱の蓋にひろげて、日かげをめぐりてまろめおきて」

まろむ 丸む 圓む〔動下二他〕まろむ(丸む)に同じ。圓形に作る。わががけ。築花「蓬菜作りたるを、箱の蓋にひろげて、日かげをめぐりてまろめおきて」

まろむ 丸む 圓む〔動下二他〕まろむ(丸む)に同じ。圓形に作る。わががけ。築花「蓬菜作りたるを、箱の蓋にひろげて、日かげをめぐりてまろめおきて」

まろむ 丸む 圓む〔動下二他〕まろむ(丸む)に同じ。圓形に作る。わががけ。築花「蓬菜作りたるを、箱の蓋にひろげて、日かげをめぐりてまろめおきて」

まろむ 丸む 圓む〔動下二他〕まろむ(丸む)に同じ。圓形に作る。わががけ。築花「蓬菜作りたるを、箱の蓋にひろげて、日かげをめぐりてまろめおきて」

まろむ 丸む 圓む〔動下二他〕まろむ(丸む)に同じ。圓形に作る。わががけ。築花「蓬菜作りたるを、箱の蓋にひろげて、日かげをめぐりてまろめおきて」

まろむ 丸む 圓む〔動下二他〕まろむ(丸む)に同じ。圓形に作る。わががけ。築花「蓬菜作りたるを、箱の蓋にひろげて、日かげをめぐりてまろめおきて」

まろむ 丸む 圓む〔動下二他〕まろむ(丸む)に同じ。圓形に作る。わががけ。築花「蓬菜作りたるを、箱の蓋にひろげて、日かげをめぐりてまろめおきて」

まろむ 丸む 圓む〔動下二他〕まろむ(丸む)に同じ。圓形に作る。わががけ。築花「蓬菜作りたるを、箱の蓋にひろげて、日かげをめぐりてまろめおきて」

まろ(り)か 丸焼〔名〕まろ(り)か(丸焼)に同じ。字彙 蠟燭 萬呂也支」

まろ(り)か 丸焼〔名〕まろ(り)か(丸焼)に同じ。字彙 蠟燭 萬呂也支」

まろ(り)か 丸焼〔名〕まろ(り)か(丸焼)に同じ。字彙 蠟燭 萬呂也支」

まろ(り)か 丸焼〔名〕まろ(り)か(丸焼)に同じ。字彙 蠟燭 萬呂也支」

まろ(り)か 丸焼〔名〕まろ(り)か(丸焼)に同じ。字彙 蠟燭 萬呂也支」

まろ(り)か 丸焼〔名〕まろ(り)か(丸焼)に同じ。字彙 蠟燭 萬呂也支」

まろ(り)か 丸焼〔名〕まろ(り)か(丸焼)に同じ。字彙 蠟燭 萬呂也支」

まろ(り)か 丸焼〔名〕まろ(り)か(丸焼)に同じ。字彙 蠟燭 萬呂也支」

まろ(り)か 丸焼〔名〕まろ(り)か(丸焼)に同じ。字彙 蠟燭 萬呂也支」

まろ(り)か 丸焼〔名〕まろ(り)か(丸焼)に同じ。字彙 蠟燭 萬呂也支」

まろ(り)か 丸焼〔名〕まろ(り)か(丸焼)に同じ。字彙 蠟燭 萬呂也支」

まろ(り)か 丸焼〔名〕まろ(り)か(丸焼)に同じ。字彙 蠟燭 萬呂也支」

まろ(り)か 丸焼〔名〕まろ(り)か(丸焼)に同じ。字彙 蠟燭 萬呂也支」

まろ(り)か 丸焼〔名〕まろ(り)か(丸焼)に同じ。字彙 蠟燭 萬呂也支」

まろ(り)か 丸焼〔名〕まろ(り)か(丸焼)に同じ。字彙 蠟燭 萬呂也支」

まろ(り)か 丸焼〔名〕まろ(り)か(丸焼)に同じ。字彙 蠟燭 萬呂也支」

まろ(り)か 丸焼〔名〕まろ(り)か(丸焼)に同じ。字彙 蠟燭 萬呂也支」

まろ(り)か 丸焼〔名〕まろ(り)か(丸焼)に同じ。字彙 蠟燭 萬呂也支」

まろ(り)か 丸焼〔名〕まろ(り)か(丸焼)に同じ。字彙 蠟燭 萬呂也支」

まろ(り)か 丸焼〔名〕まろ(り)か(丸焼)に同じ。字彙 蠟燭 萬呂也支」

まろ(り)か 丸焼〔名〕まろ(り)か(丸焼)に同じ。字彙 蠟燭 萬呂也支」

まろ(り)か 丸焼〔名〕まろ(り)か(丸焼)に同じ。字彙 蠟燭 萬呂也支」

まろ(り)か 丸焼〔名〕まろ(り)か(丸焼)に同じ。字彙 蠟燭 萬呂也支」

まろ(り)か 丸焼〔名〕まろ(り)か(丸焼)に同じ。字彙 蠟燭 萬呂也支」

まろ(り)か 丸焼〔名〕まろ(り)か(丸焼)に同じ。字彙 蠟燭 萬呂也支」

まろ(り)か 丸焼〔名〕まろ(り)か(丸焼)に同じ。字彙 蠟燭 萬呂也支」

まろ(り)か 丸焼〔名〕まろ(り)か(丸焼)に同じ。字彙 蠟燭 萬呂也支」

まろ(り)か 丸焼〔名〕まろ(り)か(丸焼)に同じ。字彙 蠟燭 萬呂也支」

まろ(り)か 丸焼〔名〕まろ(り)か(丸焼)に同じ。字彙 蠟燭 萬呂也支」

まろ(り)か 丸焼〔名〕まろ(り)か(丸焼)に同じ。字彙 蠟燭 萬呂也支」

まろ(り)か 丸焼〔名〕まろ(り)か(丸焼)に同じ。字彙 蠟燭 萬呂也支」

まろ(り)か 丸焼〔名〕まろ(り)か(丸焼)に同じ。字彙 蠟燭 萬呂也支」

まろ(り)か 丸焼〔名〕まろ(り)か(丸焼)に同じ。字彙 蠟燭 萬呂也支」

まろ(り)か 丸焼〔名〕まろ(り)か(丸焼)に同じ。字彙 蠟燭 萬呂也支」

まろ(り)か 丸焼〔名〕まろ(り)か(丸焼)に同じ。字彙 蠟燭 萬呂也支」

まろ(り)か 丸焼〔名〕まろ(り)か(丸焼)に同じ。字彙 蠟燭 萬呂也支」

まろ(り)か 丸焼〔名〕まろ(り)か(丸焼)に同じ。字彙 蠟燭 萬呂也支」

まろ(り)か 丸焼〔名〕まろ(り)か(丸焼)に同じ。字彙 蠟燭 萬呂也支」

まろ(り)か 丸焼〔名〕まろ(り)か(丸焼)に同じ。字彙 蠟燭 萬呂也支」

まろ(り)か 丸焼〔名〕まろ(り)か(丸焼)に同じ。字彙 蠟燭 萬呂也支」

まろ(り)か 丸焼〔名〕まろ(り)か(丸焼)に同じ。字彙 蠟燭 萬呂也支」

まろ(り)か 丸焼〔名〕まろ(り)か(丸焼)に同じ。字彙 蠟燭 萬呂也支」

まろ(り)か 丸焼〔名〕まろ(り)か(丸焼)に同じ。字彙 蠟燭 萬呂也支」

まろ(り)か 丸焼〔名〕まろ(り)か(丸焼)に同じ。字彙 蠟燭 萬呂也支」

まろ(り)か 丸焼〔名〕まろ(り)か(丸焼)に同じ。字彙 蠟燭 萬呂也支」

まろ(り)か 丸焼〔名〕まろ(り)か(丸焼)に同じ。字彙 蠟燭 萬呂也支」

まろ(り)か 丸焼〔名〕まろ(り)か(丸焼)に同じ。字彙 蠟燭 萬呂也支」

まろ(り)か 丸焼〔名〕まろ(り)か(丸焼)に同じ。字彙 蠟燭 萬呂也支」

おえういあ かきくこ さしすせ とつちた のねいほ へふひは まむむま もめんむま やゆや りれるりら わわわ

同菊花「此處彼處の参下向が夥しい事て御座った」

まわりこむ 参込む【動四自】参り入り込む。榮花「よるづの人参り込み見たてまつる」

まわりざかな 参有【名】「他動詞のまゐる(参る)を見よ」式三獻のにあらざる。普通の食用の有。鎌倉年中行事朝の御祝に、参有にて、御酒三獻」

まわりじよ 参所【名】参詣する所。續藤粟毛栗尾の観音松尾薬師、宮城の不動などいふ、結構な参所もあるものだんて」

まわりちがふ 参違ふ【動四自】人人、混雑して参る。増上達部(功)殿上人、夜、晝となく、袴のそば取りて参りちがふ」

まわりつく 参著く【動四自】ゆきつく(行著く)を郷重にいふ語。参著(著)す。源氏「ありぬべき人人はおのづから参りつきてありしを」

まわりもの 参物【名】「他動詞のまゐる(参る)を見よ」たべもの。食物。源氏「まわり物なるべし、折敷手づから取りど呼ばん。その日のまわり物、御厨子(子)な所わざにすべし」

まゐる 参る【動四自】「参(参)入るの約と

用ふなどの敬語。めす。大體久世(世)の鳥、交野(交)の鳥の味は、参り知りたりき」増上達部(功)殿上人、夜、晝となく、袴のそば取りて参りちがふ」

まを 眞空・空麻【名】「植 蔞麻(蔞)科に属する多年生の草。莖は、木質に近く、高さ三四尺に達し、枝を分つこと少く、葉は互生し、廣心臟形又は卵形にして、先端尖り、邊緣に鋸齒あり。表面は緑色なれども、裏面は白く、長き葉柄を具ふ。夏、葉腋より、四片の花被を有する單性の細花、雌雄株を同じくして開く。山野に自生し、夏秋の頃、莖を刈り、皮の纖維を取り、絲、織物等の料に供す。いさう、いみあさ。むし。らみい。をのね。たいま。項の草の纖維にて製したる麻絲。夫木七夕(夕)にまをのにひ絲ひきかけてくること絶えぬ星合の空」

まをか 眞岡【名】「地」モオカと發音す」下野國芳賀(賀)郡にある町。鬼怒(怒)川の支流なる五行川の右岸。宇都宮市を距ること五里、その間、輕便鐵道の便あり

まをじか 眞男鹿・眞牡鹿【名】「ま(眞)は接頭語をじか(男鹿)の美稱。「古語」記「天香山(山)の眞男鹿の肩を内拔(拔)に抜きて」

まをじぶみ 申文【名】まうじぶみ(申文)に同じ。表、マラシブミ」

まをす 申す【動四他】「ま(眞)に同じ。「白す」野山代(代)の筒木(木)の宮にもまをすすがせの君は涙ぐましも」ま(眞)に同じ。「古語」萬葉「よろづ代に坐(坐)したまひて天の下まで仕へけりわが大玉は七世まをさね」ま(眞)に同じ。萬葉(天)「飛ぶや鳥にもがもや都まで送りまをして」

まをど 間夫・密夫【名】次條に同じ。運歩色集「密夫・間夫、マラット」

まをど 間男密夫【名】情夫、又情夫を持つこと(後世は、主として、有夫の女にいふ)みそかを。密夫(夫)。著聞(聞)ま男して會合したる所など、さまざまに書いて」盛衰記日頃の寢夫(夫)を尋ぬる由にて」

まをど 間男結【名】女の帯の仲を取り持つこと

まをど 間男薬師【名】男女のいふ薬師。いろやくし。

まをむすび ますを結【名】緒の結び方の一。下の圖を見よ。



み

より高くし、母音のiを發音する場合の位置に置きて發音するmに、母音a・u・oの合して成るものなり。その長音はみやあみゅうみやおなり。四一語の中に、みの直後に、ちの續く時は、相合して、拗長音ミユウとなる。例へば、「見(見)む」の音便をミユウと發音する類。みやうみやうは拗長音ミヨオに發音す。例へば、みやうにち(明日)をミヨオニチと發音する類。

因漢語の熟語の中、足利時代以前よりのものにてmの韻を有する文字の直後に、いゝの續く時、そのいゝが、m韻の影響を受けて、ミと發音し、又、ヨオと發音するやらの續く時そのやらの、ミヨオと發音するものあり。例へば、さん(三位)をサンミと發音し、おん(陰陽師)をオンミヨオジと發音する類。なほ、ん(ん)の條下を参照せよ。

【字源】平假名みは、漢字

とてつちた そせつ のねぬにな ほへふひは もめんむみま よゆや るれるりら ををわ